

大阪圭吉短編集

大阪圭吉



目次

あやつり裁判	5
石塀幽霊	31
動かぬ鯨群	57
カンカン虫殺人事件	87
寒の夜晴れ	109
気狂い機関車	135
銀座幽霊	166
坑鬼	193
香水紳士	251

三狂人	……	270
三の字旅行会	……	299
死の快走船	……	319
闖入者	……	381
デパートの絞刑吏	……	407
灯台鬼	……	430
とむらい機関車	……	460
白妖	……	497
花束の虫	……	528
幽霊妻	……	563

あやつり裁判

いつたい裁判所なんてところは、いつてみりやア世の中の裏ツ側みたいなどこでしてね……いろんな罪人さいにんばかり、落ちあつまる……そんなところで、二十年も延こづ丁かいなんぞ勤めていりやア、さだめし面白い話ばかり、見聞きしてるだろうとお思いでしょうが、ところが、二十年も勤めると云うのが、こいつが却つてよくないんでしてね、そりやアむろん面白い事件がなかったわけじゃア決してないんですが……なんて云いますかな？　メンエキとでも云いますか……そうそう、不感症にかかっちゃうんですよ。……だからいまでは、もう死刑の宣告を受けたトタンに弁護士の鞆たもとやら椅子やら、なんでもかんでも手あたり次第に裁判長めがけてぶツつけるような血の気の多い囚人とらでも、それから……こいつは最初のうち少なからず困こまつたんですが……ちつとも暴れずに、ただこう、ローソクみたいにもたれかかつて来るような囚人とらでも、いまではなんの感興も覚えずに、まるで材木でも運ぶような塩梅あんばいに、市ヶ谷行きの囚人とら自動車くるまに積み込む——とまあ、そんな工合になつちまつてるんです……こうなるとなんですな、むしろ盗とつたの殺したのとや、ヤボ臭い刑事事件なんぞよりも、いつそ民事の、なにか離婚談ばなしかなんかのほうが、こうしんみりして、面白い位いですよ……

いや——ところが、これからお話ししようとするのは、決してそんなじやアないんで、……むろん刑事事件なんですがね……それがその、なんて云いますか、ひ

どく一風変わったやつでしてね、さすがにメンエキの、不感症のこの私でさえも、いまだに忘れかねると云うくらいの、トテツもない事件やっなんですよ……

いちばん最初の事件は……なんでも、芝神明しばしんめいの生姜市しょうがいちの頃でしたから、九月の彼岸ひがん前でしたかな……刑事部の二号法廷で、ちよつとした窃盗事件の公判がはじまつたんです。

……被告人は、神田のある洗濯屋に使われている、若い配達夫でして、名前は、山田……なんとかって云いましたが、これがその夜学へ通う苦学生なんです。

で、事件と云うのは……日附を忘れましたが、なんでも七月の、まだお天道様がカンカンしてる暑い頃のことです……日本橋の北島町で、坂本という金貸の家が空巣狙いに見舞われたんです。この坂本さかもとって家は、主人夫婦に、大学へ行くような子供が二、三人あるんですが、恰度ちやうど夏休みで、息子達はみんな海水浴へ行つて留守……そして恰度被害を受けたその日には、細君は女中を連れて昼から百貨店へ買物に出掛けて、後には主人の坂本が一人残つた、と云うわけなんです。で、残された主人は、むろん金貸とは云つても内々の金貸で、仕舞屋しもたやのことですから、玄関口に錠をおろして、座敷で退屈まぎれに書見をしはじめたんです……ところが、三時の時計の音を聞いてから、ついウトウトとまどろんじまつたんです。それから、二十分ほどして買物に出掛けた細君が三時二十分に女中と一緒に帰つて来たわけです。主人

は、それまで二十分間と云うもの、すっかり寝込んでしまったんです。で帰って来た細君は、仕方がないから、錠のおろしてない勝手口から這入ったんですが、這入ってみて、台所の板の間から、すぐ次の茶の間の畳の上へかけて、土足のあとをみつけて吃驚し、周章あわてて座敷の主人を起すと同時に茶の間の茶箆筒を調べたんですが、海水浴へ送るつもりで、ちよつとその抽斗ひきだしへ入れて置いた三百円の金がない——とまアそんなわけで、早速事件は警察へ移されたんです。

警察では、最初ながし、の空巢狙いと見当つけて捜したんですが、やがて出入りの商人が怪しいと云うことになり、坂本家へ出入りする御用聞きが、片ツ端しらみづぶから虱潰しに調べられたんです。でその結果、いま云つた、その神田の洗濯屋の外交員が挙げられたんです。

もつとも、挙げられたと云つても、その洗濯屋が自白したわけじゃア決してないんですがね……なんでも、当人の云うところによると、むろん坂本家は取引先には違いないが、その日は寄らなかつた。北島町へは行つたが、それは昼頃の事で、事件のあつた二時頃には、蔵前へ行つていた、と云うんです。で、北島町のほうを調べてみると、確かに二、三軒の得意先へ、昼頃に寄っている事は判つたんですが、蔵前のほうは一軒も得意はなく、なんでも新らしく作つてみようかと思つて、ただこ
うぶらぶらと白いペンキを塗つた手車を曳いて歩き廻つた、と云うだけで、誰れも

証人はないんです。ところが、一方坂本家を調べてみると、勝手口の戸の引手についてる筈の指紋は、あとから帰って来た女中や細君の指紋で消されているが、板の間の土足のあとが、恰度その洗濯屋のはいていた白靴のあとと大体一致するんです。そしてまた、その洗濯屋の店へ刑事連が踏込んで調べてみると、山田なんとかつてその配達人のバスケットの中から二百何円つて大金が出て来たんです……もつとも当人は、将来自分が一本立をするためにふだんから始末して貯えた金だと云い張つたんですが……ま、そんなわけで否応なしに送局となり、予審も済ましていよいよ公判つてことになったんです。ところが事件そのものは大したものではないんですが、検事側にも被告側にも、しっかりした証拠がないもんですから、いざ公判となると、よくあるやつでわりに手間がかかりましてね……それに、気の毒なことには、その洗濯屋はなんでも四国の生れとかで、小さな時から一人も身寄りつてものがないんです。店の親方も、そんなことで警察へ引っぱられてからは、まるでつつぱなしてしまふし、被告のために有利な証言をしてくれるのは、官選の弁護士一人きりなんです。ところが、この官選弁護士つてのが、そう云つちやアなんですが、ひどく事務的でしてね、どうも、洗濯屋の立場が危あぶなつかしくなつて来たんです。

ところが……ところがこの、身寄りもない貧弱な書生ツぽの被告に、突然救いの神が、それも素晴らしい別嬪べっぴんの救いの神が出て来たんですよ……

あれは、第二回の公判でした……証拠調べの始まる前に、弁護士から突然証人の申請が出たんです。と云つても、むしろこれは被告から頼んだでもなく弁護士から頼んだでもなくまったくアカの他人が進んで証人の役を買って出たんですから、裁判長は、検事さんと合議の結果、すぐにその証人を採用したんです。

そこで証人の出頭と云うことになつたんですが、その別嬪の証人と云うのは、葭町の「つぼ半」という待合の女将で、名前は福田きぬ、年は三十そこそこの、どう見ただって玄人あがりのシャンとした中年増なんです……

ところで、いよいよ証人の宣誓も済まして、証言にはいったんですが、それがまた実にハッキリしてるんです。で、福田きぬつてその別嬪の云うところによると……この女将は、商売柄いつも正午近くに起床すると、それから浅草の観音様へお詣りする習慣だったんですが、恰度その事件のあつた日も例によつて観音様のお詣りを済ますと、帰り途中でふと横網町の震災記念堂をお詣りする気になり、それに時間を見ればまだ三時を少し過ぎたばかりで遅くないからと思ひ、蔵前で電車を降りたんですが、その折白いペンキ塗りの手車を曳いた被告を確かに見たと云うんです。なぜそんなことをよく覚えていたかと云うと、それはその白い車を曳いた被告人を見たお蔭で、その時まで忘れていた大事な着物の洗張りを思いついたからだというんです。そして事件の新聞記事を読んで、あの日の三時から三時二十分頃までの間に坂

本家へ這入った犯人が写真に出ている洗濯屋だと聞かされた時から、どうもおかしいとは思ったが、さりとてそんなことを申出るのはなんだか掛合かかりあひになるような気がして、悪いとは思いつながりいまままで迷っていた、とこう云うんです。こいつア全く筋が通つてますよ。弁護士は俄にわかに元氣づいて、日本橋の北島町から浅草の蔵前まで、車を引ッ張つて五分や十分じやア絶対に行けないって頑張るんです。そこで裁判長から、証人に対して時間の点や、被告と対決させてその人相に見誤りはないかなぞと念押しがあり、検事さんと弁護士の押問答があつて、結局判決は次回に廻されたんです。……さあ、その間に検事さんはやつきになつて、その「つぼ半」の女将と洗濯屋の書生ツぼとの間に、ナニか特別な関係でもあるんではないかつてんで、刑事を八方に飛ばして調べたんですがサツパリ駄目……どう洗つたつてまるツきりのアカの他人で、「つぼ半」の女将はまさに正当な証人つてことになるんです……全く、その書生ツぼは果報者かほうものですよ。おまけに証人は特製の別嬪と来てるんですから、冥利みょうりにつきまさアね……でまあ、そんなわけで、やがて洗濯屋は証拠不充分で無罪を判決され、ひとまずその事件もケリがついたんです……

ところで……話はこれからが面白くなるんです。

と云うのは——そんな事件があつてから、左様……半歳とじもした頃のことでしたね……やはり、その刑事部の今度は三号法廷で、或る放火事件の公判があつたんで

す……むろん係りの判事さんも検事さんも、前の窃盗事件の時とは違っていました
が、で、その放火事件と云いますのは、かいつまんで申しますと——

被告人は三浦某と云うゴム会社の職工で、芝の三光町あたりに暮していた独身者
なんです、これがその、なにかのことで常日頃から憎んでいた同じ町内のタバコ
屋へ、裏口から火をつけて燃もやしちまった、と云うんです……まだ寒いカラツ風の吹
く冬の晩のことなんです……で、この放火事件も、別に確かな物的証拠つてやつは
なかったんですが、悪いことには事件の起る数日前に、被疑者の三浦と云うのがタ
バコ屋と口論して、なんでも「お前の家なぞ焼払っちゃまう！」とかつて脅かしたの
が、判つて来たんです。で、うんとしぼられて起訴された時には、告白していたん
ですが、これがその公判廷へ来ると、あれは警察から告白を強しいられたからなんだ
と、俄かに陳述を翻ひるがえして、犯行を否定しはじめたんです……それで被告の云うに
は、いちばん始めに警察で申上げた通り、事件のあつた晩、自分は宵の口から浅草
へ映画を見に行つていた、と頑張りはじめたんです。そこで裁判長は、お前が映画
を見ていたと云う、なにか証拠になるような物なり事なり出して見せなさいとやら
かしたんです。すると被告は、暫く考えたあとで、そう云えば、自分はあの晩まっ
たく早くから出掛けていて、まだ開館にならない映画館の出札口で、見物人の行列
の一番先頭に立つて出札を待つていたから、調べて貰えばきつと誰れか自分を見た

人があるに違いないって云い始めたんです。そこで早速、映画館の二、三の従業員が、証人として喚問され、被告と対決させられたんです。

ところが、被告の申立てる犯行当日に於ける上映映画のプログラムや内容については、間違いないんですが、被告人が入場者の行列の先頭に立っていたと云う事については、一日に何回も開館するのだし毎日のことだから少しも覚えがないって、その証人の従業員達はつっぱねちまったんです。つまり、被告のために有利な証拠はひとつもないってわけなんでして……いや、それどころじゃアない、ここで被告のために、却って悪い証人が出て来たんです……

で、その問題の証人と云うのは、事件当夜の映画館のことについて自から進んで警察に申出た証人があるから、と云う検事さんの申請によって、いよいよ出頭と云うことになったんですが、これがその……どうです、なんと……「つぼ半」の女将おかみの、福田きぬなんですよ……

いや、まったく、妙な女です……よくよく裁判所に、縁があると見えますよ……ここんどこでちよっとお断りしときますがね……いまま申上げた通り、前のあの洗濯屋の窃盗事件の時とは、今度は法廷も違うし、係りの裁判官も違うと云うわけで、洗濯屋事件の証人が、放火事件にも証人となって出頭したと云うようなことは、誰も、その時はつい気づかずにいたわけなんでして……それで、その時のことなぞ

も、ずっとあとになって聞かされた、と云うわけなんですがね……もつとも、その時に知ってたとしても、なにも二度証人になったからって、その人をどうこうしようってんではないんですが……いやそれでなくなつて、だいたい裁判所なんてところは忙しいとこでして……こんな風に二つの事件をひよこんと抜き出してお話しすると、ひどく際立つてみえるんですが、実際は、どうしてなかなか、こんなくらしいの事件はその間にヤゲツと云うほどあるんですから、証人がどうのこうのつて、いちいち覚えていられるもんじゃありませんよ……それ、その、例の不感症の問題ですよ……

ところで……その、放火事件に呼出された「つぼ半」の女将なんです、その日、この別嬪は、なんでも縫紋ぬいもんの羽織なんか着込んで、髪をまるまげこう丸鬚まるまげなんか結んで、ちよつと老化ふけづくりだったそうですが、これがその、例によつて型通り、うそは申しませぬとの宣誓を済まして証言にはいったんですがそのおきぬさんの証言と云うのは……

放火事件のあつた晩に、問題の映画館へ一番先に切符を買つてはいったのは、つまり入場者の行列の先頭にいたのは、被告人ではなしに、この私だつて云うんです。なんでも、商売柄しまいまで見ているわけに行かないから、早く帰つて来るつもりで早く出掛けたのだそうです……そして同席の被告を見て、あの時私のあと先には、

こんな人はいませんでしたとハッキリ申立てたんです……なにも私は好きこのんで人さまを罪に落すようなことはしたくないが、確かに間違ってることを知ってて隠してはられないから、とも云ったそうですよ……いや、むろん被告は、むきになつて怒ったそうですが、けれども、その証言をひっくり返すだけの、つまり逆の証拠がまるでないんですから、こいつアどうもてんで、見込みがありません……それに、調べてみれば証人も被告も、まるつきりアカの他人で、少くともそれまではこれっぽちの怨みツこもない間柄ですから、女将の証言も、まず正当な一市民の声、としかとりようがありません……

そんなわけで、例によつて裁判長の念押しがあつたり、検事さんと弁護士との押問答があつたりして、すつたもんだの揚句、結局次回の公判には有罪と決り、懲役六年の判決を言渡されましたよ……

いや、こんな風に申上げると、まるで「つぼ半」の女将の証言だけで、被告人が有罪になつたように見えるかも知れませんが、実際はそんなのではなく、事件当時の状況や、被告側に全然有利な証拠がないことや、それに被告人の平素の行状なんでものも盛んに斟酌しんしゃくされての上なんです……しかし、むろん、福田きぬの証言が判決に大きな影響を与えたことは、ま、この場合確かに間違いありませんね……え？……被告ですか？……ええ、むろん直ぐに控訴しましたよ……いやしかし、気の毒だが、

ダメでした。

でまあ、そんなわけで、この放火事件もひとまずケリがついたんですが……これで、このままで終つてしまえば、なんでもなかったんですが……いや、ところが、これからが本筋なんでして……問題は、その「つぼ半」の女将にあるんですがね、いやどうも、飛んでもない女なんですよ……

左様ですね……あれは、放火事件があつてから三月ほどしてからのことでしたかね……もうそろそろ夏がやつて来ようつて頃でした。「つぼ半」の女将が、又しても裁判所へやつて来たんです……いや、今度は私が、この目でみつけたんです……と云うのは、そうそう刑事部の廊下でしたよ。なんでも、人混みの中で最初ぶつかったんですがね……あの女将、前と違つて髪を夜会巻きなんかにか結つて、夏羽織なぞ着てましたがね……いや最初私は、その、ちよつと「築地明石町」みたいな別嬪を見た時に、おや、どこかで見たことのあるような——と思つて、ふと立止つたんですが、むろんすぐには思出せませんでした。そこで、なにか事件の傍聴にでも来た人だな、とまあそう思つたんです。まったく、傍聴人の中にはいつだつて物好きいな常連がいくらもいるんですからね……ところが、始めはそう思つてたんですが、どうしてなかなか、見ていりやア証人控室へはいつて行くじやアありませんか……さア、妙だな？　と思ひましてね、あとから法廷を調べてみると、どうです、今度は

一号室の殺人事件に立会つてるじゃアないですか……もつとも、その時はまだ、同じ女が、洗濯屋事件のほかには放火事件にも関係していたつてことは、私は知りませんでしたかね……それにしても、よく証人に立つ女だくらいに思つて、恰度休憩時間には一号法廷の弁護士が……その弁護士は菱沼さんひしぬまつて云いましたかね……その菱沼さんが、なにか用事があつて私達の部屋へ来られた折に、ちよつと口をすらして聞いてみたんです……すると、その時は菱沼さん、別に大して不思議にも思われないようでしたが、恰度そばに居合わせた私の同僚で夏目なつめつてのが、どんな女だつて、容姿なりから名前まで聞くんです。で、こうこう云う女だつて云うと、その女なら、前に放火事件の時にも三号法廷で証人に立つたと云うんです。でまあ、そこで私も、始めてその事を知つたわけなんですが、その夏目の云う事を聞いた菱沼さんは、そこで急に不審を抱いたんです。不審を抱いたどころじゃアない、ひどく亢奮こうふんしちまつたくらいで……

いや全く、無理もないですよ……聞いてみれば、その殺人事件つてのは、なんでも、目黒あたりの或るサラリー・マンが、近所に暮している、小金を持った後家さんを殺したと云う事件なんですがね……これが又、その、証拠が不充分で審理ざんりがなかなか果取はかどらないつて代物なんでして、そこへその、「つぼ半」の女将が証人として現れたんですが、ところがこの証人、前の放火事件と同じようにあとから警察へ申

出て、つまり検事側から出て来た証人でして、むろん被告にとって不利な証言を持たんだんです。なんでも……今度は、恰度事件のあった日に競馬を見物に出掛けたんだそうですが、その遅くなつた帰り途の現場附近で、殺された後家さんの家のある露路ろじの中から、不意に飛出して来た男にぶつかった、と云うんです。むろん兇行の時刻と一致するんですがね……ところが「つぼ半」の女将、あとで新聞の写真を見て、容疑者がそのぶつかった男とバカによく似てるってんでテツキリ怪しいと睨んだんだそうですが、やがてそれが警察の耳にはいり今度召喚を受けると進んで出て来て首実検をしたと云うんですが、入廷して被告の顔を見ると、涼しげな声で、

「ハイ、確かにこの方でございます」

とやらかしたんだそうですよ。

むろん殺人事件の判検事は、前の時とはまた係りが違つてたもんですから「つぼ半」の女将がそんなに何度も証人をした女だなんてことは、つい気づかずになっていたんです。ところが、菱沼弁護士は、さアもう不審でたまりません。……けれどもこれとても偶然——と云つてしまえば、それまでですし、検事側でも一旦証人を採用するからには、むろん相当な吟味もした上でのことですから、うっかりこちらで早まつた騒ぎかたをして、挙げた足をとられるようなことになつてもやり切れない、と菱沼さんは考えたんです。で、幸いその日の公判は、それでひとまず閉廷になりました

たし、判決までにはまだまだかなり間がありそうに思えたので、この上は、次回の公判までに、ひよつとすると「つぼ半」の女将は、ありもしない偽りの証言をしてるのかも知れないから、是が非でも徹底的に調べ上げて、あわよくば裁判を逆の結果に導こうと、ま、そう云う悲壮な決心をされたんですよ。

いや、まったく、それからの菱沼さんの真剣ぶりと来たら、ハタで見る目も恐ろしいくらいでしたよ……むろん他にもいくつかの事件に関係している忙しい体ですから、毎日役所へは出て来られましたが、それでも流石さすがに、ひどく鬱ふさぎ込んでる日が多かったですよ。

なんでも、あとで聞いた話ですが……まず最初に菱沼さんは「つぼ半」の女将が贋にせの証言をしていると仮りにきめて、それでは何故そんな無茶な証言をしたか、つまり殺人事件の被告と女将との間に、なにか秘かな怨恨関係でもありはしないかと云う点に全力を注いでみたくです……ところが、どう調べて見たってこれがサツパリ駄目なんで、そんな関係はこれッぽちも出て来ません。そこでうんざりして、今度は記録を辿って、前の放火事件と洗濯屋事件について、……これはもう判決済みですから調査もなかなかでしたでしょうが……とにかく、同じように情実関係なり怨恨関係なりを、つまり前にそれぞれ一度ずつ係りの手によって調べられたことを、又むし返して洗い立ててみたくです……いや、むろんこれも駄目でした。三つ

の事件のどの被告とも「つぼ半」の女将はなんの関係もないアカの他人と、云うことになるんです……

もつとも、この調べのお蔭で、女の身許も大分明るくなっては来たんですが……なんでも、「つぼ半」ってのは、堂々と店は構えているんですが、近頃不景気のあおりを喰らって、御多分に洩れずあんまり大して流行はやらないってんです。しかしところがそれにもかかわらず、金廻りは割によく、つまり内福なんですネ……暮し向きは、なかなか派手だつてんですよ……

なんでも菱沼さんは、一度なぞ女将の留守を狙つて、お客に化けて「つぼ半」へ上つたそうですよ……それで、女中をとらえて、それとなく調べてみたんだそうですが、この福田きぬつてのは、むろんその店の経営者なんです、これにその、よくあるやつですが「時どき来られる旦那様」つてのがやつぱりあるんですよ。それで、「商売は不景気でも、女将さんは儲けるそうだね？」

つて訊くと、まるでちやあーんと仕込まれた九官鳥みたいな調子で、「そりや旦那様が、競馬で儲けて下さるんでしょう？……」

つてその女中が云うんだそうです。

——成る程、これで旦那も女将も、競馬が好きだつてことは判る……だがしかし、旦那が儲けるのか、女将が儲けるのか、そんなことはあてになるもんか！

菱沼さんは、そう思いながら引挙げたそうですが、しかしこの程度のこと判つただけでは、まだまだまるで調べのラチはあきません。

そうこうするうちに、一方、次回公判の期日が目の前に迫つて来ます……さアそうなると、菱沼さんは、ひとかたならずヤキモキしはじめました。そこで今度は「つぼ半」の女将の証言を、逆にひっくり返すような証拠はないかと探しにかかったんです……

けれども、むろんこいつが、なかなかみつかりません……いや、もともと女将が証人に立ったと云うのも、ご承知のように、なにもシツカリした証拠物件があるわけじゃなく、どれもこれも、被告を見たとか見なかったとかツて云うような、ただ口先だけの証言ばかりですから、女将自身にとつても、うそは云わぬと宣誓しただけで確かに見たとか見なかったとかの証拠はないと同じように、一方菱沼さんにとつても、それはみなうそだ、と云い切るだけのチャンとした証拠はないわけなんです。でこの場合、女将の証言はあれはみなうそだとヤツつけるためには、なぜうそだと云うその証拠——つまり、女将と被告達との間にそれぞれナニかの特別な関係があったとか、或はまたその他に、ナニか女将がそんなうそを云わねばならなかったようなこれまた別のわけがなくっちゃアならんわけです。ところがその特別の関係もわけもいまだにみつからないってことになったんですから、菱沼さんが氣狂い

みたいになつたのもムリないです。いやそうになると益々菱沼さんにはその三つの証言を偶然だなんて思えなくなつて来て、それどころか「つぼ半」の女将つてのがトテツもなく恐ろしい女に思われて来て、自分だけがチョイチョイ出しゃばつてえて、勝手な証言をするだけではなく、ひよつとすると、その合間合間のいろんな事件にも手下でも使つて、面白半分四方八方メチャクチャの証言でもさしてゐるのではないか、いや、又そうなるをだいたい裁判所へ出て来る証人なんてものは殆んど全部がこの「つぼ半」の女将と同じデムではあるまいか、なぞと——もつともこれは平常でもチョイチョイ起る菱沼さんの変テコな頭の病氣なんだそうですが……ま、とにかくそんなわけで、すっかり先生、途方に暮れちまつたんですよ。

そうして、いよいよ公判期日の前日になつても、その関係やわけがみつからないと、とうとう菱沼さんは、思い余つて、なんでも知人の青山あおやまとかいう人に、事情を詳しく打明けて、相談を持ちかけたんです。

いや、ところが……この青山さんは、なんでも学問もやれば探偵もやるつて云う、どえらい人です、菱沼さんの頼んで行つたことを、二つ返事で引受けちまつたつてんですから、どうです大したもんでしよう……

これからいよいよ本舞台にはいつて、その青山さんつて方かたの登場になるんです

が……いや、まったく、この人の頭のよさにはホトホト吃驚びっくりしましたよ。なんしろ、菱沼さんが、あれだけ脳味噌を絞つても解決出来なかつた問題を、バタバタと片付けてしまわれたんですからね。

さて、いよいよ次回の公判が、やって来たんです。むろんこの公判では証拠調べもむし返されるんですから、「つぼ半」の女将も出廷しました……それで、まず青山さんは、あらかじめ菱沼さんへ、「どんな成行になつても構わないから、とにかく判決だけは少しでも遅らすようにネバつてくれ」と頼んでおいて、御自身は傍聴人のようなふりをして傍聴席へおさまるとそこから一応裁判を監視？ という大変ですが、ま、すまし込んで見物されたんです。……その前方まえの弁護士席では、被告や女将などと並んで菱沼さんが、わけは判らぬながらもそれでも一生懸命に、裁判官達を向うに廻して、そのネバリ戦術を始めたんです。いや、先生、確かに緊張してましたよ……

ところが、二時間ばかりして、ひとまず昼の休憩時間に這入ると、退廷した青山さんは傍聴人の休憩室で一服すると、直ぐにどこかへ飛び出して行つたんです。私は、昼飯でも食べに行かれたんかと思つてるとやがて写真機みたいなものを持って帰つて来られたんですが……どうです、それから菱沼さんを通じて、この私へ、大変なことを頼んで来られたんですよ……なんでも、菱沼さんの云われるには、

「他でもないが、午後の公判が始ったら、判検事席の後ろの扉を一寸開けて、この写真機で、人に知られないようにパチツと公判廷を撮してくれ。なに訳なく出来るよ。もうちゃんと仕掛けてあるんだから。是非頼む……」

いや、どうも大変なことを頼まれたもんです。第一こちとらア、写真を撮したことなぞないんですからね……それに、だいたい公判廷なぞ写真にとつて、一体どうしようつてんでしょう？ 全く妙ですよ。いやしかし、そう云う菱沼さんも、なんのことやらろくに判りもしないで頼んでるんですから、気の毒みたいなもの……それに、こう見えたつて私も江戸ツ子でさア、虫のいどころによつちやアどんなことでも引受けかねない気性ですから、

「よござんす」思い切つて引受けましたよ。

さアそれからいよいよ午後の公判です。ところが……全く、運がいいと云うもんですよ。裁判長が眼鏡を忘れて入廷したんです。で早速そいつを届けに判検事席へ上ったんですが、引ツ返す戸口のところで、こう向うの低いところにいる菱沼さんの方へ向けて、例のものを抜らずパチツとやらかし、そしてそのパチツて音をまぎらすようにボタンと扉を締めたんですが、なんだかパチツて音のほうがひどく耳に残つて、思わず冷汗をかきましたよ……しかし大丈夫でした。向うの傍聴人の中には、写真機をみつけた人があつたかも知れませんが、大体うまくいきましたよ……

なんしろあれが、あとにもさきにも、私の始めての写真撮りなんでした。

さて、ところで一方、公判廷なんですが……いやこれが実は、その日の公判のうちには、判決を済すましてしまいたって検事さんの予定だったんだそうですが、先刻も申上げたようになるべく判決を遅くらしくしてくれて青山さんの註文で、菱沼さん、ムキになってネバリ続けた甲斐あって、大分てまどり、結局判決は翌日に廻されることになったんです。

そして閉廷になると、早速青山さんは……なかなか元気のいい人でしたよ……私のとこへ来て、丁寧ていねいに礼まで云われながら、例の写真機を持って帰って行かれましたが、いやしかし、それに引きかえて菱沼さんは、少なからずいらいらしてみえましたよ。そしてこの菱沼さんの「いらいら」は翌あすの日まで持越されていたんです……もっとも無理もないんで、その問題の翌あすの日になって、いよいよ開廷時間が迫るまで、どうしてしまったのか肝心要かみめの青山さんが、とんと姿を見せなかつたんですからね……

さて、いよいよその当日のことです。

青山さんは姿を見せない。時間は追々迫ります。有罪か？ 無罪か？ どのみち今日は判決が下されます。このままで行けば、とても有罪は免れまい——菱沼さんは気が気ではありません。しかし時間のほうは待ってくれません。やがてまず、傍

聴人達がドヤドヤと入廷します。続いて書記さんが、書類を持って登壇する。その後から検事さん、裁判長。一方前の平場へは、被告人、菱沼さん、と云った風に、ま、昨日の公判廷と同じような顔触れが揃ったんです……もつとも菱沼さんはひどくそわそわして辺りを見廻してばかりいましたかね……

ところが、そうして皆んなの顔触れが揃うと、まるで皆んなが入廷してしまうのを待つてもいたように……どうです、ひよっこり青山さんが、入口に現れたんです。そして、少なからず周章あわててしまった菱沼さんには、物も云わず、壇上の裁判長に、ちよつと、こう眼で会釈したんです。するともう、予て打合せてでもしてあつたと見えて、裁判長が、黙って頷いたんです……いや、驚きましたよ……ところがどうです。すると青山さんは、戸外そとの後ろを振り返つて、チラツと誰かに眼配めくばせしたんですが、その合図を待つてたように、多勢の警官達がドヤドヤツと法廷へ雪崩なだれ込んで来たんですよ……驚きましたね……

いったい、警官達は誰を捕えに来たと思います……え？ 飛んでもない……はいつて来た警官達は、すぐにバラバラと散り拡がると、どうです、キチンと着席して、これから始まろうと云う公判を固唾かたずを飲んで待ちかまえていた傍聴人を——そうですね、十四人でしたかね。もつとも被告の関係者は別ですがね……とにかくその、なんの、が、も関係もなさそうなアカの他人の傍聴人達を、グルツと取巻いちまつたん

です。一網打尽って形ですよ……いや全く、面喰めんくいましたよ……すると、真ツ先にその傍聴群の真中へんにいた、こうゴルフ・パンツとかつて奴をはいた男が、鳥打帽子をひつつかんでバタバタと逃げだしたんです。むろん、直ぐに押えられましたよ。すると青山さんが、その男の前へ行つて、

「あんたが、福田きぬさんの御亭主でしょう？　ちよつと身体検査をさして貰います」

とすぐに警官の手によつて上着をムキ取られてしまつたんですが、するとどうです、チョッキのかくしから、茶色の封筒が一枚抜き出されて来たんですが、開けてみると、中から小さな紙片かみきれが、なんでも十二、三枚出て来ましたよ……それでその紙片には「無罪 片岡八郎かたおかはちろう」だとか、「無罪 小田清一おだせいいち」だとか、「有罪 峰野義明みねのよしあき」だとか、まるでなんかの入れ札みたいな調子で、てんでに勝手な判決文みたいな、無罪だとか有罪だとかつて文字が、名前と一緒に書いてあるんです……もつとも七分通りは無罪が多かつたんですがね……いや、むろんそうしている間にも、捕えられた傍聴人達は、あっちこつちで各々抵抗したり、格闘したりしておりましたが、やがて主だった警官の命令で、全部引立てられ、いつの間にか裁判所の前に止まつて待つていたトラックに積まれて、警察へ運ばれて行きました……。

一方、間の抜けた法廷では、やがて裁判長が立上があると、あとに残つた少しばかり

りの人々に向つて、

「都合により、判決は、明日に延期します」

つてやったんです。——静かなもんでしたよ……

いや、もうお判りになったでしょう……その連中は、妙な博奕ばくちを打つてたんですよ。なんでも、あとから詳しく青山さんの御説明を聞いたんですが、むろんこの首謀者は、「つぼ半」の女将の亭主なんですがね、これがまた、あとで泥を吐いたところによると、実に不敵な悪党でしてね、もうずっと以前まえから法廷で博奕をやつてたつてんですよ。……つまり、常連の傍聴人になり済まして、傍聴しつつある窃盗事件や詐欺事件や、その他いろいろの事件に就いて、有罪か？ 無罪か？ と云うことに金を賭けて勝負を決するんです。なんでもゴルフ・パンツの云うことにや、こいつあ、どんな博奕よりも、なんかこう、ぞくぞくするような別の魅力があつて、とても面白いんだそうですよ……飛んでもないことですが、まったく、一人の人間が罪になるかならぬかで決るんですから、そりやアただの博奕なんかよりは性しようが悪いだけに、それだけまた面白いんでしょう……いや、競馬どころの騒さわぎじゃありませんよ……それで、最初は、二、三人の仲間同志でやつてたんだそうですが、もともと玄人同志くわうじんがやつてたんでは互損たがいそんですから、やがて素人しろうとを引入れ始めたんで

す……つまり、休憩で退廷した時なぞに、休憩室で遊び半分の傍聴者を誘って、今度の事件はどうなるでしょう、なんてことを引ツ懸りにして、それじゃアひとつ賭をやるうじやアありませんか、とまア、そんな風に仲間に引入れるんです。むろん勝敗の結果は、やっぱり玄人側の方がいつも出掛けて裁判の成行きと云うようなものになれて来てますので、多少ともずぶの素人よりは、先見の明めつたようなものが出来てますので、勝が多い——凶に乗って、だんだん病が深入りし、とうとう今度のように、証拠不十分で皆目見当のつかないような裁判に、女房なんか使つてトテツもない大それた事をしはじめたんです……

いやまったく、呆れ果ててものが云えませんよ……しかし、それにしてもその青山さんの電光石火ぶりには、ほとほと感心しましたよ……なんでも青山さんは、最初菱沼さんから詳しく話を聞いた時に、どうも「つぼ半」の女将が、どっちへ転ぶか判らんような事件にばかり登場することや、どの被告人とも全然無関係で、被告や検事から呼び出したのでなく自分の方から話を持ちかけて出頭していることや、証拠物件はなく、ただ見たとか見なかったとかの証言ばかりだ、なぞと云うようないろいろの点を考え合せて、どうもこれは女将が法廷の事情に明るいところから見て、きつと法廷内に誰れか相棒がいるに違いないと狙いをつけて、まず傍聴人の仲間入りをしたわけなんです。それで傍聴席や休憩室で早くも妙な気配を感ずると、

早速私に命じて例の写真をとらしたんです。その写真を、直ぐに現像すると青山さんは、「つぼ半」へ遊びに上ったんだそうですが、そこで何気なく女中にその写真を見せてカマをかけると「おや、この中に、うちの旦那さんがいる」ってことが判つて、それで、いよいよ、あの一網打尽の大捕物つてことになったんです……え？ ええそりやアもう、女将は、亭主同様重罪でしたよ。

（「新青年」昭和十一年九月号）

石
塤
幽
靈

秋森家あきもりというのは、吉田雄太郎君よしたゆうたろうのいるN町のアパートのすぐ西隣にある相当にひろ宏い南向きの屋敷であるが、それは随分と古めかしいもので処まんだらにウメノキゴケの生えた灰色いらいらの藁わらは、アパートのどの窓からも殆んど覗うかがう事の出来ない程に鬱蒼くもぎたる櫟かすがや赤檜あかがしの雑木林にむっちりと包まれ、そしてその古屋敷の周囲は、ここばかりは今年の冬に新しく改修されたたつぷり、一丈はあろうと思われる高い頑丈な石塀けいにケバケバしくとりまかれていた。屋敷の表はアパートの前を東西に通ずる閑静な六間けん道路を隔てて約三百坪程の東西に細長い空地くわちがあり、雑草に荒らされたその空地の南は、白い石を切り断つたような十数丈の断崖になっていた。

吉田雄太郎君は此処へ越して来た時から、この秋森家の古屋敷に何故か軽い興味を覚えていた。雄太郎君の抱いた興味というのは、只この屋敷の外貌についてだけではなく、主としてこの古屋敷に住む秋森家の家族を中心としてのものであった。全く、雄太郎君がこのアパートへ越して来てからもう殆んど半歳になるのだが、時たま裏通りに面した石塀の西の端にある勝手口で女中らしい若い女を見かけた以外には、まだ一度も秋森家の家族らしき者を見たこともなければ、またその古びた高い木の門の開かれたことをさえ見たことはなかった。要するに秋森家の家族という

のは陰鬱で交際がなく、雄太郎君の考えに従えば、まるで世間から忘れられたように、この山の手の静かな丘の上に置き捨てられていたのだ。尤も時たま耳にした人の噂によれば、なんでもこの秋森家の主人というのはもう六十を越した老人で、家族と云えばこの老主人とまだ独身でいる二人の息子との三人で、これに中年の差配人とその妻の家政婦、並びに一二名の女中を加えたものがこの宏い屋敷の中で暮しているということだった。が、そんな報告をした人でさえ、その老主人と二人の息子を見たことはないと言っている。ところが、突然この秋森家を舞台にして、至極不可解きわまる奇怪な事件が持ちあがった。そしてふとしたことから雄太郎君は、身を以てその渦中に巻きこまれてしまったのだ。

それは蒸しかえるような真夏の或る日曜日のことだった。午後の二時半に、一寸した要件で国元への手紙を書き終えた雄太郎君は、恰度この時刻にきまつていつものように郵便屋が、アパートの前のポストへ第二回目の廻集に来ることを思い出して、アパートを出て行った。習慣というものは恐ろしいもので、雄太郎君の予想通り実直な老配達夫は、もうポストの前へ屈みこんで取出口にガチャガチャと鍵をあてがっていた。そこで雄太郎君は彼の側に歩みよって一寸挨拶をし、郵便物を渡して、さてそれから、じっとり汗に濡れた老配達夫の皺の多い横顔を見ながら、暑いなア、と思った。——断つて置くが、この附近は山の手のうちでも殊に閑静な地帯

で、平常でも余り人通りはないのであるが特にその日は暑かったためか、表の六間道路は真つ昼間だというのに猫の子一匹も通らず、さんさんと降りそそぐ白日の下にまるで水を打ったような静けさであった。その静寂のなかで不意に惨劇がもちあがつたのだ。

始め、雄太郎君と集配人の二人は、西隣の秋森家の表門の方角に当って低い鋭い得も云われぬ叫び声を耳にした。期せずして二人はその方角へ視線を投げた。すると二人の立っているポストの地点から約三十間ほど隔った秋森家の表門のすぐ前を、なにか黒い大きな塊を飛び越えるようにして、白い浴衣を着た二人の男が、横に並んで、高い頑丈な石塀沿いに雄太郎君達の立っているのと反対の方向へ、互に体をすりつけんばかりにして転がるように馳け出していった。が、次の瞬間もう二人の姿は、道路と共に緩やかな弧を描いて北側へカーブしている、秋森家の長い石塀の蔭に隠れて、そのまま見えなくなってしまった。——全く不意のことではあつたし、約三十間も離れていたもので、その二人がどんな男か知るよしもなかったが、二人とも全然同じような体格で、同じような白い浴衣に黒い兵児帯へこを締めていたことは確かだ。雄太郎君は軽い眩暈めまいを覚えて思わず側のポストへよろけかかった。が、カンカンに灼けついていたポストの鉄の肌にはハツとなつて気をとりのおした時には、もう老配達夫は秋森家の表門へ向つて馳け出していった。雄太郎君も直ぐにその後を追つた。

けれども二人が表門に達した時にはもう二人の怪しげな男の姿はどこにも見当らなかつた。黒い大きな塊に見えたのは案にたがわず這うようにして俯向きに崩打たおれたまま虫の息になつてゐる被害者の姿だつた。見るからに頸の白い中年の婦人だ。舗道の上にはもう赤いものが流れ始めてゐる。郵便屋はすっかり狼狽し屈み腰になつて女を抱きおこしながら雄太郎君へあちらを追え！ と顎をしやくつてみせた。

秋森家の表を緩やかな弧を描いて北側へカーブしてゐる一本道の六間道路は、秋森家の石堀の西端からその石堀と共にグツと北側へ折曲つてゐる。雄太郎君は夢中でその右曲りの角へ馳けつけると、体を躍らすようにして向うの長い道路をのぞき込んだ。その道路の右側は秋森家の長い石堀だ。左側は某男爵邸の裏に当たる同じような長い高い煉瓦堀だ。恐らく隠れ場所とてない一本道——。だが、犯人はいない！ 犯人の代りに通りの向うから、一見何処かの外交員らしい洋服の男がたつた一人、手に黒革のカバンを提げてやつて来る。雄太郎君は馳けよると、すかさず訊ねた。

「いまこの道で、白い浴衣を着た二人の男に逢いませんでしたか？」

「……………」男は呆気にとられ瞬間黙つたまま立竦たちすくんでいたが、意外にも、すぐに強く首を横に振りながら、

「そんな男は見ませんでした。……………なにか、あつたんですか？」

「そいつア困つた」と雄太郎君は明かにどぎまぎしながら投げ出すように、「いま、

この秋森さんの門前で人殺し……」

「なんですって！」男は見る見る顔色を変えて「人殺しですって！ いったい、誰が殺やられたんです？」と引返す雄太郎君に並んで馳けだしながら、とぎれとぎれに云った。

「私は、この秋森の差配人で、戸川とがわやいち弥市やいちつて者です」

けれどもすぐに石塀を折曲まつて秋森家の門前が見えると、二人はそのまま黙もつて馳け続けた。そして間もなく郵便屋に抱き起こされて胸の傷口へハンカチを押し当らせたままもうガツクリなっている女を見ると、洋服の男は飛びかかるようにして、

「あ、そめ子！」

と、そしてものに憑よられたように辺りをキョロキョロ見廻しながら、

「……こ、これは私の家内です……」

そう云つてべつたり坐り込んで了つた。

まがりかど曲角まがりかどの向うから、気狂いじみたチンドン屋の馬鹿騒うぎが、チチチンチチチンと聞えて来た。

それから数分の後。N町の交番だ。

新米の蜂須賀巡査は、炎熱の中に睡魔と戦いながら、流石さすがにボンヤリ立っていた。そこへ一人のチンドン屋が、背中へ「カフエー・ルパン」などと書いた看板を背負い、腹の上に鐘や太鼓を抱えたまま息急切いきせきつて馳け込んで来ると、いま秋森家の前を通りかかったところが、恐ろしい殺人事件が起きあがっていた事、死人の側には三人の男がついていたが、ひどく狼狽している様子だったので、取りあえず自分が知らせに来た事、などを手短かに喋り立てた。殺人事件！ 蜂須賀巡査は電気に打たれたようにキツとなった。時計を見る。三時十分前だ。取りあえず所轄署へ電話で報告をすると、そのまま大急ぎでチンドン屋を従えて馳けだした。

現場には、もう例の三人の他に、秋森家の女中やその他数人の弥次馬が集っていた。蜂須賀巡査の顔を見ると、いままで弥次馬共を制していた雄太郎君が進み出て、被害者の倒れていた地点から約五間程西へ隔った塀沿いの路上から拾い上げたと言ふ、血にまみれたひとりの短刀を提供した。

蜂須賀巡査は早速証人の下調べに移った。

「……じゃあ、つまりなんだね……吉田君がこちらから、その浴衣を着た二人の男を追って行く。向うから戸川さんがやって来る。ふむ、つまり、挟撃はさみうちちだ。而も道しか

路は、一本道！……ところが、犯人はいない？……すると……」

蜂須賀巡査は眉根に皺を寄せ下唇を噛みながら、道路の長さを追い始めた。が、やがてその視線が、秋森家の石塀の、曲角に近い西の端に切抜かれた勝手口の小門にぶつかる、じつと動かなくなつてしまつた。が、間もなく振り返ると、微笑を浮かべながら二人の証人を等分に見較べるようにした。勿論雄太郎君も戸川差配人も、すぐに蜂須賀巡査の意中を悟つて大きく頷いた。

「困つたことですが」と差配人の戸川が顔を曇らしながら云つた。「どうも其処より他に抜け口はございません」

そこで蜂須賀巡査は意気込んで馳けだし、勝手口の扉をあけて屋敷の中へ這入つて行つた。が、やがてその扉口から顔を出すと、勝誇つたように云つた。

「ふむ。凶星だ。足跡がある！」

恰度この時、司法主任を先頭にして物々しい警察官の一隊が到着した。蜂須賀巡査は、雄太郎君の提供した証拠物件に添えて、下調べの顛末を誇らしげに報告した。そして間もなく証人の再度の訊問が始められた。被害者は秋森家の家政婦で、差配人戸川弥市の妻そめ子。兇行に関しては雄太郎君と郵便屋との二人の目撃者があつたし、死因が単純明瞭で一目刺殺である事は疑いない事実と判定されたため、女の死体は間もなく却下になつた。そして雄太郎君と郵便屋と戸川差配人との三人の証

言の結果、司法主任は蜂須賀巡查の発見した例の足跡の調査に移った。

まず勝手門を開けて屋敷内へ這入る。五間程隔つて正面に台所口がある。左は折曲つた石堀の内側。右は広い前庭の植込を透して、向うに母屋が見える。日中の暑さで水を撒くと見えて、地面は一樣に僅かながら湿りを含んでいる。勝手門と台所との間には、御用聞ごようききやこの家の使用人達のものであろう、靴跡やフェルト草履ぞうりの跡が重なるようにしてついている。蜂須賀巡查の発見した足跡はこの勝手門からすぐ
に右へ折れて、前庭の植込から母屋へ続く地面の上に点々と続いている。庭下駄の跡だ。非常に沢山ついている。

調査の結果、大体その庭下駄の跡は、四本の線をなしている事が判つた。つまり、二人の間が、庭下駄を履いてこの間を往復したことになる。すると、外から這入つて、外へ帰つたのか？ 内から出て内へ帰つたのか？ けれどもこのような疑問は、庭下駄と云う前後の区別のハッキリした特殊な足跡が解いて呉れる。そして間もなく母屋の縁先の沓脱くつぎで、地面に残された跡とピッタリ一致する二足の庭下駄が発見みけられた。

秋森家の家族が怪しい。

警官達は俄然色めき立った。司法主任は、蜂須賀巡查を足跡の監視に残すと、母屋の縁先へ本部を移して、雄太郎君、郵便屋、戸川差配人の三人立会の下に、いよ

いよ秋森家の家族の調査にとりかかった。

老主人の秋森辰造は、動くことの出来ない病気で訊問に応じ兼ねると申しでた。そしてその病気については差配人や女中の証言が出たので、司法主任は二人の息子呼び出した。ところが、出て来た二人の男を一目見た瞬間に、雄太郎君と郵便屋は真つ蒼になった。

二人の息子は、体格と云い容貌と云いまるで瓜二つで、二人とも同じような白い蚊かがすり飛白の浴衣を着、同じような黒い錦紗きんしゃの兵児帯へいごおびを締めている。名前は宏ひろしに実みのる、年齢は二人とも二十八歳。——明かに双生児だ。

一瞬、人々の間には氣不味まい沈黙ずが漲みなぎった。が、すぐに郵便屋が、堪えかねたように顫える声で叫んだ。

「こ、この人達に、違いありません」

そこで司法主任は、一段と嚴重な追求をはじめた。ところが秋森家の双生児ふたごは、二人ともつい今しがたまで裏庭の藤棚の下で午睡ひるねをしていたので、なにがなんだかさッパリ判らんと答え、犯行に関しては頭から否定した。前庭などへ出たこともない、とさえ云った。

そこで二人の女中が改めて呼び出された。ところがナツと呼ぶ歳上のほうの女中は、老主人の係りで殆んど奥の離れにばかりいたから、母屋のことは少しも判らな

いと答え、キミと呼ぶ若いほうの女中は、二人の若旦那が藤棚の下で午睡ひるねをしていられたのは確かだが、実は自分もそれから一時間程午睡ひるねした事、尚事件の起きあがる少し前頃に何処からか電話がかかって来て、家政婦のそめ子が留守を頼んで出て行ったが、何分夢うつつでボンヤリ寝過してしまい申訳ありませんと答えた。

このように女中の証言によつても、双生児ふたごの現場不在証明アライは極めて不完全なものであつたし、何よりも悪いことには、訊問が被害者の戸川そめ子の問題に触れる度に、双生児ふたごは何故か妙に眼をきよとつかせたり臆病そうに口籠くわつたりした。この事は明かに係官の心証を損ねた。そして司法主任は、双生児ふたごの指紋と、押収した兇器の柄に残された指紋との照合による最後の決定を下すために、警視庁の鑑識課へ向けて部下の一人を急がした。

三

さて、一方足跡の番人を仰せつかった新米の蜂須賀巡查は、奉職してから初めての殺人事件に、もう一番手柄を立てたかと思うと、内心少からぬ満足で、こうなるとそろそろ商売は可愛らしく、後手を組んで盛んに合点しながら、足跡の線をあち

らへブラリこちらへブラリと歩き廻っていた。

こうして研究してみると、足跡などもなかなか面白い。例えば——、蜂須賀巡査は勝手口の小門の近くに屈み込んで、庭下駄の跡に踏みつけられた一枚の桃色の散ちぢ告を見ながら考えた。——例えば、この広告ビラは、小門の方を向いた庭下駄の跡に踏みつけられているのだから、庭下駄の主が庭の植込から出て来て、この小門を脱け出て行く際に踏みつけられたものに違いない。——ふむ。カフェーの広告だな。ルパン……ルパン？ はて、聞いたことのある名だぞ？……

何に気づいたのか、急に蜂須賀巡査は立ちあがった。そして額口に激しい困惑の色を浮べながら、暫くじつと立止っていたが、やがて訊問をすまして台所へ出て来た女中のキミを見ると、歩みよつて声をかけた。

「君。ちよつと訊くがね。この家へは、新聞や散ちぢ告は、どこから入れるかね？」
「え、新聞？」と彼女は体を起してエプロンで手を拭きながら「新聞は、その小門を開けて、台所ここまで届けて呉れますわ。郵便もね。でも、広告などは、その小門を一寸開けて、そこから投げ込んで行きますが」

「成る程。有難う」

蜂須賀巡査は大きく頷いた。けれどもその顔色は見る見る蒼褪め、額口には一層激しい困惑の色を浮べて今までの元氣はどこへやら、下唇を堅く噛みしめながら、

顛える指先で盛んに顛顛のあたりをトントンと軽く叩きながら、塑像のように立竦んでしまった。

——妙だ……つまりここから、散広告が投げこまれる……それから犯人が女を殺しに出かける途中で、投げこまれたこの広告を踏みつける……それでいいか？ それでいいのかな？……駄目駄目。サッパリ理窟が合わんぞ！ 蜂須賀巡査は頻りに苦吟しはじめた。

するとそこへ、取調べを終わった司法主任の一行が、宏と実の双生児を引立てて意気揚々と出かけて来た。蜂須賀巡査は急にうろたえはじめた。そしてどぎまぎした調子で司法主任へ云った。

「待って下さい。ちよつと疑問があるんです」

「なんだって？」司法主任は乗り出した。「疑問？ 冗談じゃあない。随分ハッキリしてるぜ。鑑識課から電話があったんだ。兇器の柄の指紋と、秋森宏の指紋がピッタリ一致しているんだ！」

——蜂須賀巡査は、手もなく引退った。

やがて一行は引揚げて行つた。そして秋森家の双生児は殆んど決定的な犯人として警察署へ收容され、事件は一段の落着を見せはじめた。

ところが、虫がおさまらないのは蜂須賀巡査だ。夕方の交代時間が来て非番にな

ると、相変らず悶々と考え続けながら秋森家へやって来た。そして勝手口の例の場所^{さつき}で、先刻の女中に立会つて貰うと、庭下駄の跡に踏みつけられた広告ビラの前へ屈み込んで、もう一度改めて考えはじめた。

——「カフエー・ルパン」の広告ビラ。これは確かにあのチンドン屋の撒き捨てていったものに違いない。すると、この広告ビラが先に投げ込まれたのか？ それとも二人の犯人が先にここを通つたのか？……けれども目前の事実はビラが先に投げ込まれて、その後から二人の犯人が出て来て、庭下駄で知らずにビラを踏みつけた、としか解釈出来ない。そうだ。この事実に間違いはない。すると……すると、チンドン屋は、犯人がこの小門を出て行く前に、つまり惨劇の起きるより先に、この門前を通つたことになる……それでいいか？ それでいいのか？……駄目駄目。チンドン屋は、事件の後から通つた筈だ。……まるで理窟になつたらん！

蜂須賀巡査は苛立たしげに立上つた。

——そうだ。兎に角、一度チンドン屋に当つてみよう。そしてあのチンドン屋が、ひよつと犯行の前にも此処を通つたかどうか？ まずあり得ない筈だが、念のために確かめてみよう。

そこで蜂須賀巡査は秋森家を出て、石堀沿いに東の方へ歩きだした。

——若しも、思つた通りチンドン屋が、犯行後にビラを投げ込んだのが確かであつ

たなら……あの犯人の足跡は……そうだ。恐ろしい罠だ。恐ろしい詭計だ……。

蜂須賀巡査は、考え考え歩き続けた。ところが、茲ではからずも蜂須賀巡査は、またしてもひとつの不可解な問題にぶつかってしまった。

恰度秋森家の表門の前の犯行の現場まで来ると、何に驚いたのか蜂須賀巡査は不意に立停ってしまった。そしてじつと前方を見詰めたまま、頻りに首を傾げ始めた。が、やがていまいままいそうに舌打すると、少からず取乱れた足取で大股に歩き始めた。そしてアパートの前まで来ると、さっさと玄関へ飛び込んで、受付へ、

「吉田雄太郎君を呼んで呉れ給え」と云った。

訊問の立会で神経がくたくたに疲れてしまった雄太郎君は、自分の室で思わずうつらうつらしていたが、吃驚して飛び起きると大急ぎで階段を降りて来た。そして蜂須賀巡査の顔を見ると、

「また何か起ったんですか？」

「いや、なんでもありませんが、一寸貴方に訊き度い事があるんです。済みませんが、一寸そこまで」

そう云つてもう歩き出した。

「いったい何です？」

雄太郎君は蜂須賀巡査の後に従いながら、急きこんで尋ねた。けれども蜂須賀巡査は、そのままものも云わずに歩き続け、やがて秋森家の表門の前まで来て舗道の上の先刻の処に立停ると、振返つていきなり云つた。

「いま、私達の立っている処が、現場、つまり被害者の倒れていた処でしょう？」
 雄太郎君は、この突飛もない判りきつた質問に思わずギョツとなった。そして顫えながら大きく頷くと、蜂須賀巡査は、今度は探るような眼頭で雄太郎君を見詰めながら、

「僕は、君を、真面目な証人として信じているが、君はあの時確かに、アパートの前のポストのすぐ側に立っていて、此処に被害者の倒れていたのを見たと言つたね？」
 「そうです」雄太郎君は思わず急きこんで、「嘘と思われるなら、郵便屋にも訊いて下さい」

「ふん、成る程。すると、此処から向うを見れば、舗道の縁に立っているそのポストは、当然見えなければならぬ筈だね？……どうです。ポストが見えますか？……」
 雄太郎君は途端に蒼くなった。ナンと雄太郎君の視線の届くところ、そこにはポストの寸影すら見えないではないか！ ポストより数間手前にある筈の街燈が、青白い光を、夕暗の中へボンヤリと投げかけている以外には、大きくカーブしている高い石塀の蔭になって、まるで呑まれたようにポストの影は見えないではないか！

蜂須賀巡査は、雄太郎君の肩に手をかけながら、顫える声でいった。「君、いったいこれは、どうしたと云うのだ！」

四

そんなわけですっかりあがつてしまい、その晩殆んど一睡もせずを考え続けてしまった雄太郎君は、けれども翌朝早くから蜂須賀巡査に叩き起されると、ひどく不機嫌に着物を着換えて部屋を出た。

「一寸手伝つて貰いたいんですがね」と階段を降りながら、急に親しげな調子で新米巡査は口を切つた。「昨晩は、僕だつて少しも眠れなかつたです。あれから僕は、一晩中飲んだくれのチンドン屋を探し廻つたんですよ。その結果、これはまだ内密ないしよの話なんですが、大変な発見をしたんです。……つまり、犯行の暫く後にあそこを通つたチンドン屋の広告ビラを、二人の犯人が、例の庭下駄で踏みつけているんです。だから、ね、君。あの庭下駄の跡は、二人の真犯人が犯行の際につけたものではなくて、あれは、犯行の後から、故意に、あの双生児ふたごを陥し入れるためにつけられた、恐ろしい詭計トリヅツなんですよ。真犯人は、誰だかまだ判らないが、兎に角、あの秋森家

の双生児は、決して真犯人ではないね！」

そしてアパートを出ながら、驚いている雄太郎君には構わずに、急に憂鬱になりながら、

「ところが、署では、僕の意見など、てんで問題にされないですよ……証人はあるし、証拠は挙がつているし、それになによりも悪いことには、その後取調べの結果、あの双生児の二人と殺された家政婦との間に、醜関係のあった事がばれたんです。一寸驚いたですね。殺された女が、報酬を受けてそんな関係を持っていたのか、それとも、女自身の物好きなきな慾情から結ばれたものか、いずれにしても、その醜関係が有力な犯罪の動機にされたんです。そこへもつて来て、ほら、昨晚のあれでしょう。全く腐っちまうね……だが僕は、こんなところで行詰りたくない」

やがて秋森家の門前へつくと、蜂須賀巡査はポケットから大きな巻尺を取り出し、雄太郎君に手伝わして、昨晚のあの石塀の奇蹟に就いての最も正確な測量を始めた。けれどもいくら試みても、ポストの処から、被害者の倒れていた地点は、緩やかにカーブしている石塀に隠れて見えない。同様に、被害者の倒れていた処からも、ポストは見えない。蜂須賀巡査は、とうとう巻尺を投げ出して云った。

「吉田君。もう一度だけ訊くが、これが最後だから、どうか僕を助けると思つて、頼むから正直に云つて呉れ給え。ね。君は確かに、あの郵便屋と二人で、このポスト

の直ぐ側に立っていて、犯行の現場を見たんだね？」

雄太郎君は、この執拗きわまる蜂須賀巡査の質問に、思わずカツとなったが、虫をころして昨晚の通り返事をした。

「ふん、やつぱりそうか……いや、疑つて済まなかつたね」蜂須賀巡査は巻尺を仕舞いながら云つた。「すると、どうしてもこの長い石堀は、あの時より、少くとも三尺は道路の方へ飛び出している事になる……全く、馬鹿げた事だ……いや、どうも有難う」と雄太郎君に会釈しながら、「だが、兎に角こ奴は、ひよつとすると証人の責任問題になるかも知れませんか、その点心得ていて下さい」

そう云つて蜂須賀巡査は、いささか気色ばんで歸つて行つた。

——困つたことになつたぞ。と雄太郎君は溜息をつきながら、——ひよつとすると、俺のほうの間違つていたかな？ いやいや、断じて間違つてはいない筈だ。だが、それにしても全く妙だ。而も蜂須賀巡査は、秋森家の双生児は犯人ではないと云つたぞ。すると、いったい犯人は誰だろう？ 誰が主犯で、誰が共犯か？ いや、もう一組他の双生児でもあるのかな？ それとも……。

雄太郎君は、いまはもう不可解への興味などと云うところは通り越して、そろそろ気味悪くなり始めた。そして同時に、蜂須賀巡査の捨台詞がグツと腹にこたえて来た。

——証人の責任問題？ チェツ、飛んでもない迷惑だ。雄太郎君は悶々と悩み続けた。けれどもいくら考えて見ても、問題の解決はつかない。そして結局自分の力では二進も三進も勘考がつかないと悟った雄太郎君は、誰か力になって貰える、信頼の置ける先輩はないものか、と探しはじめた。

——ああ、青山喬介！

雄太郎君は、ふと、自分の通っている学校へ、この頃ちよいちよい講義に来る妙な男を思い出した。

——そうだ。なんでもあの人は、かつて数回の犯罪事件に関係したこともあると云う。事情を打明けたなら、屹度相談に乗って呉れるかも知れない……。

そこで雄太郎君は、学校が退けると早速青山喬介を訪ねて行った。

「あの事件は、もう解決済みじゃなかったかね」

そう云って喬介は、無愛想に雄太郎君へ椅子を勧めた。けれどもやがて雄太郎君が、自分が証人として見聞した事実や、蜂須賀巡査の発見した新しい犯人否定説や、石塀の前の妙な出来事や、それからまた自分の証人としての困難な立場などを細々と打明けると、青山喬介はだんだん乗り出して、話の途中で二三の質問をしたり、眼をつむって考えたりしていたがやがて立上ると、

「よく判りました。力になりました。だが、その蜂須賀君とやらの云う通り、犯

人は秋森家の双生児ふたじじゃあないね。……誰と誰が犯人かつて？ そいつは明日の晩まで待つて呉れ給え」

五

翌日一日が雄太郎君にとつてどんなに永かったことか云うまでもない。時計の針の動きがむし、ようにもどかしく、矢も楯も堪え切れなくなった雄太郎君は、やがて日が暮れて夕食を済ますとそそくさと飛び出して行った。

青山喬介は安楽椅子に腰かけて雄太郎君を待兼ねていた。「今日、蜂須賀巡查と云うのに会つて来たが、なかなか間に合いそうな男だね」喬介が云つた。「この事件で、あの男の昇給は間違いなしだよ」

「じゃあもう、真犯人が判つたんですか？」

「勿論さ。昨晚君の話聞いた時から、もう僕には大体判つていた。……なにも驚くことはないよ。ね、君。事情は大変簡単じゃあないか。……つまり、あの一本道で、君と郵便屋が、こちらから二人の犯人を追つて行く。差配人が向うから来る。ところが犯人がいない。そこで、たったひとつの抜道である秋森家の勝手口を覗き

こむ。すると、犯人の足跡がある。ところがだ。その足跡が、犯行よりずっと後からつけられたものであった、としたなら、一体どうなるかね?……」

「……犯人が、その時、勝手口から這入らなかつたことになりましたが……」

「そうだよ。そして、塀の外には、君達三人の男がいたんだ。……判るだろう?」

「……判るようで……判りません……」

「じれつたいね……その塀の外に、犯人がいたんだよ……つまり、君達三人の中に、犯人がいたんだ!」

——冗談じゃあない! 雄太郎君は思わず声を上げようとした。が、喬介は押かぶせるように、

「君達三人の中で、犯行後チンドン屋が勝手口へピラを投げ込んで通りかかった時から、そのチンドン屋の知らせで蜂須賀巡査が馳けつけて足跡を発見するまでの間に、勝手口から邸内へ這入った男があつたらう?……そいつが犯人だ」

「じゃあ、戸川差配人が犯人?」

「そうだ。ところで、戸川は何分位邸内にいたかね?」

「約五分? 位です。でも、差配人は、カバンを置きがてら急を知らせに……」

「そのカバンだよ。今日僕が、蜂須賀君と一緒に調べたのは。その中に、白い浴衣と黒い兵児帯が一人前這入っていたんだ!……つまり戸川は、皆んな午睡ひるねの最中に、

電話で自分の女房を呼び出すと、君達証人の前で予め双生児ふたごの指紋をつけて置いていた兇器さししろで刺殺し、君達の目の届かない曲角の向うで、洋服の上へ着ていた浴衣を脱いでカバンへ突込むと、そ奴いつを邸内へ置きにいった序ついでに、大急ぎで庭下駄トリツクの詭計こいつを弄し、女中達を叩き起したと云う寸法だ。……なんの事はない。秋森家の双生児ふたごと殺された女との醜関係から、警察が双生児ふたごに持たせた犯罪の痴情的動機を、僕は逆にそうして極めて自然に、女の夫である戸川弥市に持たせたまでさ」

「じゃあいったい、もう一人の共犯者は？」

「共犯？ 共犯なんて始めからないよ」

「待つて下さい。貴方は、僕の視力を無視するんですか？ 僕はハッキリこの眼で、

二人の犯人を……」

「いや、君がムキになるのも尤もだ。君の云うその共犯者はあの石堀の奇蹟と非常に深い関係があるんだ。そしてその奇蹟を発見みけた犯人が、そ奴いつを利用して故意に君達証人、特に郵便屋のように一定の時刻にきつとあの辺を通る男の面前で、巧妙な犯罪を計画したんだよ。あ、どうしたんだ。君。頭が痛むのかね？ いや、尤もだ。あの石堀の奇蹟に就いては、確かに不可解なことがあったんだ。もう、大体の見当はついてるんだが、一寸説明した位では逆も信じられまい。もう二三日待つて呉れ給え。兎に角僕は、これから一寸警察へ行かなくちゃあならん——」

さて、青山喬介が雄太郎君の頭痛の種を取り除いて呉れたのは、それから三日後のことだった。

その日は恰度あの惨劇の日と同じようにひどく暑い日だったが、喬介と雄太郎君と蜂須賀巡査の三人は、午後の二時半の灼くような炎熱に打たれながら、秋森家の横の道路を歩いていった。が、やがて例の曲角まで来ると、喬介が云った。

「これから実験を始める。そしてそれは大丈夫成功するつもりだ。——僕達はいまからこの石塀に沿って、あの表門の前の、被害者の倒れていた位置まで歩いて行くんだ。そしてその位置についた時に、僕達の前方に、ポストが、あの見えない筈のポストが、若しも見えて来たなら、それで奇蹟は解決されたんだ。いいかい。さあ歩こう」

雄太郎君と蜂須賀巡査は、まるで狐にでも憑かれたような気持で歩きだした。……五間……十間……十五間……もう秋森家の表門迄は、余すところ五間、だがそれも聴^{やが}て……四間……三間……と、ああ、とうとう奇蹟が現れた！

まだ被害者の倒れていた位置までは三間近くもあるうと云うのに、カーブを越して三十間も向うのアップートの前にある筈の赤いポストが、いともクツキリと、鮮かな姿を石塀の蔭から現わし始めた。そして三人が前進するに従って、その姿は段々と完全に、そして遂に石塀の蔭から離れた。と、なんと云う事だ。そのポストに重な

るようにして、もう一つ同じようなポストが見えだして来たのだ。そして三人が表門の前に立った時には、二つの赤いポストがヒョッコリ並んで三十間の彼方に立っていた。雄太郎君は軽い眩暈めまいを覚えて思わず眼を閉じた。と不意に喬介が云った。「見給え、郵便屋の双生児ふたごがやって来る！」

——全く、見れば霜降りの服を着て、大きな黒い鞆を掛けたグロテスクな郵便屋の双生児ふたごがポストの側からだんだんこちらへやって来る！ だが、不思議にもその双生児ふたごは、三人に近付くに従って双生児ふたごからだんだん重なつて一人になりはじめた。そして間もなく其処には、あの実直な郵便配達夫が何に驚いたのか眼を瞠みはつて、じつとこちらを見詰めたまま立停っていた。

「ああ、蜃気楼いせどだな！」不意に雄太郎君が叫んだ。

「うん、当らずと雖も遠いそどからずだ」喬介が云った。「つまりひとつの空気反射だね。温度の相違などに依つて空気の密度が局部的に変わった場合、光線わんきょくが彎曲わんきょくして思いがけない異常な方向に物の像すがたを見る事があるね。所謂ミラージいわゆるとか蜃気楼とかかつて奴さ。そいつの、これは小規模な奴なんだ。……今日は、あの惨劇の日と同じように特に暑い。そしてこの南向の新しい大きな石堀は、向いの空地からの反射熱や、石堀自身の長さ高さその他の細かい条件の綜合によって、ひどく熱せられ、この石堀に沿つて空気の局部的な密度の変化を作る。するといま僕達の立っている位置か

ら、あのポストの附近へ通ずる光線は、空中で反射し屈折しとて、つもない彎曲をして、ひよっこり『石塀の奇蹟』が現れたんだ」そして喬介は郵便屋を顎で指して笑いながら、「……ふふ……見給え。規定された距離を無視して近付いた郵便屋さんは、もう双生児ふたごではなくなつて、恐らく先生も、いま僕達の体について見たに違いない不思議に対して、あんなに吃驚びつくりして立ってるじゃあないか。……兎に角、もう十分もして、一寸でも石塀の温度が下つたり、この実に珍らしい奇観を作り上げていく複雑な条件が一つでも崩れたりすると、もうそれで、あのポストも見えなくなつてしまふよ……やれやれ、これでどうやら君の頭痛もおつたらしいね」

（〈新青年〉昭和十年七月号）

動
か
ぬ
鯨
群

「どかんと一発撃てば、それでもう、三十円丸儲けさ」

いつでも酔つて来るとその女は、そう云つてマドロス達を相手に、死んだ夫の話をはじめた。捕鯨船北海丸の砲手で、小森安吉と云うのが、その夫の名前だった。成る程女の云うように、生きてゐる頃は、一発銃を撃ち込む度に、余分な賞与にありついてゐた。が、一年程前に時化に会つて、北海丸の沈没と共に行衛が知れなくなると、女は、僅かばかりの残された金を、直ぐに使果して、港の酒場で働くようになった。砲手は、捕鯨船では高級な船員だった。だから雑夫達と違って、ささやかながらも一家を支えて行くことが出来た。夫婦の間には、子供が一人あつた。女は愚痴話をしながら、家に残して来たその子供のことを思い浮べると、酔も醒めたように、ふと押黙つて溜息をつく。

最初のうちは、夢のように信じられなかつた夫の死も、半歳一年と日がたつにつれ、追々ハッキリした意識となつて、いまはもう、子供のためにこうして働きながら、酔つたまぎれに法螺とも愚痴ともつかぬ昔話をするのが、せめてもの楽みになつてゐるのだつた。

北海丸と云うのは、二百噸足らずのノルウェー式捕鯨船で、小さな合名組織の岩倉

捕鯨会社に属していた。船舶局の原簿によると、北海丸の沈没は十月七日とあった。その日は北太平洋一帯に、季節にはいつて始めての時化しけの襲った悪日だった。親潮に乗って北へ帰る鯨群を追廻していた北海丸は、日本海溝の北端に近く、水が妙な灰色を見せている辺あたりで時化しけの中へ捲き込まれてしまった。

最初に救難信号を受信ききつけたのは、北海丸から二十哩カイリと離れない地点で、同じように捕鯨に従事していた同じ岩倉会社の、北海丸とは姉妹船の釧路丸くしろまるだった。釧路丸以外にも、附近を航行していた汽船の中には、その信号を聞きつけた貨物船が二艘あった。しかし、海霧ガスに包まれた遭難箇所は、水深も大きく、潮流も激しく、荒れ果てていて到底近寄ることは出来なかった。

小船の北海丸は、浸水が早く沈没は急激だった。海難救助協会の救難船が、現場に馳はせつけた頃には、もう北海丸の船影はなく、炭塵や油の夥おほしく漂った海面には、最初にかけてつけた釧路丸が、激浪に揉まれながら為なす術すべもなく彷徨さまよっているばかりだった。

S・O・Sによれば、遭難の原因は衝突でもなければ、むろん坐礁、接触などでなかった。ただ無暗と浸水が烈しく、急激な傾斜が続いて、そのまま沈没してしまつた。しかし、まだ老朽船と云うほどでもない北海丸が、秋口の時化しけとは云え、何故そんなに激しい浸水に見舞われたのか、それは当の沈没船から発せられた信号に

よつてさえも、聞きとることは出来なかつた。捜査は、救難船と釧路丸の手によつて続けられた。けれども時化しげがあがつて数日たつても、北海丸は発見されなかつた。それから、もう一年の月日が流れている。

根室の港には、やがてまた押し迫つて来る結氷期を前にして、漁期末の慌しさが訪れていた。

「どかんと一発撃てば、それでもう、三十円丸儲けさ」

夜になると底冷えがするので、もう小さな達磨だるまストープを入れた酒場では、今夜もまた女の愚痴話が始まつていた。

「人間なんて、あてになるもんじやないよ……ね、そうじやない？　丸辰まるたうのとつ

あん……」

「みんな、鯨たの崇りだよ」

丸辰と呼ばれた沖仲士らしい老水夫は、酒に焼けた目尻をものうげに起しながら、人々を見廻わすようにして云つた。

「鯨の崇りだよ。仔鯨を撃つから、いけないんだ」

「とつつあん。また、ノルウェー人かい？」

トロール漁船の水夫らしい男が、ヤジるように云つた。

鯨の崇り——しかしそれは、一人丸辰の親爺だけではなく、北海丸の沈没の原因

について、根室港の比較的歳取った人々の間に、もうその当時から交されていた一つの風説だった。まだ日本の捕鯨船にノルウエー人の砲手達が雇われていた頃から、その人達によつて云い伝えられた伝説だった。

「仔鯨を撃つ捕鯨船には、必らず祟りがある」

宗教に凝つた異邦人達は、そう云つて仔鯨撃ちを恐れ拒んだ。もつともそれでなくとも、鯨類の保護のために、仔鯨を撃つことは法律を以つて固く禁ぜられていた。親鯨でさえもその濫獲を防ぐためには、政府は捕鯨船の建造を、全国で三十艘以内に制限しているのだった。しかし、捕鯨能率を高めるために、監視船の眼のとどこかぬ沖合で、秘かに仔鯨撃ちも犯す捕鯨船は、時折りあるらしかった。

根室の岩倉会社には、二艘の持船が許されていた。北海丸と釧路丸がそれだった。そして海霧の霽れた夕方など、択捉島の沖あたりで、夥しい海豚の群に啄まれながら浮流されて行く仔鯨の屍体を、うっかり発見けたりする千島帰りの漁船があつた。丸辰流に言えば、その鯨の祟りを受けて、北海丸は沈没した。そしてもう、一年の月日が流れてしまった。岩倉会社は、損害にもひるまず、直ぐに新しい第二の北海丸を建造して、張り切つた活躍を続けているのだった。

丸辰の親爺は、酒に酔つぱらつた砲手の未亡人が、客を相手に愚痴話をはじめだすと、きまつて鯨の祟り——を持出す。そして話がそこまで来ると、殆んど船乗り

ばかりのその座は、妙に白けて、皆ないやアな顔をして滅入り込むのが常だった。今夜も、とどのつまり、それがやって来た。

海から吹きつける海霧が、根室の町を乳色に冷くボカして、酒場の硝子窓には霜のような水蒸気が、浮出していた。真赤に焼けたストーブを取巻いて、人々は思い出したように酒を飲んだ。冷くさめ切った酒だった。

外には薄寒い風が、ヒューヒューと電線を鳴らして、夜漁の船の発動機がタンタンタンと聞えていた。なぜか気味の悪いほど、静かな海霧の夜だった。人々は黙りこくって、苦い酒を飲み続けた。

けれども、そうした白けきった淋しさは、永くは続かなかった。

全く不意の出来事であつたが、いままで酒臭い溜息をもらしながら、ボンヤリ人々の顔を見廻していた砲手の未亡人が、突然ジャリンと激しく器物を撒き散らしながら、テーブルを押し傾げるようにして立ちあがった。顔色は土のように青褪め、恐怖に見開られたその眼は、焼きつくように表の扉口へ注がれている。

水蒸気に濡れたその硝子扉には、幽霊の影がうつつていた。——ゴム引きの防水コートの襟を立てて、同じ防水帽を深々とかむった影のような男が、外から硝子扉にぴったり寄添つて、蓬々に伸びあがった髯面を突出しながら、憔悴しきった金壺眼で、きよろきよろとおびえるように屋内を見廻していたが、直ぐに立上つた女の視

線にぶつかると、こつそり眼配めくばせでもするように頤あごをしゃくつて、そのまま外の闇へ消えてしまった。

それは沈没船北海丸の砲手、死んだ筈の小森安吉だった。

二

酒場の中では、人々が総立ちになった。

「お前の、亭主じゃないか」

丸辰が、すっかり酔のさめた調子で云った。若い水夫が、顫え声で、

「人違いだろう?」

「いや、人違いじゃあねえ。わしは、この根室に出入する男の顔は、今も昔も、一人残らず知っている」丸辰は、立ちあがりながら、「あいつア、確かに北海丸の安吉だ」

「じゃア、生残っていたんか」

「助かって、今頃帰つて来たんかな」

けれどもやがて女は、ものも云わずに、扉口とぐちのほうへ馳かけだして行つた。人々もその後から雪崩なだれを打って押しかけた。霧の戸外へ向つた扉ドアがサツと開けられると、最初に飛出した女は、灰白くボヤけた向うの街燈の下を抜けて、倉庫の角を波止場

の方へ折曲つて行つた男の影を見た。

「私の勝手にさしといておくれよ」

女は、雪崩出なだれようとする男達を振切つて、そのままバタバタと影の男を追い出した。

倉庫の蔭を曲ると、乳色の海霧ガスが、磯の香かを乗せて激しく吹きつけて来た。男はなおも歩き続けた。幾つかの角を曲つて、漁船の波止場に近い鯨倉庫にしんの横まで来ると、男はやつと立止つて、臆病そうに辺りを見廻し、黙つて馳け寄つて来た女の方へ振返つた。

それは幽霊でも何でもない、正真正銘の小森安吉だった。霧に濡れてかそれとも潮をかぶつたのか、全身濡れ鼠になつていた。女は躍りかかるようにして、抱きついて行つた。

けれども生き帰つて来た安吉は、以前の安吉とはまるでガラツと變つていた。短い間にも、女には直ぐにそれがわかつた。

「おれが帰つて来たことは、誰にも云つてくれるな」

とにかく落付かないから家うちへ這入ろう——女はそう云つてすすめるのだが、安吉は、再び辺りをきよきよと見廻して、

「ダメダメ、おれは狙われてるんだ。家なんか、帰れるものか」

そして妻の肩を両手でかかえるようにさすりながら、声を改めて、

「時坊は、大きくなつたらうな？」

「そりやお前さん……だが、いったい誰に狙われてるんだよ」

しかし安吉は、それには答えもしないで、

「ああ時坊に逢わしてくれ。おれは、むしように子供に逢いたいんだ」と再びおびえたように辺りを見廻し、「家へはとも帰れない。ここに隠れてるから、ここままで、子供を連れて来てくれんか。それから、一緒に逃げてくれ」

妻が言葉も継げずに、呆氣にとられてためらっていると、安吉はかぶせるように続けた。

「とてつもない、恐ろしい陰謀なんだ。おれはもう、海を見るのさえ恐ろしくなつた。……こうしてるのも、やりきれん。おい、早く逃げ仕度をして、時坊を連れて来てくれ。わけは、それからゆっくり話す」

北海丸と一緒に海の底へ沈み込んで、死んでしまったと思われていた夫の安吉が、全く不意に帰つて来た。そして、どこをどんなにして一年を過して来たのか、何者かを激しく恐れながら、子供を連れて一緒に逃げてくれと云う。驚きと喜びと、不安の一度に押寄せた思いで、たった今まで沈滞した諦めの中に暮していた女は、激しい動揺とためらいに突落されたのだった。

けれども、やがて女は決心したように夫の側を離れると、云われるままに町外れの、小さな二階借の自宅へ引返して来た。そして半ば夢見るような気持で、まだろくに歩けもしない子供を背負ったり、いつも子供を預つて貰う階下の小母さんに、それとない別れを告げたりするうちに、少しずつ事態が呑み込めるようになって来た。

いままでは、まるで家庭など眼中になく、勝手放題に振舞つていた強がり屋の安吉が、どんな恐ろしい目に合ったのか、突然帰つて来ると妻子を連れて逃げ出そうと云う。そこには、よくよくの事情があるに違いない。沈没船から生帰つて来たと言うだけでも、それはもう大きな秘密だ。——考えるにつれて、女には夫の立場が異様に切迫したものに思われて来て、身の廻りの品を纏めると、そのままそくさと霧の波止場へ急いだ。

歩きながらも、安吉を包む秘密への不審と不安は、追々高まつて、安吉の云つた「とてつもない恐ろしい陰謀」が影もなく浮上つたかと思うと、丸辰の「鯨の祟り」が思い出されたりして、それらが一緒になつて、今度は今のままの安吉の体へ、直接の不安を覚えるようになって来た。

しかし、その不安は、全く適中していた。恰度その頃練倉庫の横丁では、とり返しつかない恐ろしい惨劇が持上つていたのだ。

酒場の前を避けるようにして、霧次伝いにさつき場所まで引返して来た女は、

その街燈に照された薄暗うすやみの中で、倉庫の板壁へ宮守みやもりのようにへばりついたまま、血にまみれた安吉の無残な姿をみつけたのだった。鯨のとどめを刺すに使う捕鯨用の鋭い大きな手鋸で、虫針に刺された標本箱の蛾のように板壁へ釘づけにされた安吉へ、女が寄添うと、断末魔の息の下から必死の声を振絞つて、

「く、く、釧路丸の……」

とそこまで呻いて、あとは血だらけの右手を振上げながら、眼の前の羽目板へ、黒光りのする血文字で、

——船長だ——
マズター

と、喘ぎ喘ぎのたくらして行つた。そしてそのまま、ガツクリなつてしまった。

三

根室の水上署員が、弥次馬達を押分けるようにして惨劇のその場に駆けつけたのは、それから三十分もあとの事だった。

倉庫の横の薄暗い現場の露次には、激しい格闘の後が残されていた。板壁に釘づけにされるまでに、もう安吉はかなりの苦闘を続けたと見えて、全身一面に、同じ手鋸ていさのこぎりの突創つとけがいくつも残されていた。激しい手傷を受けて、思わず板壁によるめき

かかった安吉に、背後から最後のとどめを突刺して、そのまま犯人は逃げ去つたものらしい。

取外された屍体は、直ぐに検屍官の手にうつされたが、しかしこれと云う持物はなにもなく、安吉がどこをどんなにして歩き廻っていたか、恐ろしい秘密を物語るような手掛は、一つも残っていないかつた。

今度こそ本当に未亡人になつた女と、丸辰の親爺、それから最初酒場の扉口とぐちに安吉を見たマドロス達は、その場で一応の取調べを受けた。丸辰は、自分の見ただけのことを勝手に喋舌しゃべつて、それから先が判らなくなると、「鯨の祟り」を持出した。そいつの尻馬に乗ってマドロス達は、同じように勝手な憶測ばかり撒き散らして、なんの役にも立たなかつた。しかし安吉の妻の陳述によつて、その不満は半ば拭われ、警官達には、事件の外貌だけがあらまし呑み込めて来た。

重なる異変に気も心もすっかり転倒しつくした安吉の妻は、夢うつつで後さきもなく、夫の断末魔の有様を述べて行つたが、述べ進むにつれて少しずつ気持が落付いて来ると、最初生き帰つて来た夫の何者かを恐れているらしい不可解な態度や、あわただしい自分の逃げ仕度など、繰り出すようにしながら、ともかくも首尾を通して説明することが出来るようになって来た。

やがて、根室の町から港へかけて、海霧ガスに包まれた闇の中に、非常線が張られて

行つた。

安吉の告げ残した「釧路丸」と云えば、同じ岩倉会社の姉妹船で、北海丸が去年の秋に沈没した折、いち早く救助に駆けつけた捕鯨船ではないか。その船の船長が、安吉の殺害犯人なのだ。手配は直ぐに行届いて、峻厳な調査がはじめられた。

すると、真ッ先に海員紹介所から、耳よりな報告がはいった。

それによると、恰度惨劇の起つた時刻の直後に、灰色の大きなオーバーを着た恰幅のいい船長級の男が、砲手の募集にやつて来たが、時間外で合宿所のほうへ廻ると、そこにゴロゴロしていた失業海員の中から、砲手を一人雇つて行つたと云うのだ。その船長は、なにか事ありげに落付きがなく、顔を隠すようにしていたが、玄関口で雇入れの契約中を立聞きした一人のマドロスは、乗込船の名を、確かに釧路丸と聞いた。

そこで、波止場の伝馬船が叩き起されて、片ツ端から虱潰ししらみつぶに調べられた。けれども、新しい砲手を雇つた船長は、まだ陸地にうろついているのか、それとも自船の伝馬で往復したのか、それらしい客を乗せて出た伝馬は一艘もいなかった、しかし、その調べのお蔭で、もう一つの新しい報告が齎もたらされた。

それは、宵の口に帰港した千島帰りの一トロール船が、大きなうねりに揺られながら、海霧ガスの深い沖合に錨いかりをおろしている釧路丸を見たと言ふ。

水上署の活動は、俄然活気づいて来た。

齎らされた幾つかの報告を組合して、小森安吉を殺した釧路丸の船長は、海員合宿所から一人の砲手を雇うと、早くも自船の伝馬船に乗って、沖合に待たしてあつた釧路丸へ引挙げたことが判つて来た。

執拗な海霧ガスを突破つて、水上署のモーターは、けたたましい爆音を残しながら闇の沖合へ消えて行つた。

けれども、追々に遠去かつて行つたその爆音は、どうしたことか十分もすると、再びドドドドドド……と鈍くよど激んだ空気を顫わして、「戻り高まつて来た。」と思うと、今度は右手の沖合へ、仄明くサーチライトの光芒ひかりをひらめかして、大きく円を描きながら消え去つて行つた。消え去つて行つたのだがやがてまた今度は左の方に舞い戻り、舞い戻つたかと思うと戻り詰めずに再び沖合へ……

釧路丸は、もうとつくの昔に錨を抜いていたのだ。

四

「おい、美代公みよ。元氣を出せよ」

翌ある日の午下り。夜でさえまともには見られない疲れ切つたその酒場へ、のっそ

りとやって来た丸辰の親爺は、その片隅で、睡不足の眼を赤く濁らせ、前をはだけて子供に乳を飲ませながらしよげ込んでいた安吉の妻へ、そう云って笑いながら声をかけた。

「まア、悪い夢でも見たと思つて、諦めるんだぜ」

けれども、女が黙り込んでそれに答えないと、いままでカウンターに肱を突いて、女と話し込んでいたらしい酒場の亭主のほうへ、向き直りながら話しかけた。

「昨夜の、水上署の大縮尻しくじりを、見ていたかい。沖でグルグルどうどうめぐりよ。見てるほうで気が揉めたくらいだった。……いやしかし、どうもこいつア、思つたよりも大きな事件になるらしいぜ」

「いったい、どうなつたんかね？」

亭主が乗出して来ると、丸辰は例のガタ椅子を引寄せて腰掛けながら、
「まんまと釧路丸に逃げられて、今度は、各地の監視船へ電信を打つたんだ。つまり、みつけ次第釧路丸をひっつかまえるように、頼んだわけさ」

「ほう、水上署から、水産局の監視船へ、事件が移うつ牒つされたつてわけだね？」

亭主が不精髯をなで廻した。

「うん、まアそんなこつたる……だが、なんしろ海は広いんだから、まだみつからない……ところが、一方そうして監視船に海のほうを頼んだ警察は、それから直ぐに、

岩倉さんの事務所を叩き起したんだ。ところが、宿直の若僧が寝呆けていてサツパリは、かが行かないと、業を煮やして、今度は署長が自身乗り出して、社長邸へ乗り込んで、岩倉さんにジカに面会を申込んだわけさ……ここまでは、まずいい。ところがここから先が、面倒なことになったんだ。と云うのは、なんでも岩倉の大将、ことが面倒だとも察したのか、頭が痛むとかなんとか云って、逃げたがったんだそうだが、まあしかし、結局行会ゆきあって、署長から、これこれ云々しんじかと一部始終を聞き終ると、どうしたとかサツと顔色を変えて、なんだか妙にうろたえながら、『それはなんかの間違いだ。鉏路丸は、いまは根室附近になぞおりません』と云うようなことを、答えたんだそうだよ」

「ふム、成る程。あの大將、なかなかの剛腹者だからな……それで、いったい鉏路丸は、どっちの方面へ出漁でているって云ったんかね？」

「うんそれが、なんでも朝鮮沖の、鬱陵島うつりょうとうの根拠地でへ出張はってるんだそうさ。成る程あそこは、ナガス鯨の本場だからな」

「へエー？　だがそれにしても、鬱陵島とは、大分方角が違つとるね」

「いや、とにかくそれで」と丸辰は手の甲でやたらに口ばたをコスリながら、「もうその時署長は、どうも岩倉の大將の云うことは、おかしいとは思つたんだが、どの途みちその場ではケジメもつけかねて、まず一応引きあげた。引挙げてそれから直ぐ

に、鬱陵島のほうへ電信を打った。岩倉の大将の云ったことは本当か嘘か、いや嘘には違いなからうが、そこんとこに何かごまかしがありはしないか、それが嘘だと云う証拠を握らねばと云うので、抜からず調べて貰った。返事は向うの警察から直ぐにやって来た。ところがどうだい、まず大将の云うように、岩倉会社の釧路丸は、当地を根拠地にして、一ヶ月ほど前から来とることは確かだ、が、しかし、今はいない。三日ほど前から出漁中で、まだ帰っていないってんだよ。いいかい、つまり事件のあつた昨日きのうの前々日から、向うの根拠地を出漁したと云うんだぜ。出漁したんだから広い海へ出たんだ。どこの海でどんな風にして捕鯨をしようとったか、果してあそこらの海でうろろうる鯨を追っていたのかどうか、さアそいつは誰も見ていた人はないんだから、流石さすがの岩倉社長も証明することは出来ないよ」

「いよいよ怪しいな」

「うん、怪しいのはそれだけじゃアない。問題はその釧路丸が、事件のあつた昨晚、海霧ガスの深い根室こむろの港へやって来て、それも人目を忍ぶようにしてこっそり沖合にとまっていたと云うんだから、こいつア変テコだろう。おまけに、その釧路丸の調査について、署長の訪問を受けた岩倉の大将が、サツと顔色を変えて、妙にうろたえはじめたってんだから、いよいよ以ってケツタイさ。つまり岩倉の大将も、釧路丸は日本海にいるなんて云って、根室へこっそり帰って来たことは、出来るだけ隠し

たい気持なんだ。こいつが、警察の見込みを、すっかり悪くしてしまった」

「そりやそうだろう」と亭主は身をそらして腕を組みながら、「そんな風じゃ、岩倉の見込みの悪くなるのも、ムリはないな……どうもこいつア、成る程大きな事件になりそうだな。なにかがあるぜ。そこんとこに……」

「うん大有りだ。確かになにかがある……どうも、俺の思うには、あの北海丸が沈んだ時に、生き残った砲手の安吉が、いったいどうして鉋路丸なんかに乗り込んでたか、つてのがまず問題だと思うよ……むろん俺は安吉が、大ツぴらで鉋路丸に乗つてたのなんか、見たことアないが、昨夜、安吉を殺した鉋路丸の船長が、代りの砲手を雇つて消えたつてんだから、いままで安吉は、鉋路丸に乗り込んでいたつてことに、ま、理窟がそうなる」

「待ちなよ……」とこの時亭主は首を傾げながら、「あの北海丸が沈んだ時に、一番先に駆けつけたのが鉋路丸だったんだから……そうだ。安吉は、運よく鉋路丸に救い上げられたんじやアないかな？」

すると今まで、気の抜けたようにボンヤリして、二人の話を聞いていた安吉の妻が、顔を上げて云つた。

「お前さん。それならなぜ安吉は、直ぐその時に、救けられたつて、喜んで帰つてくれなかつたのさ」

「う、そこんどこだよ」と丸辰が弾んで云った。「救けられても、直ぐに帰つて来なかつたと云うんだから、俺ア、そこんところに、なにかこみ入つた事情があると思うんだ。帰つて来たくなかつたのか……それとも、帰りたくても帰れなかつたのか？」

「まさか、監禁されてたわけでも……」と亭主は不意に顔色を変えて、「おい、とつあん。……北海丸は、どうして、何が原因で沈んだんだつたかな？」

「え？ なんだつて？」と丸辰は、顔をしかめて暫く考え込んだが、「……まさか、お前は、釧路丸が故意に北海丸を……いや、なんだか気味の悪い話になつて来たぞ……こいつアやつぱり、鯨の祟りが……」

そう云つて、ふと口を嚙くはんでしまった。

表扉を開けて、若いマドロスが二人はいつて来た。椅子について顎をしゃくつた。安吉の妻が煩わしそうに立上つて、奥へはいつてしまうと、亭主は起直つて、客のほうへ酒を持って行つた。

「しかし、とつあん。どうして又お前さんは、そんなに詳しく警察のほうの事情が判つたんだい？」

再び元の席へ帰つて来た亭主は、調子を改めてそう云つた。すると丸辰は、思いついたように昂然と氣どつて、

「いや、それだよ……実は、白状するが、今夜から俺は、監視船に乗つて、釧路丸

を捜す探偵の仲間入りをするんだ」

「なんだって？ お前が監視船に……」

「うん、頼まれたんだ」と丸辰は勿体ぶつて、「実は、さっきに警察から、俺んこへ依頼が来たんだ。それで、東屋あずまやつて人に会つて来たんだがな。その人は、内地の水産試験所の所長さんだそうだが、恰度根室へ鱈たら漁場の視察に来ていて、今度の事件を聞き込むと、なんか目論見でもあるのか、とても乗気になって、一役買つて出たんだそうだ。それで、今夜オホツクから廻されて来る監視船に、乗り込むんだが、それについて、なんでも船乗りの顔に詳しい男が欲しいってわけで、この丸辰が呼ばれたんだ」

「へえー？ そりや又、えらい出世をしたもんだな」

「うん。しかし、あの東屋つて人に、果して釧路丸をつかませても、鯨の祟りが判るかどうかはアテにならないよ。俺も、監視船に乗込むんだから、この仕事には、大いに張合があるわけさ……そうだ、もうそろそろ、乗込みの仕度をしとかならん。親爺、酒だ。酒を持って来てくれ！」

妙に、鼻息が荒くなつて来た。

北太平洋の朝ぼらけは、晴れとも曇りとも判らぬ空の下に、鉛色の海を果てしもなく霞ませて、ほのぼのと匂やかだった。

昨夜根室を出た監視船の隼丸は、泡立つ船首にうねりを切つて、滑るような好調を続けていた。船橋には東屋氏を始め、船長に根室の水上署長、それから丸辰の親爺たちが、張り切つた視線を遠くの海へ投げかけていた。中甲板の船室では、数名の武装警官達が、固唾を飲んで待ち構える。

こんなに広い海の真ん中で、果して釧路丸が発見かるだろうか？ その予想は見事に当つて、隼丸は、そのまま緊張した永い時間を過すのだった。

けれども、午後になつて遙かな舷の前方に、虹のように見事な潮を吹き続ける鯨群をみつけると、今まで無方針を押し通した東屋氏の態度がガラリと變つて、不意に隼丸は、ひとつの固定した進路に就くのだつた。

「うまく発見かつた。あの鯨群を見逃さないように、遠くから跡をつけて下さい」東屋氏は続けて命じた。

「それから、無線電信を打つて下さい。電文は——捕鯨船二告グ、東経152、北緯34ノ附近ヲ、北北東二向ウ大鯨群アリ——それほどの大鯨群でもないんだが」と東屋氏は笑いながら、「そうそう、序に発信者を——貨物船えとろふ丸——とでもし

といて下さい」

「えとろふ丸、はよかったですね」

船長が苦笑した。

「いや、こんな場合、うそも方便ですか。釧路丸の船長は、代りの砲手を雇ったんですから、鯨と聞いたたら、ジツとしてはいけませんよ」

間もなく船は、スピードをグツと落して、遠くに上る潮の林を目標にして、見え隠れ鯨群のあとをつけるのだった。船足は、のろのろと鈍くなつたが、船の中の緊張は、一層鋭く漲り渡つて来た。

東屋氏は、双眼鏡を持って、グルグルと水平線を見廻していたが、やがてひと息つくと、水上署長へ、

「昨晚お訊ねしたあの釧路丸の最高速度ですね。あれは、確かに十二節ノットですね？」

「間違いありません」

署長が、氣どつて云つた。

東屋氏は頷きながら、今度は船長へ、

「鬱陵島から根室まで、最短距離をとつて、八百カイリ浬もありますか？」

「そうですね。もつとあるでしょう。八百……五、六十カイリ浬も、ありますかな？　しかしそれは、文字通りの最短距離で、実際上の航路としては、それより長くはなつ

ても、短いことはありませんよ」

「ああ、そうですね」

東屋氏は、再び双眼鏡を覗き込む。

雲の切れ目から陽光が洩れると、潮の林が鮮かに浮きあがる。どうやら仔鯨を連れて北へ帰る、抹香鯨の一群らしい。船は、快いリズムに乗って、静かに滑り続ける。

やがて一時間もすると、無電の効果が靦面に現れた。最初右舷の遙か前方に、黒い小さな船影がポツンと現れたかと思うと、見る見る大きく、捕鯨船となって、その鯨群を発見してか、素晴らしい速力で潮の林へ船首を向けて行った。

「さア、あの船に感づかれないように、もつと、うんとスピードを落して下さい」
隼丸は、殆んど止まらんばかりに速度を落した。人々は固唾を呑んで双眼鏡を覗いた。捕鯨船は、見る見る鯨群に近付いて、早くも船首にパツと白煙を上げると、海の中から大きな抹香鯨の尻穂が、瞬間跳ね曲って、激しい飛沫を叩きあげた。——しかし、人々は、苦笑しながら双眼鏡を外した。その船は、釧路丸ではなかったのだ。
「どうも、仕方がないですね。しかし、違犯行為はありませんか？」

「まあ見てやって下さい。間違いないですよ」

やがて捕鯨船は、両の舷側に大きな獲物を浮袋のようにいくつも縛りつけて、悠々

と引きあげて行った。

鯨群は、再び浮き上つて進みはじめた。隼丸は、もう一度根気のよい尾行を続ける。

それから、しかし、一時間しても、第二の捕鯨船は現れない。東屋氏の眉宇に、ふと不安の影が掠めた。——もしも、このままで釧路丸が来なかったとしたら、夜が来る。夜が来れば、大事な目標の鯨群は、いやでも見失わねばならない。東屋氏はジリジリしはじめた。

ところが、それから三十分もすると、その不安は、見事に拭われた。左舷の斜め前方に、とうとう岩倉会社特有の、灰色の捕鯨船が現れたのだ。うっかりしていて、最初船長がそれを発見^みけた時には、もうその船は鯨^{しやち}のような素早さで、鯨群に肉迫していた。

隼丸は、あわてて速度を落す。幸い向うは、獲物に気をとられて、こちらに気づかないらしい。益々近づくその船を見れば、黒い煙突には○のマークが躍り、船側^{サイド}には黒くまぎれもない釧路丸の三文字が、鮮かにも飛沫に濡れているのだった。

ダーン……早くも釧路丸の船首には、鉦砲^{せんぽう}が白煙を上げた。東屋氏が合図をした。隼丸は矢のように走りだした。

「おや」と船長が固くなった。「あいつ、犯^やつとるな。仔鯨撃ちですよ」

「恐らく常習でしょう」東屋氏が云った。

鉋路丸では、ガラガラと轆轤かぐらさんに銚網せんろうが繰られて、仔鯨がポツカリ水の上へ浮上った。するとこの時、前橋マストの見張台にいた男が、手を振ってなにやら喚き出した。近づくと、早くも鉋路丸は、ググツと急角度で左舷に迂廻しはじめた。

隼丸の前橋マストに「停船命令」の信号旗が、スルスルと上った。時速十六節ノットの隼丸だ。——捕鯨船は、戦わずして敗れた。

近づいてみると、鯨群は思ったよりも大きかった。逃げもせずにはうろうろしているその鯨達の中に、諦めて大人しく止ってしまった鉋路丸へ、やがて隼丸が横づけになると、東屋氏、署長、丸辰を先頭にして、警官達が雪崩なだれ込んで行った。鉋路丸の水夫達は、ただの違法摘発にしては少し大袈裟過ぎるその陣立てを見て、ひどくうろたえはじめた。が、直ぐに警官達に依って包まれてしまった。

東屋氏は、署長、丸辰を従えて、船橋ブリッジへ馳け登って行った。そこには運転手らしい男が、逃げまどっていたが、東屋氏が、

「船長マスターを出せ！」

と叫ぶと、

「知らん！」

と首を振つて、そのまま甲板デッキへ飛び降りた。が、そこで直ぐに警官達と格闘が始つた。その様を見ながら、どうしたことかひどくボケンとしてしまった丸辰を、東屋氏はグイグイ引張りながら、船長の捜査を始めた。

船長室にも無電室にもみつからないと、東屋氏は、船橋ブリッジを降りて後甲板の士官室へ飛込んだ。が、いない。直ぐ上の、食堂にも、人影はない。——もうこの上は、船首おもての船員室だけだ。

東屋氏は、丸辰と署長を連れて、前甲板のタラップを下り、薄暗い船員室の扉の前に立つた。耳を澄ますと、果して人の息使いが聞える。東屋氏は、すかさず扉をサツと開けた。——ガチャンと音がして、室へやの中の男が、ランプにぶつかつて大きな影をゆららかしながら、向うへ飛び退いて行つた。けれども次の瞬間、激しく揺れ続ける吊ランプの向うで、壁にびったり寄添いながら、眼を瞋いからし、歯を喰いしばつて、右手に大きな手銚カサシを持ってハツシとばかりこちらへ狙いをつけたその船長マスターを見た時に、丸辰がウワアアと異様な声で東屋氏にだきついた。銚が飛んで、頭をかすめて、後ろの壁にブルンと突刺さつた。が、署長の手にはピストルが光つて、直ぐに手錠のはまる音が聞えると、丸辰が顫え声を上げた。

「そ、その男は、死んだ筈の、北海丸の船長マスターです！」とゴクリと唾を呑み込んで、肩で息をしながら、「そ、それだけじゃアない……いやどうも、さつきから変だと思つ

たが、あの運転手も、それから、甲板ソトで捕まった水夫達も、ああ、あれは皆んな、死んだ筈の北海丸の乗組員です！」

「な、なんだって？」あとから飛び込んで来ていた隼丸の船長が、蒼くなって叫んだ。「飛んでもないこった。じゃア、いったい、それが本当だとすると、鉦路丸の船員達は、どうなったんだ？」

するとこの時、いままで黙っていた東屋氏が、振返って抜打ちに云った。

「鉦路丸は、日本海にありますよ」

「え?!」

船長がタジタジとなった。

「ああ、ごもつともです」と東屋氏は急にすまなさそうに首を振りながら、「いや申上げます。なんでもないんですよ。……あなたは、鉦路丸の最高速度を、十二節ノットと再三云われましたね……問題は、それなんです。ま、考えて見て下さい。その十二節ノットの鉦路丸は、鬱陵島の警察からの報告によれば、殺人事件の前々日に、あの島の根拠地を出漁したんでしょう?……ところが、鬱陵島から根室までは、最短八百五十哩カイリもあります。それで、鉦路丸が最高速度で走ったとしても、ええと……七十時間、まる三日はかかるんですよ……いいですか、つまり殺人のあった晩に根室へはいった船は、断じて鉦路丸ではないんです」

船長は、紙のように白くなりながら、喘ぎ喘ぎ云った。

「じゃア、いったい、この船は？」

「この船は、去年の秋に、日本海溝附近で沈んだ筈の、北海丸ですよ」

「……」

皆が呆れはてて黙ってしまうと、東屋氏は、やおらタラップを登りながら、切りだすのだった。

「いや、捕鯨史始つて以来の、大事件です……実はこう云う私も、この丸辰さんに船長を鑑定させるまでは、その確信も八分位いしかなかったんですがね……時に船長。捕鯨船の法定制限数は、三十隻でしたね。いやこれは、私の組立てた意見なんです、——あの岩倉会社の大将は、二隻に制限されている自分の持船を、三隻にしたんですよ。つまり、幹部船員達と共謀して、一年前に北海丸の偽沈没を企てたんです。あの嵐の晩に、船側の名前を書き変えて、まんまと姉妹船の釧路丸に偽装した北海丸は、勝手に油や炭塵を海に流し、贗の無電を打って、さていち早く救助に駆けつけた釧路丸のような顔をしながら、サルベージ協会の救難船と一緒に、自分の幻を二日も三日も涼しい顔で探し廻ったんですよ……どうも呆れた次第ですが、……そうして、やがて船舶局には、北海丸の沈没が登録され……そうだ、私の考えでは、恐らく今度新造された新らしい北海丸など、前の北海丸の保険金で出来たんじゃア

ないかと思えますね……とにかく、そうして岩倉会社は、表面法律で許された二隻の捕鯨船で、その実、三隻それも一隻はぬけぬけと脱税までして、能率を上げていたんですよ……ところが、この釧路丸は贗物なんですから、船員の口から秘密の洩れるのを恐れて、まず根室の附近へは、絶対に入港も上陸も許さなかつたんでしよう。むろん船員達は、荒男の集まりだけに、金にさえなれば根室なんかどうでもいい。一匹千円からする鯨のほうだが、どれだけいいか判らない——とまあ、そんなわけで、かれこれ一年たつてしまいます。……ところが、ここに困つた事は、独り者の船員達はともかくも、根室に妻子を置いてある砲手の小森ですよ。むろんあの男も、始めは他の船員達と同じ気持だつたんでしようが、段々日を経るにつれて、心の中に郷愁が芽生える。しかし船長は、危険を覚えて、絶対に妻子のところへ帰さない。が、盛上る感情つて奴は、押えたつて押え通せるものではないですよ……根室の近くへ漁に来たチャンスを掴んで、とうとう小森砲手は、脱走してしまつたんです……」

「ふーム」と船長が始めて口を切つた。「成る程、それで、あとをつけた船長マスターの手で、あの惨劇が起きたわけですね。……いや、よく判りました。実に御明察ですわい」

船長は、甲板に立つて、改めて辺りを見廻すのだった。

海には、まだ大きな鯨共が、逃げもせずまわりにグルグルと船の周囲をまわつていた。

それは不思議な景色だった。捕われた捕鯨船の船首砲には、その大きな鯨共を撃つための第二の銃が、用意されたままになっていた。老獪な船長は、マスター そうした不思議な鯨共を容易く撃ち捕るために、密かに禁止された仔鯨撃ちを、永い間安吉に命じていたのだった。

仔鯨がいると親鯨はのろい。一年前の安吉のように、子供を置いてけぼりになど絶対にしないのである。

〔新青年〕昭和十一年十月号

後註

一 「45」は縦中横

カンカン虫殺人事件

K造船工場の第二号乾船渠ドライ・ドックに勤めている原田喜三郎と山田源之助の二人が行方不明になつてから五日目の朝の事である。

失踪者の一人、原田喜三郎の惨殺屍体しがいが、造船工場から程遠ほどから海上に浮び上つたと云う報告いしらせを受けて、青山喬介きやうすけと私は、暖い外套を着込むと、大急ぎで工場までやつて来た。

原田喜三郎と山田源之助は、二人共K造船所直属のカンカムシにゆうきよせんで、入渠船の修繕ほたくや、船底ボタムのカキオコシ、塗り換えなどをして食つて行く労働者である。その二人が五日前の晩から行方不明になつて了しまい、捜査に努力した水陸両警察署も、何等なんらの手掛てがかりを得る事も出来ず、事件はそのまま忘れられようとしていた時の事だけに、半ばなか予期していた事とは言え、失踪者の惨殺屍体が発見されたと聞いて、私達が飛上つたのも無理からぬ話である。

門前で車を降りた私達は、真直まっすぐにK造船所の構内へやつて来た。事務所の角を曲ると、鉄工場の黒い建物を背景バックにして、二つの大きな、深い、乾船渠ドライ・ドックの堀が横たわっている。その堀と堀の間には、たくましいクレーンの群むれが黒々と聳そびえ立つて、その下に押し潰されそうな白塗りの船員宿泊所が立っている。発見された屍体しがいは、その建物の前へアンペラを敷いて寝かしてあつた。

もう検屍けんしも済んだと見えて、警察の一行は引挙ひきあげて了しまい、只五六人の菜ツ葉服ただが、

屍体に嘔り付いて泣いている細君らしい女の姿を、慘ましそうに覗き込んでいた。喬介は直ちに屍体に近付くと、遺族に身柄を打明けて、原田喜三郎の検屍を始めた。地味な労働服を着た被害者の屍体は、長い間水浸しになっていたと見えて、四十前後のヒゲ面も、露出された肩も足も、一様にしらはじけて、恐ろしく緊張を欠いた肌一面に、深い擦過傷が、幾つも幾つも遠慮なく付いている。裸けられた胸部には、丁度心臓の真上の処に、細長い穴がぽっかり開いて、その口元には、白い肉片がむしり出ていた。

『メスで突き刺したんだね。これが致命傷なんだよ。』

喬介は私にそう告げ終ると、尚も屍体を調べ続けた。顔面はそれ程引き歪められていると言う方ではないが、只左の顔だけ一面にソバカスの出来ているのが、なんとなく気味悪く思われた。喬介は又喬介で、どう言うつもりかそのソバカスに顔を近付け、御丁寧に調べ廻していた。が、臆て屍体を裏返すと、呆れた様子を私を見返した。成る程、屍体の後頭部には鉄の棒で殴り付けた様な穴が、破壊された骨片をむき出して酷らしくぶちぬかれている。屍体の背面には表側と同じ様に、深い擦過傷が所々に喰い込み、労働服の背中にはまだ柔い黒色の機械油が、引き裂かれた上着の下のジャケツトの辺りまで、引っこすった様にべっとりと染み込んでいる。そしておおよそ私達を吃驚させた事には、後へ廻された両の手首は丈夫な麻縄で堅く縛ら

れ、すつこぎの結び玉から何にかへくり付けた様に飛び出している綱の続きは、
フイート一呎程の処で荒々しく千切れている事だ。黒い機械油は、手首から麻繩の上まで
 べつとり染み付いている。

一通りの検屍を終った喬介は、傍そばの婦人に向つて静しずかに口を切つた。

『いやどうも失礼いたしました。早速さつそくで恐縮の至りなんです、御主人が行方不明
 になられた晩の模様をお聞かせ下さいませんか？』

『と言いますと？』

『つまりですな。御主人が最後に家うちを出られた時の様子です。』

『ハイ。』婦人は涙を拭いながら話し始めた。

『あの晩工場から暗くなつてから帰つて来た主人は、御飯を食べると急やぎような夜業やぎようがあ
 るからと言つて直すぐに出て行ゆきました。』

『一寸待ちよつとつて下さい。』と喬介は側に立たっていた菜葉服なっぱふくの一人に向つて、『その晩、夜
 業は確かにあつたんですね？』

『いいえ。夜業はなかつたです。』労働者が答えた。

『なかつた？ ふむ。ないものがあると云うからには、何か知られ度たくない事情が
 あつたんだな。お内儀かみさん、心当かりは御座居ませんか？』

『別に、御座居ませんけど——』

『そうですか。で、御主人は一人で出掛られたんですね？』

『いいえ。源さんが、あの山田源之助さんが呼びに来られて、一緒に出掛けました。』
『御近所ですか？』

『ええ、直ぐ近くですし、それにとっても心安い間柄でしたから寄って呉れたんです。出がけに表戸の前で、「あの若僧わかぞうすっかり震え上つて了しまいおつた。」とか「今夜は久し振りに飲めるぞ。」とか二人で話し合いながら出て行くのを、妾わたしはこっそり立聞きしていました。』

『ほう。好よくそんな話を覚えていられましたね？』

『ええ。前の日まで中気で寝ていた源さんは、その日無理をして仕事に出た為ためめ工場で過あやまつて右腕に肉離れしまをしてつたのです。で、そんな怪我をした弱い中気の体で、又酒など飲んで——と他人事ひとことながら心配でしたので、あの話は好く覚えております。』

『いや有難う。それで、そのまま二人共帰らないんですね？』

『ええそうなんです。』

『有難う。』

1 「出掛でられた」はママ

喬介は丁寧テイネイに礼を言つて彼等の側を離れると、私を顎あごで呼びながら船渠ドックの方へ歩き出した。

『いや、驚いたねえ。随分クソ丁寧テイネイに殺したものだねえ。』
喬介に寄り添いながら私が言った。

『全くだ。体中傷だらけだよ。心臓さしきずの刺傷さしきずと後頭部の猛烈な打撲傷——二つの致命傷が一つの肉体に加えられているんだ。そして、その上に身体からだ一面に恐るべき擦過傷がある。随分惨忍な殺人だよ。勿論屍体はあの通り麻縄でガツチリ縛り、海まんなかの真中へ重おもしを着けて沈めたんさ。犯人の頭脳おぼしのレベルは決して高いものではないね。まあ九分九厘知識階級おぼしの人間でない事は確かだ。だが、推理を起すに当つては、やはり充分な注意を払わなければならぬ。で、先まず最初に僕が頭をひねつたのは、あの幾通りかの傷や機械油が、被害者の体へ加えられて行つた順序だ。確かにあれ丈だけの変化が一度に起つたとは思われぬ。いや、それどころか各々おのおのの変化には、みんなハッキリした順序が見えている。後頭部の打撲傷や身体各所の激しい擦過傷を思い出し給え。あの二通りの傷は、心臓部の刺傷に比較して恐ろしく周囲の皮膚が擦りむけていたね。一人人間の皮膚と言う奴は、勿論生きている人間の、而も薄しかい上皮しんではなくあの屍人しにんのその様に一枚下の厚い奴の事だよ。そう言う皮膚は、あんなに易々やすやすと傷口の周囲までまくれて了しまうものかね？ 僕はそう思えないんだ。只ただ、もう息の

通つていない、そろそろ虫の湧きかかりそうな、或は又、数日間水浸しになっていたとか言う様な屍体では、そう言う事も信じられる。で、この考え方からして、最も妥当な順序を立てて見ると、先ず最初被害者は、鋭利な刃物で心臓を一突きに刺されて絶命する。次に後手に縛り挙げられ、重を着けられて海中へ投げ込まれる。茲で暫く時間を置いて、次にあの致命的な打撲傷と恐るべき擦過傷が幾分柔かくなつた肌へ加えられる。茲で面白い証拠を僕は見ておいたよ。後手に縛られた両腕の表側には擦過傷があるが、腕の後側や腕の下に当る胸の横から背中の一部へかけては、衣服の綻びさえも見られない事だ。次に、あの黒い機械油のシミだが、溶け加減と言ひ、染み工合と言ひ、確かに暫く水浸しになっていたに違ひはないが、凡ての傷の一番最後から着いたものなんだ。何故つてあの油は、背中の上部の上衣から、綻びの中のジャケットや擦り破れた肌の上まで、そして縛られた麻縄の表側へまでも、ひっこすった様に着いていたからね。さあ、これで一通りこの方は済んだ積りだ。ひとつ、これから殺人の現場を調べて見ようじゃあないか。』

喬介はこう言つて、鉄工場の方へどんどん歩き出した。私は驚いて思わず声を挙げた。

『エッ！ 殺人の現場？ どうして君はそれを知っているんだ。』

私の質問に微笑を浮べた喬介は、歩きながら言葉を続けた。

『ふむ。何でもないさ。君はあの死人の左の顔面に気味悪いソバカスのあつたのを覚えてるだろう。僕はあれを見た瞬間に、ソバカスが顔の一方に丈けあるのを不思議に思ったんだ。で、よく調べて見ると、なんの事はない鉄の切屑の粉が一面にめり込んでいるのさ。つまり、ソバカスと思つた小さいな斑点は、被害者が心臓を突き刺されて、俯向になつた儘バツタリとノビて了つたトタンに、めり込んだ鉄屑なんだ。僕はこの推理の延長から、殺人の現場を直感する。それは旋盤工場である。旋盤工場はあの鉄工場の一部にある筈だ。其処の裏手の屑捨場まで歩けば、もうそれで充分だ。』

私は黙つて喬介の後へ続いた。途中で行逢つた職工の一人に屑捨場の所在を訊ねた私達は、それから間もなく鉄工場の隅の裏手へやつて来た。其処には、油で黒くなつた古い鉄粉や、まだ銀色に光る新しい鉄粉が、山と積つて捨てられてある。

喬介は直ちに手袋をはめると、比較的新しい鉄屑の傍へ腰を屈めて、ごそごそとさばき始めた。暫く一面に掻き廻していたが、何んの変化も見られない。追々私
は倦怠を覚え始めた。

と、喬介の顔色が急に赭らみかけて来た。成る程、喬介の手元を見ると、新に掘り出されたまだ余り古くない白銀色の鉄粉の層の上に、褐色の錆を浮かした大きな染が出て来た。被害者の心臓から流れ出た血の痕だ。私とその血痕を夢中で見詰め

ている間に、喬介は何かチラツと光る物を拾い挙げて私の側へ寄り添った。

『君こんなものがあつたよ。』

喬介が笑いながら私の前へ差し出したのは、飛びツ切上等の飾が付いた鋭利な一丁のジャックナイフだ。鉄屑の油や細かい粉で散々に穢れているが、刃先の方には血痕らしい赤錆が浮いている。

『残念だがこう穢れていては逆も指紋の検出は出来ん。』

喬介は、手袋の指先で、柄元の塵を払い退けた。と、鮮かにG・Yと刻んだ二文字の英字が見えて来た。途端に、私の頭の中で電光の様な推理が閃いた。G・Y——とは、「山田源之助」をローマ字綴りにした場合の頭文字の配列である。そこで私は、すかさず言葉を掛けた。

『君、こりやあ山田源之助の頭文字だ。犯人は源之助なんだね。』

『うむ。まあそう考えて行くのも悪くはないさ』と、落着き払って喬介は言う、『だが、他の多くの条件の符合を無視して、只これだけで犯人を山田と断定する事は、どう考えても危険性の多い話だ。僕は先ず、被害者は一体何をしにこんな処までやって来たのだろうか？ その方を先に考えたい。そして君は、あの先程被害者の細君が話した「若僧震え上つて了つた」とか「今夜は久し振りに飲める」とか言う二人の間の密やかな会話を覚えていられるだろうか？ あの会話は、あの晩二人の間に「若僧」

と呼ばれた一人の第三者が関係していた事を意味する。勿論、その第三者と言う男は、二人よりも年若であつたらうし、そして又——』

喬介は茲で語を切ると、腰を屈めて何か鉄屑の間から拾いあげた。よく見ると鉄屑の油で穢れてはいるが、まだ新しい中味の豊富な広告マッチだ。レットルの凶案の中に「小料理・関東煮」としてある。喬介は微笑しながら再び語を続けた。

『そして又その男と言うのはだね。恐らく此の頃何処か、多分西の方へでも旅行した事のある男だ。どうしてつて、ほら君の見る通りこのナイフの側に落ちていた広告マッチのレットルには「小料理・関東煮」としてある。関東煮とは、吾々東京人の所謂おでんの事だよ。地方へ行くとおでんの事を好く関東煮と呼ぶ。殊に関西では、僕自身度々聞いた名称だよ。従つて、このマッチは、レットルの文案に「関東煮」としてあるだけで、充分に東京の料理店のマッチでない事は判る筈だ。——』

『いや、もういい。よく判つたよ。』

私は喬介の推理に、多少の嫉ましさを感じて口を入れた。喬介は、先程のジャックナイフをハンカチに包んで広告マッチと一緒にポケットへ仕舞い込みながら、私の肩に手を置いた。

『じゃあ君。これから一つ機械油の——あの被害者の背中に引ッこすツた様に着いていたどろりとした黒い油のこぼれている処を探そう。』

そこで私は、喬介に従って大きな鉄工場の建物の中へ這入った。

回転する鉄棒、ベルト、齒車、野獸の様な叫喚を挙げる旋盤機や巨大なマグネットの間を、一人の労働者に案内されながら私達は油のこぼれた場所を探し廻った。が、喬介の推理を受入れて呉れる様な場所は見当らない。で、がっかりした私達は、工場を出て、今度は、二つの乾船渠の間の起重機の林の中へやって来た。其処で、大きな鳥打帽を冠った背広服に仕事着の技師らしい男に行逢うと、喬介は早速その男を捕えて切り出した。

『少しお訊ねしますがね。この造船所の構内で、茲一兩日の間に、誰れか誤って機械油をぶちまけて了った、と言う様な事はなかったでしょうか？ ほんの一寸した事でもいいんですが——』

喬介の突拍子もない細かな質問を受けて、若い技師はいささか面喰った様子を見せたが、間もなく私達の眼の前の船渠を指差しながら口を切った。

『その二号船渠で、昨日油差しを引っくりかえした様でした。何んでしたら御案内しましょう。』

技師はそう言つて、私達を連れて歩き出した。間もなく私達は、その大きな空の乾船渠の底へ梯子伝いに降り立った。技師は、海水を堰塞している船渠門の扉船から五六間隔った位置にやってくる、コンクリートの渠底の一部を指差しながら私

達を振り返った。

『こ奴なんですがね。——』

成る程其処には、三尺四方位の機械油の溜りが、一度水に浸されたらしく半ばぼやけて残っている。その溜りの中央が、丁度被害者の背中でこすり取られたらしく、白っぽいコンクリートの床を見せて、溜りを左右二つに割っている。

『誰がこぼしたんです？』

『水夫です。五日前の朝から昨晚まで修繕の為に入渠していた帝国郵船の貨物船で、天祥丸と言う船のセーラーです。推進機の油差しに出掛けて誤ってこぼしたらしいです。』

『ああそうですか——』

こう言つて喬介は、何か失望したらしく首をうなだれて鬱ぎ込んで了つたが、臆て何思ったか元気で顔を挙げると、

『その天祥丸と言う汽船は、何処からやつて来たんです？』

『神戸出帆です。』技師が答えた。

『神戸——？ で、寄港地は？』

『四日市だけです。』

『エッ！ 四日市？ そうだ。』

喬介は思わず叫び声を挙げると、何にか思い出した様にポケットの中へ手を突込んで、先程の広告マツチを取り出し、ハンカチで穢れを拭って一寸の間レッテルに見入っていたが、間もなく元気で話を続けた。

『で、その天祥丸つて言う船は、今何処にいるんですか？』

『今は芝浦に碇泊しています。何んでも荷物の積込みが遅れたとかつて船主の督促で、昨晚日が暮れてから修繕が終ると、その儘大急ぎで小蒸汽に曳航されて出渠しました。そうですねえ、今日の正午だそうですねえ、もう四時間もすると出帆です。』

『有難う。で、その船は五日前の朝入渠したと言いましたね？』すると、あの被害者が行方不明になった、つまり殺された日の朝ですね？』

『ええそうですね。』

『じゃあ構内の宿泊所には、その晩天祥丸の船員が泊っていた訳ですね？』つまり、夜業はなくても、この造船所の構内には、その晩天祥丸の船員がいたんですね？』

『ええ。まあ、少々はですね。』

『と言うと？』

『詰り、八〇パーセントは淫売婦の処——という意味です。』

『好く判りました。で、その日天祥丸以外に入渠船がありましたか？』

『なかつたです。』

『有難う。』

技師は喬介との会話が終ると、一号船渠ドックに入渠船にゆうきよせんがあるからと言って、向うの船渠ドックの方へ出掛けて行つた。そこで私も喬介に誘われて、面白半分に技師の後に従つた。一号船渠ドックの渠門きよもんの前には、千トン位の貨物船カーゴ・ボートが、小蒸汽こじようきに曳航えいこうされて待つていた。私達が着くと間もなく、扉船とせんの上部海水注入孔のバルブが開いて、真ツ白に泡立つた海水が、恐しい唸うなりを立てて船渠ドックの中へ迸出し始めた。次いで径二尺五寸程の大きな下部注水孔のバルブも開いて、吸い込まれて面喰めんくちつた魚を渠底きよていのコンクリートへ叩き付け始めた。その小気味良い景色にうっとり見惚みどれていた私の肩を、喬介が軽く叩いた。

『君。船の入渠にゆうきよする所でも見ながら暫く待つていて呉れ給えね。僕はこれから、ちよいと犯人を捕とらえて来る——』

喬介はそう言い残した儘まま、呆氣まへに取られている私を見返りもせずパイと構内を飛び出して了しまつた。仕方がないので私は、船渠ドックの開閉作業を見物しながら喬介の帰りを待つ事にした。

一時間して船渠ドックが満水になつても、喬介はまだ帰らない。扉船とせん内の海水が排除されて、その巨大な鋼鉄製の扉船きよもんが渠門きよもんの水上へポツカリ浮び挙あがつても、それからその浮び挙つた扉船を小船に曳ひかして前方の海上へ運び去り、小蒸汽こじようきに曳航えいこうされた入

渠船が、渦巻きの静まり切らぬ船渠内へ引つ張り込まれても、喬介はまだ来ない。渠門に再び扉船がはめ込まれて、外海と劃別された船渠内の海水が、ポンプに依つて排除され始めた頃に、やっと表門の方から一台の自動車が入つて来た。喬介かと思つたら警視庁の車である。さて、事件が大分複雑化して来たなと一人で決め込んだ私の眼の前へ、車の扉を排して元氣よく飛び出した男は、ナント吾が親友青山喬介だ。驚いた私の前へ、続いて現れたのは、ガツチリ捕縄を掛けられた、船員らしい色の黒い何処となく凄味のある慄慄な青年だ。二人の警官に護られている。喬介に伴われた一行が、二号船渠の海に面した岸壁の辺りまで来た時に、どきまぎしながら彼等について行つた私に向つて、初めて喬介が口を切つた。

『君。天祥丸の水夫長、そして殺人犯人矢島五郎君を紹介するよ。』

喬介はそう言つて、捕縄を掛けられたセーラーを私に引合した。私は、まだ犯人を山田源之助だと思つていたので、と言うよりも私は、ナイフに彫り込まれた頭文字に依つて私の作り上げた推理を、まだ意地悪く信じていたかったので、矢島五郎——と聞いた時に、いささか昂奮して了つた。が、間もなく喬介は縛られた男を私達から遠去けて、喋り始めた。

『先程技師の人から、天祥丸が四日市へ寄港したと聞いた時に、僕はふとあの広告

マツチの関東煮としてある方ではなく、その裏側のレットルに、ヨの字を冒頭にした幾つかの片仮名が、ゴテゴテ小さく並んでいたのを思い出したんだ。で、早速取り出して穢れを拭って見たのさ——』と喬介は先程のマツチを私の眼の前へ差し出しながら『見給え。「勘八」と言う店名の下に、小さく「ヨツカイチ会館隣り」としてあるだろう?』

『うむ。』

私は大きく頷いた。

『で、天祥丸の乗組員でこのマツチを持った男と、行方不明になった二人の男とが、あの晩旋盤工場の裏の鉄屑の捨場で行き逢った、と言う風に僕は推理を進めた。ところで、いいかい君。山田源之助は、中気で、而も右腕に怪我をしていた筈だ。その源之助が、あれ丈け鮮に喜三郎の心臓を突き刺す事が出来ると思うかい? 一寸六ヶ敷い話だ。そこで僕は、先程此処を出ると早速山田源之助の遺族を訪ねて、源之助が右利きであった事を確かめて見た。ところが其処で一層都合の良い事には、喜三郎と源之助の二人は、三年前まで、どうだい君、天祥丸の水夫をしていたんだぜ。そこで僕は充分の自信を持って芝浦まで出掛け、予定の行動を取ったんさ。外でもない。まだ出帆前の天祥丸の船長に逢って、頭文字の配列がG・Yとなる男が乗組員の中に何人あるか調べて貰った。すると事務長の八木稔と言うのと、この水夫長

の矢島五郎君の二人だ。ところが、事務長の八木稔の方はもう五十近い親爺だ。それに引き換えて水夫長の矢島五郎君は、船長も驚いている程の凄腕なんだが、年はまだ二十九歳の所謂例の「若僧」と言われた部類に属しとる。で、僕は早速矢島君にこつそりと面会して、あのジャックナイフを買い取つて呉れんかとワタリを付けて見たんさ。すると、ナイフを見た矢島君は、途端にダアとなつて震えながら百圓札を一枚気張つて呉れたよ。で、僕は札を受取る代りに、矢島君に捕縄を掛けさして貰つたんさ。先生、多少は駄々を捏ねたがね。なに、大した事はなかつたよ。』

喬介はそう言つて、笑いながら右腕の袖口をまくし挙げて見せた。手首の奥に白い繻帯、赤い血を薄く滲ませて巻かれてあつた。

『じゃあ一体、山田源之助はどうなつたと言うんだい？』

ごつくりと唾を飲み込みながら私が訊ねた。

『さあ、それなんだがね——』

喬介は振り返つて、遠去けてあつた矢島五郎の側まで歩み寄ると、傍の警官には眼も呉れず、こう声を掛けた。

『矢島君。さあひとつ、潔く言つて呉れ給え。山田源之助の屍体を運んで行つて、

この海の中のどの辺へ沈めたのかつて事をだね。多分原田喜三郎と同じ場所なんだ

3 「ワタリ」は底本では「ワタリ」

ろう?』

『……………』

矢島は黙って喬介を睨み付けていた。

『君、言えないのかね。え?　じゃあ仕方がない。僕がその場所を知らしてあげよう。』

喬介は涼しい顔をして一号船渠の方へ飛んで行くと、間もなく、今入渠船の据付作業を終わったばかりの潜水夫を一人連れて来た。

潜水夫は私達の立っている近くの岸壁まで来て、暫く何か喬介から指図を受けていたが、臆て二人の職工を呼び寄せると、気管やポンプの仕度を手伝わせ、間もなく岸壁に梯子を下げて、直ぐ眼の前の海の中へ這入って行った。十分程すると、私達の立っている処より少しく左に寄って、第二号船渠の扉船から三米程隔った海上へ、夥しい泡が真黒な泥水と一緒に浮び上って来た。

この時、私達の耳元で、恐しい野獣の様な唸り声が聞えた。振り向くと、矢島五郎が、鼻の頭をびっしりと汗で濡らし、真っ青になりながら唇を噛み締めて地団駄踏んでいる。喬介は微笑みながら再び海上へ眼を遣った。五分程すると、梯子の下へ潜水夫が戻って来た。見ると、原田喜三郎と同じ様に、両腕を後手に縛りあげられた屍体を、背中に背負っている。

『あッ！ 源さんだ。』

今までポンプを押していた職工の一人が、突飛もない声で叫んだ。矢島は、ガツクリと顔を伏せてその場へ坐り込んで了った。

源之助の屍体には、喜三郎の屍体に見られた様な打撲傷や擦り傷はなかった。只、心臓の上に、同じ様な刺傷があるだけだ。

『古い鉄の歯車の大きな奴を重にしてありましたよ。逆も持って来れませんので、途中で綱を切つて了ったんです。そう言えば、もう一本途中でむしり取つた様に切れた綱が重に着いていましたが、あれに喜三郎さんの屍体が縛り付けてあつたんでしようなあ——』

仕事を終つた潜水夫は、そう言つて大きく息を吸い込だ。

喬介は、矢島の肩に手を掛けながら、

『君。もう一つ訊くがね。工場の裏で二人に逢つた時に、何故話を丸くしないでこんな酷い事をして了つたのかね？』

喬介の質問に、キツと顔を挙げて矢島は、自棄糞に高い声で喋り出した。

『こうなりやあ、何も彼もぶちまけちまうよ。三年前まで二人はあつしと一緒に天祥丸に乗り組んでいたんだ。ところが丁度天祥丸がまだ新品で南支那へ遠航をやつてた時だ。この前の船長で、しこたまこれを持ってた柿沼つて野郎を、あつしが暴風

の晩に海人中へ叩ツ込んで、ユダみてえに掴み込んでやがった金をすつかりひつた、つたのを二人が嗅ぎ付けて了つたんだ。そ奴をあの晩ゴタゴタ並べて強請りに来たんだ。だから片付けちまったんだ。只、それだけさ。』

『いやどうも、色々有り難う。』

喬介はそう言つて、警官に眼で合図した。

喬介は、重苦しい冬の海を見詰めながら語り始めた。

『どうして源之助も殺されていると言ふことが判つたのかだつて？ そりゃあ君、前後の事情を考え合せて、殆ど直感的にそう推定したんさ。すると君は、じゃあ何故源之助の屍体の沈められた場所が、あんなに簡単に判つたかつて言うだろう。その説明は、山田源之助と一緒に殺された原田喜三郎の屍体が、今朝発見されるまでの行程を一通り説明すれば、それで充分なんだ。つまり、あの鉄工場の裏で突き殺された二つの屍体は、此処まで運ばれ、重を附けられて海中へ投げ込まれる。丁度二号船渠の扉船の直ぐ側だ。それから四日経て昨日の晩だ。修繕の終つた天祥丸は、K造船工場に暇乞いをして芝浦へ急行しなければならぬ。そこで出渠の作業が始まる。第二号乾船渠の扉門の注水孔は、バルブを開いて、恐しい勢で海水を船渠の中へ吸い込み始める。すると渠門の近くの海中へ重を着けられて沈められ、綱の長さでコンブ見たいにふわりふわりしていた屍体はどうなる？ 何んの事はない面喰つた

魚と同じ事だよ。直径二尺五寸の鉄の穴に、傷だらけになりながら恐しい力で吸い込まれ、コンクリートの渠底へ叩き付けられるんだ。丁度その日天祥丸のセーラーが、誤つてぶちまけたと言う機械油の上を、惰性の力で押し流される。臆て船渠が満水になると、渠門は開かれて天祥丸は小蒸汽で曳き出される。浮力の加減で船底にハリツイていた喜三郎の屍体は、その儘連れ出されて外海へ漂流する訳だ。勿論、源之助の屍体がそんな眼に逢わなかつたのは、屍体の位置と注水孔との距離の遠近とか、重に縛られた綱の長短とかが影響していたに違いないんだ——。』

喬介は語り終つて苺の吸殻を海の中へ投げ込んだ。

『じゃあ一体、二人が矢島を強請つたとか、話を丸く収めなかつたのが、つまりこの事件の動機だね。ありやあ一体どうして判つたのかね？』

私は最後の質問を發した。

『ハツハツハツハツ——あ奴あ僕にも、矢島が自白するまでは少しも判らなかつたよ。只、前後の事情を考えて見て、何故話を丸くしなかつたのか——なんてカマを掛けて見た丈けなんだ。』

後註

- 一 底本ではこの行1字下げしていない
- 二 ルビの「じたんだ」はママ

寒の夜晴れ

また雪の季節がやって来た。雪というと、すぐに私は、可哀そうな浅見三四郎のことを思い出す。

その頃私は、ずっと北の国の或る町の——仮にH市と呼んでおこう——そのH市の県立女学校で、平凡な国語の教師を勤めていた。浅見三四郎というのは、同じ女学校の英語の教師で、その頃の私の一番親しい友人でもあった。

三四郎の実家は、東京にあった。かなり裕福な商家であったが、次男坊で肌合の変っていた三四郎は、W大学の英文科を卒業すると、教師になって軽々諸国行脚の途についた。なんでも文学を志したというのだが、いまだ志成らずして、私とH市で落合った頃には、もう三十面をかかえて八つになる子供のいい父親になっていた。少しばかり気の短い男だったが、それだけに腹のないひどく人の好い男で、私は直ぐに親しくなつて行つた。もつとも、私が一番親しくしていたわけではない。誰れも彼も、三四郎を親しみ、三四郎に多かれ少かれ好意を持たない人はなかった。実家が裕福なためもあつたらう、職員間でもなにかと心が寛く、交際も凡て明るくて、変に理窟めいたところが少しもなかった。どうして、文学などという暗い道の辿れる男ではない。私はわけもなく親しくなつて行きながら、すぐにそのことに気づいてしまった。

わけても微笑ましいのは、家庭に於ける三四郎だった。どんなに彼が、美しい妻

と一粒種の子供を愛していたか、それは女生徒達の、弥次気分も通り越した尊敬と羨望に現わされていた。事実私は、どの教師でも必ずつつけられているニツクネームを、三四郎に関する限り耳にした事がなかった。それはまことに不思議なことではさえあつた。

いまから思うと、すべての禍根は、こうした三四郎の円満な性格の中に、既に深く根を下していたのかも知れない。

当時H市の郊外で、三四郎の住居の一番近くに住っていたのは私だった。それで恐ろしい出来事の最初の報せを私が受けたのであるが、悪い時には仕方のないもので、恰度その頃、当の三四郎が暫く家を留守にしていた間のことであつたので、不意を喰つて私はすっかり周章あわててしまった。三四郎が家を留守にしていたと云うのは、その頃県下の山間部に新しく開校された農学校へ、学務部からの指令を受けて学期末の一ヶ月を臨時の講師に出掛けていたのだつた。その農学校は二十五日から冬の休暇に入る予定であつた。それで二十五日の晩には、三四郎はH市の自宅へ帰つて来る予定だつた。ところが不幸な出来事は三四郎よりも一日早く、二十四日の晩に持上つてしまつた。

その頃の三四郎の留守宅には、妻の比露子ひろこの従弟いとこに当る及川おいかわというM大学の学生が、月始めからやつて来ていた。この男に関して、私は余り詳しく知らない。た

だ明るい立派な青年で、大学のスキー部に籍を置いていて、毎年冬になると雪国の従姉のところへやって来ることだけは知っていた。全くH市の郊外では、もう十二月にもなれば、軒下からスキーをつけることが出来る。その及川と比露子と、その年の春小学校へ入ったばかりの、三四郎の最愛の一粒種である春夫はるおの三人が、留守宅に起居していた。いつてみれば及川は、三四郎の留守宅の用心棒と云った形だった。しかし奇怪な出来事は、それにもかかわらず降って湧いたように舞い下った。

さて、十二月二十四日のその晩は、朝からどんより曇っていた鉛色の空が夕方になつて崩れると、チラチラと白いものが降りはじめた。最初は降るともなく舞い下っていたその雪は、六時七時と追々に量を増してひとしきり激しく降りつのが、八時になると紗幕しゃまくをあげたようにパタツと降りやんで、不意に切れはじめた雪の隙間から深く澄んだ星空が冴え冴えと拡がっていった。こうした気象の急変は、しかし、この地方では別に珍しくも思われなかった。いつでも冬が深くなると、寒三十日を中心にして気象がヘンにいじけて来るのだった。いつもいつも日中はどんよりと曇りつづけ、それが夜になると皮肉にもカラリと晴れて、月や星が、冴えた紺色の夜空に冷く輝きはじめる。土地の人びとは、そのことを「寒かんの夜晴よばれ」と呼んでいた。八時に遅がけの夕飯を済ました私は、もう女学校も休暇に入ったので、何処か南の方へ旅行に出掛ける仕度をしていた時だった。

三四郎が級主任をしている補習科A組の美木みきという生徒が、不意に転げ込んで来て、三四郎の留守宅に持上った兇事の報せを齎もたらして来た。私は寒空に冷水を浴びた思いで、それでもすぐにスキーをつけると、あわてふためいて美木と一緒に走りはじめた。

私達が家を出ると、直ぐに市内の教会から、クリスマス前夜イヴの鐘が鳴りはじめたので、もうその時は九時になっていたに違いない。

美木という生徒は、大柄な水々しい少女で、どこの女学校にもきまつて二、三人はいる早熟組の一人だった。化粧することを心得、スカートの長さがいつも変つて、ノートの隅に小さな字で詩人の名ばかり書き並べていようという。美木はまた、よく三四郎のところへ遊びに来ていた。「浅見先生に文学を教えて頂く」なぞと云いながら、三四郎の留守にも度々訪れたというのだから、その「文学」は三四郎でなく、及川にあったのかも知れない。いずれにしても美木は、その夜も三四郎の宅を訊ねて行ったという。けれども戸締りがしてないのに家の中に人の気配がないと、ふと不審を覚えていつもの軽い気持で玄関から奥へ通ずる扉ドアを開けてみた。そして家の中の異様な出来事を見つけると、一番近い私のところまで駆けつけて来たという。

さて、私の家から三四郎の家までは、スキーで行けば十分とかからない。

三四郎の住居は、丸太材を適度に配したヒュッテ風の小粋な住居すまいで、同じように

三軒並んだ右端の家であった。左端の家はもう休んだのか窓にはカーテンが掛り、真中の家は暗くて貸家札が貼つてあつた。三四郎の家の前まで来ると、美木はもう顫え上つて動こうとしなくなつた。それで私は、ここから程遠くない同じ女学校の物理教師の田部井氏の家まで、彼女を求援に走らした。そして流石に固くなりながら、思切つて三四郎の家へ入つていった。

玄関の隣りは、子供の部屋になつていた。壁には幼いクレオン画で、「陸軍大将」や「チューリップの兵隊さん」が、ピン付けになつていた。部屋の中程には小さな樺の木の本鉢植えが据えられて、繁つた枝葉の上には、金線のモールや色紙で造られた、花形や鎖が掛り、白い綿の雪がそれらの上に積つていた。それは三四郎が、臨時講師に出る前から可愛い春夫のために買い植えてやつたクリスマス・ツリーであつた。しかしその部屋に入つた私が、まっ先に気づいたものは、部屋の片隅の小机の前に延べられた、クリスマス・ツリーの小さな主人の寢床だつた。その床は夜具がはねのけられて、寝ていた筈の子供の姿は、見えなかつた。主人を見失つたクリスマス・ツリーの銀紙の星が、キラキラ光りながら折からの風に揺れ、廻りはじめていた。けれども次の瞬間、私は、その部屋のもう一人の臨時の主人であつた及川が、奥の居間へ通ずる開け放された扉口のところ、頭をこちらへ向けて俯向きに打倒れている姿をみつけた。私は期せずして息を呑みこんだが、開け放された扉口を通し

て、向うの居間がなんとなく取り散らされた気配をさすると、すぐに気をとリ直して境の扉口^{ドア}へ恐る恐る爪先立ちに歩み寄り、足元に倒れた人と見較べるようにして居間の中を覗きこんだ。

そこには、トタンを張った板枠の上に置かれたストーブへ、頭を押付けるようにして、三四郎の妻の比露子が倒れていた。髪の毛が焦げていてたまらない臭気が部屋の中に漂っていた。

私は、恐れと意外にガタガタ顫えながら暫く立竦^{たちすく}んでしまったが、必死の思いで気をとリ直すと、屈みこんで恐る恐る足元の及川の体に触ってみた。が、むろんそれは、もう生きている人の体ではなかった。

及川も比露子もかなり烈しく抵抗したと見えて、ひどく取り乱した姿で倒れていた。二人とも額口から顔、腕、頸と、あらゆる露出個所に、何物かで乱打されたらしく紫色の夥しいみみず腫れが覗いていた。しかしすぐに兇器は眼についた。及川の足元に近く、ストーブの鉄の灰搔棒が、鈍いくの字型にひん曲つて投出されていた。部屋の中も又、激しく散乱されていた。椅子は転び、卓子^{テーブル}はいぎって、その上に置いてあったらしい大きなボール紙の玩具箱は、長椅子の前の床の上にはね飛ばされ、濡れて踏みつぶされて、中から投げ出された玩具の汽車やマスケットや、大きな美しい独楽^{こま}などが、同じように飛び出したキャラメルや、ボンボン、チョコレー

トの動物などに入れ混つて散乱し、そこにも小さな主人を見失つた玩具達の間の抜けたあどけなさが漂つていた。

もしも私が、この場合まるで知らない人の家へ飛び込んで、そのような場面につかつたとしたなら、恐らくこんな細かに現場の有様に眼を通したりしてはいられなかつたであろう。恐怖に魂消^{たまげ}て死人と見るや否や、そのまま飛び出して交番へ駆けつけたに違いない。しかしこの時の私には、目に見える恐怖よりもつと恐ろしい目に見えない恐怖があつた。私はその家に飛び込むと、真つ先に大事な子供の姿の見えないのに気がついた。妙なことだが、眼の前に殺されている人よりも、奪われた子供の安否に焼くような不安を覚えた。私にも、及川や比露子と同じように、留守中の三四郎に対する責任があつた。

三四郎の家は、皆で四部屋に別れていた。そこで私は、おびえる心を無理にも引立てるようにながら、すぐに残りの部屋を調べはじめたのだが、しかし家中探しても何処にも子供の姿は見えなかつた。

ところが、そうしているうちに私はふとあることを思い起して、思わずハツと立止つた。それはあの、惨劇の部屋の窓が、引戸を開けられたまままでいたことだつた。考えるまでもなくこれは確かに可笑^{おか}しい。この寒中の夜に部屋の窓のあけ放されてある筈はない。二人の大人を叩き殺して子供を奪い取つた怪しい男が、その窓から、

あわてて戸も締めずに逃げ出して行く姿を私はすぐに思い浮べた。そこで私は、恐る恐る元の部屋に引返した。そして見えない敵に身構えるように壁によりそって、そっと窓の外を覗き見た。

窓の下の雪の上には、果して私の予期したものがみつかった。明らかにそこからスキーをつけたと思われる乱れた跡が、夜眼にもハッキリ残されていた。そしてその乱れた跡から二筋の条痕が滑り出して、生垣の隙間を通り越し、灰白い暗の中へ消え去っていた。その暗の向うの星空の下からはまだ鳴りやまぬクリスマススの鐘が、悪魔の囁きのように、遠く気味悪いほど冴え返って、ガラン、ゴロンと聞えていた。私は猶予なく、決心した。そして直ちに玄関口へ戻ると、そこから自分のスキーをつけて戸外へ飛び出し、勝手口の方を廻って、裏側の開放された居間の窓の下までやって来た。

雪の上に残されていたスキーの跡は、確かに二筋で、それは一人の人の滑った跡に違いなかった。踏み消さないようにしながら、生垣の隙間を越して、私は直ちにその跡を尾行しはじめた。

ところが、歩きはじめて間もなく、私は有力な手掛りを発見した。というのは、そのスキーの跡は、平地滑走でありながら、両杖を突いていない。条痕の左側には、杖を突いていたと見えて、杖の先の雪輪で雪を蹴散らした痕が二、三間毎について

いるが、右側には全然ない。

私の胸は高鳴りはじめた。予想が適中したのだ。つまりそのスキーマの主は、左手には杖を突きながら、右手には杖を突くことが出来なかつたのだ。その手は、杖の代りに何ものかを抱えていたに違いない。怪しい男に抱えられて、藻掻もがきつづけながら運ばれて行つた子供の姿が、まぶた瞼の裏に浮上つて来た。私はいよいよ固くなりながら、前の方を絶えず透し見ではスキーマの跡をつけて行つた。

疑問のスキーマは、生垣を越して空地を通り抜け、静かな裏通りへ続いて行つた。この辺りはH市の郊外でも新開の住宅地で、植込の多い人家はまばらに点在して、空地とも畑ともつかぬ雪の原が多かつた。

この雪は、夕方から八時まで降つた処女雪で、美しい雪の肌には他のスキーマの跡は殆んどなく、時たま人家の前で新しいスキーマの跡と交叉したり、犬の足跡がもつれたりしている以外には、疑問のスキーマを邪魔するものはなかつた。なにしろ、相手が相手である。私は戦慄に顫えながらも、益々注意深く、森しんとした夜空の下を滑りつづけて行つた。

疑問のスキーマは、やがて裏通りを右手に折れて、広い雪の原へ行って行つた。その空地の向うには、三四郎の家の前を通つて市内へ通じている本通りがある。スキーマの跡は市内の方へ向いてその空地を斜めに横切り、どうやら向うの本通りへ乗

り換えるつもりらしい。この分では、途中で警官に応援を求めることが出来るかも知れない。私は急に元気づいて、かなり広いその原ツバを、向うの通りへ斜めに向って走って行った。しかしその私の考えは、まるでトテツもない結果に終わってしまった。

最初私が、スキーの跡は本通りへ乗換えていると思ひ込んだのが、そもそもよくなかった。はじめそのつもりで斜めに雪の原を横切って行った私は、もうその原ツバを半分以上も通り越したところで、ふと、いつの間にか疑問のスキーの跡を見失っていることに気がついた。びっくりした私は、あわててあたりを見廻した。が、雪の肌にはなんにもない。ただ私の通って来た跡だけが、少しづつ曲りくねりながら至極のんびりと残っているだけだ。

私は、自分で自分をどやしつけながら、あわてて廻れ右をした。あたりをせわしく見廻しながら、元の空地のはいり口へ向って、後もどりはじめた。いくら戻っても、いくら見廻しても、しかし疑問のスキーの跡は、みつからない。こいつは妙だぞ、私は益々うろたえはじめた。

ところが、空地の入口の近くまで来て、やっと私は、灰白い雪の肌に、さっきのスキーの跡を再びみつけることが出来た。私はホツとして、今度こそは見失わぬように、ずっとその跡の近くまで寄添って、糸でも手繰るようにながら進みはじめ

た。こうしてつけて行くと、やっぱりその跡は、原ツぱを斜めに横切つて、本通りのほうへ向つてゐる。なんだつてこいつを見失つたりしたのだろう。私は、再三自分で自分をどやしつけながら、注意深く跡を見詰めつづけて行つた。ところが、そうして今度こそはと注意して進むうちに、とうとう私は、まことになんとも変テコなことに気がついてしまった。

というのは、原ツぱの真ん中近くまで来ると、どうしたことかその疑問のスキ一の跡は、ひどく薄くなつて、いや元々古い雪の上に積つた新しい雪の上のその跡は、決して深くはなかつたのだが、それよりも又浅くなつて、なんと云うことだろう、進むにつれ、歩むにつれ、益々浅く薄く、驚く私を尻目にかけて、とうとう空地の真中頃まで来ると、まるでその上を滑つていたものが、そのままスウツと夜空の上へ舞上つてしまつたかのように、影がうすれ、遂にはすっかり消えてしまつてゐるのだ。

その消え方たるや、これが又どう考えてもスキーの主^ミに羽根が生えたか、それとも、あとから、その跡の上に雪が降つて、跡を消してしまつたか——それより他にとりようのない、奇怪にも鮮かな消えかただつた。

私は、うろたえながらも、夢中になつて考えた。しかし前にも述べたように、夕方からひとしきり降りつた雪は八時になつてバツツと止んでしまふとそのまま

「寒の夜晴れ」で、あとから雪なぞ決して降らなかつた。よし又、たとい降つたとしても、ここから先の跡を消した雪が、何故現場からここまでの跡を消さなかつたのであろうか？ 雪はあまねく降りつもつて、凡ての跡は消されなければならぬ。——それでは、その原ツばに奇妙な風雪の現象が起つて、風に舞い上げられた雪が降りつもつて、その部分の跡が消されたのではあるまいか？ しかしそのような風雪を起すほどの風は、決してその晩吹かなかつた筈だ。——私は憑かれた人のように雪の原ツばに立竦んでしまった。まだ鳴り止まぬ不気味な鐘の音が、悪魔の嘲笑のように澄んだ空気を顫わせつづける。

しかし、ここで私は、いつまでもボンヤリ立竦んでいるわけにはいかない。攫さらわれた子供の安否は急を告げている。家には二人の死人がある。もうこの上は、猶予なく警察へ報せなければならぬ。

やがて私はそう決心すると、そのまま一直線に市内へ向つて走り出した。一番近い交番へ飛び込んで、事件を知らせ、その若い警官と一緒に再び元来た道を引返しながらも、しかし私は、雪の原ツばの消失ばかり気にしなければならなかつた。やがて私達が、ひとまず三四郎の家まで辿りついた時には、もう出来事を嗅ぎつけたらしい近くの家の人達が二、三人、スキーをつけて、警察へ報せに出ようとしているところだつた。三四郎の家の前には、その人達に混つて度を失つた美木が、

泣き出しそんな顔で立っていた。家の中には、美木に呼びにやらした田部井氏が、恐らく私と同じ事を考えたのであろう、ガタピシ扉ドッを鳴らして部屋から部屋へ子供の行衛ゆくえを探していた。

警官は家の中へはいつて現場をみると、直ぐに私と田部井氏へ、本署から係官が出張されるまで、現場の部屋を犯さないよう申出た。そして三四郎の書齋あに充てられた別室へ陣取ると、戸外おもての美木も呼び込んで、ひと通り事情を聴取しはじめた。

美木も私も、すっかりとりのぼせてしまつて、前に述べたような発見の径路や、この家の家族についての説明を、横から口を出したり後戻りしたりしながら、喋つていった。しかし田部井氏はかなり落ついていて、口数も少なかった。

やがて、数人の部下を連れた肥ふとつた上役らしい警官が到着すると、現場の調べが始まつた。パツ、パツ、と二つも三つもフラッシュが焚かれて、現場の写真が撮られて行つた。現場が済むと警官達は、家の外を廻つて窓の下へ集まつて行つた。肥つた上官は、さっきの若い警官から報告を受けたり、死体の有様を眺めたりしていたが、窓の外の警官達が、生垣の隙間を越して向うの空地へ、ざわめきながらスキ一の跡をつけはじめると、じつとしていられないように、あとを若い警官にまかせて窓の外へ出て行つた。

私は三四郎に当てて電報を書くと、それを美木に持たせて郵便局へ走らせた。そ

して始めて落ついた気持で、田部井氏と差向いになった。

田部井氏は、さつき私が警官に色々と説明していた頃から、もう既に落ついていたが、その頃には益々落つきを増して、落ついているというよりも、なにかしきりに考え込んでしまった様子だった。いったい何を考え込んでしまったのだろうか？
何か特別な考えの糸口でもみつけたのだろうか？

「田部井さん」私は思い切つて声をかけた。

「いったいあなたは、どう云う風にお考えになりますか？」

「どう云う風に、と云いますと？」

田部井氏は顔を上げると、眼をぱちぱちさせた。

「つまりですね」私は向うの部屋のほうを見ながら、「あなたもご覧になれば判ると思いますが、ああいう惨酷なことをして子供を奪いとつて逃げ出した男の足跡が、なんしろ、まるで空中へ舞い上つたように消えてしまつてゐるんですからね。妙な出来事ですよ」

「そうですね。確かに妙ですよ。しかし妙だと云えば、この事件は、始めっから妙なことばかりですよ」

「ほう、それはまた……」

「あなたは、あの部屋に散らばっている玩具やお菓子を、始めから、つまりこんな

出来事の起らない先から、あの部屋にあったものと思つていますか？」

「さあ、やはり前からあの部屋にあつて、食べたなり遊んだりしていたものでしょうな」

「私は、そうは思わないですよ。少くとも食べかけたものなら、キャラメルなりチョコレート、銀紙や蠟紙が捨ててある筈なんです。が、さつき警官の来ない先に、探してみた時にはなにもなかつたですよ。それに、あそこに転っている玩具は、みんな新しい品ばかりです。第一長椅子の前に投げ出されてやぶれていたボール紙の玩具箱が、お茶なぞのこぼれた跡もないのに濡れていたのは妙です……あれは、あの蓋の上に少しばかりの雪が積つていて、室内の温度で解けたのではないかと思ひます。……そうそう、こんなつまらない事は云わなくたって……」と田部井氏はここで語調を変えて、今度はジツと私の眼の中を覗き込むようにして、「……不思議の材料は、始めから揃つておりますよ……とにかく、クリスマスの晩にです……雪の上を、スキーに乗つて……窓から出入して……それから、天国へ戻つて行く……」

田部井氏は、ふつと押黙つて、もう一度私の眼の中を促すように見詰めながら、「………、いったい、何者だと思ひます？……」

「ああ」私は思わず呻いてしまった。「じゃアあなたは……あの、サンタ・クロースの事を、云つていられるんですか？」

「そうです。つまり、あの部屋へ……手ツ取早くいうと……サンタ・クロースが出現したわけです」

私は少からず吃驚してしまった。

「しかし、随分惨酷なサンタ・クロースですね？」

「そうです。飛んでもないサンタ・クロースですよ……恐らく悪魔が、サンタ・クロースに化けて来たのかも知れませんが」とここで田部井氏は、急に真面目な調子に戻って、立上りながら云った。「……いや、しかし、どうやらその化けの皮も、剥がれかかって来ましたよ。……私には、この謎がもう半分以上、判つて来ました。さア、これからひとつ、サンタ・タロースのあとを追ッ駈けましょう」

田部井氏は、居間の入口まで行つて、その中で頻りに現場の状況をノートしていた警官へ、外出を断ると、私へ眼配しながら玄関口へ出て行つた。私は、わけが判らぬながらも、自信のありそうな田部井氏の態度に惹かれて、ふらふらと立上つた。そして、これから追跡しようとするあの奇怪なスキーの条痕や、そして又その条痕の終点で、さだめしい頃、腕を組んで夜空を振仰いでいるに違いない肥つちよの係員の姿を思い浮べながら、田部井氏のあとに続いて行つた。

けれども戸外に出た田部井氏は、どうしたことか、裏の窓口へは廻ろうとしないで、生垣の表門へ立つて、前の通りをグルグル見廻しはじめた。そここの雪の上には、

出入した幾つかの足跡が入り乱れ、近所の人達が、蒼い顔をして立っていた。いったいどうしたと云うのだろう。

「田部井さん。足跡は、裏の窓口からですよ」

「あああれですか」と田部井氏は振り返って、

「あれはもう、用はありませんよ。私は、もう一つの条痕あとを探してるんです」

「もう一つの条痕あとですって？」

思わず私は、そう訊き返した。

「そうですとも」田部井氏は笑いながら、「窓の外には一人分の跡があっただけでしょう。ね、あれでは往復したことになりませんよ。あそこからサンタ・クロースが出て行ったのなら、もう一つ入った跡がなければなりませんし、あそこから入ったのなら、出た跡があるわけですよ」とそれから、浅見家の屋根のほうを見上げてニヤツと笑いながら、「いくらサンタ・クロースだって、まさかあの細い煙突から、はいったなんてことはないでしょう……こいつは、ただのお伽噺とぎはなしではないんですからね」

成る程、何処かから入って来た跡がなければならぬ筈だ。私は自分の迂濶うがくさに気づいて、思わず顔がほてって来た。が、この時私は、ふと電光のように、或る思いつきが浮んで来た。

「ああ田部井さん。判りましたよ。……八時前には、雪が降っていたでしょう。それで、サンタ・クロースは八時前にここへ入って、八時過ぎて雪が止んでから、出て行ったのでしょうか。だから、入った時の跡は雪に消され、出て行った時の跡だけ残ったのでしょうか」

すると田部井氏は、意外にも静かに首を振った。

「それが、大違いなんです。成程、その考え方も、一応もつともですね。私も、最初あの窓の下の条痕^{あと}が一つだけなのを見た時に、そんな風にも考えて見ました。しかし、あとであなたから、あの条痕^{あと}が消えてしまったことを伺った時に、それが間違っている事に気づきました。問題は、あの途中で消えてしまった足跡にあるんです」

「と云われると……?」

「じゃアやっぱり、雪が積ったんですか?」

「そうですよ」

「じゃア何故、その雪は、あんな斑^{まだら}な、不公平な降りかたをしたんです」

すると田部井氏は、私の肩に手をかけた。

「あなたは、推理の出発を間違えられたんです。いいですか——部屋の中で人が殺されて、大事な子供が奪われている。そして窓^{あけはな}が開放されて、その外の雪の上に、

確かに片手に子供を抱えて行つたらしい片杖のスキーの跡がある——と、ここまで観察されるうちに、もうあなたは、その窓から子供を奪つた怪人が逃げ出して行つた、と云うように推理されてしまつたでしょう。それが、そもその間違ひなんです」とここで田部井氏は調子を変えて、今度は手真似を加えながら、「じゃア、ひとつ、こういう場合を考えてみて下さい。……いいですか、こう、盛んに雪の降る中を、一人の人間が歩いていたとします。……ところが、その人が歩き続けているうちに、急に雪がやんで、カラリとしたお天気になつたとしたら、その場合その人の足跡はどういう風に残りますか?……つまり、雪の降っている時には、足跡はつけられてもつけられる一方からすぐに消えてしまうが、その雪がバツツとやんでしまつたと、その雪のやんだところから、始めて足跡がつきはじめるわけでしょう。その足跡を、その人の進行に逆らつてこちらから辿つて行けば、まるで人間がなくなつてしまつたように、その足跡は、薄れ、消えてしまうわけでしょう……つまり人が通つてしまつたあとから雪が降つたのでもなければ、雪がやんでしまつたあとから人が通つたのでもなく、実に人の歩いている最中に、その進行の途中で、いままで降つていた雪がやんだわけです……これでもう、あの消えた足跡の正体はお判りになつたでしょう。つまりあの足跡の主は、この家の窓からあの時に出て行つたのではなくて、逆にはいつて来たわけです。しかも今夜雪がやんだのは恰度八時頃でし

たから、そのサンタ・クロースが町の方からやって来てこの家に窓からはいつの間も、まず八時頃と見当がつくわけです」

「なるほど、よくわかりました」私は頭をかきながらつけ加えた。「そうすると、あの片杖の跡はどういうことになりますか？」

「あれですか、あれはなんでもありません。あなたが始め考えられたように、やはりそのサンタ・クロースは荷物を片手に持っていたのです。しかしそれは、子供ではなくて、あの部屋に転っていた雪に濡れたボール紙の大きな玩具箱だったのです。サンタ・クロースの贈物だったのです……」とここで田部井氏は言葉を改めて、「さア、これでもう大分わかって来たでしょう。窓の足跡は確かに外から入って来たものであり、その足跡のほかに出て行ったらしい足跡もなく、家の中にもサンタ・クロースの姿はおろか子供の影もないと云えば、この表玄関からサンタ・クロースと子供は出て行ったに違いないのです……時に、あなたが最初ここへ駆つけられた時に、表口（まへぐち）にそれらしい足跡はありませんでしたか？……その連中はあなたより先にここを出て行ったのですよ」

「さア、そいつは。……なんしろあわてていましたので……」

「じゃア仕方ありません。ひとつ面倒でも、この沢山の跡の中から、片杖を突いた跡を探しましょう」

田部井氏は早速屈み腰になって、それらしい跡を探しはじめた。むろん私もその後が続いて、灰白い雪明りの中をうろつきはじめた。表通りの弥次馬連は、なに事が起つたのだらうと、好奇の眼を輝かして私達のしぐさを見守つた。

雪の上には、私達や警官達のスキーの跡がいくつも錯綜して、なかなか片杖のスキーの跡はみつからない。例のスキーの跡の終点まで行つた警官達が、やっと帰つて来たとみえて、家の中がなんとなく賑かになつた。

その時、田部井氏が私のところまで来て、不意に問いかけた。

「あなたより先にここへ来たのは、あのA組の美木でしたね……美木は大人用のスキーをつけていたでしょうね？」

私が頷くと、

「じゃアやっぱり子供のものだ」

とわけのわからぬことを云いながら、道路の生垣に沿つたところまで私を誘つて行きそこに残されている二組のスキーの跡を指しながら云つた。

「片杖の跡のないのも無理はないですよ。子供は、サンタ・クロースに抱えられて行つたのではなく、サンタ・クロースに連れられて、自分でスキーをはいて行つたんです」

成るほど雪の上には、大人のスキーと並んで、幅の心持狭いスキーの跡が、表通

りを進んでいる。

「さア、訊問に呼び出されないうちに、急いでこの跡をつけて行きましょう」

私達は、直ぐに滑り出した。

もう大分時間もたっている事だから、どこまでその跡の主人達は進んでいるか判らない。最初私は、そう思つて滑り出したのだが、ところが、生垣に沿つて五十米突も進んだ処で、不意にその条痕は、なにか向うから来たものを避けるようにして二つとも右側へ方向転換キックターンしている。私はギョツとなった。そこは隣りの空家である。二つの条痕は、ささやかな生垣の表からはいつて玄関をそれ、暗い建物の横から裏のほうへ廻っているらしい。私達は固唾を飲んでつけたした。

「意外に近かつたですね」田部井氏が歩きながら、蒼い顔をして云つた。「どうも、不吉な結果になりそうです……ところで、あなたは、いったいサンタ・クロースを、誰だと思えますか？……もうお判りになつたでしょう？」

私は顫えながら、烈しく首を振つた。田部井氏は空家の庭へ踏み込みながら、「判つていられても、云い憎いんじゃないですか？……この場合、サンタ・クロースになつて、窓から贈物を届けるほどの人は、誰でしょう？……しかも、子供は、引ッ抱えなくても、一人でスキーをはいてついて来るんです……確か、七時半頃に、この日市へ着く汽車がありましたね？……私はなんだかその汽車で、予定よりも一

日早く、浅見さんが帰って来たんじゃないかと」

「えッ、なに三四郎が!」私は思わず叫んだ。「飛んでもない……よしんば、三四郎が帰ったにしても、なぜ又こんな酷惨むじたんしいことを……いいや、あんなに家庭を愛した男が、どうしてこんなことをするのですか!」

しかしもうその時、空家の裏側へ廻っていた田部井氏は、その窓の下に二組の大小のスキーが脱ぎ捨てられているのをみつけると、すぐに明放あけはなされた窓へ飛びつき、真暗な部屋の中へはいって行った。続いて窓枠に飛びついた私は、この時間の中から顫え上るような、田部井氏の呻き声を聞いた。

「ああ……やっぱ遅かった……」

闇に眼が馴れるにつれて、やがて私も、天井に下げたカーテンのコードで、首を吊っている浅見三四郎の、変り果てた姿を見たのだった。その足元には、バンドで首を絞められた子供が、眠るように横わっていた。チョコレートチョコレートの玉が、二つ三つ転っている。その側に、キチンと畳まれた紙片が置いてあったが、田部井氏はそれを拾い上げると、チラリと表紙おもてを見て、黙って私にそれを差出した。それは三四郎の、私にあてた、たった一つの遺書であった。雪明りを頼りに急ぎ認したためたものとみえて、荒々しい鉛筆の走書きであったが、窓際によつて、私は顫えながらも、辛からうじて読みとることが出来た。

鳩野君。

とうとう僕は、地獄へ落ちた。しかし君にだけは、事の真相を知って貰いたい。農学校は、雪崩なだれのために予定よりも一日早く休みになった。七時半の汽車で町についた僕は今夜がクリスマス・イーヴなのに気づいて、春夫の土産みやげを買って家路を急いだ。

君は、僕がどんなに平凡な男で、妻を、子供を、家庭を愛していたか、よく知っていてくれたと思う。僕は、妻や子供が、予定よりも一日早く帰ってくれた僕を、どんなに喜んでくれるか、そう思うと、いつそうその喜びを大きくしてやりたさに、ふと、サンタ・クロースを思いついた。僕は、幸福にはち切れそうな思いで、わざわざ家の裏へ廻って、跽音あひおとを忍ばせ、居間の窓枠へ辿りつくくと、そうツとスキーを脱いで杖に突き、窓枠へ乗って、驚喜する家人の顔を心の中に描きながら、硝子扉ガラスを開けた。

ああ僕は、しかしそこで、絶対に見てはならないものを見てしまったのだ！ 部屋へ入って僕は、長椅子の上に抱き合いながら慄えている及川と妻の前へ、僕の前までの幸福の塊かたまりみたいな、土産の玩具箱を投げつけてやった。

しかし鳩野君。どうしてそんなことで、沸たぎり立つ憎しみがおさまろう。それから僕が、涙を流しながら、灰搔棒でなにをしたか、もう君は知っている筈だ。僕

は、隣室で眼を醒した春夫に、僕のした事を知らずまいとして春夫を騙して表へ連れて逃げだした。ああしかし、僕はもう逃げ場を失ってしまった。よしんば逃げ場があつたとしても、どうして傷付いたこの心が救われよう。

鳩野君。僕は、僕のこの暗い旅の門出が、愛する春夫と二人であることに、せめてもの喜びを抱いて行こう。

では、左様なら。

三四郎

窓の外には、いつの間にか夜風が出て、弔花のような風雪が舞いしきり、折から鳴りやんでいた教会の鐘が、再びしょうしょう嬋々と、慄える私の心を水のようにしめつけていった。

〔新青年〕昭和十一年十二月号

気
狂
い
機
関
車

日本犯罪研究会発会式の席上で、数日前に偶然にも懇意になつたM警察署の内木司法主任から、不思議な殺人事件の急電を受けて冷い旅舎に真夜中過ぎの夢を破られた青山喬介と私は、クレバネットのレイン・コートに身を包んで烈しい風を真面に受けながら、線路伝いに殺人現場のW停車場へ向つて速足に歩き続けていた。

洩て泣き喚く様な吹雪の夜の事だ。

雪はやんでいたが、まだ身を切る様な烈風が吹捲り、底深く荒れ果てた一面の闇を透して遠く海も時化ているらしく、此処から三哩程南方にある麁港の防波堤に間断なく打揚る跳波の響が、風の悲鳴にコキ混つて、粉雪の積つた線路の上を飛ぶ様に歩いて行く私達の跽音などは、針程も聴えなかつた。

やがて前方の路上には遠方信号機の緑燈が現れ、続いて無数の妙に白けた燈光が、蒼白い線路の上にガラガラと反射し始める。そして間もなく——私達はW駅に着いた。

赤、緑、橙等さまざまな信号燈の配置に囲まれて、入換作業場の時計塔が、構内照明燈の光にキツカリ四時十分を指していた。明るいガランとした本屋のホームで、先着の内木司法主任と警察医の出迎えを受けた私達は、貨物積卸ホームを突切つて直に

殺人の現場へ案内された。

其処はW駅の西端に寄つて、下り本線と下り一番線との線路に狭まれて大きな赤黒い鉄製の給水タンクが立っている薄暗い路面であるが、被害者の屍体は、給水タンクと下り一番線との間の、四呎程の幅狭い処に、数名の警官や駅員達に見守られながら発見当時のままで置かれてあつた。

被害者は菜ッ葉服を着た毬栗頭の大男で、両脚を少し膝を折つて大の字に開き、右掌を固く握り締め、左掌で地面を掻きむしる様にして、線路と平行に、薄く雪の積つた地面の上に俯伏に倒れていた。真白な雪の肌に黒血のにじんだその頭部の近くには、顎紐の千切れた従業員の前帽がひとつ、無雑作に転つている――。

警察医は、早速屍体の側へ屈み込むと、私達を上眼で招いた。

「――温度の関係で、硬直は割に早く来ておりますが、これで死後三四十十分しか経過していません。勿論他殺です。死因は後頭部の打撲傷に依る脳震盪で、御覧の通り傷口は、脊髄に垂直に横に細く開いた挫傷で、少量の出血をしております。加害者は、この傷口やそれから後頭部の下部の骨折から見て、幅約〇・八糎、長さ約五糎の遊離端を持つ鈍器――例えば、先の開いた灰搔棒みたいなもので、背後から力まかせにぶん殴つたものですか」

「他に損傷はないですか？」喬介が訊いた。

「ええ、ありません。もつとも、顔面、掌その他に、極めて軽微な表皮剥脱ないし乃至皮下出血がありますが、死因とは無関係です」

喬介は警察医と向い合つて一層近く屍体に寄添うと、懐中電燈の光を差付ける様にして、後頭部の致命傷を覗き込んだ。が、間もなく傷口を取巻く頭髮はえぎわの生際はえぎわを指差しながら、医師へ言った。

「白い粉みたいなのが少しばかり着いていますね。何でしょう？ 砂ですか？」
「そうです。普通地面のありふれた砂ですよ。多分兇器に附着していたものでしょう」

「成程。でも、一応調べて見たいものですね」そして駅員達の方へ振向いて、「顕微鏡はありますか？ 五百倍以上のものだと一層結構ですがね——」

すると、私の横に立っていた肥つちよのチヨビ髭はげを生したW駅の助役が、傍らの駅手に、医務室の顕微鏡を持って来いと命じた。

喬介は、それから、固く握り締められたままの被害者の右掌や、少し膝を折つて大の字に拡げられた両の脚などを、時折首を傾かげながら調べていたが、やがて立上ると、今しがた部下の警部補と何か打合せを終えた内木司法主任に向つて声を掛けた。

「何か御意見を承うけたまわ給りたいものですね」

喬介の言葉に司法主任は笑いながら、

「いや。私の方こそ、貴下^{あなた}の御援助を得たいです。が、まあ、とにかく捜査に先立つて、大切な点をお知らせして置きましょう。と言うのは、外でもないですが、一口に言うとは、つまり現場に加害者の痕跡が微塵もないと言う事です。何しろ、御承知の通り犯行の推定時刻までにはあの通り雪が降っていましたし、報告に接して急行した吾々^{われわれ}係官の現場調査も、充分——いや、これはむしろ貴下方の御信頼に任ずとして——、それにもかかわらず、この雪の地面には、加害者と覚しき足跡は愚か、被害者自身の足跡すら発見されなかつたのです。従つて私達は、ここで最も簡単にしても合理的に、犯行の本当の現場を見透す事が出来るのです。即ち屍体は、推定時間當時に於てこの下り一番線上を通過した機関車から、灰搔棒で殺害後突墜^{つきおと}されたものに違いないと言う事——私のこの考え方を裏書してくれる確実な手掛りを御覧下さい」

司法主任はそう言つて、軌条と屍体との中間に当る路面に、懐中電燈の光を浴びせ掛けた。——成程、薄く積つた地面の雪の上には、軌条から二呎^{フイート}程離れしかも軌条に平行して、数滴の血の雫^{しずく}の跡が一列に並んで着いている。その列の尖端、つまり血の雫の落始まつた処は、屍体よりも約五呎^{フイート}程の東寄にあつて、其処には同じ一点に数滴の雫が、停車中の機関車の床から落ちたらしく雪の肌^{にきりこぶし}に握拳程^{しきみ}の染を作つている。そして二呎^{フイート}三呎^{フイート}と列の西に寄るに従つて、雫と雫との間隔は一吋^{インチ}二吋^{インチ}と

大きくなって、やがて吾々の視線から闇の中へ消えている。司法主任は、それらの雫の特異な落下点を指差しながら、機関車が給水のため此処で停車していた時に犯行が行われたに違いない、と附け加えた。喬介はそれにいちいち頷きながら聴いていたが、やがて、駅員達の方へ振返つて、屍体発見並に被害者の説明を求めた。

と、それに対して、ゴム引の作業服を着た配電室の技師らしい男が進み出て、自分が恰度午前四時二十分前頃に、交換時間で、配電室から下り一番の線路伝いに本屋の詰所へ戻る途中、この場で、この通りに倒れている屍体を発見し、直に報告の処置を執つた旨を、詳細に且つ淀みなく述べ立てた。が、被害者に就いては、一向に見覚えがない旨を附加えた。すると今度は、今まで助役の隣で、オーバーのポケットへ深々と両手を突込んだまま人々の話に聞き入っていた頬骨の突出た瘦ギスの駅長が、被害者は、W 駅の東方約三十哩の H 駅機関庫に新しく這入つた機関助手である事は判るが、姓名その他の詳細に就いては不明であるため、既に H 機関庫に打電して、屍体の首実検を依頼してある旨を陳述した。

恰度この時、先程の駅手が顕微鏡を持って来たので、喬介はそれを受取ると、整つた照明装置に満足の笑を漏しながら、警察医に機械を渡して、屍体の傷口に着いた砂片の分析的な鑑定を依頼した。そして再び振返ると、駅長に向つて、

「では次にもうひとつ、今から約一時間前の犯行の推定時刻に、この下り一番線

通過した列車に就いて伺いたいのですが——」

すると今度は、チヨビ髭の助役が乗り出した。

「列車——と言うと、一寸門外の方には変に思われるかも知れませんが、恰度その時刻には、H機関庫からN駅の操車場へ、作業のために臨時運転をされた長距離単行機関車がこの線路を通過しております。入換用のタンク機関車で、番号は、確か2400形式・73号——だったと思います。御承知の通り、臨時の単行機関車などには勿論表定速度はありませんので、閉塞装置に依る停車命令のない限り、言い換えれば、あらかし予め運転区間の線路上に於ける安全が保障されている以上、多少の時刻の緩和は認められております。で、そんな訳で、その23号のタンク機関車が本屋のホームを通過した時刻を、今ここで厳密に申上げる事は出来ませんが、何でもそれは、三時三十分を五分以上外れる様な事はなかったと思います。尚、機関車が下り一番線を通ったのは、恰度その時、下り本線に貨物列車が停車していたためです。——」

「すると、勿論そのタンク機関車は、本屋のホームを通過してしまつてから、現場で、一度停車したんでしような？」

喬介が口を入れた。

「そうです。——多分御承知の事とは思いますが、タンク機関車は他のテンダー機関車と違って、別に炭水車を牽引しておらず、機関車の主体の一部に狭少な炭水車槽

を持つているだけです。従つてH・N間の様に六十哩マイル近くもある長距離の単行運転をする場合には、どうしても当駅で炭水の補給をしなければなりません。勿論この号も、此処で停車したに違いありません。そして、この給水タンクから水を飲み込み、その貯炭パイルから石炭を積み込んだでしょう」

チヨビ髭の助役はそう言つて、給水タンクの直ぐ東隣に、同じ様に線路に沿つて黒々と横わたつた、高さ約十三、四呎フット長さ約六十呎フットの大きな石炭堆積台パイルを、肥ふとつた体を延び上げる様にして指差した。

そこで喬介は助役に軽く会釈すると、今度は、司法主任と向合つて顕微鏡の上に屈み込んでゐる警察医の側へ行き、その肩へ軽く手を掛けて、

「どうです。判りましたか？」

すると警察医は、一寸そのまま黙つていたが、やがてゆっくり立上つて大きく欠伸あくびをひとつすると、ロイド眼鏡の硝子たまを拭き拭き、

「有りましたよ。いや。仲々沢山に有りましたよ。——先ず、多量の玻璃質はりに包まれて、アルカリ長石、雲母角閃石うんぼ、輝石等々の微片、それから極めて少量の石英と、橄欖岩かんらんに準長石——」

「何ですつて。橄欖岩に準長石?……ふむ。それに、石英は?」
「極く少量です」

「——いや、よく判りました。それにしても、……珍らしいなあ……」と喬介はそのまま暫く黙想に陥つたが、やがて不意に顔を上げると、今度は助役に向つて、「この駅の附近の線路で、道床に粗面岩の碎石を敷詰めた箇所がありますか？」

するとその問に対して、助役の代りに配電室の技師が口を切つた。

「此処から三哩程^{マイル}東方の、発電所の近くに^{きりとおし}切通があります。その山の切口から珍らしく粗面岩が出ていますので、その部分の線路だけ、僅かですが、道床に粗面岩の碎石を使用しております」

「ははあ。するとその地点の線路は、勿論当駅の保線区に属しているでしょうな？」

「そうです」今度は助役が答えた。

「では、最近その地点の道床に、^{つきかため}搗固工事を施しませんでしたか？」

「施しました。昨日と一昨日の二日間、当駅保線区の工夫が、五名程出ております」

助役が答えた。すると喬介は、生き生きと眼を輝かせながら、

「判りました。——殺人に用いられた兇器は撥形^{ヒーター}鶴嘴です！」そして吃驚^{びっくり}した一同を、軽く微笑して見廻しながら、「しかも、それは、当駅の工事用器具所に属するものですよ！」

私は、喬介の推理に今更の様に啞然としながらも、鶴嘴の一方の刃先が長さ約五センチ程の撥形ばちに開いた兇器——よく汽車の窓から見た、線路工夫の振上げているあの逞しい撥形ヒーター鶴嘴を、アリアリと眼の中に思い浮べた。内木司法主任も、私と同様に驚いたらしく、眼を大粒に見開いたまま、警察医の方へ臆病そうに顔を向けた。すると今まで、相変らずポケット・ハンドをしたまま黙り込んでいた瘦ギスの駅長が、ズングリした頬骨を突出しながら、熱心な語調で喬介に立向った。

「しかし、たとえそれらの鉞片が傷口に着いていたからとて、何もそれだけで、兇器を、あの切通で使った撥形ヒーター鶴嘴であると推定されるのは、少し早計ではないでしょうか？——御承知の通り、碎石道床と言う奴は、碎石が角張っている点は理論的に言えば道床材料として大変都合なんです、何分高価なものですから我国では普通に使用されず、その代りに主として精選砂利を用いております。が、これとても又相当に値段が張りますので、普通経済的に施工するためには、道床の下部に砂交りの切込砂利を入れ、上部の表面だけに精選砂利を敷詰める方法、所謂——化粧砂利と言うのがあります。で、この、化粧砂利の下の粗雑な切込砂利に、石英粗面岩の細片を使用した道床が、つまり表面は普通の精選砂利でも、内部が石英粗面岩の切込砂利になっている道床が、H駅の附近にも数ヶ所もあるのです」

「駅長はそう言つて喬介の顔を熱心に見詰めた。が、喬介は、決してひるまなかつた。」

「石英粗面岩——ですつて？ いや。大變いい参考になりました。でも、石英粗面岩と粗面岩とは、同じ火成岩中の火山岩に属していながらも、全々別個の岩石である事を忘れないで下さい。即ち、粗面岩は石英粗面岩と違つて石英は決して多くは存在せずに、却つて橄欖岩や準長石の類は往々含有している事、をですな。そしてしかも、この種の岩石は、本邦内地には極めて産出が少く、大變珍しい代物なんです」

そこで駅長は、二、三度軽く頷くと、そのまま急に黙つてしまった。喬介は司法主任へ向つて、

「とにかく、撥形鶴嘴ビーターと言えよそんな小さな品ではないんですから、一応その辺を探して見て下さい。もし有るとすれば、きつと発見みかるでしょう」

で、二名の警官が、司法主任から兇器の搜索を命ぜられた。

一方喬介は、ソツと私を招いて、先程司法主任が知らしてくれた軌条沿いの血の跡を、懐中電燈で照しながら、線路伝いに駅の西端へ向つて歩き始めた。

が、二十米メートルも歩いたと思う頃、立止つて振り返ると、給水タンクの下であれこれと指図しているらしい司法主任の方を顎で指しながら、私へ言った。

「ね君、大将の言ってる事は、あの屍体に関する限り、大体間違いない様だよ。つまり、屍体は、タンク機関車^{キャップ}23号から墜^{おと}されたもので、同時にこれらの血の雫は、同じ23号の操縦室^{キャップ}の床の端から、機関車が給水で停車している時から落始めたものだ、と言う風にね。そして先生、23号の、被害者と同乗した被害者以外のもう一人の、或は二人の、乗務員に対して、有力な嫌疑を抱いているらしい。ま、大体素直な判定さ。だが、僕は、その推理に就いて云々する前に、あの屍体の奇妙に開かれた両脚や、五指を固く握り締めたままの右掌に対して、何よりも大きな興味を覚えるよ。そしてだね君。あの屍体の傷口を思出してくれ給え。あの傷は、打撲に依る挫創並に骨折で、決して出血の多いものではなかった筈だ。ね。それにもかかわらず、ほら、御覧の通り、機関車の操縦室^{キャップ}の床から落ちた血の雫は、こんな処まで続いているじゃないか!! いや、それどころかまだまだ西方^{むしやう}まで続いている様だ。——ひとつ、僕達は、その血の雫の終る処までつけて行つて見ようじゃないか」

で喬介は再び歩き出した。私は一寸身顫いを覚えながら、それでも喬介の後に従つた。

嵐はもう大分静まっていたが、この附近の路面には建物が無いので、広々とした配線構内の上には、まだ吹止まぬ寒い風が私達を待っていた。喬介は線路の上を歩きながら、何かブツブツ呟いていたがやがて私へ向つて、

「君。この血の雫の跡を見給え。落された雫の量の大きさは少しも変っていないのに、その落された地点と地点との間隔は、もう二米余にも達している。僕は、先刻からこの間隔の長さが、追々に伸びて行く比率に注意しているよ。それは余りに速く伸び過ぎる。——つまり、33号機関車は、あの給水タンクの地点から急激に、最高速度で、出発させられたのだ。——大体、入換用のタンク機関車などと言う奴は、僕の常識的な考えから割出して見ても、牽引力の大きな割に速力は他の旅客専用の機関車などより小さい訳だし、それに第一、転轍器や急曲線の多い構内で、そんな急速な出発をするなんて無茶な運転法則はないんだから、この33号の変調は、先ずこの事件の有力な謎のひとつと見て差支ないね」

そこで、歩きながら私が口を入れた。

「しかし、もしもその機関車の操縦室の床に溜った血の量が、全体に少なくなって来たのだとしたなら、雫の大きさは同じでも、落される間隔は、あたかも機関車の速度が急変したかのように、長くなるのじやないかね？」

「ふむ。仲々君も、近頃は利巧になったね。だが、もしも君の言う通り、そんなに早く機関車の方の血が少なくなつて来たのだとしたなら、この調子では、もう間もなく血の雫は終つてしまうよ。——其処まで行つて見よう。果して君の説が正しいか、それとも、僕の恐ろしい予想に軍配が挙がるか——」

で、私達は二人共亢奮して歩き続けた。

もうこの附近はW駅の西端に近く、二百米程メートルの間に互って、全線路が一樣に大きく左にカーブしている。私達は幅の広いそのカーブの中を、懐中電燈で血の雫の跡を追いながら、下り一番線に沿って歩き続けた。が、間もなく私の鼻頭には、この寒さにもかかわらず、無気味な油汗がにじみ始めた。——私は、喬介との闘いに敗れたのだ。

線路の横には、喬介の推理通り行けども行けども血の雫の跡は消えず、タンク機関車73号は、明かに急速度を出したらしく、もうこの辺では、血の雫の跡も五、六米メートル置きにほぼ一定して着いていた。そしてそのカーブの終りに近く、下り一番線から下り本線への互り線の転轍器ポイントの西で、とうとう私達は、異様な第二の他殺屍体にぶつかってしまった。

三

屍体は第一のそれと同じ様に、菜っ葉服を着、従業員の正帽を冠った、明かに73号の機関手で、粉雪の積った砂利面の上へ、線路に近く横ざまに投げ出されていた。——辺りは、一面の血の海だ。

私は、直に喬介を置いて元来た道を大急ぎで引返した。そして司法主任や警察医の連中を連れて、再び其処へ戻った時には、もう喬介は屈み込んで、綿密な屍体の調査を始めていた。

やがて喬介並に警察医の検案に依って、第二の屍体は、第一のそれと殆ど同時刻に殺されたもので、致命傷は、鋭利な短刀様の兇器で背後から第六胸椎と第七胸椎との間に突立てた、創底左肺に達する深い刺傷である事が判った。尚、屍体が機関車から投げ出された際に出来たらしく、顛頂骨の後部に近くアングリ口を開いた打撲傷や、その他全身の露出面に互る夥しい擦過傷等も明かになつた。

私達は協力して暫くその辺を探して見たが、勿論殺害に使われた兇器は発見からなかつた。そして線路の脇の血の雫の跡も、もうそれより以西には着いていなかった。

司法主任は、第二の屍体の発見に依って自分の抱いていた疑いが微塵に碎かれてしまつたためか、すっかりしおれて、黙々としていたが、やがて思い出した様に傍らの路面から、私はうっかり気付かなかつたのだが、先刻ここへ来た時に持つて来て置いたらしい大型の撥形鶴嘴を取上げると、喬介の眼前へ差出しながら、

「やはり有りましたよ。こいつでしょう？ 最初の屍体に加えられた兇器は。——あの貯炭パイルト、直ぐその東隣のランプ室との間の狭い地面に抛り込んでありま

したよ。ええ、無論その撥形ぼちの刃先に着いていた砂は、顕微鏡検査に依つて、貴方あなたの仰有おっしゃった通り、あちらの屍体の傷口の砂と完全に一致しました。尚、柄えも調査しましたが、加害者は手袋を用いたらしく、指紋はなかつたです」

喬介はそれに頷きながら撥形ピーター鶴嘴を受取ると、自身で詳しく調べ始めた。が、その柄の端近くに抜かれた小指程の太さの穴に気付くと、貪る様にして暫くその穴を調べていたが、やがて傍らの助役へ、

「これはどう言う穴ですか？」

「さあ——?!」

「当駅の撥形ピーター鶴嘴で、柄の端にこんな穴の開いた奴があつたのですか？」

「そんな筈は、ないんですが——」

「ふむ。判りました。その通りでしょう。第一この穴は、こんなに新しいんですからね……」

喬介はそれなり深い思索に陥つて行つた。

間もなく、W駅の本屋ほんやの方から一人の駅手が飛んで来て、H機関庫から首実検の連中が到着したとの報告を齎もたらした。すると司法主任は急に元氣附いて、警官の一人にこの場の屍体を見張っている様命ずると、先に立つて歩き始めた。私達もその後に従つた。

やがて私達が、給水タンク下の最初の現場へ戻り着いた時には、運搬用の気動車モーターカーでやって来たらしい三名の機関庫員は、既に屍体の検証を済して、一服している処だった。が、その内の主任らしい男が、肥った体をヨチヨチやらして私達より一足遅くやって来た助役の顔を見ると、早速立上って、

「——飛んだ事でした。被害者は確かに〇〇号の機関助手で土屋良平と云う男です」
「いや、どうも。ところで、機関手の名前は？」

「機関手——ですか？ ええ。井上順三いのうえじゅんぞうと言いますが」

「ふむ。そいつも殺されておりますぞ！」

助役の言葉で、機関庫主任も駅長も明かに蒼くなった。そして一名の機関庫員は、飛ぶ様にして第二の屍体の検証に向った。

すると司法主任が、待構えた様に機関庫主任を捕えて、

「〇〇号のタンク機関車が、H機関庫を出発したのは何時ですか？」

「午前二時四十分です」

「ははあ。で、当駅を通過したのが三時半と——。じゃあ、無論途中停車はしなかつたですね？」

「ええ、そうですとも。当駅で炭水補給の停車以外には、N操車場ハンフ・ヤードまで六十哩マイルの直行運転です」

「ふむ。ところで、乗務員は何名でしたか？」

「二名です」

「二名——？ 三名じゃあなかったですか？」

「そ、そんな筈はありません。第一、原則的に、機関手と助手の二名だけ——」

「いや。その原則外の、非合法の一人があつたのだ！」と、それから、急ぎ込んで、駅長へ、「N駅へその男の逮捕方を打電して下さい。もう機関車は、N操車場へ着くに違いない——」

すると、今まで黙っていた喬介が、突然吹出した。

「……冗談じゃあない。内木さんにも似合わん傑作ですよ。ね。——もしも私が、

その場合の犯人であつたとしたなら、N駅へ着かない以前に、機関車を投げ出して、疾の昔に逃げてしまいますよ。いや、全く、貴下の意見は間違いだらけだ。例えば、

最初機関車がH駅を出発した当時から、犯人が被害者の二人と一緒に乗っていたものとするれば、第一の屍体の兇器、即ち昨日まで道床搗固つきかために使われ、当駅の工用具所へ仕舞われたあの撥形鶴嘴ヒタカタを犯行後機関車の中からランプ室と貯炭パイルの間の狭い地面へ投げ捨てる事は出来るとしても、一体、何処からそいつを手に入れる事が出来ると言うんです。そして、又よしんばそれが出来得たとしても、犯人は何の必要があつて、わざわざ当駅で停車中などに二人もの人間を殺害しなければならな

かったのです。犯人が機関車に乗っていたのなら、何もこんな処で殺さなくたって、あの吹雪の闇を疾走中に、もつと適切な殺し場がいくらもあつた筈ではないですか。——いや、この事件は、いま貴下が考えていられるより、もう少しは面白いものらしいです。そしてその事は、非常に沢山の謎が証明してくれず。例えば、この第一の屍体に於ける奇妙な硬直姿勢、撥形鶴嘴の柄先の不可解な穴、そして、タック機関車33号の急激なスタート、尚又、二つの屍体に与えられた兇器がそれぞれに異つたものである事、等々です。で、ここでひとつ、手近な処から片附けて見ると、二つの屍体に於て異なる兇器が与えられたと言う事實は、先ず、犯人が別々に時を隔てて二人を殺害したか、或は何等かの方法で同時に殺害したか、と言う二様の立場から見ることが出来ます。ところが——、前者は、第二の屍体から流れ落ちた血の雫が、最初の屍体の置かれたと同一のこの地点から始まっている事、そしてこの地点に於ける機関車の停車時間は決して長いものではなかつた事、尚又屍体検査に依る死後時間の一致、等に依つて抹殺されてしまいます。従つて殺害は同時になされた事になります。すると、短い停車時間の間で、殆ど同時に二人の間をそれぞれ異つた兇器で殺害するためには、犯人が二人であるか、或は一人で何等かの特殊な方法に依つたものであるか、と言う二つの岐路に再度逢着します。——ここで私は、もうひとつの謎をこれに結び付けてみる。即ち、あの撥形鶴嘴の柄先の奇妙

な穴を思い出すのです。そして、ひとまず犯人は一人であるとし、その一人の犯人が、二人の殺害に当って必らず^な為さなければならなかったであろう筈の、ラ、クリ、即ち兇器の特殊な使用方法に就いて、今までずっと考え続けていたのです。で、その結果に就いて申上げる前に、一寸駅の方に御注意して置きますが、犯人は、一人でもしかも機関車がこの地点へ来て停車した時に殺害の目的で乗込んだと同様に、犯行後、再びこの場で機関車から離れたのです。つまり、——タンク機関車〇〇号が、西方へ向つてこの地点を急速度で発車した時には、既に犯人は〇〇号に乗っていないなかつたのです」

すると、今まで黙つて喬介の説明を聞いていた助役が、急に吹き出しながら、「そ、そんな馬鹿な事はない。もしもそうとすれば、機関車は独りで疾走^{はし}つて行つた事になる——。と、とんでもない事だ！」

そして心持顎を突出し、眼玉を大きく見開いて、一寸喬介を軽蔑する様にして見せた。が、その顔色は恐ろしく蒼褪^{あおざ}めていた。

四

駅長も、助役と同じ様に喬介の言葉には驚いたらしく、ひどく心配そうに蒼白い

顔をして、亀の子の様に大きなオーバーの中へ首や手足をすくめる様にしていたが、間もなく本屋ほんちやくの方へ歩いて行つた。喬介は、一向平氣に極めて冷淡な語調で、再び助役へ向つた。

「時に、当駅に、73号と同じ形式の機関車はありませんか？」

すると助役は、一寸不機嫌そうに、

「ええ、そりやあ、仕別線路しわけの方には二輛程来てはいますがね。……一体何ですか？」

「実地検証です。是非、一輛貸して頂きたいです。この一番線へ当時の73号と同じ方向に寄越して下さい」

で、助役はケ、テン、顔をしながら出掛けて行つた。

間もなく、2400形式のタンク機関車が、汽笛シンダーから激しい蒸気を洩し、唧子桿ピストン・ロッドや曲柄クランクをガチンガチン鳴らしながら、下り一番線上を西に向つて私達の前までやつて来た。そこで喬介の指図に従つて、路面上の血の滴列の起点の上へ、恰度操縦室キャブの降口の床の端が来る位置に機関車が止ると、喬介は、給水タンクの線路側の梯子を真中頃まで登つて行つて、其処にタンクの横ッ腹から突出している径一糎センチ長さ〇・六米程の鉄棒を指差しながら、下を振向いて助役へ言つた。

「これは何ですか？」

「あ、それは、いま貴下の前に、タンクの開弁装置へ続く長い鎖が下つていて、しよ

う。その鎖の支棒として以前用いられたものです」

「成程。ところで、序ついでにひとつ、その撥形鶴嘴を取つてくれませんか」
で、助役は、顫えながら、その通りにした。

喬介は撥形鶴嘴を受取ると、その柄先の穴を、例の鉄棒の尖さきに充行あてがつてグツと押えた。するとスツポリ填ふさがつて、撥形鶴嘴は鉄棒へぶら下つた。と喬介は、今度は少しづつ梯子を登りながら、撥形鶴嘴の柄を持って先の穴を中心に廻転させ、やがてそれが刃を上にして殆ど垂直に近く立つ処までやると、恰度其処に出ているもう一本別の錆た鉄の支棒の尖さきに、その柄元を一寸引掛けた。そして最後に、開弁装置へ続く鎖の恰度第二の鉄棒に当る位置に縛りつけてある太い、短い、妙に曲つた針金を、同じ鉄棒の中頃へ引つ掛けた。

それらの装置が終ると、喬介は梯子を降りて来て、今度は、規定の位置に停車している機関車の操縦室キャブへ乗り込み、そこから投炭用のスコップを持ち出すと、地面へは降りずに汽罐側のサイド・タンクに沿つて、框フレームの上を給水タンクの梯子と向合う処まで歩くと、ウンと力んで片足を給水タンクの足場へ掛け、機関車と給水タンクとの間へ大の字またがに跨つた。

「さて。これから始めます。先ず私を、この事件に於ける不幸な第一の被害者、土屋良平君と仮定します。そして、タンク機関車33号に給水するため、土屋君は頭上

に恐るべき装置があるとも知らず、この通りの姿勢を執つて、ここにぶら下つてゐるこのズック製の呑口を、こちらの機関車のサイド・タンクの潜口へ向けて充行い、給水タンクの開弁を促すために右掌でこの鎖を握り締めて、この通りグイと強く引張ります——」

喬介は本当に鎖を引張つた。すると撥形鶴嘴は恐ろしい勢で、柄先を中心に半円を空に描きながら、喬介の後頭部めがけて落ちて来た。と、喬介は素速く上体を捻つて、左手に持つていたスコップを、恰度頭の位置へ差出した。

ジーン——鋭く響いて、スコップは私達の前へ弾き落された。私達は一樣にホツとした。……

やがて、見事に検証を終えた喬介が、機関車を帰して、両手の塵を払いながら私達の側へ戻つて来ると、チヨビ髭の助役が、顫え声で、すかさず問い掛けた。

「じゃあ一体、貴方のお説に従うと、犯人は何処から来たのです。道がないじゃあないですか？」

「ありますとも」

「ど、どこです？」

すると喬介は、上の方を指差しながら、

「この給水タンクの屋根からです。ほら。御覧なさい。少し身軽な男だったら、給

水タンク、石炭パイル、ランプ室、それから貨物ホーム——と、屋根続きに何処までも歩いて行けるじゃないですか!!」

——私は驚いた。喬介に言われて始めてそれと気付いたのだが、四つの建物は、高さこそ各々三、四尺ずつ違うが偶然にも一列に密接していて、薄暗い構内に、まるで巨大な貨物列車が停車したかの如く、長々と横わっている。成程これでは、私だって歩いて行けそうだ。

「ところで、犯行前には、雪が降っていたのでしたね」

そう言つて喬介は、給水タンクの梯子を登り始めた。で、司法主任と助役は本線側の梯子を、私は喬介と同じ一番線側の梯子を、それぞれ喬介の後に従つて登つて行つた。

直ぐに私達は、地面から二十呎フイットとないその頂に達した。そして其処の鈍い円錐形の鉄蓋やねの上の、軽く積つた粉雪の表面へ、無数に押し着けられたままの大きな足跡や、掌ての跡や、はては撥形鶴嘴ビーターを置いたり引摺つたりしたらしい乱雑な跡などを発見した。

喬介は直すくに鉄蓋やねの上へ匍はい上つた。——實際こんな処では、匍はつていなければ墜ちてしまう——そして、その上の無数の跡に就いて調べ始めた。

向うの梯子の上では、司法主任と並んで、興奮した助役が、唇を噛み締めながら

喬介の仕草を見ていたが、とうとう堪え兼ねた様に、

「じゃあ、は、犯人は、ここから梯子伝いに機関車へ乗り移り、犯行後そのまま機関車で走り去ったに違いない。ね、走り去ったんでしよう?」

すると喬介は笑いながら、

「何故貴下は、いつまでもそんな風に解釈したがるんですか!! ほら、これを御覧なさい。この足跡は、石炭堆積台の上にうず高く積み上げられた石炭の山から上つて来て、こちらの一番線側の梯子口へ来ていると同時に、逆に、再び戻っているじゃないですか?」

助役は、血走った眼で喬介の指差す方を追っていたが、やがてぶるぶる顫い出すと、あわてて腕時計を覗き込んだ。そして顫える声で、

「失敗しまった……大変なことになったぞ……」

そう言つてそのまま蒼くなつて、大急ぎで梯子を降りて行つた。そして、保線係や日機関庫主任等を捕えて、乗務員なしで疾走し去つた。23号機関車が、その閉塞区間の終点であるN駅で、既に、当然惹き起したであろう恐るべき事故。そして又、そのために一体どんな責任問題が起るか——等々に就いて大騒ぎを始めた。

一方、鉄蓋やねの上の足跡を一心に調べていた喬介は、やがて私と司法主任に向つて、「じゃあ、犯行の大体の径路を、僕の想像に従つて、話して見よう。——先ず、撥形鶴嘴ビイターを持つた犯人は、あの貨物ホームの屋根から、ランプ室、貯炭パイルを伝つて此処へやつて来ると、先刻さつきの実験通り撥形鶴嘴ビイターに依る殺人装置を施して、蝙蝠こうもりの様にその梯子の中途にへバリ着きながら33号のやつて来るのを待つていたのだ。やがて機関車が着くと、素速く梯子から機関車の框フレームへ飛び移つて、乗務員に発見されぬ様に、汽罐の前方を廻つて反対側の框フレームに匍はいつくばつていたに違ひない。一方、機関助手の土屋良平は、そんな事も知らずに給水作業に取掛る。そして、あの恐ろしい機構かくりに引掛つて路面の上へ俯伏うつぶせにぶつ倒れる。すると操縦室キャップにいた井上順三が、何事ならんと驚いて、操縦室キャップの横窓から、半身を乗出す様にして覗き込む。と、そうだ。恰度その時を狙つて、反対側の框フレームに蹲うつすまつていた犯人は、素速く操縦室キャップに飛び込むと、井上順三の背後から、鋭利な短刀様の兇器で、力任せに突刺したんだ。——すると今まで黙つて聞いていた司法主任が急に眉を顰ひそめて、

「じゃあ、つまり貴方は、機関車を動かしたのは、犯人だ、と仰有おっしゃるんですね？」
「無論そうです。この場合、犯人以外には機関車を動かす事は出来なかつた筈です。——従つて犯人は、操縦技術を知つてる男で、犯行後再び機関車からこちらの梯子へ

飛び移る前に、素速く発車槌てつちを起し、加速装置を最高速度に固定したに違いありません。そして給水タンクから貨物ホームへ、屋根伝いに逃げ去りながら、撥形鶴嘴ピーターをパイルとランプ室の間へ投げ捨てて行つたのです。一方、操縦室キャップの床に倒れていた井上順三の屍体は、機関車の加速度と、曲線カーブに於ける遠心力の法則に従つて、あの通りに投げ出されます。だが、ここで問題になるのは、何故犯人は、犯行後、機関車を発車させたか？　と云う点です。が、この最後の疑問を突込む前に、僕は、いまひとつ、新しい発見を紹介しよう」と、それから喬介は明かに興奮を浮べた語調で、「この鉄蓋やねの上を見給え。いま吾々がこうしていると同じ様に、犯人も、必ず此処の上では匍はつて歩いたのです。そしてしかも、あの重い撥形鶴嘴ピーターは、この通り、自分より少しずつ先へ投げ出す様にして運びながら匍ふ進しんしたのです。それにもかかわらず、どうです、犯人の掌ての跡は、右掌だけで、何処を見ても左掌の跡はひとつも無いじゃあないですか。——つまり、犯人は、右手片腕の男です！」

そして、吃驚びっくりしている私達を尻眼に掛けながら、喬介はタンクの梯子を降りて行つた。そして其処で騒いでいた助役を捕えると、

「当駅の関係者で、左手の無い片腕の男があるでしょう？」

「ええッ！——片腕の男!!」

助役は、急にサツと顔色を変えると、物に怖おそけた様に眼を引きつけて、ガクガク

顫えながら暫く口も利けなかった。が、やがて、

「あ、あります」

「誰れですか？」と、喬介は軽く笑いながら、「——それは、多分……」
すると助役は、不意に声を落して、

「え、え、駅長です」

——私は驚いた。

そして、満足そうに煙草に火を点けている喬介を、いつぞ憎々しく思った。が、
流石さすがは司法主任だ。直ちに彼は、数名の部下を督励ほんおとして本屋の駅長室へ馳けつけて
行った。

が——、間もなく司法主任は、興奮しながら飛び帰ると、

「手遅れです。駅長は短刀で自殺しました！」

「自殺?!——失敗しまった」

今度は喬介も一寸驚いた。

可哀想な助役は、機関庫主任と一緒に、転ぶ様にして本屋の方へ馳けつけて行っ
た。

私は、驚きながらも、喬介の興奮の静まるのを待つて、この殺人事件の動機に就
いて、訊ねて見た。すると喬介は、重々しく、

「多分、——復讐だよ」

と、それなり黙ってしまった。

「恰度その時、助役と機関庫主任が、一層興奮してやって来た。そして助役は、喬介へ、

「私は、気狂いになりそうだ！——ともかく、運搬車モーター・カーへ乗って下さい。只今、N駅からの電信に依ると、疾とつくの昔に着いて、と言うよりも、そこで恐るべき衝突事故を起して居る筈の23号が、まだ不着だそうです！……事故は、途中の線路上で起つたのだ！」

で、私達は、早速二番線に置かれてあつた無蓋の小さな運搬車モーター・カーへ乗込んだ。

やがて線路の上を、ひと塊かたまりの興奮が風を切つて疾走し始めた。が、駅の西端の大きな曲線カーブの終りに近く、第二の屍体が警官の一人に依つて見張られている地点まで来ると、急に喬介は立上つて車を止めさせた。そして助役へ、

「23号は、此処わたの互り線わたりせんを経て、下り一番線から下り本線へ移行する筈だったんですか？」

「そうですとも。そして、勿論そうしたに違ひないです」

すると喬介は笑いながら、

「ところが23号は、この互り線を経て本線へ移つてはいないのです！——この屍体

の位置を御覧なさい。もしも3号が、この互り線へ移つたのであつたならば、遠心力の法則が覆えられない限り、屍体はカーブの内側、即ちこの^{ポイント}転轍器の西方へ振落される事は絶対にならないのです。そして、何よりも先ず、こちらの一^{ポイント}番線の延長線上を見て下さい。ほら、互り線と違つて、雪が積つていないじゃあないですか！——とにかく駅長の仕事です。^{ポイント}転轍器の聯動装置ぐらい楽に胡魔化せませすよ。ところで、この先の線路は、何になつていますか？

「車止めのある避難側線です。——もつとも途中の^{ポイント}転轍器に依つて、三^{マイル}哩先の麁港へ続く臨港線に結ばれていますが」

「ふむ。とにかく、出掛けて見ましよう」

そこで^{ポイント}転轍器が切換えられると、私達を乗せた^{モーターカー}運搬車は再び^{はし}疾走り出した。そして、雪の積つていない軌条を追い求める様にして、もうひとつの^{だるまポイント}達磨^{ポイント}転轍器を切換えた私達は、とうとう臨港線の赤錆た六十五封度^{ポイント}軌条の上へ^{はし}疾走り出た。

もう風も静まつて大分白み掛けた薄闇の中を、フル・スピードで^{はし}疾走り続けながら、落ついた調子で、喬介は助役へ言った。

「これで、大体この事件もケリがつきました。で、最後にひとつお尋ねしますが、駅長が片腕になられたのは、いつ頃の事でしたか？」

「半年程前の事です。——何でもあれば、入換作業を監督している際に、誤つて機

機関車に喰われたのです」

「ふむ。では、その機関車の番号を、覚えておられますか？」

すると助役は、首を傾^かげて、一寸記憶を呼び起す様にしていたが、急にハツとなると、見る見る顔を引き歪^ひめながら、低い、嘎^{しゃ}がれた声で、呻く様に、

「ああ。——2400形式・73号だー」

それから数分の後——

荒れ果てた廃港の、線路のある突堤^{ピヤ}埠頭^トの先端に、朝の微光を背に受けて、凝然と立竦^{すく}んでいた私達の眼の前には、片腕の駅長の復讐を受けた「 ∞ 」号を深々と呑み込んだドス黒い海が、機関車の断末魔の吐息に泡立ちながら、七色に輝く機械油を、
当^{あて}もなく広々と漂わしていた。

〔「新青年」昭和九年一月号〕

銀座幽霊

みち幅三間げんとない横町の両側には、いろとりどりの店々が虹のように軒をつらねて、銀座裏の明るい一団を形づくっていた。青いネオンで「カフェ・青蘭せいらん」と書かれた、裏露路にしてはかなり大きなその店の前には、恒川つねかわと呼ぶ小綺麗な煙草店があった。二階建て間口二間けん足らずの、細々と美しく飾りたてた明るい店で、まるで周囲の店々から零れおちるジャズの音を掻きあつめるように、わけもなくその横町の客を一手に吸いよせて、ぬくぬくと繁昌はんしょうしていた。

その店の主人というのは、もう四十をとづくに越したららしい女で、恒川房枝ふさえ——女文字で、そんな標札がかかっていた。横町の人びとの噂によると、なんでも退職官吏の未亡人ということで、もう女学校も卒業おするような娘が一人あるのだが、色の白い肉づきの豊かな女で、歳にふさわしく地味なつくりを装ってはいるが、どこかまだ燃えつきぬ若さが漲みなぎっていた。そしていつの頃からか、のツペリした三十からみの若い男が、いり込んで、遠慮深げに近所の人びとと交際つきあうようになっていた。けれども、酔い痴しれたようなその静けさは、永くは続かなかつた。煙草店が繁昌して、やがて女中を兼ねた若い女店員が雇われて来ると、間もなく、いままで穏かだった二人の調和が、みるみる乱れて来た。澄子すみこと呼ぶ二十を越したばかりのその女店

員は、小麦色の血色のいい娘で、毬まのようにはずみのいい体を持っていた。

煙草屋の夫婦喧嘩を真ッ先にみつけたのは、「青蘭」の女給達だった。「青蘭」の二階のボックスから、窓越しに向いの煙草屋の表二階が見えるのだが、なにしろ三間と離れていない街幅なので、そこから時どき、思いあまつたような女主人のわめき声が、聞えて来るのだった。時とすると、窓の硝子扉ガラスドアへ、あられもない影法師のうつることさえあつた。そんな時「青蘭」の女達は、席をへだてて客の相手をしていながらも、そつと顔を見合せては、そこはかとなし溜息をつく。ところが、そうした煙草屋の不穏な空気は、バタバタと意外に早く押しつめられて、ここに、至極不可解きわまる奇怪な事件となつて、なんとも気味の悪い最後にぶつかつてしまつた。そしてその惨劇の目撃者となつたのは、恰度ちやうどその折、「青蘭」の二階の番に當つていた女給達だった。

それは天気工合からいつても、なにか間違いの起りそうな、変な気持のする晩のこと、宵の口から吹きはじめた薄ら寒い西の風が、十時頃になつてふツと止まつてしまふと、急に空気が淀とんで、秋の夜とは思われない妙な蒸暑さがやつて来た。いままで表二階の隅の席で、客の相手をしていた女給の一人は、そこで腰をあげると、ハンカチで襟元あおを煽おほりながら窓際によりそつて、スリ硝子ガラスのはまつた開き窓を押しあけたのだが、何気なく前の家を見ると、急に悪い場面ヒコでも見たように顔をそむけ

て、そのまま自分の席へ戻り、それから仲間達へ黙って眼で合図を送った。

煙草屋の二階では、半分開けられた硝子窓ガラスの向うで、殆んど無地とも見える黒っぽい地味な着物を着た、色の白い女主人の房枝が、男ではない、女店員の澄子を前に坐らせて、なにか頻りに口説きたてていた。澄子は、いちいち頷うなずきもせず、黙ってふくれッ面をして、相手に顔をそむけていたのだが、黒地に思い切り派手な臙脂色の井桁模様いげたを染め出した着物が今夜の彼女を際立って美しく見せていた。けれども房枝は、直ぐに「青蘭」の二階の気配に気づいてか、キツと敵意のこもった顔をこちらへ向けると、そそくさと立上って窓の硝子戸ガラスをぴしやりと締めてしまった。ジャズが鳴っていてかなり騒々しいのに、まるでこちらの窓を締めたように、その音は高く荒々しかった。

女給達は、ホツとして顔を見合せた。そして互に、眼と眼で囁き交した。

——今夜はいつもと違ってよ。

——いよいよ本式に、澄ちゃんに喰ってかかるんだ。

まったく、いつもと変っていた。無闇と喚き立てず、黙ってじりじり責めつけているらしかった。時折、高い声がしても、それは直ぐに辺りの騒音の中に、かき消されてしまった。十一時を過ぎると、母親に云いつけられたのか女学校へ行っている娘の君子が、店をしまつて、ガラガラと戸締りをしはじめた。煙草屋は、十一時

を打つといつも店をしまう。ただ売台の前の硝子戸ガラスに小さな穴のような窓が明いて、そこから晚い客に煙草を売ることが出来るようになってあつた。達次郎たつじろう——それが房枝の若い情人おとこの名前だつたのだが、この男も、どうしたのか、今夜は店先へも顔を出さなかつた。

——確かに今夜は深刻だよ。

——達次郎と澄ちゃんの間、とうとう証拠を押えられたんかな。

女給達は、再び眼と眼で囁き合うのだった。けれどもやがて辺りがどんどん静かになつて来て、四丁目の交叉点をわたる電車の響が聞えるようになる頃には、もうカンバンを気にしだした彼女達は煙草屋を忘れて、宵のうちからトラになっている三人組の客を追い出すことに腐心していた。惨劇のもち上つたのは、恰度この時のことだつた。

最初、泣くとも呻くとも判らない押しつぶしたような低い悲鳴が、さっきのままで榮螺さざえの蓋のように窓を締められたまま電気のもつていた煙草屋の二階のほうから聞えて来た。

「青蘭」の女達は、期せずして再び顔を見合した。が、直ぐに同じ方角からなにか人間の倒れるような音がドウと聞えて来ると、ハツとなつた女達は顔色を変えて立上り、身を乗りだすようにして窓越しに向いの家を覗きみた。

煙草屋の二階の窓には、その時、たじたじとよろめくような大きな人影がうつつたかと思うと、ゆらめきながらその影法師はジャリーンと電気にぶつかり、途端に部屋の中が真ッ暗になった。が、直ぐにそのままよろめく気配がして表の硝子窓ガラスによろけかかり、ガチャンと云う激しい音と共にその窓硝子の真ん中にはまった大きな奴が破れおちると、そこから影法師の主の背中が現れた。

殆んど無地とも見える黒っぽい地味な着物を着た、うなじの白いその女は、われた窓からはみ出した右手に、血にまみれた剃刀らしい鋭い刃物を持ち、背中を硝子ガラス戸にもたせかけたまま、はげしく肩で息づきながらそのまましばらく呆然と真ッ暗な部屋の中をみつめていたが、すぐに「青蘭」の窓際の人の気配に気づいてか、チラッと振り返るようにしながら再びよろよろと闇の中へ掻き消えてしまった。真ッ蒼さおで、歪んだ、睨みつけるような顔だった。

「青蘭」の窓際では、「ヒヤーツ」と女給達の悲鳴があがった。泣き出しそうなおおる声も混った。が、女達の後ろから同じように惨劇を目撃していた三人組の客達は、流石男さすがだけに、すぐに馳けだしてもものも云わずにドタドタと階段を馳けおると、階下で遊んでいた客や女に、

「大変だ！」

「人殺しだ！」

と叫びながら表に飛び出して行った。そのうちの一人は交番へ飛んでいった。あとの二人がすっかり酔もさめはててうろろうろしていると、その時、煙草屋の店の中からバタバタ音がして、激しくぶつかるようにゴジゴジと慌しく戸をあけて、桃色のタオルの寝巻を着た娘の君子が飛び出して来た。そしてもう表に飛び出してうろろしていた男や女を見ると、誰彼のみさかいかもなく、

「澄ちゃん、誰かに殺されてるよう！」

泣声で、喚きたてた。

間もなく警官達がやって来た。

殺されていたのは、やっぱり澄子だった。電気の破れ消えた真ッ暗な部屋の中に、さつき「青蘭」の女達の見たときのままの、派手な臙脂えんじの井桁模様の着物を着て、裾を乱して仰向きにぶつ倒れていた。最初、懐中電燈を持って飛び込んで来た警官の一人は、倒れた澄子の咽喉のどがヒューヒューと低く鳴っているのを聞きつけると、直ぐに寄りそって抱き起したのだが、女は、喘ぎながら、

「……房……房枝……」

と蚊細い声で呻いたまま、ガツクリなってしまうた。

咽喉のど元へ斬りつけられたと見えて、鋭い刃物の創きずが二筋ほどえぐるように引ッ掻かれていた。あたり一面の血の海だ。その血の池の端のほうに、窓に近く血にまみ

れた日本剃刀が投げ捨てられていた。

問題の房枝は、もう人びとが駈けつけた時には、家の中には見当らなかつた。房枝だけではない。達次郎もいなかつた。ただ、娘の君子だけが、二階へも上れずに、青くなつて店先でガタガタと顫えていた。

「青蘭」の女達は、さつきから自分達の見ていた全部の出来事を、簡単にかいつまんで、だがひどく落つきのない調子で、警官に申立てた。例の三人組も、その申立てを裏書きした。この証人達の申立てと云い、被害者の残した断末魔の言葉といい、早くも警官は事件の大体を呑み込んで、早速房枝の捜査にとりかかつた。

煙草屋の二階には、殺人の行われた部屋の他に、裏に面した部屋と、間の部屋と、都合二部屋あつた。が、その二部屋ともに房枝の姿は見えなかつた。階下には、店の他に、やはり二部屋あつた。が、むろん房枝は見当らない。表には、もう十一時から戸締りがしてある。警官達が崩れ込んだ前後にも、そこから逃げ出す隙はなかつた。そこで彼等は、台所へ押掛けた。そこはこの家の裏口になつていて、幅三尺位の露次が、隣に並んだ三軒の家の裏を通つて、表通りとは別の通りへ抜けられるようになっていた。その露次を通り抜けて街へ出たところには、しかし人の好きそうな焼鳥屋が、宵から屋台を張つていた。焼鳥屋は頑固に首を振つて、もう二時間も

三時間も、この露次から出入ではいりした者はない、とハッキリ申立てた。そこで警官は引返すと、今度はいよいよガタピシと煙草屋の嚴重な家宅捜査をしはじめた。そして、便所でも押入でも、片ツ端から容赦なしに捜して行くうちに、とうとう二階の、それも当の殺人の行われた部屋の押入の中に、房枝をみつけてしまった。

ところが、真ッ先にその押入の唐紙からみをあけた警官は、あけるが否いなや、叫んだ。「や、や、失敗しまった！」

押入の中で、もう房枝は死んでいた。

さつきに「青蘭」の女達が見たときのままの、殆んど無地とも見える黒っぽい地味な着物を着て、首に手拭を巻いて、それで締めたのか、締められたのか、グンナリなつて死んでいた。血の気の引いた真ッ蒼さおな顔には、もう軽いむくみが来ていたが、それが房枝である事は間違まちがいなかった。娘の君子は、警官に抱かき制とめられながらも、母親の変りはてた姿へおいおいと声をあげて泣きかけていた。

いままで警官の後ろからコツソリ死人を覗き込んでいた例の三人組の一人が、黄色い声でいった。

「ああ、この死人ひとですよ。あつちの、派手な着物を着た方の女を、剃刀で殺したのは、この女です」

すると上役らしい警官が乗り出して、大きく頷うなっていたが、やがていった。

「——つまり、なんだな、あの澄子という女を殺してから、この房枝は、暫く呆然として立竦たちすくんどったが、「青蘭」の窓から、君達に見られとったと知ると、急に正気に戻って……さりとて階下したへおりるのは危険だから、ひとまずよろよろと押入の中へ隠れ込んだ……が、そうしているうちにも、いよいよ自責と危険に責められるにつれ、堪えられなくなつてとうとう自殺した……ふむ、まずそんな事だな」

警官はそう云つて、桃色の寝巻のまま泣きじやくっている君子のほうへ、手帳を出しながら身を屈めた。

ところが、それから間もなく検判事と一緒に警察医が現場へ出張して来て、本格的な調べが始まり、やがて房枝の検屍にかかると、俄然、なんとも奇怪至極な、気味の悪い事実が立証されて来た。

それは、房枝が澄子を殺したのであるから、当然房枝は、澄子よりあとから死んだわけであつて、澄子より先に死んでいる筈はないのであるが、それにもかかわらず、まだ澄子の死体にはほのかに生気が残つており体温もさめ切つていないというのに、房枝の死後現象はかなりに進行していて、冷却や屍固しこ、屍斑等々のあらゆる条件を最も科学的に冷静に観察した結果、確実に最少限一時間以上を経過している、と医師が確固たる断定を下したのだった。

「そ、そいつアおかしいですね……」と先程の警官がメンクラツて云つた。「そうす

ると……いや、飛んでもないことだ……つまり、もう澄子が殺されてから二十分位になります、房枝が死後一時間と云うと、澄子が殺されたより四十分くらい前に、被害者より先に、加害者が死んでいた——ってことになりますよ。……逆に考えると、澄子が断末魔に残したあの『房枝』ってのも、それから大勢の証人達が見たと云う剃刀を振廻していたその『房枝』ってのも、それは本物ではなく、もうその時にはとづくに死んでいた房枝……飛んでもない……房枝の幽霊ってことになりますよ。幽霊の殺人!?!……それも銀座の、ジャズの街の真ん中で、幽霊が出たんだから、こいつア新聞屋にやア大受けだがね……」

二

事件は、俄然紛糾しはじめた。警官達は大きな壁にでもぶつかつた思いで、ハタと行き詰ってしまった。しかも、問題が二つに分れて来た。死人が二人になった。そのうちの一人は、幽霊に殺され、他の一人は、死んでから、幽霊になってふらふらと人を殺しに出掛けたことになる。なんとという奇怪な話だろう。

しかし、このまま踏みとどまっていることは出来ない。警官達は直ぐに気を取りなおして、再び調査にとりかかった。

まず、あとから殺された澄子のほうは、ひとまず後廻しにして、とりあえず房枝の死について調べ始めた。

——いったい房枝は、自殺したのか？ それとも他殺か？

けれどもこの疑問に対しては、警察医は、縊死とは違って、自分から手拭で首を締めて死ぬなどと云うことは、仲々出来ないと言う理由で、他殺説を主張した。判検事も、警官も、大体その意見に賛成した。そして階下の店の間を陣取って、いよいよ正式の訊問が始まった。

まず、娘の君子が呼び出された。母親を失った少女は、すっかりとり乱して、しゃくりあげながら次のような陳述をした。

その晩、母の房枝は、君子に店番を命ずると、澄子を連れて表二階へあがって行った。それが十時頃だった。君子は、その時の母の様子がひどく不機嫌なのを知ったが、よくある事で大して気にもとめず、雑誌など読みながら店番をしていたが、十時になると、学校へ行くので朝早いためすっかり睡ねむくなってしまい、そのままいつものように店をしまつて裏二階の自分の部屋へ引きとり、睡ってしまった。二階の階段を登った時には、表の部屋からは話声は聞えなかった。が、君子にとつては、それは疑いを抱かせるよりも、妙に恥かしいような遠慮を覚えさしたと云うのだった。ところが、しばらくうとうととしたと思うころ、表の部屋のほうで、例の悲鳴

と人の倒れる音を聞いて眼を醒し、しばらく寢床の中でなんだろうと考え考え迷っていたが、急に不安を覚えだすと、堪えられなくなつて寢床から抜け出し、表の部屋へ行つて見たのだが電気が消えていたのでいよいよ不安に胸を躍らせながら、間の部屋に電気をつけてその唐紙をそおつとあけて表の部屋を覗きみた。そしてその部屋の真中に澄子が倒れているのをみつけるとそのまま声も上げずに転ぶようにして階下へ駆けおり、表の戸をコジあけるようにして人々に急を訴えたのだ——大體そんな陳述だった。

「表の部屋を覗いた時に、窓のところにお母さんが立っていないかつたか？」

警官の問に君子は首を振つて答えた。

「いいえ、もうその時には、お母さんはいませんでした」

「それで驚いて階下へ降りた時に、お母さんがいないのを見ても、別に不審は起らなかったのか？」

「……お母さんは、時どき夜晩くから、小父さんと一緒にお酒を飲みに行かれますので、また今夜も、そんな事かと思つて……」

「小父さん？　小父さんと云つたね？　誰れの事だ？」

警官は直ぐにその言葉を聞きとがめた。そこで君子は、達次郎のことを恐る恐る申立てた。そしてピクピクしながらつけ加えた。

「……今夜小父さんは、お母さんよりも先に、まだ私が店番をしている時に出て行きました……でも、裏口はあけてありますので、途中で一度帰って来たかも知れませんが、私は眠っていたので少しも知りませんでした」

「いったい何処へ、飲みに行くのかね？」

「知りません」

そこで係官は、直ぐに部下を走らせて、達次郎の捜査を命じた。そして引続いて、「青蘭」の女給達と、例の三人組が、証人として訊問を受けることになった。

証人達は、いちばん始めに申立てた事をもう一度繰返した。しかしむろんそれ以外に、なにも新しい証言は出来なかった。ただ、君子の申立が、自分達の見ていたところと一致していることと、それから達次郎のことに關して、女給達が、君子の知っていた程度のことを申立てただけだった。

そこで訊問が一通り済むと、大体房枝の殺された時刻が判つて来た。つまり、「青蘭」の女給達に見られて、澄子と対座していた房枝が、荒々しく窓の硝子戸ガラスを締め、あの時から、十一時頃までの間に殺された事になる。そうすると、君子の証言が正しい限り、その間達次郎は家にいなかったではないか？ しかし、君子が店番をしている間に、そつと裏口から忍び込んで二階に上り、房枝を絞殺して再び逃げ去った、と見る事は出来ないだろうか？ いずれにしても、これは達次郎を調べな

いことには判らない。

その達次郎は、しかしそれから間もなく、警官の手にもかからずにふらふらと一人て帰つて来た。なにがなんだか、わけのわからぬ顔つきで、問わるるままにへどもどと答えていった。

それによると、達次郎は、十時からいままで、新橋の「鮭八」というおでん屋で、なにも知らずに飲み続けていたということだった。直ぐに警官の一人が「鮭八」へ急行した。が、やがて連行されて来た「鮭八」の主人は、達次郎を見ると、直ぐに云つた。

「ハイ、確かにこちら様は、十時頃からつい先刻まで、手前共においてになりました。……それはもう、家内も、他のお客さんも、ご存知の筈でございます……」

係官は、ガツカリして、「鮭八」を顎で追いやつた。

達次郎にはアリバイが出て来た。さあこうなると、捜査はそろそろ焦り気味になつて来た。表には君子が番をしていたし、裏口には、出たところで焼鳥屋が、誰も通らなかつたと頑張っている。表二階の窓は「青蘭」の二階から監視されていたし、裏二階の君子の部屋の窓には内側から錠が下ろしてあつた。よしんば錠が下してなかつたとしても、その窓の外には、台所の屋根の上に二坪ほどの物干場があり、その周りには嚴重な針金の忍返がついている。尚又、裏口から焼鳥屋のいた横の通り

へ通ずる露次に面した隣り三軒の家々も、念のため調べて見れば、どの家も露次に面した勝手口には宵から戸締りがしてあり、怪しいふしは見当らない。すると、房枝の殺された頃に、煙草屋のその密室も同様な家の中にいたのは、後から殺された澄子と、店番をしていた君子の二人だけになる。

いまはもう、どう考えてもこの二人を疑うより他に道がない。そこで早速、君子がまず槍玉にあがった。しかし、もうここまで来ると、舞台が狭くなって、始め房枝を殺した犯人を捜すつもりの推理が、澄子の奇怪な殺害事件と重り合かさなつて来て、まるで変テコなものになってしまふのだった。例えば、もしも君子が、少からず無理な考え方だが、とにかくひとまず母親の房枝を殺したことにする。するともう房枝は死んでしまったのだから、そのあとから澄子を殺しに出掛けるのは妙だ。そこで今度は、澄子が房枝を殺した事してみる。しかしこれも前と同じように、殺された房枝があとから澄子を殺しに出掛けるのは妙だ。——結局、とどのつまりは、澄子の奇怪な殺害事件に戻つて来るのだった。そして係官達は、いよいよ幽霊の殺人事件に、真正面からぶつかつて行くより方法がなくなつてしまった。皆んなムキになつて頭をしぼつた。

——まず、澄子が殺された頃に、煙草屋のその密室も同様な家の中にいたのは、もう澄子より先に殺されていた房枝と、裏二階の部屋で寝に就いていたと云う君子

との二人になる。が、なかなか幽霊を信じることの出来ない警官達は、「青蘭」の窓から証人達が澄子を殺した房枝を見たと言つても、それはチラツツと見ただけで、その顔が確かに房枝のものであつたかどうかは誰もハッキリ云い得ず、ただ黒い無地の着物を着ていたことだけが一致した証言だつたのだから、これは房枝などが澄子を殺しに出掛けたのではむろんなく、君子が、母の房枝の着物を着て澄子を殺し、あとから桃色の寝巻に着換えた、と見てはどうか？

しかしこの意見は、直ぐに破れてしまつた。現場の窓から、殺人の直後にふらふらと房枝らしいその姿が消えてから、「青蘭」の連中が表へかけつけ、そこで寝衣ねまきを着た君子にぶつかるまでに、殆んど三分位しか時間が無い。その間に君子が着ていた母の着物を脱いで、それを再び母の死骸へ着せるなぞと云うことは到底出来つこない。

では、母の着ていた着物ではなしに、他の同じような黒っぽい、三、四間けん離れたら無地に見えそうな地味な着物を着て、芝居を打つたとしたらどうなる？ これは出来そうなことだ。そこで警官達は、煙草屋の徹底的な家宅捜査を行った。ところが、そのような着物は、わずかに筆筒ひつだんの抽斗ひきだしから房枝のものが二、三枚出て来ただけであつたが、しかしそれは皆、虫除け薬を施してキチンと文庫紙の中に畳みこんであつて、とうてい三分や四分の早業でそうと出来るものではない事が判つた……

いや、それでなくなつて、もしも君子が犯人であつたとしても、それならば澄子が死際に残した房枝の名前はいつたいどうなる……どう考えたつて、澄子を殺したのは、君子なぞではありつこない……。

警察は、とうとうその夜の捜査を投げ出してしまった。

翌日になると、果して新聞は一斉に幽霊の出現説をデカデカと書き立てた。警察は、ヤツキになつて、前と同じようなことを、蒸し返し調べた。新しい収獲と云えば、兇器に使われた例の剃刀を鑑識課へ廻した結果、その剃刀は柄が細くてハッキリした指紋が一つも残っていない事と、達次郎を引立てて調べた結果、達次郎がいつの間にか澄子と出来合つていて、そのために家の中が揉め合つていた事なぞが、判明したに過ぎなかつた。

ところが、そうして警察が五里霧中の境を彷徨さまよいはじめようとするその日の夕方になつて、ここに突然奇妙な素人探偵が現れて、係りの警察官に会見を申し込んで来た。

それは、「青蘭」の支配人パー・テンで、西村にしむらと名乗る青年だつた。ガリガリベルを鳴らして、せわしげに電話を掛けてよこした。

「……もしもし、警部さんですか。私は『青蘭』のパー・テンですが、幽霊の正体が判りました。澄子さんを殺した幽霊犯人の正体が、判つたんですよ……今晚こち

らへお出掛け下さいませんか？……ええ、その折お話しいたします……いや、幽霊をお眼に掛けます……」

三

「青蘭」の二階へ、部下の刑事を一人連れてその警部がやって来た時には、もう辺りはとつぷり暮れて、昨夜の事件も忘れたように、横町は明るく、ジャズの音に溢れていた。が、流石に物見高い市中のこととて、煙草屋の前には、弥次馬らしい人影が、幾人もうろうろしていた。「青蘭」には、階上にも階下にもかなり客が立てこんでいて、それがみんな煙草屋の幽霊の噂をしているのだった。

白い上着に蝶ネクタイを結んだ西村支配人は、愛想よく警部達を迎え、二階へ案内すると、表の窓際に近い席をすすめて、女達に飲物を持って来させたりした。が、警部は最初から苦り切っていて、ろくに口もきかず、胡散臭げに支配人のすることな為すことを、ジロジロ覗うかがっていた。

窓越に見える直ぐ前の煙草屋の二階には、死体はもう解剖のために運ばれて行ったので、普段と変かわりなく、スリ硝子ガラスのはまったその窓には、電気が明るくもつていた。

「実は、なんです」支配人パーテンが口を切った。「……下手に御説明上げたりするよりは、いつそ実物を見て頂いたほうが、お判り願えると思ひまして」

「いったい君は、何を見せるつもりなんだね？」

警部が、疑い深げに問返した。

「ええ、その……私のみつけ出した、幽霊なんですが」

すると警部は遮切さえぎるようにして、

「じゃア君は、もう澄子を殺した犯人を、知っていると云うんだね？」

「ええ大体……」

「誰なんだね？ 君は現場を見ていたのかね？」

「いいえ、見ていたわけではありませんが……あの時には、もう房枝さんは殺されていたんですから、あとには二人しかいないわけです……」

「じゃア君子が殺したとでも云うんかね？」

警部は嘲けるように云った。

「いいえ違いますよ」支配人パーテンは烈しく首を振りながら、「君ちゃんは、もう貴方あなたがたのほうで、落第になつてるじゃアありませんか」

「じゃアもう、誰もないぜ」

警部は投げ出すように反そりかえった。

「あります」と西村青年は笑いながら、「澄ちゃんがあるじゃアないですか」

「なに澄子？」

「そうです。澄子が澄子を殺したんです」

「じゃア自殺だつて云うんか？」

「そうですよ」とここで西村君は、ふと真面目な顔をしながら、「皆んな、始めっから、飛んでもない感違いをしていたんですよ。死んでしまった後から発見みつけたんなら、こんなことにもならなかったでしょうが、なんしろ、自分で自分の笛を掻き切つて、もがき死にするところを、その藻掻もき廻るところだけを見たもんですから、自殺の現場を、他殺の現場と感違ひしてしまつたんですよ。……私の考えでは、恐らく房枝さんを殺したのも、澄子だと思ふんです。つまり、昨晚あの時の房枝の折檻が、痴話喧嘩になり、揚句の果てに房枝を絞め殺してしまつた澄子は、正気に返るにつれて、自分のしでかした逃れることの出来ない恐ろしい罪を知ると、ひとまず房枝の死体を押入に隠して……これは多分、十一時になつて君子が二階へ上つて来る危険を覺えたからでしょうか……それから悶々として苦しんだ揚句、とうとう自殺してしまつたんでしよう。つまり、最初あの房枝の死体のみつかつた時に、貴方がたのお考えになつた事の逆になるわけです。だから、あの断末魔の澄子が、房枝の名を呼んだと云うのも、自分を殺した人の名を呼んだのではなくて、自分が殺して

しまった人の名を、悔悟にかられて叫んだ、とまあ、そう私は考えるんですよ」

「冗談じゃアないぜ」警部がとうとう吹き出してしまった。「すると君は、あの時、ホラそこにいる女給さん達が見た、あの無地の着物を着て、剃刀を持って、ガラス窓によろけかかった女を、房枝ではなく澄子だと云うんだね？……飛んでもない、それこそ感違いだよ。いいかい。まず第一、着物のことを考えて見たまえ。房枝はあの通り地味な着物を着ていたし、澄子は、あの通り派手な着物を着ていたし……」

「お待ち下さい」支配人バーテンが遮切った。「つまり、そこんとこですよ。幽霊が出たと云うのはね……もう仕度が出来たと思いますから、これからひとつ、その幽霊の正体をみて頂こうと思いますが……」とむっくり起き上りながら、「……まだお判りになりませんか？ 銀座の真ん中に出た幽霊の正体が……これはしかし、あの事件の起きた時の様子や、家の構えなどを、よく考えて見れば、誰にでも判ると思うんですが……」

支配人バーテンはそう云つて、意地悪そうに笑うと、呆気あっけにとられている警部達を残して、階下したへ降りて行った。が、直ぐに自転車用の大きなナショナル・ランプを持って引返して来ると、窓際に立つて警部へ云った。

「じゃア幽霊をお眼に掛けますから、どうぞここへお立ち願います」

警部は脹れ面はくをして、支配人バーテンの云う通り窓際へ立った。いままで、遠慮して遠巻

にしていた女給や客達も、この時ぞろぞろと窓の方へ雪崩れよつて来た。支配人が云つた。

「お向いの窓を見て下さいよ」

三間ばかり前のその煙草屋の二階の窓には、その時はまだ前と同じように静かに灯がともつていたのだが、やがてその部屋の中に人の気配がすると、窓硝子へ人影がうつつた。

こちらの人びとは、何事が始まるだろうと思わず身を乗り出すようにして見詰めていると、窓の影法師は大きくゆらめいて、手を差しのべ、途端にパツと電燈が消えた。

「いいですか。あの時は影法師の主が、ゆらめいた途端に電気にぶつかつて、やはりこんな風に暗くなつたんですね」

しかし支配人のその言葉の終らぬうちに、向いの窓が、内側からガラガラつとあけられると、そこから、昨晚人びとの見たと同じような、殆んど無地とも見える黒っぽい地味な着物を着た女の後姿が、白いうなじを見せて暗の中にポツカリ現れた。途端に支配人が、持つていたナショナル・ランプの光を、その女の背中に投げかけた。と、なんと今まで、殆んど無地とも見える黒っぽい着物を着ていた年増女の姿が、不意に、黒地に思い切り派手な臙脂の井桁模様を染めだした着物を着た、若い

娘の姿に変わってしまった。

「君ちゃん。ありがとう」

支配人パー・テンが、向うの窓へ呼びかけた。すると窓の女は、静かにこちらを向いて淋げに微笑んだ。君子の顔だった。

「ご覧になったでしょう。……いや、君子さんと、あの着物は、ちよつとこの実験のために拝借したんですよ」

支配人パー・テンはそう云つて振り返ると、呆氣にとられている警部の顔へ、悪戯いたずらそうに笑いかけながら、再び云つた。

「まだ、お判りになりませんか?……じゃア、申上げましょう。……いいですか、こう云う事を一寸考ちよつとえて見て下さい。例えばですね、赤いインキで書いた文字を、普通の色のないガラスで見ると、ガラスなしで見ると同じように赤い文字に見えるでしょう? しかし、同じように赤いインキで書いた文字を、今度は赤いガラスを通して見ると、赤い文字は何も見えませんよ。……恰度、あの写真の現像をする時にですね……私は、あれが道楽なんですが……赤い電気の下で、現像に夢中になってみると、不意に、直ぐ自分の横へ確かに置いた筈の赤い紙に包んだ印画紙めんどらが、どこかへ消えてしまって、すっかり面喰めんぐらつてしまうことがよくありますね。びっくりして手探りで探してみると、チャーソンとその何にも見えないところで手答てたずえがあつたり

して……ええ、あれと同じですよ。ところが、今度はその赤いガラスの代りに、青いガラスを通して赤インキの文字を見ると、前とは逆に、黒く、ハッキリと見えましよう?……」

「ふム成る程」警部が云った。「君の云うことは、判るような、気がする、がしかし……」

「なんでもないですよ」と西村支配人パーテンは笑いながら続けた。「じゃ、今度は、その赤インキの文字を、紅色の、えんじ臙脂色の、派手な井桁模様の着物と置き換えてみましよう。すると、普通の光線の下では、それは臙脂の井桁模様に見えましよう? ところが、いまの赤インキの文字の例と同じように、一旦青い光線を受けると、その臙脂の井桁模様は暗黒い井桁模様になってしまいます。黒い井桁模様になっただけならいいんですが、その井桁模様の染め出された地の色が黒では、黒と黒のかち合いで模様もへちまもなくなってしまう、黒い無地の着物とより他に見えようがありません」

「しかし君。電燈は消えたんだぜ」

「ええそうですよ。あの部屋の中の普通の電燈が消えたからこそ、一層私の意見が正しく現れたんです」

「じゃア、青い電燈が、その時いつの間についたんかね?」

「え？ そいつア始めつからついてたですよ。その時にパツとついたらたんでしたなら、誰にだつて気がつきますよ。つまり、その時に青い電燈が始めてついたたんでなく、向うの部屋の普通の電燈が消えた時に、始めていまままでついていた青い電燈が、ハッキリ働きかけたんです。だから、この窓にいた人たちは、少しも気づかなかつたんですよ」

「いったいその、青い電燈はどこについてたんです」

「いやもう、皆さんご承知の筈じゃありませんか！」

警部はこの時、ハツとなると、支配人パーテンの言葉を皆まで聞かずに窓際へかけよつた。そして窓枠へ手を掛け足を乗せると、外へ落ちてしまいそうに身を乗り出して、上の方を振仰いだが、直ぐに、「ウム、成るほど！」と叫んだ。

「青蘭」のその窓の上には、大きく「カフェ・青蘭」と書かれた青いネオン・サインが、鮮かに輝いているのだった。

「しかし、それにしても、よくまあこんな事に気がついたね？」

あとでビールを奢りながら、警部は支配人パーテンにこう尋ねた。若い支配人パーテンは、急にてれ臭そうに笑いながらいった。

「いや、なんでもないですよ。……第一私なぞ、こんな幽霊現象なら、いつもちよつとしたやつを見て暮しているんですからね」と女給達のほうを顎でしゃくりながら、

「この連中、昼と夜では、同じ着物もまるで違っちゃまうんですからね……これも一種の、銀座幽霊ですよ……」

（「新青年」昭和十一年十月号）

坑鬼

室生岬の尖端、荒れ果てた灰色の山の中に、かなり前から稼行を続けていた中越炭礦会社の滝口坑は、ここ二、三年來めきめき活況を見せて、五百尺の地底に繰り掘られた黒い触手の先端は、もう海の底半哩マイルの沖にまで達していた。埋蔵量六百万噸——会社の事業の大半はこの炭坑一本に賭けられて、人も機械も一緒くたに緊張の中に叩ツ込まれ、きびしい仮借のない活動が夜ひるなしに続けられていた。しかし、海の底の炭坑は、いかなる危険に先んじて一步地獄に近かった。事業が繁栄すればする程地底の空虚は拡大し、危険率は無類の確實さを以つて高まりつつあった。人々は地獄を隔てたその薄い命の地殻を一枚二枚と剥がして行つた。

こうした殆んど狂気に近い世界でのみ、始めて領かれるような狂暴奇怪な形をとつて、異変が滝口坑を見舞つたのは、まだ四月にはいったばかりの寒い頃のことであつた。地上には季節の名残りが山々の巒むたに深い雪をとどめて、身を切るような北国の海風が、終日陰気に吹きまくつていようと云うに、五百尺の地底は、激しい地熱で暑さに蒸せ返っていた。そこには、一糸も纏まとわぬ裸の世界があつた。闇の中から、臍へそまで泥だらけにして鶴嘴つるはしを肩にした男が、ギロツと眼だけ光らして通つたかと思つと、炭車トロを押して腰に緋かすりの小切れを巻いた裸の女が、魚のように身をくねらして、

いきなり飛び出したりした。

お品おしなと峯吉みねきちは、こうした荒々しい闇の世界が生んだ出来たての夫婦であった。どの採炭場キリハでもそうであるように、二人は組になつて男は採炭夫さやまを、女は運搬夫あとむきを受持った。若い二人は二人だけの採炭場キリハを持つていた。そこでは又、小頭の眼のどにかぬ闇が、いつでも二人を蜜のように押し包んだ。けれども例外ということの認められないこの世界では、二人の幸福も永くは続かなかつた。

それは流れ落ちる地下水の霧を含んだ冷い風が、いやに堅坑の底まで吹き降ろして来る朝のことであつた。

二枚目の伝票を受取つたお品は、捲立まきたての底で空からになつて降ろされて来た炭車トロを取ると、そのまま長い坑道を峯吉キリハの採炭場へ歸つて行つた。炭坑は、謂いわば黒い息づく地下都市である。二本の堅坑で地上と結ばれた明るい煉瓦巻の広場にはポンプや通風器の絶え間ない唸りに、技師のT型定規や監督の哄笑が絡まって黒い都市の心臓がのさばり、そこから走り出した太い一本の水平坑は謂いわば都市計画の大通りだ。左右に幾つもの口を開いた片盤坑は東西何丁通りに当り、更にまた各片盤坑に設けられた櫛の歯のような採炭坑は、南北何丁目の支線道路だ。幹線から支線道路へ、いくつものポイントを切つて峯吉キリハの採炭場へ近づきにつれ、お品の足は軽くなるのであつた。

片盤坑の途中で、巡視に出たらしい監督や技師に逢つたきり、会社の男にぶつからなかつたお品は、最後のポイントを渡ると急カーブを切つて峯吉の採炭坑へ駆け込んで行つた。

闇の坑道には、いつものように峯吉が待ち構えていた。走り込んで行つた炭車を飛び退くようにして、立ちはだかつた男の腕の中へ、お品は炭車の尻を蹴るようにして水々しいからだを投げかけて行つた。投げかけて抱かれながら、お品は夢見心地で、闇の中を独りで遠去かつて行く空の炭車を、その杵の尻にブラ下げた仄暗い、揺れ続ける安全燈を見たのであつた。

全くそれは夢見心地であつた。あとになつてその時のことは何度も調べられたし、又女自身でも何度も考えたことであるが、その時の有様はハッキリ頭の中へ焼きつけられていながら、尚且それは夢の中の記憶のようにそらぞらしい出来事であつた。

お品の安全燈は、その時闇の中に抱き合つた二人を残して、わずかに炭車の裾を淡く照らしながら遠慮でもするかのように揺れながら遠退いていったのであるが、みるみる奥の採炭場の近くまで遠退いていったその炭車は、そのレールの上に鶴嘴でも転つていかチャリーンと鋭い音を立ててひときわ激しく揺れはじめ、揺れはじめたかと思うとアツという間に安全燈は釘を外れてレールの上へ転落して行つた。滝口坑で坑夫達に配給していた安全燈は、どこの炭坑とも同じようにやはりウオ

ルフ安全燈であつた。ウォルフ安全燈というのは、みだりに裸火にされる危険を避けるために、豎坑の入口の見張所の番人の持つている磁石マグネットに依らなければ、開閉することの出来ない装置になつていた。けれども、取扱いに注意を欠いて斜に置いたり、破損するようなことがあつては安全を期することは出来ない。

悪い時には仕方のないもので、お品の安全燈ランプは炭車トロの尻にブラ下げてあり、そして空の炭車トロはそのまま走つていたのであるから炭車トロの尻には複雑な氣流が起り、いままですら地面に沈積していた微細な可燃性の炭塵は、当然烈しく捲き立てられていたのであつた。全くそれはふとしたことであつたがその瞬間に凡ての悪い条件は整つてしまい、いままですら二人の幸福の象徴でもあつた安全燈は、ここで突然予期しない大事を惹き起してしまつたのだ。

瞬間、女は眼の前で百のマグネシウムが焚かれたと思つた。音よりも先に激しい氣圧が耳を、顔を、体をハタツと撃つて、なにか無数の泥飛礫どろつぶみたいなものがバラバラツと顔中に当たるのをボンヤリ意識しながら、思わずよろめいた。よろめきながらも早くも四壁に燃えうつた焰を採炭場キリハの奥に覚えると、夢中で向き直つて片盤口へ馳け出したが、直ぐに「峯吉は」と氣づいて振り返ると男も真赤な焰を背にして影のようにあとから馳け出して来る。炭塊に燃移つた焰は、捲き起された炭塵の群に次々に引火して火勢はみるみる急となつた。お品は背後に続く男の乱れた蹠音あしおとと、

目の前の地上に明々と照らし出された二人の影法師に僅かな安堵を覚えながらそれでも夢中で駈けつづけた。レールの枕木にでもつまずいてか突然後ろの影がぶつ倒れた。眼の前に片盤坑の電気が見えた。

しかしお品がその電気の下に転げ出た時、ここで最初の悲劇が持上った。片盤坑に抜け出たお品がその複雑なレールのポイントにつまずいて思わず投げ出されながら後ろを振り返った時に、早くも爆音を聞いて駈けつけた監督が、いまお品の転げ出たばかりの採炭坑の入口で、そこにしつらえられた頑丈な鉄の防火扉をみるみる締めはじめた。一足違いで密閉を免れたお品は、ホツとして無意識であたりを見廻わしたが、この時はじめて恐ろしい事態が呑みこめた。大事な男が、峯吉がまだ出ていない。お品は矢のように起上ると防火扉の門にかかった監督の腕に獅嚙みついた。激しい平手打が、お品の頬を灼けつくように痺らした。

「間抜け！ 火が移ったらどうすんだ！」

監督が唝鳴った。お品は自分とひと足違いで密閉された峯吉が頑丈な鉄扉の向うでのたうち廻る姿を、咄嗟に稲妻のように覚えながら、再びものも云わずに狂いついて行つた。

が、直ぐにあとから駈けつけた技師の手で坑道の上へ叩きつけられた。続いて工手が駈けつけると、監督は防火扉の隙間に塗りこめる粘土をとり駈けだして行つ

た。こんな場合一人や二人の人間の命よりも、他坑への引火が恐れられた。それは今も昔も変らぬ炭坑での習わしであった。

発火坑の前には、坑夫や坑女達が詰めかけはじめていた。皆んな誰もかも裸でひしめき合っていた。技師だけがコールテンのズボンをはいていた。狂気のようになつて技師と工手に押しとめられているお品を見、その場にどこを探しても峯吉の姿のないのを知ると、人びとはすぐに事態を呑み込んで蒼くなつた。

年嵩の男と女が飛び出した。それは直ぐ隣の採炭場キリハにいる峯吉の両親ふたおやであった。父親は技師に思いきり一つ張り飛ばされると、そのまま黙つてその場へ坐つてしまった。母親は急に気が変になつてゲラゲラと笑いはじめた。レールの上へ叩きつけられて喪心してしまつたお品を、進み出て抱え上げた坑夫があつた。父母の亡くなつたお品にとつて、たつた一人の肉親である兄の岩太郎であつた。

女を抱きあげながら岩太郎は、憎しみをこめた視線を技師達のほうへ投掛けると、やがて騒ぎ廻る人びとの中へ迎え込まれて行つた。

監督が竹簀たけすへ粘土を入れて持つて来た。続いて二人の坑夫が同じように重い竹簀を抱えて来た。工手がすぐにコテを取つて鉄扉の隙間を塗込めはじめた。

ほかの持場の小頭達が、急を知つた坑内係長と一緒にその場へ駆けつけて来ると、技師と監督は、工手の塗込作業を指揮しながら騒ぎ立てる人びとを追い散らした。

「採炭場へ帰れ！ 採炭を始めろんだ！」

呶鳴られた人びとは、運びかけの炭車を押したり、鶴嘴を持直したり、不承不承引上げて行つた。興奮が追い散らされて行くにつれて、鉄扉の前に居残つた人々の顔には、やがてホツとした安堵の色が浮び上つた。

犠牲は一坑だけにとどまつた。しかもこうして密閉してしまえば、その一坑の焰さえも、やがて酸素を絶たれて鎮火してしまう。採炭坑は、謂わば炭層の中に横にクリあけられた井戸のようなもので、鉄扉を締められた入口の外には蟻一匹這出る穴さえないのであつた。

間もなく塗込め作業が完了した。この時が恰度午前十時三十分であつたから、発火の時間は恐らく十時頃であつたろう。けれども塗込め作業の終つた時には、もう発火坑内にはすっかり火が廻つたと見えて、熱の伝導に敏感な鉄扉は音もなく焼けて、人びとに不気味な火照を覚えさせ、隙間に塗りたくつた粘土は、薄いとところから段々乾燥して色が変り、小さな無数の不規則な亀裂が守宮のように裂けあがつて行つた。

技師も工手も監督も、一様に不気味な思いに駆られて妙に苦り切つてしまつた。やがて急を聞いて駆けつけた請願巡査が、事務員に案内されてやつて来ると、坑内係長は不機嫌に唾を吐き散らしながら、巡査を連れて広場の事務所のほうへ引上げていった。小頭達も、それまでその場に坐り込んだまま動こうともしない峯吉の父

親を引立てて、同じように引きあげて行った。

監督は、工手を指揮してその場の跡片附をしはじめた。もうこれで鎮火してしまふまで発火坑には用はない。いや何よりも、第一手のつけようがないのであつた。

鎮火の進行状態は、技師の検定に委ねられた。採炭坑には、どこでも通風用の太い鉄管が一本ずつ注がれていた。一人だけあとに残つた技師は、鉄扉の上の隙間から、塗込められた粘土を抜け出して片盤坑の一層太い鉄管へ合流している発火坑の通風管を、その合目から切断してしまふと、その鉄管の切口から烈しい圧力で排出されて来る熱瓦斯ガスの分析検査にとりかかつた。

時どき炭車トロを押した運搬夫あとむき達の行列が、レールの上を思い出したようにゴロゴロ通つて行つた。騒ぎの反動を受けて急に静かになつた片盤坑の空気を顫わして、闇の向うから、氣の狂つた峯吉の母の笑い声が、ケタケタと水瓦斯ガスのように湧きあがつて来た。

黒い地下都市の玄関である坑内広場は、もう平常の静けさに立返つていた。滝口坑はこの夏までに十萬噸トの出炭をしなければならぬ。僅かの変災のために、全盤の機能が遅滞することは一分間といへども許されなかつた。闇の中から小頭達の眼が光り、炭車トロもケージも、ポンプも扇風器も、一層不気味に静まり返つて動きつづけていった。しかし事務所の中では、係長がひどく不機嫌に当り散らした。

発火後のごてごてした二十分間に、何台の炭車トが片盤坑に停まり、何人の坑夫が鶴嘴を手から放したか、係長は真ッ先にそれを計算した。続いて発火坑の内部で、何噸トの石炭が焼失してしまったか、しかしこれは未知数だ。現場の検査にまたない限り、恐らく概算も掴めない。そこで事務員の一人が鎮火状態を調べに向かわされた。ところで次に、この損害の直接の責任が誰の上にかかって行くか、発火の原因を調べなければならぬ。係長はもう一人の事務員に、助かった女を連れて来るよう命ずると、それから向直つて、まるで鉱山局の監督官みたいに、勿体ぶつて傍らに立っていた請願巡査へ、始めて口を切つた。

「いやなに、大した事でもないんですよ」

全く一人の坑夫が塗込められた位のことは、或は大した事でなかつたかも知れない。しかし大した事は、この時になつて始めて持上つた。それは鎮火状態を問合せに行つた先程の事務員が、間もなく戻つて来て、丸山まるやまと呼ぶその技師が、何者かに殺害されたことを報告したのであつた。

二

技師の屍体は、防火扉から少し離れた片盤坑の隅まがに転つていた。熱瓦斯ガスの検査中

に被害を受けたものと見えて、直ぐ前の坑壁には切り離された発火坑の排気管が、針金で天盤の坑木に吊し止められ、踏台の上には分析用の器具が乱雑に置かれたままになっていた。

屍体は俯向きに倒れ、頭のところから流れ出た黒い液体が土の上をギラギラと光らしていた。大きな傷が後頭部の濡れた髪の毛を栗の毬のように掻き乱して、口を開いていた。兇器はすぐに見つかった。屍体の足元から少し離れて、漬物石程の大きな角の丸くなった炭塊が、血に濡れて黒く光りながら転っていた。係長はそれを見ると直ぐに黙ったまま天盤へ眼をやった。落盤ではない。しかし落盤でなくても、結構これだけの傷は作られる。

いったい五百尺の地の底では、気圧もかなり高かった。地上では、例えば一千尺の高度から人間が飛び降りたとしても屍体は殆んど原形を保っている場合が多い。しかし豎坑から五百尺の地底に落ちると、それはもう目も当てられないほど粉碎されてしまう。落盤の恐るべき理由も又そこにあるのであって、僅かの間を落ちて来る小片でも、どうかすると人間の指など卵のようにひしゃいでしまう。その事を知っていた人びとはこの場合、炭塊一つが充分な兇器になり得ることに不審を抱かなかった。係長は持上げた兇器を直ぐに投げ出して、監督のほうへ蒼い顔を見せた。

いままで固くなって立っていた工手が、始めて口を切った。

「あれからひときりついて、浅川あそかわさんが見巡りに出られますと、私は器具置場までコテを置きに行きましたが、その間にこんなことになったんです」

浅川と云うのは監督の名前であった。工手は古井ふるいと呼んだ。二人とも発火直後のまだ興奮のさめきらぬうちに、このような事件にぶつかつたためかひどくうろたえて落着を失つてた。しかし落着を失つたのは、二人ばかりではなかつた。平常から太ッ腹で通した係長自身が、内心少なからず周章あわててしまった。

発火坑は一坑にとどまつた。とは云えその問題の一坑の損害の程度もまだ判りもしないうちに、貴重な技師が何者にとも知れず殺害されてしまった。切つた張つたの炭坑で永い間飯を食つて来た係長は、人が殺された、と云うよりも技師が殺されたという意味で、恐らく誰よりも先に周章あわてていたのに違いない。

しかしやがて係長には、厳しい決断の色が見えて来た。

「いったい、誰が殺やつたんでしよう。こちらで目星はつきませんか？」

請願巡査が呑気なことを云うと、

「目星？ そんなものならもうついています」

と係長は向直つて、苛々しながら云つた。

「この発火事件ですよ……一人の坑夫が、逃げ遅れてこの発火坑へとじこめられたんです。気の毒ですが、むろん助けるわけにはいきません。ところが、その塗込

作業に率先して働いたのが丸山技師です。その丸山技師がこの通り殺されたと言うんですから、目星もつくわけでしょう。いやハッキリ目星がつかなくなつて、大体嫌疑の範囲が限定されて来る」

「そうだ。それに違いない」

監督が乗り出して云つた。

会社直属の特務機関であり、最も忠実な利潤の走狗である監督は、表面現場の親玉である係長の次について働いてはいるが、しかしその点、技師上りの係長にも劣らぬ陰然たる勢力を持っているのであつた。巡査は大きく領いた。監督は続けた。

「それに、アカの他人でいまどきこんなおせつ、かい、をする奴はないんだから……峯吉と云つたな？ この採炭場の坑夫は」

事務員が頷くと、今度は係長が引取つて云つた。

「そいつの両親と、生き残つた女を、事務所へ引張つて来て置いてくれ。ああ、まだ女の兄と云うのがあつたな？ そいつも連れて来て置け」

「とにかく、峯吉の身内を全部調べるんだ」

監督が云つた。

巡査と事務員が、おっとり刃で闇の中へ消えてしまうと、係長は閉された発火坑の鉄扉の前まで行つて、寄添うようにして立止つた。

密閉法が功を奏して、もう坑内の鎮火はよほど進んだと見え、鉄扉の前には殆んど火照ほてりがなくなっていた。けれどもいま急いで開放でもしようものなら、恐らく新しい酸素の供給を受けて、消えくすぶった火熱も再び力づくに違いない。係長は舌打ちしながら監督へ云った。

「立山坑の菊池技師を、呼び出してくれませんか。それから貴方あなたも、一通り見巡りがすんだら、事務所の方へ来て下さるね」

立山坑というのは、山一つ隔てて室生岬の中端にある同じ会社の姉妹坑だった。そこには専属の技師のほかに、滝口立山の両坑を随時一手に引受ける、謂わば技師長格の菊池技師が、数日前から行っている筈であった。折からやって来た炭車トロの一つに飛びついて監督は闇の中へ消えて行った。

人びとが散り去ると、再び静寂がやって来た。闇の向うの水平坑道の方から、峯吉の母の笑い声が聞えたかと思うと、なにかがやがやと騒がしく引立てられて行くらしい気配が、炭車トロの軋りの絶え間から聞えて来た。左片盤の小頭が、アンペラを持って来て、係長の指図を受けながら、技師の屍体の上へかぶせて行った。工手は切取られた排気管の前に立って、殺された技師の残した仕事をあれこれいじと弄り廻していたが、急に身を起すと、

「係長。どうやら悪い瓦斯ガスが出たようです」

「君に判るのか？」係長が微笑を見せた。

「六ヶ敷いことは判りませんが、出て来る匂いで判りますよ。もう火は殆んど消えたらしいですが、くすぶったお蔭で悪い瓦斯^{ガス}が出たらしいです」

係長は鉄管の側に寄つたが、直ぐに顔をしかめて、

「うむ、こりやアもう、片盤鉄管へ連結して、この瓦斯^{ガス}をどしどし流してしまわねばいかん。そうだ。匂いで判るな。じゃア君は、時どき調べてみて、瓦斯^{ガス}の排出工合を見守ってくれ。わしはこれから坑夫を調べに行くが、その内には菊池技師も来てくれるだろう」

工手は鉄管の連結にとりかかった。係長は工手を残して歩き出した。

広場の事務所には、もう四人の嫌疑者達が、巡査と三人の小頭に見張られて坐り込んでいた。

お品はいつの間にか寝巻を着て、髪を乱し、顔を隠すようにして羽目板へ寄りかかりながら、ぜいぜい肩で息をしていた。兄の岩太郎は、顔や胸を泥に穢したまま鳩尾^{みぞうち}をフイゴのように脹^{ふく}らしたり凹^{へこ}めたりしながら、係長がはいつて行くから睨みつづけていた。

峯吉の父親は、死んだ魚のそれのような眼で動きもせずの一つところを見詰めつづけ、母は小頭の腕に捕えられながら、時どき歪んだ笑いを浮べてはゴソゴソと落

着がなかった。

係長は四人の真ん中につつ立つと、黙ってグルリと嫌疑者達を見廻した。

「これで峯吉の身内は全部だな」

「はい。あとはアカの他人ばかりで」

小頭の一人が云った。

事務所は幾部屋かに別れていた。係長は小頭へ四人の嫌疑者を一人ずつ連れ込むように命じて、巡査と二人で隣の部屋へ引帰ると、そのガタ椅子へ腰を降ろして陣取った。

最初に岩太郎が呼び込まれた。

係長は一寸巡査に眼くばせすると、乗出して岩太郎へ向き直った。そしてなにか大きな声で唝鳴りつけようとでも思ってたか、息を呑みこむようにしたが、直ぐに気持を変えて、割に優しく口を切った。

「お前は、さつきあれから、妹を抱えて何処へ行った」

「……」

「何処へ行ったか？」

しかし岩太郎は、係長と向合って腰掛けたまま、脹れ面ふくをして牡蠣かきのように黙っていた。

「巡查がまごついて横から口を出した。」

「もつとも、何ですよ、この男とあの女は納屋から連れて来たんですがね……」

納屋と云うのは、豎坑を登った坑外の坑夫部落の納屋のことであつた。係長は巡查へは答えずに、岩太郎へ云つた。

「わしの訊いとるのは、あれからお前が、真ツ直ぐに納屋へ行つたかどうか、と云うことなんだ」

すると岩太郎が、やっと顔をあげた。

「真ツ直ぐに行つた」

ぶっきら棒な返事だつた。

「間違いないな？」

係長の声が引締つた。岩太郎は、黙つたまま小さく頷いた。

「よし」係長は傍らの小頭の方へ向直つて云つた。「ひとまずこの男は、そちらの部屋へ待たして置け、それから、お前は直ぐに豎坑の見張へ行つて、この男が何時に女を抱えて出て行つたかシツカリ訊いて来るんだ」

小頭は、すぐに岩太郎を連れて出て行つた。

続いて今度はお品が呼び出された。女が椅子につくと、巡查が係長へ云つた。「この女には、発火の原因に就いても調べるんではしたね」

係長は黙って頷くと、女へ向った。

「安全燈から発火したんだらうな？」

「……」

「火元は安全燈だらう？」

「お品は力なく頷いた。」

「お前の安全燈か、亭主の安全燈か、どちらだ？」

「わたくしのほうです」

「じゃアいったい、どうして発火したのか。その時の様子を詳しく云ってみろ」

お品はこの問にはなかなか答えなかった。が、やがてポロツと涙をこぼすと、小声でボソボソと俯向いたまま喋りだして行つた。お品がその時のことをどんな風に述べていったか、しかしそれは、ここでは云う必要がない。お品の陳述、既に物語の冒頭に記したところと寸分違わなかつた。

さて女の告白が終ると、係長は姿勢を改めて口を切つた。

「いずれその時のことは、またあとから発火坑の現場について、お前の云つたことに間違いはないか調べ直すとして……これは別のことだが、お前はあの時、兄に抱かれて納屋へ帰つたと云うが、確かにそれに間違いはないか？」

しかしこれは、訊ねる方に無理があつた。お品はあの時、恐怖の余り顛倒して岩

太郎に抱えられた筈であるから、それから岩太郎と共に真ッ直ぐに納屋へ連れ帰されたかどうか、女自身にも覚えのない筈であった。しかし係長にして見れば、この場合お品も岩太郎も、共に怪しまないわけにはいかなかった。そこで係長は重ねて追求しようとした。

が、この時事務所の扉があいて、さっきの小頭が見張所の番人を連れて戻つて来た。

カラーのダブついた詰襟の服を着て、ゴマ塩頭の番人は、扉口でジロツと岩太郎とお品を見較べると、係長の前へ来て云つた。

「この二人でございますね？　ハイ、確かに、十時二十分頃から十時半までの間に、ケージから坑外へ出て行きました」

「なに、十時半より前に出て行つた？」

「ハイ、それはもう確かで、そんな時分に坑外に出たのは、この二人だけでございますから、よく覚えとります」

「そうか。では、それから今しがたここへ連れ込まれるまでに、一度も坑内へ降りしなかつたな？」

「ハイ、それは間違いございません。ほかの番人も、よく知つとります」

「そうか。よし」

番人が帰って行くと、係長は巡査と顔を見合せた。

十時半前と云えば、発火坑の塗り込めの完了したのが恰度十時半であり、その時にはまだ丸山技師はピチピチしていたのであるから、十時半前に出坑した岩太郎とお品がどうして技師を殺害することが出来よう。これで四人の嫌疑者のうち二人までが同時に嫌疑の圏内から抜け出てしまった。残りは二人だ。

係長は、ひとまず岩太郎とお品を控室にとどめて置いて、次に峯吉の父親を呼び込んだ。

「お前は、あの時、左片盤の小頭に連れられて、何処かへ行ってしまったな。いったい何処へ行っていた？」

すると死んだ魚のような目をした老坑夫は、声を出すたびに腹の皮へ大きな横皺を寄せながら、

「それは、小頭さんに、訊いて下さい」と云った。

左片盤の小頭は、食堂で昼飯を食べていたが、係長の命令で直ぐに呼び出された。「君はあの時、発火坑の前からこの男を連れ出して来ただろう。それからどこへ連れて行ったんだい？」

「この親爺」と小頭は笑いながら答えた。「あの時腰が抜けてたんです。それで、救

護室へ連れて行ったんですが……、さっき私はその救護室へアンペラをとりに行つた時に、やっと起きあがりはじめた程で……看護夫も手を焼いとりましたよ」

「成る程」と巡查が口を挟んだ。「それで、起きれるようになってから、何処へ行つたかは判らんですね」

と係長へ向直つて、

「こいつは臭いですよ。なんしろ私は、片盤坑の入口で、気の狂つた女房と一緒にうろろうろしてるのを捕えて、ここへ連れて来たんですからね。救護室を出てから、いままで何処でなにをしていたか……」

「いや、あんたは勘違いしとるよ」

いままで黙つていた係長が、不意にいった。

「成る程。歩けるようになってから、捕えられるまで、どこにいたかは判らん。が、しかし……」と小頭の方へ向つて、

「君がアンペラを取りに行く頃までは起たてなかつたんだね。それで、君はそのアンペラを丸山技師の屍体へかぶせるつもりで取りに行つたんだらう？」

「そうです」

すると係長は巡查へ向直つて、

「丸山技師は、この男がまだ救護室で腰の抜けている最中に殺されたんですよ。こ

の男が発火坑の前で腰が抜けて、救護室へ連れ込まれる。それから後で技師が殺され、小頭が屍体へかぶせるアンペラを取りに行った。その時始めてこの男が救護室で起^たてるようになっていた。つまり丸山技師が殺された時には、この男はまだ腰が抜けて看護夫の厄介になってたんです。腰が抜けていたんでは、片盤坑まで出掛けて人殺しなど出来っこない。判りますね。さアもう、これで犯人は判ったでしょう。あの氣狂い婆をフン縛つて下さい」

請願巡査はギクンとなつて立ちあがると、バタバタと隣室へ駆けこんで行つて、岩太郎やお品の見ている前で、有無を云わさず峯吉の母を縛りあげようとした。

ところが、この時、ここで全く異様なことが持上つた。それは、いままで自信を以つて推し進められた係長の推断を、根底から覆してしまふような出来事であつた。断つて置くが、殺された丸山技師は平素から仕事に対して非常に厳格であつた。それでそのために坑夫達からは恐れられ、幹部連中からは敬遠されがちであつた。が、しかし殺されるなぞと云うような変に個人的な、切羽詰つた恨みを受けるような人では決してなかつた。今度の坑夫塗込事件だけが、始めてそうした恨みを受けそうな唯一の場合であつた。そこで係長は、峯吉の塗込めに関して丸山技師を恨んでいそうな人間を全部捕えて、片っ端から調べた揚句、やつといま目的が達せられるかに見えて来ているのであつた。しかも工手や監督と一緒に峯吉の塗込めをした

丸山技師に対して、烈しい恨みを抱いている筈の四人の嫌疑者達は、この場合嫌疑が晴れたと晴れないとにかかわらず事務所へ押し込まれて、巡査や小頭の見張りの元に調査を進められ、その間からいまここで異様な出来事にぶつかるまで、誰一人抜け出た者はなかつたのである。

さて、その出来事と云うのは——峯吉の母親が息子に代つて復讐した犯人と定められて、請願巡査に捕えられようとしたその時であつた。事務所の表のほうから、落着かない人の気配がしたかと思うと、硝子扉をサツとあけて浅川監督が飛び込んて来た。そして室内の有様などには目もくれず、息をはずませながら係長へ云つた。「工手の古井が、殺されとる」

三

いったい船乗りとか坑夫とかのようには、ズバ抜けて荒っぽい仕事をしている人びとの気持の中には、どうかすると常人ではとても想像も出来ない位に小心で、臆病で、取越苦勞な一面があるもので、恰度船乗りたちが海に対して変テコな迷信を抱いたり、可笑^{おか}しな位に海を神秘したりすると同じように、坑夫達もまた、坑内で口笛を吹くと必らず山神の怒にふれて落盤の厄に合うとか、坑内で死んだ人間の魂は、

いつまでもその場に居残っていて後々へ禍を及ぼすとか、妙なことが云い触らされていた。そしてそうした坑夫達の執拗な恐怖心を和げる道具として、坑内が血に穢されたような場合には、その場に締縄しめなわを張って清めのしるしにされるなぞ、そうした奇怪な事実のあるとなしとにかかわらず、もう一般化したならわしにさえなっているのであった。

滝口坑の片盤には、今日その締縄が白々と張り出されたのだ。そしてその締縄に清められた筈の防火扉の前で、皮肉にも新しい血が、一度ならず二度までも流されてしまった。片盤の坑夫や坑女たちは、網をかぶった薄暗い電気の光に照らされながら、閉された採炭場キリハの防火扉の前に、意味ありげに二つも並んだ屍体を遠巻きにして、前とは違って妙にシーンとしていた。

工手の屍体は、アンペラで覆われた丸山技師の屍体の側に、くの字形に曲って投げ出されていた。伸びあがって瓦斯ガスの排出工合を検査している隙に、後ろから突き倒されたものとみえて、踏台が投げ倒され、その側に技師の時よりも、もつと大きな炭塊が血にまみれて転っていた。俯伏せに倒れた上へ折重って、力まかせにその大きな炭塊をガツと喰らわしたものであろう。後頭部から頸筋へかけて大きな傷がクシャクシャに崩れ、左の耳が殆んど形のないまでに潰されていた。殺害は、係長が工手を発火坑の前に一人残して、広場の事務所へ引上げてから、立山坑の菊池技

師に電話を掛けに行った監督が、序ついでに昼飯を済ましてやりかけの見巡りに出掛けるまでの間に行われたものであつて、犯人は前の丸山技師の時と同じように、現場に炭車トロの通つていないような隙を狙つて、闇伝いに寄り迫つたものに違ひなかつた。係長は紙のように蒼ざめながら、あたりを見廻わして、苛立たしげに坑夫達を追い散らした。

——工手の殺害は、技師の殺害と同じ種類の兇器を用いて行われた。しかも符合はこれだけにとどまらない。工手も又技師と同じように、殺害されるかも知れない同じ一つの理由を持つていた。発火坑の塗り込めに當つて、丸山技師や監督の指図を受けながらも、直接その手にコテを掴んで粘土を鉄扉に塗りたくつた峯吉生埋めの実行者は、外ならぬ古井工手ではなかつたか。犯人は云うまでもなく同一人であり、しかも坑殺された峯吉の燃え沸たぎる坩堝るっぼのような怨みを継いだ冷酷無比の復讐者だ。

しかし、ここで係長は、鉄扉のような思索の闇にぶつかつた。

最初係長は、技師の殺害に當つて、早くも事の真相を呑み込むと、峯吉の復讐者となり得る人びとの全部を捕えて片ツ端から調査にとりかかつたのであるが、しかしその四人の嫌疑者の調査の進行の途中に於て、技師と同じ意味で古井工手が殺害されてしまったのだ。しかも四人の嫌疑者達は、工手の殺害が行われる間中確実に

事務所へとじこめられて、一步も外へは出ていない。それでは犯人は、その四人以外の他人の中にあるか？ かしいまどきの魯鈍な坑夫の中に、他人のために怨みを継いで会社の男を次々に殺していくような、芝居染みた気狂いはいる筈がない。

係長は、いままで鼻の先であしらっていたこの事が、意外な難関に行き当つてしまふと、もうまるで糸の切れた凧たのようにアテもなくうろたえてしまった。

ところが、ここで係長の暗中模索に、やがてひとつの光が与えられた。けれどもその光たるや、なんともえたいの知れぬ燐のような光で、却つて係長を青白い恐怖の底に叩き落してしまふのだつた。

滝口坑では、いつでも死傷者に対して炭坑独特の荒っぽい検屍を、救護室で行うことになつていた。それは坑道が、電気が処々についているとは云つても、炭塵にまみれた暗い電気であつたからでもあり、また坑道は炭車トの通行に必要な程度にか設計されていず、なにかと手狭で、そうした支障のために少しでも出炭率の低下するのを恐れたからでもあつた。

医員の仕度が出来て救護室へ下つて来た知らせを受けると、係長は、とりあえず二つの屍体を救護室に移すことにして、来合せた炭車トへアンペラを敷いて屍体を積み込んだ。そして自分も監督や巡査と一緒に後の一台へ乗ろうとした時であつた。

一人の若い坑夫が、己れの安全燈ランプのほかに火の消えた安全燈ランプを一つ持つて、片盤

坑の奥から駈け出して来た。坑夫は係長を見ると、立止つて固くなりながら云つた。

「水呑場で、安全燈を一つ拾いました」

「なに、安全燈を拾つた？」

係長は険しい顔で振り返つた。

炭坑では、安全燈は、坑夫の肌身を離すことの出来ない生命であつた。それはただ暗い足を照すと云うばかりではなく、その焰の変化によつて爆発瓦斯の有無を調べる最も貴重な道具でもあつた。しかし先にも述べたように扱ひ方によつては甚だ危険なものであるから、炭坑はこれに専用者の番号をつけて、坑口の見張所でないちい入坑の時に検査をさしていた。その安全燈の一つが所属不明で転つていたと云うのであるから係長の顔は瞬間固くなつた。

「何番だ？」

「はの百二十一です」

「はの百二十一？」

監督が首を傾げた。係長は炭車から飛び降りると、運搬夫へ顎をしゃくつていつた。

「見張所へ行って、はの百二十一の坑夫は誰だか、直ぐに聞いて来てくれ」

「こういうゴテゴテした際に」監督が乗り出して云つた。「こんなだらしないマネ

をする奴がいるから困る」と坑夫へ向つて、

「いったい、何処で拾つたんだ」

「水呑場の直ぐ横に、置き忘れたように転っていました」

水呑場——とは云つても、自然に湧き出す地下水を水甕みずがめに受けているに過ぎなかつた。それはこの片盤では、突当りの坑道にあつた。そこは片盤坑道の終点になつていて、そこには穴倉や一寸した広場もあつた。広場には野蛮な便所もあつた。坑夫達は口が渇くと、勝手にそこへ出掛けては水を飲んだ。

「置き忘れただつて？ よし、その坑夫が判つたら処罰するんだ」

監督は苛立たしく呶鳴りつけた。係長は、そこらにうろろしている運搬夫あとむきたちが、皆んな安全燈ランプを持つていかどうかと見廻わした。むろん誰れも闇の世界で光を忘れてゐるものはなかつた。この場合、忘れると云ふことは絶対にあり得ない。それは恐らく、忘れたのではなくて、故意に置いて行つたとよりとりようがない。故意に置いて行つたということになると、恐らくその坑夫は、光が不要であつたか、それとも有つては却つて邪魔になつたか——しかしそんなことを詮索しているうちに、さっきの運搬夫あとむきの女が、炭車トロを持たずに蒼くなつて駈け戻つて来た。

「はの百二十一は、死んだ峯吉の……」

「なに？」

「ハイ、その峯吉ツつアんの安全燈だそうです」

「なんだって？ 峯吉の安全燈……」

係長は瞬間変テコな顔をした。

「待てよ。峯吉の安全燈……？」

——まさか、峯吉の安全燈が出て来ようとは思わなかった。峯吉では、いまはもう処罰のしようもない。いや、処罰の処罰でないのと云うよりも、どうして又坑内で働いていて死んだ筈の峯吉の安全燈が、いま頃こんなところから出て来たのであるのか？

係長はなに思つてか急にいやな顔を見ると、その安全燈を取り上げて、これも又同じように様子の變つてしまつた浅川監督へ、顫え声で云つた。

「とにかく、引挙げましょう。その上、ひとつよく考えてみるんですね。どうも、サツパリわけが判らなくなつてしまつた」

四

立山坑の菊池技師というのは、まだ四十に手の届かぬ働き盛りの若さで、東大工学部出身の秀才であつたが、その癖蒼くなつて机に嘔かりついているのが大嫌いで、

暇さえあれば鉄砲を持って熊の足跡をつけ廻していようと云う——日焼のした赧^{あか}ら顔で、慄^{ひょうかん}悍な肩をゆすつて笑つたりすると、机の上の凶面が舞つて仕舞いような声を出す人であつた。

さて、報らせを受けてその菊池技師が、滝口坑へやつて来た時には、請願巡査は管区の警察へ求援に出掛け、峯吉の安全燈^{ランブ}を発見した係長は、検屍も瓦斯^{ガス}検査もひとまず投げ出して事務所へとじこもり、不安気な様子で頭痛あたまを抱えていた。

係長は、しかし菊池技師の顔を見ると、幾分元気をとり戻した。そして直ちに発火坑の様子について説明しはじめたのであるが、いつの間にか話して行くうちに知らず知らず横道にそれて、発火事件が殺人事件に変わってしまうのだつた。菊池技師もまた、始め単なる発火事件の処置を予期してやつて来たのであるが、係長の訴えるような話を聞くうちに、段々その話のほうへ引き込まれて行つた。係長は、丸山技師の殺害と四人の嫌疑者のことから、工手の殺害に峯吉の安全燈^{ランブ}の不思議な出現に至るまで逐一詳細に物語ると、最後にぶつかってしまった大きな矛盾と、その矛盾からシミジミと湧き出して来る異様な一つの疑惑を、疑い深くそれとは云わずにそのままそっくり技師の耳へ畳みこんでいった。

「こいつアどうも、熊狩りみたいに面白くなりましたね」

菊池技師は、ひと通り係長の話をお聴き終ると、そう云つて事もなく笑つたが、内

心ではかなり理解に苦しむと見えて、そのままふツと黙り込むと、困った風に考え込んでしまった。

「どうも、だし抜けにこんな変テコな殺人事件を聞かされたんじやア勝手が違つて戸惑いますよ」

やがて技師が口を切つた。

「しかし係長。あなたも人が悪いですね。なぜもつと、御自身の考えていられることを、アケスケに云つてしまわないんですか。いまあなたがどんな疑惑にぶつかっているか。むろん私にもそれは判る。そしてその疑惑が、どんなに子供っぽく、馬鹿氣ているか、いや全く、論理をテンから無視したバカ話で、とてもまともに口に出せるような代物でないことも判ります。しかしその癖あなたは、その疑惑を頭から笑殺してしまうだけの勇氣もないでしょう。怒らないで下さいよ、係長。……そこで、そのあなたの頭痛の種を一掃してしまふ手段が、ここに一つあります。なんでもないんですよ。発火坑を開放して見るんです。そうですね。発火当時にどれだけの熱が出たかは知れませんが、人間の骨まで燃えてなくなつてしまうようなことは絶対にありませんからね」

「そりやそうだ」と係長が云つた。「鎮火も早かつたんだからな。しかし、瓦斯ガスが出ている」

「でも排気してるんでしよう？ だったら、そんなにいつまでも瓦斯のある筈はないでしょうし、それに防毒面だつてあるんです。——あ、しかし、その前に係長」と技師はここで、なにか新しい着想を得たと見えて、急に眼を輝し、辺りを見廻しながら云つた。

「浅川さんは、どうしました？」

「浅川君か？……」

と係長が後ろへ向き直ると、傍らにいた事務員が口を入れた。

「札幌の本社から電話で、出て行かれましたが……」

けれどもその浅川監督は、待つほどもなく返つて来た。技師は簡単な挨拶や前置きをすまずと、直ぐに調子を改めて切り出した。

「実は浅川さん。変なことを云うようですが、その坑夫の塗り込めには、少くとも三人の人が手を下していた筈ですね？ そして、あなたも、その一人でしたね？」

監督の顔色がサツと悪くなった。技師は、うわ眼を使いながら、静かにあとを続けた。

「まだ、この殺人事件は、終りをつけていませんよ。どうやら今度は、あなたの番ですね。ああ、しかし」と技師は顔をあげて、急せわしく云い出した。「御心配には及びませんよ。いいですか、丸山君も古井君も、炭塊でやられています、あれは犯人

が、武器を持っていない証拠ですよ。だが、あなたは、これから武器を持つことが出来ます。場合によっては、犯人を捕えることも出来ます。そうだ。出来るどころではない。犯人に狙われているんだから、この場合、あなただけが、犯人捕縛の最も有利な立場にあるんです。我々の前には隠れている犯人も、あなたの前にはきつと姿を見せまますよ」

「成る程」係長が云った。「流石熊狩りの先生だけあって、うまいことを云う」
しかし菊池技師は、真面目で続けた。

「それで私は、ここでひとつお二人の前へ提案したいんですがね。つまり浅川さんに武器を持って頂いて、犯行の現場附近へ単身で出掛けて貰うんです。むろん私達は、あとから殿軍しんがりを承わる。武器さえ持つて行けば、決して心配ないと思います。如何でしょう？ こいつは、手ツ取早くていいと思うんですが」

係長は直ぐに賛成した。

監督は、一寸考えてから立上った。そして何処からかストライキ全盛時代に入入れたドスを一本持出して来ると、そいつの鑑こじりでドンと床を突きながら、

「じゃ、殿軍しんがりを頼みますよ」

云い残して、ひどく悲壮な調子で出掛けて行つた。

係長と菊池技師は、少しばかり時間を置いて、監督の後に続いた。が、水平坑を

通つて発火坑のある片盤坑の前まで来ると、技師は立止つて、係長へ云つた。

「一時間この片盤坑の出入りを禁止したら、どれ位出炭が滞滯しますか？」

「なんだつて、片盤を止める？」

係長が眼を瞠みはつた。

「そうです」

「冗談じゃアないよ。仕事を罷やめるなんて……」

「だつて、我々ゆきちがと行違ちがひに、犯人がこちらへ逃げ出して来たらどうします」技師が云つ

た。「どうです。この片盤だけでしたら、三十噸ト位のものでしょう？ 係長。それ位の犠牲でしたら、ひとつ思い切つて止めて下さい。危急を要する場合ですよ」

「どうも君は、算盤そろばんよりも狩獵カウナのほうが好きらしいね」

係長が仕方なく苦笑すると、技師は直ぐに片盤坑の入口の大きな防火扉を引寄せ

て、水平坑道でうろたえ始めた坑夫や小頭に事情を含め、係長と一緒に片盤坑へ飛び

込むと、外側から防火扉を閉めて、小頭に門かぬきをかけた。折から来合せた左片盤の

炭車トの行列は、直ぐにこの異常な通行禁止にぶつかると、峯吉の塗込めがあつたばか

りなので、夢中になつて騒ぎはじめた。が、人びとは自分達と同じように密閉され

た係長や技師を見ると、直ぐにこれが悪性の密閉ではなく、なにか事情があつての

通行禁止であることに気がつき、やがて起きはじめた騒ぎも、追々静まつて行つた。

ところが、そうして出合う運搬夫たちへ因果を含めながら、片盤坑を奥へと進んで行つた係長と菊池技師は、しかしとうとう密閉された峯吉の採炭場の入口の近くで、全く予期しない出来事にぶつかつてしまつた。

おとり
囲になつた浅川監督は、人一倍優れた膂力りよりよくを持つていたし、その上武器も持つていれば、張り切つた警戒力も備えていた筈であつた。おまけに相手は武器も持たずに隠れているのだ。それで危険はない筈であつたのであるが、しかしそれにもかかわらず、係長と技師が目的場所に着いた時には、もう監督は路面の上で全くこと、切れていたのであつた。

仰向きになつて大の字なりに倒れた屍体の上には、殆んど上半身を覆うようにして、前より一層大きな、飛石ほどもあるうと思われる平たい炭塊がのしかかつていた。その炭塊は他所よそから運ばれたものではないと見えて、すぐ傍らの炭壁の不規則な凹凸面には、いかにも落盤のように、炭塊を叩き落したらしい新しい切口があり、路面には大小様々の炭塊が、屍体を取り巻くようにしてバラバラと崩落ちていた。殴り倒された浅川監督の瀕死体の上へ、残忍な殺人者の手によつて最後の兇器が叩き落されたのだ。

係長は、思わず監督のドスを拾いあげて、辺りを見廻しながら、技師と力を合せて屍体の上の炭塊を取り除けた。屍体は首も胸もクシャクシャに引歪められて、二

夕目と見る事も出来ないむごたらしきだった。

ホンの一足遅くれたために、貴重な匣は、殺人者の姿をさえも見ることも出来ずに逆に奪われてしまった。予期しなかった危険とは云え、これは余りに大き過ぎる過失であつた。二人は烈しい自責に襲われながらも、しかしこの出来事の指し示す心憎きまでに明白な暗示に思わずも心を惹かれて行くのであつた。復讐は為し遂げられたのだ。しかも武器も持たずにこのように着々と大事を為し遂げて行く男は、いったい何者であろうか。犯人はこの片盤内にいるただの坑夫か、それとも——係長は、発火坑の鉄扉の上へ視線を投げた。鉄扉の前へ近づいた。手を当てた。が、なんとそれはもうすっかり冷め切つていた。菊池技師は排気管を調査した。が、瓦斯ももう殆んど危険のないまでに稀められていた。二人は舌打ちしながら力を合せて、鉄扉の隙の乾いた粘土を掻き落しはじめた。

間もなく粘土がすっかり剥ぎ取られると、技師は門を跳ね上げて、力まかせに鉄扉を引き開いた。異様な生温い風が闇の中から流れて来た。二人は薄暗い安全燈の光を差出すようにしながら、開放された発火坑に最初の足跡をのしりて踏み込んだ。踏み込んですぐその場から安全燈を地上へ差しつけるようにしながら、峯吉の骨を探しはじめた。が、みるみる二人は、なんともかとも云いようのない恐怖に叩ツ込まれて行つた。

峯吉の骨がない！

いくら探してもない。墨をかけられた古綿のように、焼け爛れた両側の炭壁は不規則な退却をして、鳥居形に組み支えられていた坑木は、醜く焼け朽ち、地面の上に、炭壁からにじみ出たコールタールまがいの瓦斯液が、処々異臭を発して溜っているだけで、歩けども進めども、峯吉の骨はおろか、白い骨粉ひとつさえない。二人はまるでものに憑かれたように、坑道の中をうろたえはじめた。が、やがて曲つたり脹れ浮いたりしていたレールが、急に飴あめのようにひねくれ曲つて、焼け残つた鶴嘴や炭車トの車輪がはねとばされ、空気がまだ不気味な火照ほてりを保っている発火の中心、つまりその採炭場キリハの終点まで来てもそれらしい影がみつからないと、いよいよ事態の容易ならざるに気づいたもののようにそのままその場に立竦んでしまった。

最悪の場合がとうとうやって来たのだ。先にも云つたように、採炭坑は謂わば炭層の中に横にクリあけられた井戸のようなもので、鉄扉を締められた入口のほかには蟻一匹這い出る穴さえないのであった。その坑内に密閉されて火焰に包まれてしまった筈の峯吉の屍体が、屍体はともかく、骨さえも消えてしまふなぞということは絶対のない筈である。ところが、そのない筈の奇蹟がここに湧き起つた。係長は、己れのふとした疑惑が遂に恐るべき実を結んだのをハッキリ意識しながら、思わず固くなるのであった。――

恰度、この時のことである。

不意に、全く不意に、あたりの静かな空気を破つて、すぐ頭の上のほうから、遠く、或は近く、傍らの炭壁をゆるがすようにして、

……ズシリ……

……ズシリ……

名状し難い異様な物音が聞えて来たのだ。

瞬間、二人は息を呑んで聞耳を立てた。が唸るとも響くともつかぬその物音は、すぐにやんで、あとは又元の静けさに返つて行つた。

しかし、永い間炭坑に暮した人びとには、その物音が何であるか、すぐに判る筈であつた。

それは、すっかり採炭し終つた廃坑の、炭柱を崩し取つて退却する時なぞに、どうかすると聞くことの出来る恐ろしい物音であつた。炭柱を抜くと、両壁にゆるみのある場合など地圧で天盤が沈下する。沈下は必ず徐々に間歇的に行われるが、坑木がむっちり挫折し始め、天盤に割れ目の生ずる際に、その異様な鳴動が聞えるのであつた。謂わば崩落の前兆であるその物音を、炭坑の人びとは山鳴りと呼んで恐れていた。

この場合の物音が正しくそれであつた。発火坑内の坑木が焼け落ちてしまい、発

火と同時に俄に膨脹した坑内の気圧が、やがて徐々に収つて行くにつれて、両壁がゆるみ、少しずつ天盤の沈下がはじまったのに違いない。

係長は、蒼くなつて安全燈を天井へさし向けた。けれどもそこには、一層恐ろしいものが待ち構えていた。

頭の上に押し迫つた天盤には、鰐のような黒い大きな亀裂が、いつ頃から出来たのか二つも三つも裂けあがつて、しかもその内側まで焼け爛れた裂目の中からは、水滴が、ホタリホタリと落ちていた。水が廻つたのだ。係長はその水滴に気がつくのと、直ぐに手を出して滴を一つ掌に受け、そいつを不安げに己れの口へ持つて行った。が、瞬間ギクツとなつて飛び上つた。

考えて見れば、天盤も崩落も、火災も地下水も、炭坑にとつてはつきものである。滝口坑にしてからが、いつかはそうしたこともあるうかと、最善の防禦と覚悟が用意されていたのであるが、そして又そうした用意の前には、決して恐るるに足りない物なのであるが、しかしいま、係長の舌の上に乗つたこの水一滴こそは、実に滝口坑全山の死命を決するものであった。もはや如何なる手段も絶対に喰止めることのないその水は、地下水でもなければ、瓦斯液でもない。それは至極平凡な、ただの塩水であつた。

「失敗つた！」

最初の海の訪れを口にした係長は、思わず顫え声で叫んだ。

「こいつは人殺しどころではない。とうとう海がやって来たのだ！」

ところが、こうした大事を目の前にして、その頃から菊池技師の態度に不思議な変化が起って行つた。それは放心したような、立つたまま居睡りを始めたような、大胆にも異様に冴え切つた思索の落つきであつた。

「相手が海では、敵かないませんよ」

やがて技師が、冷然として云い放つた。

「さア、諦めなさい、係長。そしてまだ充分時間があるんですから、落付いて避難の仕度にかかりましょう。ところであなたはいま、人殺しどころではないと云いましたね？ 成程、そうかも知れません。しかし、この塩水と人殺しとは、決して無関係ではないんですよ。係長、あの裂目の内側まで焼け爛れた大きな亀裂に、注意して下さい。私にはなんだか、この事件の真相が判りかけたらしいんです」

五

さて、それから数分の後には、密閉された片盤坑を中心にして、黒い地下都市の中に、異常な緊張が漲みなぎりはじめていた。

崩落に瀕した廃坑に、再び重い鉄扉を鎖した係長は、慌しく電話室に駆けつけると、立山坑の地上事務所と札幌の本社へ、海水浸入の悲報を齎した。続いて狭い豎坑の出口で圧死者などの出ないように、最も統制のとれた避難準備にとりかかった。一方菊池技師は、熊狩りで鍛えた糞度胸をいよいよムキ出しにして、問題の片盤坑の鉄扉を抜け出ると、再びそいつを鎖し、水平坑の小頭達を呼び寄せて、鎖した入口を嚴重に固めさせた。残忍な殺人者は、深い片盤坑のどこかにいるのだ。その男の捕えられるまでは、何人といえども片盤坑から抜け出る事は出来ない。こうして水も洩らさぬ警戒陣が出来上ると、技師は広場の事務所へやって来た。

広場では、豎坑に一番近い片盤の坑夫達が、突然下った罷業の命令に、訳の判らぬ顔つきで、ざわめきながらも引揚げはじめていた。いくつかの片盤の小頭達へ、次々に、何かしきりと指図し終った係長は、技師を見ると馳け寄って云った。

「さア今度は、左片盤の番だよ。出掛けよう」

「待って下さい」技師が遮切った。「その前に、二、三調べたいことがあるんです」「なんだって」

係長は吃驚して、苛立ちながら云った。

「この際になって、どうして又そんな呑気なことを云い出したんだ。もう犯人は、あの片盤の中に閉籠められているんじゃないか。そいつを叩き出して、少しも早く

あの片盤を開放しなくちやアならん」

しかし、菊池技師は動かなかった。

とうとう係長は、技師が来るまで坑夫を外に出さない条件で、一足先に捜査を申出した。

係長が水平坑の闇の中へ消えてしまうと、菊池技師は、別室であのまま足止めされていたお品を、すぐに事務所へ呼び込んだ。お品は、やがて問われるままに、大分落ついた調子で、もう一度発火当時の模様を、前に係長にしたと同じように繰返しはじめた。が、やがて、女の陳述が終ると、菊池技師は力を入れて訊き返した。

「では、もう一度大事なことを訊くが、お前が発火坑から逃げ出して、監督や技師や工手たちが駆けつけて防火扉を締め切ったその時には、確かにその場に峯吉は出ていなかったのだな？」

「ハイ、それに間違いありません」

お品は、腫れた臉をあげながら、ハッキリ答えた。

技師は頭の中で何事か考えを整理するように、一寸眼をつぶったが、すぐに立上ると、電話室へ出掛けた。十分間もすると戻って来た。多分長距離電話であつたのであろう。しかし戻って来た菊池技師は、抜け上つた額に異様な決断を見せながら、お品を連れて、水平坑へはいつて行った。

密閉された片盤坑の前には、二、三の小頭たちと一緒に、どうしたことか係長が、ドスを持ったまま蒼くなって立っていたが、技師を見ると、進み寄って口を切った。「菊池君。どうも困った事になった」

「どうしたんです」

「それがその、全く変テコなんだ。実は、この片盤には犯人がいないんだ。坑道はむろんのこと、どの採炭場キリハにも、広場にも、穴倉にも、探して見たがいないんだ」すると菊池技師は、落着いた調子で、意外なことを云いだした。

「いったいあなたは、誰を捜しに入坑したんです？」

「え？ 誰を捜しにだつて？」係長は思わずうろたえながら、「犯人にきまつてるじゃアないか」

「いやそれですよ。あなたはさつきから犯人犯人と云われたが、いったい誰のことを云われるんです？」

「なんだつて？」

係長は益々うろたえながら、

「坑夫の峯吉にきまつてるじゃアないか」

「峯吉？」

と云いかけて菊池技師は、困ったような顔をしながら黙ってしまった。が間もな

く側の炭車^トへ腰かけながら、静かに改まった調子で口を切った。

「いや、実は私も、さつきあなたと一緒にこの片盤にはいった頃には、まだ犯人が誰だか、よく判らなかつたんですよ。それで片盤坑に確かに犯人を閉込めてはいながら、いったい誰を捜してよいのか、犯人犯人と抽象ばかりで、誰を捕えたらそれが犯人になるのか、サツパリ判らなかつたんです。しかしいま私は、その具体を掴むことが出来た」

菊池技師は炭車^トから腰を降ろすと、係長の前まで歩み寄って、あとを続けた。

「私の掴んだ具体は、どうやら、あなたの掴んだ具体よりも、正しいらしい。——係長。どうもあなたは、この事件に就いて全体に大きな勘違いをしてるらしいですよ。あなたは事件の表面に表われた幾つかの事実と、それらの事実の合成による或るひとつのもつともらしい形にとらわれ過ぎて、論理を無視しています。——一人の坑夫が塗り込められ、その塗込めに従事した人びとが次々に殺害される。ところが嫌疑を掛けた坑夫の遺族の中には犯人はいない。そしてその代り塗込められて死んだ筈の坑夫の安全燈^ブが、発火坑以外の或る箇所で見えられ、発火坑を調べてみるとその坑夫の屍体はおろか骨さえない——とこれだけの事実の組合せから、あなたはその塗込められた坑夫自身が何等かの方法で生き返って坑外へ抜け出し、自分を塗込めた男達へ復讐しはじめた、と云う至極もつともらしい疑惑を抱いたわけでしょう。

しかしそのもつともらしきは論理ではなくて、事実への単なる解釈であるに過ぎませんよ。その解釈が如何にもつともらしい暗示に富んでいても、そのために、絶対に抜け出ることの出来ない坑内から抜け出した、と云う飛んでもない矛盾をそのまま受け入れてしまうことは出来ません」

「それで君は、どう考えたんだ」

係長が苦り切つて云つた。技師は続けた。

「手ツ取り早く云いましょう。私はあの発火坑で、坑夫の骨さえ見当らなかつた時に、その時から新しく考えはじめたんです。——まず坑内には骨さえないのですから、峯吉はどこからか外へ出たに違いない。ところが、いちいち探すまでもなく、防火扉を締めたら間もなく鎮火したと云うのですから、これは消^け盡^がみたいなもので、防火扉のところよりほかにあの坑内には絶対抜け穴はない。それでは峯吉は防火扉のところから出たに違いない。ところが、防火扉の門は外側にあるし、隙間に塗込めた粘土は塗られたままに乾燥していて開けられた跡はなかつた。つまり防火扉は締められてから私達がさつき開けた時までには絶対に開放されていけないことになり。すると峯吉は、どうです、そもそも防火扉の締められる前に抜け出ていた、ということになるではありませんか……ところで、ここまで進んだ新しい目で、ほかの事実を調べてみます。——この可哀相な女は、あの時、男の^{あしおと}蹠音を後ろに聞

きながら発火坑を飛び出したのでしたね。そして飛び出してホツとなつて後ろを振返つた時には、もう爆音を聞いて駈けつけた浅川監督が、防火扉を締めかけていた。そして締めてしまった。続いて技師が来、工手が駈けつけて、塗込めがはじまる……ここが肝心なところですよ。いいですか、峯吉は防火扉の締められる前に出ていなければならぬのですから、その時女のあとから飛び出して来て、そして浅川監督が防火扉を締めるまえに飛び出したことになるのです。つまり飛び出してホツとして振返つた女と、防火扉を締めかけた浅川監督との間のなにもなかつた空間に、峯吉がいたわけです……」

「待て待て、君の云うことは、どうも判るようで、判らん」

係長が、顔を顰しかめながら遮切るようにして云つた。技師は構わず続けた。

「いや、判らないのも無理はないですよ。私だつて、こうして理詰めで攻め上げればこそ、やっと少しづつ判りかけて来たのですから……全く、その時そこで、なんとも変テコなことが起つたんですよ。運命の悪戯いたずらとでも云う奴なんです」

云いかけて、技師は、傍らに立っていたお品のほうへ向き直つた。

「お前にもうひとつ聞きたいことがあるんだ……お前は、あの時炭車トを押して捲立まきたてから帰つて来ると、片盤から自分の採炭場キへはいつて行き、その闇の坑道でいつもそこまで迎に出ている峯吉に飛びついて行つたと云うが、その男は確かに峯吉で

あつたか？」

お品は、意外な技師の言葉に、瞬間息を呑んで目を瞠った。

「お前は、峯吉がいつもこの闇の中で、抱いてくれると云つたろう。闇の中でそうしてその時お前を抱いた男は、確かに峯吉に相違なかつたか？」

「……はい……」

「それではもうひとつ聞かすが、その時峯吉は安全燈を持っていたか？」

「持つてはいませんでした」

「お前の安全燈はどうしていた？」

「炭車の尻につけていました」

「するとその安全燈の光りは、杵に遮切られて前のほうを照らさずに、炭車の尻の地面ばかりを照らしていたわけだな……お前は、走っている炭車をそのまま投げ出して峯吉へ飛びついたと云つたが、それではその峯吉の前へ炭車が行くまで、安全燈の光りは峯吉の顔を照らさなかつたわけだし、峯吉の前を炭車が走り去つて炭車の尻につけた安全燈の光りが始めて峯吉に当つた時には、峯吉の体は光りを背に受けて影になつて浮上るではないか。どうしてお前はそれが峯吉だつたと見ることが出来たのだ？」

「……」

お品は訳の分らぬ顔をして、俯向いてしまった。が、その顔には隠し切れぬ不安が漲みなぎっていた。技師は係長へ向き直った。

「もう、私の考えていることが、いや、こうよりほかに考えざるを得ないことが、大体お判りになったでしょう……つまり、峯吉は、あの発火の時に、てんから坑内には入っていないかったですよ」

「待ち給え」係長が遮切った。「すると君は、この女が闇の中で抱きついた男と云うのは、峯吉ではなかったと云うんだな？」

「そうです。峯吉は外にも中にもいかなかったのですから、いやでもそう云うことになるではありませんか」

「じゃア、いったいその男は誰なんだ」

「女のあとから飛び出して、しかも坑内には残されなかったのですから、その時女のうしろにいて、防火扉のまえにいた男です」

係長は、意外な結論に驚いて黙ってしまった。が、直ぐに勢いを盛り返して、

「どうも君の云うことに従うと、事件全体がわけの判らぬ変チクリンなものになってしまうぜ。例えば、峯吉は発火の時にその場にいなかったとすると、いったい何処へ行っていったんだ」

「さア、それですよ」と技師はひと息して、「ここでもう一つの他の事実を、そこま

で進んだ新しい目で見ます。……つまり、水呑場にあつた安全燈ですが、あなたは、その安全燈を、密閉後抜け出した峯吉が、人殺しの邪魔になるから置いて行つたと解釈されたでしょう。しかしいま私は、その安全燈を、発火当時坑内にいなかった峯吉の所在を示すものと解釈します。峯吉は、水呑場へ行つていたんです」

「成る程。じゃアなんだな。峯吉は全々発火に関係していなかった。つまり決して塗込めに関係していなかったんだな。それでは、何故その塗込められもしない峯吉が、塗込めに関係した恨みもない人々を次々に殺害したのだ」

「どうもあなたは、まだ誤つた先入主にとらわれていますね」

菊池技師は苦笑すると、両手を握り合して苛立たしそうに歩き廻りながら云つた。

「私がいままで考え進めて来た範囲では、まだ犯人が誰であるかと云う点には、少しも触れていなかった筈ですよ。ところで、ここでもう一つほかの事実を調べて見ましょう。それはこの殺人に就いてなんですが、三つの殺人には、考えて見るとそれぞれバラバラに殺害されているようで、その実面白い幾つかの連絡がみられます。まず兇器ですが、三人が三人とも炭塊で叩き殺されております。炭塊で殺されていると云うことは、なんでもないことのようにですが事實は決してそうでない。係長。あなたは統計に現われた坑夫仲間の殺傷事件について、兇器は何が一番多いかご存じでしょう。鉄槌かなづちに鶴嘴ですよ。全くこれくらい坑夫にとって、手近で屈強な武器

はありませんからね。しかも坑夫たちは安全燈ランプと同じように、大事な仕事道具として必らず一つづつは持つております。ところがこの事件で犯人は、珍らしくもそれぞれの被害者へ対して凡て炭塊を使つております。この事実を、事件全体のなんとなく陰險な遺口やぐちなぞと考え合せて、炭塊以外に手頃な兇器の手に入らない人、つまり坑夫でない人の咄嗟とっさにしないでかして行つた犯行でないか、とまあ考えたわけなんです。ところであなたは、この事件の被害者達が、何故同じように殺されて行つたかという共通した理由を、塗込められた男の恨みによるものと、解釈されたでしょう。ところが、事実は塗込められた男なぞないんですから、その考えは、自おのずから間違つたものになって来ます。むろん三人は、峯吉が塗込められたと勘違いしている、遺族からは、共通な恨みを買つていよう。ところが遺族の中には犯人はいないのでしようからこれも又問題になりません。それではほかに被害者達の殺害される共通の理由はなかつたかと云うと、いやそれがあるんです……私は、暫く前からそのことには気づいていましたが、被害者達は、皆一様に少しも早く発火坑を開放するための鎮火や瓦斯ガスの排出工合を検査している時に、殺されております。これを別様に考えると、仕事の邪魔をされたわけであり、あなたが発火坑を開放して少しも早く発火真相の調査にかかりたいという、そのあなたの意志の動きを阻害されたわけなんです。もっとハッキリ云えば、犯人は、ある時期まで、あなたに発火坑の内

部を見られなくなかったのです。それで少しでも発火坑の開放を遅くらしめたのです」

「待ち給え」

再び係長が遮切った。

「いったいその犯人は、なにをそんなにわしに見られなくなかったのだ。さつき君と二人で、あの発火坑を調べた時には、この殺人事件と関係のあるようなものは、なかったではないか」

「ありましたとも。係長。しっかりして下さいよ。我々はあの発火坑で重大な発見をしたではありませんか。密閉された筈の峯吉がいらないという大発見を、いやそんなことではない。もっと大きな発見、あの天盤の亀裂と塩水です！」

この言葉を聞くと、辺りに立っていた坑夫達の間には、異様な騒ぎが起りはじめた。海水の浸入！この事実に較ぶればいままでの殺人事件など、坑夫達にとってはなんでもない。技師は、燃上る瞳に火のように気魄をこめて、人々を押えつけないがら係長へ云った。

「片盤を開けて下さい。そしてもう、炭^ト車を皆出してやって下さい」

やがて幾人かの小頭の、あわておののく手によって、重い鉄扉が左右に引き開かれると、片盤坑の中からワーンと坑夫達のざわめきが聞えて来た。汗にまみれた

運搬夫あともむきの女達が、小麦色の裸身をギラギラ光らして炭車トを押出して来ると、技師は進み出て唝鳴りつけた。

「皆んなここで石炭をブチ撒けて引きあげろ。炭タをあけて行くんだ」

女達は瞬間技師の奇妙な命令に顔を見合せて立止ったが、すぐその側から係長が黙って頷いているのを見ると、わけもなく技師の命令に従って行つた。

滝口坑の炭車トは、凡て枠のホゾをはずすと箱のガタンと反転する式のダンプ・カーであつた。運搬夫あともむきたちは技師の命に従つて、次々に出て来ると、その場で箱を反転さして積み込んだ石炭をザラザラとあけていった。みるみるそこには石炭の山が出来あがつた。が、十二、三台目の炭車トが箱を反転させた時に、ここでとてつもないことが持上つた。

大きな箱の中からザラザラと流れ出た石炭の中から、炭塵に黒々とまみれた素ツ裸の男が、転ろげ出て、跳ね起きて、面喰らつてキョトキョトとあたりを見廻わした。係長が叫んだ。

「やや、浅川監督！」

全くそれは、炭塊に潰されて死んだ筈の浅川監督であつた。咄嗟に身構えて飛びかかろうとする奴へ、すぐに技師は、係長からひつたくつたドスで思い切りひたと峯打ちを喰らわした。

監督がぶつ倒れると菊池技師は、魂消た係長とお品を連れて、立ち騒ぐ坑夫たちを尻目にかけて、炭車トコロに乗って開放された片盤坑へはいって行った。間もなく発火坑の前まで着くと、技師は、そこに置かれたままの「浅川監督の屍体」を顎でしゃくりながらお品へ云った。

「この死人をよく見てくれ。都合で監督の猿股などはかされているが、お前には、見覚えのある体だろう」

始め女は、死人におびえて立竦んでいたが、やがて段々死人のほうへ前かがみになると、誰の顔とも判らぬまでに烈しく引歪められたその顔に、灼きつくような視線を注ぎながら、進み寄り、屈みこんで、不意に妙な声をあげて死人の体を抱えあげながら、振返つて嘎しやがれ声で云った。

「うちの、峯吉です」

六

その頃、滝口坑では全盤に亘つて、技師の洩らした言葉が激しい衝撃を与えていた。始め一番坑から続々出坑して、あと半数ほどに残されていた坑夫達の間には、ひとたび海水浸入の事実が知れ渡ると、もうそこには統制もなにもなかった。人び

とは炭車トを投げ出し、鶴嘴を打捨てて、捲立まきたてへ、豎坑へ、潮のように押寄せて行つた。広場の事務所では、何処からかかかるのか電話のベルがひっきりなしに鳴り続け、滝口立山の両坑を取締る地上事務所から到着した救援隊は、逃げ出ようとする坑夫達と、広場の前で揉合こみあっていた。

どん尻の炭車トに飛び乗って、豎坑口へ急いそながらも、しかし係長は捨て兼ねたような口調で、技師へ訊ねるのであった。

「つまり丸山技師と工手と、それから峯吉を殺した男は、浅川監督だったんだね？」
技師が黙つて頷くと、

「じゃア一番あとから殺された峯吉は、それまで何をしていたんだ」

「峯吉は一番さきにやられたんです」

「一番さき？」

「そうです。恐らくあの水呑場で屠られたんでしょう。そして峯吉の屍体を、ひとまず側そばの穴倉へでも投げ込んだ監督は、それから、あの採炭場キリハへ火をつけたんです」
「なんだって、火をつけた？」

係長は思わず訊き返した。

「そうですよ。あなたは、あれがただの過失だなんて思ったら大間違いです。レールの上へ峯吉の鶴嘴を転がして置いて、闇の中で女を抱きとめ、夫婦の習慣と女の

安全燈ランプを利用して、炭塵に点火したんです。あれは實際陰險きわまるやり口ですよ。ああして置けば、あとで監督局の調査があつた時にも、発火の責任は、自分のところへは来ませんからね」

「しかし、何故また、あの採炭場キリハに火をつけたりしたんだ」

「それですよ」と技師は次第に声を高めながら云つた。

「さつきも云いましたように、それはあの採炭場キリハの中に、或る時期までは絶対に人に見せてならないものがあつたからなんです。だから、ああして発火坑にして人を入れないことにし、そしてまた、あとからその扉を開けようとして熱瓦斯ガスの検査にかつた丸山技師と、工手を同じ目的のために片付けてしまつたんです。するとあなたは、ここで、じゃア何故我々だけは無事にあの扉を開けることが出来たのか、つて訊かれるでしょう。それは、もうその時、或る時期が過ぎたからなんです。しかも、あの時私みたいな男がやつて来て、それまで皆んなの考えが、折角監督の思う壺にはまつて来ているのに、もしもこの殺人が坑殺者への復讐であるなら、監督も今度は殺されなければならぬぞと云い出したものですから、切羽詰つて穴倉の峯吉の屍体をずり出し、いかにも自分がやられたように見せかけて、炭車トロに人知れず潜り込んで嚴重な警戒線を突破り、もう用もなくなつたこの滝口坑から逃げ出そうとしたんです」

「待つてくれたまえ」係長が遮切った。

「君はさつき、その監督が人に見られまいとしたものは、あの天盤の亀裂と海水の浸入だと云ったね。しかしこれは、やっぱりこの殺人事件とは全然別の事象だし、おまけにあの採炭場キリハに火がつけられた時には、まだ天盤に異動はなかったんではないか？」

「冗談じゃあない。海水の浸入とこの殺人事件とは、密接な関係がありますよ。そして係長。あの天盤の異動は、むろん発火によつて一層促進されはしたでしょうが、実はもう発火前から動いていたんですよ。多分地殻が予想外に弱かったんだ。それに、この事は係長。もうあの時注意したではないですか。よく思い出して下さい。ほら、あの亀裂は、内側まで焼け爛れていたではありませんか。つまり焼けてから裂けたのではなくて、裂けてから焼けたんです。そうだ。監督は誰よりも先に、あの亀裂と、滴り落ちる塩水を、みつけていたんですよ」

「成る程。しかし何故監督はこんな危険をそんなに早くから知っていないながら、何故我々にまで隠そうとしたんだ。そして又、君の云う、その或る時期までとは何のことでだ」

「それが、この事件の動機なんです。監督は、海水浸入の事実を最初に発見すると、そいつを某方面へ報告したんです。そしてこの恐ろしい事実の外に洩れるのを、或

る時期まで喰い止めることによって、かなりの報酬にありつけることになってたんでしよう。或る時期とは、ほら、あなたも知ってるでしょう。私が此処へ着いた時に、札幌から監督へ電話が掛つて来たでしょう。あれですよ。あれに違いないんです。この考えには、間違いはありませんよ。私は自分の疑惑を確かめるために、さつき思い切つて、小樽の取引所へ電話を掛けて見たんです。するとどうです。中越炭坑株が、今日の午前の十一時頃から、かなり大きく動き出しているんです。十一時頃、からですよ。係長。現場の我々よりも会社の重役のほうが、数時間前に滝口坑の運命を知っていたんです」

技師はそう云つて、もう見えはじめた事務所の灯のほうへ、なにかまだ解けきらぬ謎を追い求めるような虚ろな視線を、ボンヤリ投げ掛るのであった。

ところが、それから十分もしないうちに、堅坑口で逃げ惑っている人びとを思わず釘付けにするような、不意にグラグラッと異様な地響きが、滝口坑全盤にゆるぎわたつた。そして間もなく、坑側の流水溝には、何処から湧き出づるのか夥しい濁水が、灼熱した四台の多段式タービン・ポンプを尻目にかけて、一寸二寸とみるみる溢れあがつて行くのであった……。

香水紳士

品川しながわの駅で、すぐ前の席へ、その無遠慮ぶえんりよなお客さんが乗り込んで来ると、クルミさんは、すっかり元気をなくしてしまった。

「今日は、日本晴れですから、国府津こうづの叔母さんのお家からは、富士ふじさんがとてもよく見られますよ」

お母さんからそう聞かされて、喜び勇んでお家を出たときの元気はどこへやら、座席ざせきの片隅へ小さくなつたまま、すっかり憎げしよかえて、窓越しに、うしろへ飛び去つて行く郊外近い街の屋根々々を、シヨンポリ見詰めつづけるのだった。

東京駅発午前八時二十五分の、伊東行いとうゆきの普通列車である。

その列車の三等車の、片隅かたすみの座席に、クルミさんは固くなつて座っているのだ。日曜日で、客車の中には、新緑の箱根はこねや伊豆へ出掛けるらしい人びとが、大勢乗っている。

しかしクルミさんは、箱根や伊豆いずへ出掛けるのではない。ずっと手前の、国府津の叔母さんのところへ行くのだった。

国府津の叔母さんのところには、従姉いとこの信子さんがいる。信子さんは、クルミさ

んより五つ年上の二十一で、この月の末にお嫁入りするのである。クルミさんは、日曜日を利用して、娘時代の信子さんへの、お別れとお慶よろこびを兼ねて、叔母さんのお家へ出掛けるのだった。

網棚あみだなの上の風呂敷ふろしきの中には、お母さんから托された、お祝いの品が包んである。昨日、お母さんと二人で、新宿へ出てととのえた品であった。が、その時、おなじ店で、お母さんに知れないように、自分だけのお祝いのつもりで、買い求めたもう一つの品物がある。

それは、クルミさんの制服のポケットの中に、こっそり忍ばせてあった。

可愛い真紅まっかのリボンをかけた、小さな美しい細工の木箱にはいった香水だった。

「なにか、あたしだけのお祝いをあげたい……」

と思ひ、

「なんにしようか知らず？」

と考へて、思いついた品だった。

「これ、あたしだけの、お祝い……」

そういつて、こっそり信子さんに渡すときの楽しみを、昨夜から胸えがに描えがいていたクルミさんである。

その香水の、可愛い木箱と一緒に、クルミさんのポケットの中には、チューイン

ガムとキャラメルがはいっている。快い小旅行への、楽しい用意であるはいうまでもない。

実際、クルミさんは、今日の国府津行を、もう三日も前から、夜も眠られないほど楽しみにしていた。

いよいよ今朝になると、もう御飯もろくに咽喉を通らない。

「駄目ですよ、クルちゃん。御飯だけは、ウンと食べて行かなくては……」
お母さんにたしなめられても、

「だって、いただきたくないんですもの。もし、おなかがすいたら、大船でサンドウィッチを買いますわ。あすこのサンドウィッチ、とてもおいしいんですもの」

「まあ、あきれたおしや、まさんね。どこからそんなこと聞きつたの？」

「あーらいやだ。だって、去年の夏、鎌倉の帰りに、お母さんが買って下さったじゃないの……」

そんなわけで、早々にお家を飛び出すと、いそいそとして東京駅へやって来たクルミさんである。

日曜日で、列車はわりにたて混んでいたが、それでも車室の一番隅っこに、まだ誰も腰掛けていない上等のボックスがみつかった。

一番隅っこであったことが、わけもなくクルミさんを喜ばした。

「ここなら、ガムを噛んだって、サンドウィッチを食べたって、恥かしくないわ」
「こころゆくまで、一時間半の小旅行が楽しめるのだ。」

まず、窓際へゆつくり席をとって、硝子窓を思いつきり押しあける。と、こころ
よい五月の微風が、戯れかかるように流れこんで来た。

やがて、ベルが鳴り、列車は動きだす。そして、クルミさんの楽しい小旅行がは
じまったのだ。

ところが――

そうして、まだ十分もしないうちに、列車が品川の駅へとまると、クルミさんの
ボックスへ、一人の相客が割りこんで来た。そしてそのお客さんのお蔭で、とたんに
クルミさんはすっかり悄げかえって座席の片隅へ、小さくなってしまったのであつ
た。

一一

その客は、年のころ四十前後の、眼つきの妙に鋭い、顔も体もいやに大きな、洋
服の紳士であった。

中折帽を眼深まぶかにかむつて、鼠色ねずみいろのスプリング・コートのポケットへ、何故か右手を絶えず突込んだままにいる。

最初、紳士は、車室の中へはいつて来ると、通路に立ったまま、素早く車内を眺めまわし、まだほかに席がないではないのに、ふと、クルミさんのほうをみると、さも満足したような表情をチラツと見せて、すぐにやって来ると、クルミさんの目の前の席へ、大きな体で無遠慮ぶえんりよに、黙ったままドンと腰掛けたのであった。

そして、笑うでもない、怒るでもない、まるでお面めんのような無表情な顔で、クルミさんの顔を、体を、シゲシゲと見るのだ。

帽子はかむつたまま、右手はポケットへ入れたままである。

クルミさんは、ヒヤリとして、身をすくめると、窓の外へ顔をそむけてしまった。列車はいつのまにか、新緑の大森おおもりの街を走っている。

空は、すばらしい日本晴れだ。

普通ならば、もうこの辺で、そろそろチューインガムを噛みはじめる予定だったのに、いまはそれどころではない。

「折角の楽しみも、これですっかりオジャンだわ」

クルミさんは、横顔のあたりに紳士の気味悪い視線を感じながら、ひそかに溜息ためいきをついた。

やがて紳士は、クルミさんのほうから顔をそらすと、窓の方を背にして、横向きになった。そして、コートの左のポケットから左手で新聞をとり出すと、相変らず右手はポケットへ入れたまま、不自由そうに片手で新聞をひろげて、それを顔の上へかぶせるようにしながら、熱心に読みはじめた。

窓の外を見ていても、クルミさんには、その動作がよくわかるのである。

時々、窓から流れ込む爽やかな風に吹かれて、新聞が、ペラペラと鳴る。すると紳士は、その都度顔をしかめて、こちらを見る様子である。

「窓をしめなければ、いけないかしら」

クルミさんはそう思った。

しかし、どうしたものか、妙にからだがすくんでしまつて手が出せない。だいたい、この紳士が乗り込んで来てからは、まだ、身動きひとつしていかないクルミさんである。それに、窓をしめるとすれば、どうしても、紳士の頭のうしろへ片手を持つて行かなければならない。そう思うと、いよいよ固くなってしまふのだつた。

突然、紳士が立ちあがつた。

そして、窓から外を見ているクルミさんにはものも云わず荒々しい調子で、硝子窓をしめてしまった。

クルミさんは、ハツとなつて身を退いた。

紳士の不機嫌ふきげんが、クルミさんの心を鞭打むちうちつたのだ。が、そればかりではない。もう一つ大きな理由があつたのだ。クルミさんは、紳士の右手を、はじめて見たのである。

誰でも知つていのように、汽車の窓をしめるには、必ず両手を使わなければならない。それで、今、立ちあがつた紳士も、この時はじめて右手をポケットから出して、両手で窓をしめたのであるが、丁度ちやうどその右手が、窓の外を見ているクルミさんの顔の前へ来てとまった。が、窓がしまると、素早く紳士はその手を引ツこめて、ポケットへ入れ、再び前の姿勢になつて、新聞を読みはじめたのだ。

しかし、その短い間に、クルミさんは、紳士の右手を見てしまった。

その手は、⁶中指が根元ねもとからなくて、四本指である。

「ああ、傷痕しょうこん軍人の方か知ら？」

瞬間、クルミさんはそう思つて、みるみる身内みうちが熱くなつた。

「もしそうだつたなら、あたしはなんて愚かな少女だろう。そういう立派なお方と、同席したことを不愉快に思つていたなんて！」

しかし、すぐにクルミさんの頭の中には、ムラムラとひとつの疑惑ぎわくが持上つた。

「でも、もし軍人さんだつたなら、どうしてそのように貴い御負傷を、こんなに不

⁶ 「その手は」は底本では「その手は」

自然にお隠しになるのだろうか？」

—— そうだ、たとい、軍人さんでなくって、普通にお怪我をなさった方にしても、こんな不自然な、隠されかたをされる筈はない。

クルミさんは、そう思うと、なんだか前よりも体が引きしまるような気がして、一層小さくなりながら、硝子越しに、ひたすら窓の外を見詰めつづけるのだった。

二二

間もなく列車は、横浜を過ぎた。

「ひよつとすると、横浜で下りてくれるかも知れない」

そう、ひそかに心の中で思っていたクルミさんの望みも、すっかり裏切られて、紳士は、相変らずクルミさんの眼の前にいる。それどころか、読みかけの新聞を、帽子をかむったままの顔の上へ乗せるようにしたまま、どうやら居睡りでもはじめたらしく、軽い鼾が聞えて来る。この分だと、何處まで行くか知れない。ひよつとすると、国府津よりも向うの、小田原か、熱海あたりまで行くのかも知れない。クルミさんは、とうとう観念してしまった。

「これでもう、大船のサンドウィッチも、みすみすダメになつてしまつた」紳士は、居いねむ睡むつているのであるから、サンドウィッチを買つたつて、構かまわないようなもの、しかし、物音を立てて、うっかり眼でもさまされたら、却かえつて困る。

クルミさんは、そおツと自分のポケットへ手をやつてみる。チューインガムもキラメルも、まだそのまままでジツとしている。

クルミさんは、固かたず睡ずを呑みながら、外を見た。

窓の外には、すがすがしい新緑に包つつまれた湘南しやうなんの山野が、麗かな五月の陽光を浴びながら、まるで蓄音機のレコードのように、グルグルと際限もなく展開されて行く。そういう景色を眺めながら、クルミさんはなんとかして自分の気持を引きたて、今朝の元気をとりもどそうと、つとめてみるのだつた。

ところが、気持が引きたてられるどころか、この時、却かえつて、大変7もないことが起きあがつてしまつた。

さつきから、少しづつズレかかつていた紳士の顔の上の新聞が、この時、ガサツと音をたてて、紳士の横坐りになつて膝ひざの上へ落ちて来た。

クルミさんはヒヤリとなつた。どうしようかと思つて、紳士の顔と、落ちた新聞

7 「大変もない」はママ

8 「クルミさんは」は底本では「クルミさんは」

を見較べた。

むろんこのまま、そつとしておくより仕方はない。がしかし、この時クルミさんは、思わずギクリとなった。

紳士の顔は、うしろのも、たれと窓枠の間へはまり込むようにして居睡っているの
で、帽子が前へズレて、半分隠されたようになってるが、それは、さっきのまま
の顔である。クルミさんが、びっくりしたのは、その顔ではなくて、落ちた新聞の
ほうである。その新聞は、落ちた拍子に裏返しになって、さっきまで紳士が熱心に
読んでいた方の面が出ているのだ。クルミさんは全くなにげなしにその新聞を見た
のであるが、思わずギクツとなって、あやうく声を立てるところだった。

それは三面記事で、上のほうの右肩のところ、次のような恐しい文字が、大き
な活字で印刷されてあった。

かくめん 覆面の盗賊、こんぎよう 今暁渋谷の××銀行を襲う、こうきん 行金を強奪して逃走す

それが見出して、その次に小さな文字が何行も並び、それから又、前よりは少し
小さな活字ではあるが、一層恐しい第二の見出しが印刷されてあった。

犯人は洋服姿の大男で、中指のない四本指の右手が最大の特徴、凶器を擬せられつつ沈着なる宿直員の観察

クルミさんは、急に眼の前がクラクラツとなつて、思わずうしろのもたれへよりかかつてしまった。

四

なんとという恐しいことだろう！

からだ中の血潮が、ドキドキと逆流するようだ。とてもジツとしていられない。が、さりとて、妙に体が硬張つて、声を立てることも、動くことも出来ない。

「人違いであつてくれればいいが！」

クルミさんは、一所懸命に自分を押えつける。しかし、その下から、ムクムクと恐しい考えが浮上つて来る。

——なるほど、洋服を着た人は何処にでもいるし、大きな男も何人もいるかもしれない。そして、中指を怪我して失つた方も、広い東京には何人もいるかも知れな

い。しかし、この三つの特徴が三つともピッタリあてはまるといような人が何人もいるものだろうか？

「しかも、この紳士は、極端きよくたんなくらい不自然に、四本指の右手を隠しているではないか！ そういえば、車室にはいつて来た時の態度からして、とてもおかしい！」
クルミさんは、ブルブルツと身ぶるいした。

——恐らくこの紳士は、最初車室にはいつて来たときに、素早すはやくあたりを見廻して、クルミさん一人だけのこの席をみつけると、相手を少女とみくびって、それであんな満足まんぞくそうな顔をしたのに違いあるまい。そして、昨夜あんな恐しい仕事をして睡ねむらなかつたので、熱海か箱根へ逃げのびる途中で、ついウトウトと、居睡いねむりをしはじめたのに違いない。

クルミさんは、もうジツとしていられなくなつた。が、さりとて声を立てたり動いたりすることはとても出来ない。

すぐ眼の前の新聞記事によれば、犯人は凶器きょくきを持っていたとあるではないか！
うっかり声でも立てたなら、どんなことになるかも知れない。

「こつそり車掌しゃしょうさんに知らせようか知ら」

しかし、そんなことをしたとて、無駄である。相手がそのように恐しい男では、却って騒ぎ立てて、平和な旅客りょきやくたちの間に、間違いで起きたなら、それこそ大変

である。いやなによりも、もうクルミさんは、石のようになってしまつて、出したくても声も出せなければ、動きたくても、身動きも出来ないのだった。永い時間がたつたようだ。

ジツとしたまま、こわごわ、もう一度新聞を見る。

「沈着ちんちやくなる宿直員の観察かんさつ」

という見出しが、ふと目についた。すると、少しばかり、クルミさんの心の中に、⁹ 明るいものがみつかった。

「そうだ、落ちつかなければいけない」

われと己おのれをおのれはげまして、思い切つて紳士の顔を見る。

すっかり居い睡ねむりが、本式になつたらしい。

列車は、もういつの間にか、幾つかの駅を通過して、だんだん国府津こふうづの町へ近づいて行くらしい。

ふと、クルミさんは、云いしれぬ恐しさの中から、なんともいえない口惜くやしさが、こみあげて来るのを覚えた。

考えてみれば、大変なことになつてしまつた。折角の楽しい旅行が、お蔭ゆかりで滅茶々めちやめちやになつてしまつた。たださえ、知らない大人の人の同席など、あまり歓迎したく

⁹ 「クルミさんの」は底本では「ルミさんの」

なかつた今日の旅行に、こともあろうに恐しい盗賊紳士の乗合わずなぞとは！ふとまた、クルミさんは、別の考えにとらわれる。

——いま、この客車の中に、このように恐しい紳士が乗っていることなぞ、誰も知らないのだ。あたしだけが知っている。このまま知らぬ顔をして、国府津で降りてしまつていいものだろうか？

——しかし、それかと云つて、どうして、自分のような少女の身で、こんなにふるえているような臆病さで、このことを人に知らせることなぞ出来ようか？

遠く、松原の向うに、見覚えのある国府津の山が見えだした。

「そうだ、もう、そろそろ荷物を下して置かなければならない」

急に我に返ると、クルミさんは、思い切つて、静かに立ちあがつた。手足がガタガタふるえている。まるで夢の中のしぐさのように、中々網棚の風呂敷包みが下せない。

が、やがてとり下すことが出来た。

紳士は、相変らず居眠つている。

と、この時、お祝いもののはいつたその風呂敷包みを膝の上へ置きながら、ふと、クルミさんの頭の中へ、とてつもない考えがひらめいた。すると、前よりもはげしくクルミさんの手足はふるえ出した。が、その眼は、急にいきいきと輝き出した。

しばらくクルミさんは、どうしようかと迷っているようであったが、窓の向うに国府津の海が見えだすと、いきなりクルミさんは、制服のポケットの中へ手を突っ込んだ。そして、真紅のリボンのかかった、小さな美しい木箱をとり出した。

それは、信子さんへのお祝いに、こっそり買求めて来た、あの香水だった。

クルミさんは、ものに憑かれたような手つきで、ぶるぶる顫えながら、その美しいリボンをほどき、レットルをはがして、木箱の蓋をあけると、中から、円い、可愛い香水の瓶をとり出し、その栓の封を切った。

クルミさんは、静かに前かがみになった。

栓を抜いた香水の瓶を、居眠っている紳士のほうへ、ワクワクふるえながら差出し、差出したかと思うと、素早く瓶の口を下へ向けて、紳士の洋服へ、惜しげもなくタラタラと中身を流しつくしてしまった。

列車は、国府津駅にとまった。

なおも居眠りつづける紳士を残したまま、クルミさんは、列車をあとにした。そして、駅を出ると、まるで火でも放ったようなはりつめた顔をして、すぐ駅前の、交番の前へ立ったのである。

五

しょうなん
湘南から伊豆の町々へかけて、警察電話が、活発な活動をしはじめた。

おだわら
小田原から伊東に至る十一の停車場の出口には、鋭い眼をした私服のお巡りさんたちが、眼でない、鼻をヒクヒクさせながら、まるで旅客のような格好で、こつそり立ちはじめた。

ここは、熱海の駅である。

午前十時四十六分、伊東行きの列車が到着すると、大勢の旅客たちが、広いプラットフォーム・ホームになだれ出た。

その人びとの中に混って、一人の異様な紳士が——満身にすばらしい香水の匂いをプンプンさせた紳士が、右手をスプリング・コートのポケットへ入れたまま、なにかひどく腑に落ちかねたような顔つきで、鼻をヒクヒクさせながら、人混みをかきわけるようにして、出口のほうへ歩いて行った。

人びとは、誰もかも、その紳士の発散する、強い激しい芳香に打たれて、びつくりしたように立ちどまると、不思議そうな顔をして、或はあきれたような顔をして、紳士を見返り、見送った。

すると紳士は、いよいよわけが判らないというような顔をしながら、少からずうろたえはじめ、急にいそぎ足になった。

と、その体から立ちのぼる芳香は、自ら捲きおこした風に乗って、いよいよひろまり、一層多くの人びとが立ちどまって、不思議そうに紳士を見詰めはじめた。

紳士は、泣き出しそうに顔をしかめた。が、急に今度は、真ッ赤になると、歩きながらしきりとなにかブツブツいいはじめた。そして前よりも一層はげしくうろたえはじめ、あわてた足どりで、プラット・ホームから地下道へ、地下道から駅の出口へと、折から爽やかな五月の微風に、停車場一面ときならぬ香水の嵐をまきおこなしながら、かけ出して行った。

このような紳士が、駅の出口で、さつきから鼻をヒクヒクやりながら、待ちかまえているお巡りさんを、ごまかすことが出来よう筈はない。……

その晩、東京のお家へ帰ったクルミさんのところへ、警視庁のえらいお巡りさんと、××銀行の支配人さんと、それから新聞社の人たちがやって来た。

写真をとられたり、色々な話を聞かれたりしたあとで、銀行の支配人さんがいった。

「お嬢さん。あなたのお蔭で、私共の銀行は、おお助かりをいたしました。ついて

は、何かお礼を差上げたいのですが、なにがお望みでしょうか？」

すると、クルミさんは、一寸ためらってから、こっそりいった。

「そうですね？　じゃ、折角ですから、あたしの使ってしまった、あの香水を買っていただきましょうか？　だってあたし、あの品を、従姉いとこの信子さんに、お贈りするつもりだったんですもの」

「おやおや、お嬢さん。私共は、もつと沢山のお礼を差上げたいのですよ。それはそれとして、さ、なんでも外にお望みの品を、もうひとつおっしゃって下さい」

すると、クルミさんは、一寸考えてから、恥かしそうに囁ささいた。

「じゃ、あたし、サンドウィッチをいただきますわ」

(おわり)

三狂人

赤沢あかざわ医師の経営する私立脳病院は、M市の郊外に近い小高いあかつちやま赭土山の上にこんもりした雑木林を背景に、火葬場へ行く道路を見下すようにして立っているのだが、それはもうかなり旧式の平屋建で立っていると云うよりは、なにか大きな蜘蛛でも這いつくばったという形だった。

全く、悪いことは続けて起るとはうまいことを云ったもので、今度のような世にも兇悪無惨な惨事もちあがる以前から、もう既に赤沢脳病院の朽ちかけた板塀の内には、まるで目に見えぬ瘴氣しょうきの湧きあがるように不吉な空氣おいおいが追々色を深め、虫のついた大黒柱のように家ぐるみひたむきに没落の道をたどっていたのだった。

もつとも赤沢医師の持論によると、いったい精神病者の看護というものは、もともと非常に困難な問題で、患者の多くはしばしば些細な動機やまた全く動機不明に暴行、逃走、放火などの悪質な行動に出たり、或はまた理由のない自殺を企てつまらぬ感情の行違いから食事拒否、服薬拒否等の行為に出て患者自身はむろんのこと看護者に対しても社会に対しても甚だ危険の多いものであるから、これを社会的な自由生活から隔離して充分な監護と患者自身への精神的な安静を与えるためには、どうしても一定の組織ある病院へ収容しなければならないのだが、けれどもこれも

又一面から考えると、大体が精神病患者というものは普通一般の病人や怪我人と違って自分自身の病気を自覚しない者が多いのだから、自分で自分の体を用心することを知らず、いづどこからどんな危険が降って来ても極めてノンビリしているから、その看護には特別な注意と親切が必要で、どちらかと云えば病院のような大規模なところよりも、むしろ家庭のような行届いた場所で少数の患者を預り所謂家庭看護を施したほうが成績もよいわけだし、第一看護の原則としても一人の患者には絶えず一人の看護者がつきまといなければならぬ、と云うのだった。

赤沢院長の父祖と云うのは、流石さすがに日本一の家庭看護の本場、京都岩倉村の出身であるだけに、いち早くこの点に目をつけた。そして互に矛盾し合う二つの看護形式を折衷して謂いわば家庭的小病院と云うようなものを創立したのだった。けれども一人の患者に必らず一人の看護者を抱えて置くという、これは仲々経費のかかる病院だった。初代目はどうやら無事に過ぎた。が、二代目にはそろそろ経営難がやって来た。そして三代目の当主に至って、とうとう私財を殆ど傾けてしまった。

新しい時代が来て、新しい市立の精神病院が出来上ると、その頃からたださえ多くもない患者がめきめきと減って行った。勲章をブラ下げた將軍や偉大なる発明家達が、賑にぎやかに往來ゆききしていた病舎を一人二人と去って行くにつれて、今までは陽気でさえあつた歌声も、何故か妙にいじけた寂しいものになって来て、わけても風

の吹く夜などはいたたまれぬほどの無気味さを醸し出し、看護人も二人三人と逃げるように暇をとって今ではもう五十を越した老看護人が一人、からくも居残った殆ど引取人もないような三人の患者の世話を続けていた。もつともこの外に薬局生を兼ねた女中が一人いて、院長夫妻を加えて七人の男女が暮しているわけだが、それとても荒廃しきった禿山の静けさを覆うには、余りにも陰気な集りに過ぎなかつた。

締め切った窓に蜘蛛の巣が張り、埃の積った畳に青カビの生えたような空室が数を増すにつれて、赤沢医師の気持も隠しきれない焦燥に満たされて来た。いつからか凝り始めた盆栽の手入れをしながら、うっかり植木の新芽を摘みすぎてしまったり、正規の回診時間にひどい狂いが起きたりするうちはまだよかつたが、やがて嵩んだ苦悩のはげ口が患者に向けられて、「この気狂い野郎！」とか「貴様ア馬鹿だぞ、脳味噌をつめ替えなくっちゃア駄目だ」などと無謀な言葉を浴せるようになる。側に見ていた看護人や女中達は患者よりも院長のほうに不安を覚えて、そつと眼を見交わしては苦い顔をするのだった。けれどもそんな時患者の方は、急に口をつぐんでいつも教えられたように院長の言葉を聞分けようとでもするのか、妙な上眼を使いながらのそりのそりと尻込みするのだった。

三人の患者は三人とも中年の男で、むろんそれぞれ本名があるのだが、ここでは特別な呼名をつけられていた。即ち「トントン」と云うのは一号室の男で、毎日病

室の窓によりかかつては、火葬場へ行く自動車の行列を眺めたり、電柱の鴉を見詰めたりしながら、絶えず右足の爪先で前の羽目板をトントンと叩く癖を持っていた。この癖は非常に執拗で、だから「トントン」のいつも立っている窓の下の畳の一部は、トントンとやる度毎の足裏の摩擦でガサガサに逆毛立ち、薬研のように穿かれていた。

二号室の男は、(断つて置くが、患者が少なくなつてから各室に散在していた三人の狂人は、なにかと看護の便宜上最も母屋に近い、一、二、三号室に纏めて移され、四号室から残りの十二号室までは全部空室になつていたので。)さて二号室は「歌姫」と呼ばれ、いい髯面の男だてらに女の着物を着て可憐なソプラノを張りあげ、発狂当時覚えたものであるう古臭い流行歌を夜昼なしに唄いつづけては、われとわが手をバチバチ叩いてアンコールへの拍手を送り、送つたかと思うとケタケタと意味もなく笑い出したりした。

次に三号室は「怪我人」と呼ばれ、決してどこも怪我をしているわけではないのだが、自から大怪我をしたと称して頭から顔いっぱい繻帯を巻き、絶対安静を要する意味でいつも部屋の中で仰向きに寝てばかりいた。偶々看護人でも近寄ろうものなら大声を上げて喚き出す始末で、他人の患部へ手を触れることを烈しく拒絶するのだった。けれども流石に院長にだけは神妙に身を委せ、時どき繻帯をとり替え

て貰つては辛うじて清潔を保っていた。

以上三人の患者達は、どちらかと云えばみんな揃つて温和な陽性の方で、赤沢病院が潰れようと潰れまいとそのようなことにはとんとお構いなく、狭い垣の中で毎日それぞれ営みにせつせと励んでいたのだが、それでもだんだん看護が不行届になつたり食事の質が落ちて来たりすると、陽気は陽気ながらも一抹の暗影が気力にも顔色にもにじむように浮出して来て、それが常にならない院長の不興の嵩みにぶつかつたりすると、ひどく敏感に卑屈な反映を見せたりして云うに云われぬいやな空気がだんだん色濃く風のように湧き起つていった。そしてその風は追々に強く烈しく旋風のように捲きあがつて、とうとう無惨な赤沢脳病院の最後へ吹き当つてしまつたのだ。

それは何故か、朝から火葬場へ通う自動車の行列が頻繁で、絶えず禿山の裾が煙幕のような埃に包まれた、暑苦しい日の朝だった。

老看護人の鳥山宇吉は、いつものように六時に目を醒すと、楊枝を啣えながら病舎へ通ずる廊下を歩いて行つたのだが、歩きながら何気なしに運動場の隅にある板塀の裏木戸が開放しになつてのを見たと、ハツとなつて立止つた。

ここでちよつと説明さして貰うが、赤沢脳病院の敷地は総数五百五十坪で、高い

板塀に囲まれた内部には診察室、薬局、院長夫妻その他家人の起居する所謂母家と、くの字に折曲つた一棟の病舎が百五十坪程の患者の運動場を中に挟んで三方に建繞り、残りの一方が直接板塀にぶつかっていて、板塀の病舎寄りのところに今いった裏木戸が雑木林へ向つてしつらえてあるのだが、むろん狂人の運動場へ直接続く木戸であるから母屋の勝手口なぞと違って表門同様に開放されると云うことは絶対になく、いつも固く錠がおろされている筈だった。もつとも時たま院長がここから裏の雑木林へ朝の散歩に出かけたりすることがあるので、ふと思いついた看護人の鳥山宇吉は、それでは院長が出られたのかなと思いつながら取りあえず木戸の方へ歩いて行つた。けれどもたとえ院長が散歩に出るにしても大事な木戸を開放しにすると云うことは、少しの間といえども決して許されぬことだ。鳥山宇吉はそう思いながら木戸まで来ると、立上つて不安そうに塀の外を見廻した。

誰もいない。

雑木の梢で姿の見えない小鳥共が、ピーチクピーチク朝の唄を唄っていた。すると宇吉はふと奇妙なことに気がついて思わず啣くわえた楊枝を手にとつた。

いつも朝早くから唄いつづける「歌姫」のソプラノが、そう云えば、今朝は少しも聞えない。「歌姫」のソプラノどころか、あれほど執拗でこうるさい「トントン」さえも、どうしたものか聞えない。ガランとした病舎はひどく神妙に静まり返つて、

この明るさの中に死んだように不気味な静寂を湛しじまえていた。全く静かだ。その静けさの中から、低く遅くだが追々速く高く、宇吉の心臓の脈打つ音だけが聞えて来た。

「……これア……どえらい事になったゾ！」

思わず呟いた鳥山宇吉は、みるみる顔色を青くしながらそのまま丸くなって病舎の方へ駆け込んで行った。

ガラガラ……バタンバタン……暫く扉を開け閉たてる音が聞えていたが、やがて悲しげな顫ふるえる声が「……せ、せんせいイ……大変だア……」と四号室から一号室へ、続く廊下を押し切つて、まだ寝ている母屋のほうへバタバタと駆けこんで行った。

「……大変だ。大変です。患者がみんな逃げてしまいましたぞオ……」

間もなく屋内が、吃驚びっくりした人の気配で急に騒がしくなった。

「先生はどうしました。先生は？」

「向うの寝室に……早く起して下さい」

「向うの寝室には見えません」

「いらつしやらない？」

「とにかく、患者が皆逃げちまいました」

「空室には？」

「全部いません」

「先生を起して……」

「その先生が見えません」

やがて鳥山看護人と赤沢夫人、続いて女中の三人が、しどけない姿で運動場へ飛び出して来た。

——大変だ。こうしてはいられない。

宇吉を先頭にして三人の男女は、早速病院の中から外の雑木林の中まで、眼を血走らせながら手分けて探しはじめた。が、狂人共はいない。そして間もなく人々は、今にも泣きだしそうな顔をして、裏木戸の前へ落集おちあつまった。

「……でも、先生は、どうしたんでしよう？」

女中がおどおどしながら云った。

物音に驚いた鴉共が、雑木の梢で不吉な声をあげだした。宇吉は膝頭をガクガク顫かたわしながら戸惑かたっていたが、不意に屈かたみこむと、

「おやッ。こいつア……？」

と叫んで前のめりになった。成る程木戸のすぐ内側には、ビール瓶のようなものが微塵に碎けて散らばっている。見れば病舎の便所に備えつけた防臭剤のガラス瓶だ。そしてその附近一帯に、もう乾枯ひからびて固くなりかかった赤黒い液体の飛沫しぶきが、点々と目につきだした。女中が黄色い声をはりあげた。

「鳥山。なにか引きずった跡じゃない？」

赤沢夫人の指差す先の地面には、たしかになにか重いものを引きずった跡が、ボンヤリと病舎の方へ続いている。そいつを縫うようにして赤黒い零しずくの跡がポタリポタリ……

三人は声を呑んでまろぶように跡をつけた。直ぐに板塀に沿って病舎の外れの便所へ来た。床板のないセメント張りの土間だ。だがその土間を覗き込んだ三人は、瞬間アツともギャツとも云いようのない恐怖の叫びをあげて釘づけになつてしまった。

土間一面の血の海で、その血溜りの真ん中へのけぞるように倒れた人は、昨夜のままのパジャマを着た明らかに赤沢院長の無惨な姿だった。血海の中に冷く光っているガラス瓶の欠片かけらでつけたものであろう、顔から頭へかけて物凄い搔傷かききずが煮凝にこりのような血を吹き、わけても正視に堪えぬのは、前額から頭蓋へかけてバツクリ開いた大穴から、なんと脳味噌が抜きとられて頭の中は空っぽだ。とられた脳味噌はどこへ行ったか、辺りには影も形もない……

急報を受けたM市の警察署から、司法主任を先頭に一隊の警官達が赤沢脳病院に雪崩れ込んだのは、それから二十分もあとのことだった。

司法主任吉岡警部補は、すっかり上つてしまった鳥山宇吉から一通りの事情を訊きとると、取りあえず部下の警官を八方に走らして、脱走した三人の狂人の搜索逮捕を命じた。

間もなく検事局の連中がやって来ると、直ちにテキパキした現場の検証や、予審判事の訊問が始まった。宇吉、赤沢夫人、女中の三人は、気も心も転倒したと見え、最初のうちしどろもどろな陳述で係官を手古摺らしたが、それでも段々落つづくに従つて、赤沢脳病院の現状からあのいまわしい雰囲気、院長の荒んだ日常、そして又三人の狂人の特長性癖等に就いて、曲りなりにも問わるるままに答えて行つた。

一方警察医の意見によると、院長の死は午前四時頃と推定され、その時刻には家人はまだ睡つていて、物音などは聞かなかつたこと。院長はいつも早起きで、寝巻のままで体操や散歩をする習慣であつたこと等々も判つて来た。

ひと通りの調査が終ると、検事が司法主任へ云つた。

「とにかく犯行の動機は明瞭です。問題は、三人の気狂いの共犯か、それとも三人の内の誰かがやって、あとは扉が開いてるを幸いそれぞれバラバラに飛び出してしまつたか、の二つです。ところで、犯人の逮捕に、警官は何名向けてありますか？」

「取りあえず五名向かわしました」

「五名？」と検事は顔を顰めて、「それで、なんとか情報がありましたか？」

「まだです」

「そうでしよう。五名じゃアとても手不足だ。だいたい逃げ出した気狂いは三人でしよう。それも隠れとるかも判らないし……」

云いながら検事は、ふと恐ろしい事に気がつく、みるみる顔を硬張らせながら、あとを続けた。

「そうだ、この場合、捕える捕えないどころの問題じゃアないよ。いや、こいつア大変なことになる……いいかね、犯人は狂人で三人、それもただの気狂いじゃアなく、突然兇暴化して、なにをしでかすか判らない連中なんだ」

「まったく」と予審判事が青い顔をして割り込んだ。「……そんな奴等が、万一、婦女子の多い市内へでも逃げ込んだら……どうなる？」

「恐ろしいことだ」と検事は声を顫わせながら、司法主任へ云った。「いや全く、ぐずぐずしてはられない。直ぐに警官を増援してくれ給え。そうだ、全市の交番へも通牒して……」

吉岡司法主任は、眼の色を変えて、あたふたと母屋の電話室へ駆け込んで行った。現場から警察へ、警察から市内の各交番へ……急に引締った緊張が眼苦しく電話

線を飛び交わして、赤沢脳病院の仮捜査本部は色めき立って来た。

間もなく増援されて来た警官隊は、二手に分けられて一部は市内へ、一部は脳病院の禿山を中心として郊外一帯へ、直ちに派遣されて行った。

けれども、好ましい情報は仲々やって来なかった。司法主任は苛立たしげに歯を鳴らした。まだこれ以上の兇悪な事件がもちあがらないだけが、せめてもの幸しあわせだった。

——だが愚図愚図してはいられない。少しも早く逮捕して、惨事を未然に防がねばならない。そうだ、それにしても、もしも狂人達が人を恐れてどこかへ身を隠したとしたなら、こいつは仲々困難な問題だ。

そう思うと司法主任は、いよいよじりじりはじめた。

——いったい狂人の気持として、こんな場合、隠れるだろうか？ いや、もし隠れるとしたら、いったいどこなどころへ隠れるだろうか？……そうだ、こいつア一寸専門家でなくては判らない。

正午ひるになっても吉報がないと、主任は決心して立上った。そして本部を市内の警察署に移し、留守を署長に預けると、赤沢病院とは反対側の郊外にある、市立の精神病院へやって来た。

乞こに応じて院長の松永博士は、直ぐに会ってくれた。

「ひどいことをやったもんですね」

もうどこからか聞込んだと見えて、あからがお緒顔の人の好きそうな松永博士はそう云つて主任へ椅子をすすめた。

「実はそのことで、早速ですがお願いに上りました」

「まだ、三人とも捕まらないんですか？」

「捕まりません」司法主任は苦り切つて早速切りだした。「先生。いったい気狂いなぞ、こんな場合、隠れるでしょうか？ それとも……」

「さア……捕まらないところを見ると、隠れてるんでしょうね」

「では、どんな風に隠れてるんでしょうか？……何ぶん危険な代物で、急ぎますので……」

すると博士は苦笑しながら、

「難問ですな。しかし、どうもそれは、その患者の一人一人に就いて細かに研究して見なくては判りませんよ。一般にあの連中は、思索も感情も低いんですが、しかし低いながらも色々程度があつて、その一人一人には、それぞれ勝手な色彩の理窟があるんです。で、率直に私の意見を申しますと、この場合問題は、何処へ誰がどんな風に隠れたかと云うことよりも、院長殺害が三人の共犯であるか、それとも一

人の犯行であるか、と云う点にかかっていると思います。もし一人の犯行だったなら、その犯人は一寸六ヶ敷いが、少くとも残りの二人だけは、今にきつと、興奮が去って腹でも空いたなら、その勝手な隠れ場所からソノソノと出て来ますよ。ナニ興奮さえ去ってしまえば危険はありませんまい。が、しかし、これが共犯だと……」

博士はそう云って椅子へ掛け直ると、急に熱を帯びた口調で後を続けた。

「……共犯だと、一寸困るんです」

「と云いますと?」

思わず司法主任が乗り出した。

「つまり一人の犯行だった場合に、その犯人だけが一寸無事に出て来にくいと同じ理由で、三人の安否が気遣われるんですよ」

「……判りませんが……どう云うわけで?……」

主任は六ヶ敷そうに顔を赭あからめた。

「なんでもないですよ」と博士はニヤリと笑いながら、「……これは私が、薬屋から聞いたんですが、なんでもあの赤沢さんは、最近ひどく憔悴して、患者を叱る時に『脳味噌をつめ替えろ』と云うような無謀な言葉をよく使われたそうですね」

「それです。それが動機なんです」

「待って下さい。……それで、私の一、二度耳にした限りでは、確か『脳味噌をつ

め替えろ』で、『脳味噌をとれ』ではなかったと思います。いいですか、『つめ替えろ』と『とれ』とでは、大分違いますよ」

「……ハア……」

主任は判つたような判らぬような、生返事をした。博士は尚も続けた。

「ね。馬鹿は馬鹿なりに、それ相応の理解力があるんですよ。『脳味噌をつめ替えろ』と云われて、利巧な人の脳味噌を抜きとつた男が、それから、いったいなにを、すると思えます？……」

「……」

主任は、無言のうちに愕然となつて立上つた。そして顫える手で帽子を掴むと、思わず松永博士にびよこんと頭を下げた。

「有難うございました。よく判りました」

すると博士は快活に笑いながら、

「いや、結構です。では成るべく早く、その可哀相な気狂いが、自分の頭を叩き潰して死ぬようなことのない先に、捕まえてやつて下さい」そう云つて立上りながら、博士はつけ加えた。「この事件には、教えられるところが多々ありますよ……誰でも、気をつけなければいけません……」

精神病院を引きあげた吉岡司法主任は、それでも何故か気持が楽だった。

松永博士の教えに従えば、脱走した狂人が一般人へ対して暴行すると云う危険性が、いくらかでも緩和されたわけだ。三人の狂人、或はその内の一人は、もう他人を傷付けることよりも、まず抜き取つて来た「先生」の脳味噌を、自分のそれと取替えることに夢中になっているのだ。だが、なんと云う気狂いじみた恐ろしいことだ。

吉岡司法主任は、一つの不安が去つた代りに、もう一つの別の恐怖に冷汗をかきながら、本部に収ると、やつきになって捜査の采配を振りつづけた。

だが、流石に専門家の鑑定は見事に当つて、やがて司法主任の努力は、段々酬いられて来た。

まず、その日の夕方になって、脱走狂人の一人「歌姫」が、とうとう火葬場の近くで捕えられた。松永博士の推断通り興奮の鎮まつた「歌姫」は西の空が茜色に燃えはじめると、火葬場裏の雑木林の隠れ家から例のせつなげなソプラノを唄い出したのだ。それを聞きつけた気の利いた用心深い私服巡査の一人が、近寄つてバチバチと手を拍いた。すると「歌姫」は瞬間唄い止んで、暫く疑ぐるような沈黙をみせたが、直ぐに安心したように再び悩ましげに唄いはじめた。巡査はもう一度拍手を

送った。今度は直ぐにアンコールだ。再び拍手。そしてアンコール。果ては笑声さえ洩れだして、二人の距離はだんだん縮まり、案外わけなく捕えられてしまった。

女の着物を着た「歌姫」が、自動車でステージならぬ警察へ連行されて来ると、司法主任は勇躍して訊問にとりかかった。が、直ぐにその相手が、到底自分の手におえられるようなただの代物でないことに気のついた司法主任は、松永博士のところへ電話を掛けた。

博士は、病院を退けてから、見舞いかたがた赤沢脳病院へ出向いていたが、主任の電話を受けると直ぐに来てくれた。そして事情を聞きとると、真先に「歌姫」を捕えた警官の機智を褒め上げた。

「いや大変結構でした。とにかくこう云う人達を扱うには、決して刺戟を以ってしてはいけません。柔かく、真綿で首を締めるように、相手と同じレベルに下って、幼稚な感情や思索の動きに巧たくみにバツを合せて行かなければいけません」

博士はそれから、「歌姫」を相手にして暫く妙な問答をしながら、それとなく鋭い眼で相手の身体検査をするらしかったが、直ぐに向き直って司法主任へ云った。

「この男は犯人ではありません。どこにも血がついていません。あれだけの惨劇を狂人がしかして、こんなに綺麗でいる筈はありません。……やはり共犯ではなく、残りの二人のうちの誰かがやったんでしょう。とにかく、この男は、もう元の住家

へ返してもよろしい」

そこで博士の指図通り、「歌姫」は無事に赤沢脳病院へ連れ戻されて行つた。

そして司法主任は、残る「トントン」と「怪我人」の捜査に全力を注ぎはじめた。ところが、それから一時間としない内に、松永博士の恐ろしい予言が、とうとう事実となつて報告されて来た。

それは——M市の場末に近い「あづま」と呼ぶ土工相手の銘酒屋の女将が、夜に入つて、銭湯へ出掛けようとして店の縄暖簾なわのれんを分けあげた時に、暗い道路の向うからよろよるとやつて来た男があつたが、近付くのを見ると女将はキヤツと声を上げた。着物の前をはだけた中年の男で、顔中血だらけにして両の眼を異様に据えつけたまま、お地藏様のように捧げた片手の掌ての上に、なにか崩れた豆腐のようなものを持つて見るからに蹠跟そうろうとした足取りで線路の方へ消えて行つた、と云うのだった。それを「あづま」の女将から聞込んだ警官の報告を受取ると、司法主任は蒼くなつて立上つた。そして松永博士に同行を乞うと、そのままとりあえず場末の銘酒屋まで車を走らせた。

そこで女将からもう一度前記の報告を確かめると、狂人が消えて行つたと思われる線路の方角一帯に亘つて急速な捜査をしはじめた。

恰度その頃、松永博士の所謂「興奮の鎮まって腹の空く時期」とでも云うのがやって来たのか、市内を縦貫しているM川の附近で、もう一人の狂人が捕えられた。

顔から頭へかけて繃帯をグルグル巻きにした「怪我人」で、恰度「歌姫」が出現した時のようにふらふらと橋の上へ立現われて、ひどく弱り切った風情で暗い水面を覗きこんでいた。それを通行人から報せを受けた警官が、蟬をつかまえるようにして捕えたのだ。「怪我人」は「歌姫」と違って少しばかり抵抗した。が、直ぐに大人しくなつて本署へ連れて行かれた。

この報告を線路の踏切小屋の近くで受取った司法主任は、駈けつけた警官に向つて直ちに口を切った。

「で、その気狂いは、着物かどこかに血をつけていなかったか？」

「ハア、少しも着けていません。ただ、どこかへ寝転んでいたと見えて、頭の繃帯へ藁屑わらくずみたいなものを沢山つけていました」

すると司法主任は、傍の松永博士とチラツと顔を見合せて笑いながら、

「よし。じゃアその気狂いを、赤沢脳病院まで送り届けてくれ。穏やかに扱うんだぞ」

「ハア」

警官が去ると、主任は博士と並んで、再び線路伝いに暗やみの中を歩きはじめた。

「いよいよ、判って来ましたな」

博士が云った。

「全く……」主任が大きく頷いた。「それにしても、いったいどこへ潜り込んだのでしようナ」

あちらこちらの暗やみの中で、時々警官達の懐中電燈が、蛍のように点ついては消え点いては消えした。

だが、十分と歩かない内に、突然前方の線路の上らしい闇の中から、懐中電燈が大きく弧を描いて、

「……ウあーい……」

と叫び声が聞えて来た。

「どうしたーッ」司法主任が思わず声を張りあげた。

すると続いて向うの音が、

「主任ですかア？……ここにおります。死んでおります！……」

こちらの二人は一目散に駆けだした。

間もなく警官の立っているところまで駆けつけると、主任はそこで、とうとう恐ろしい場面にぶつかってしまった。

線路の横にぶつ倒れた「トントン」は、恰度レールを枕にするようにしてその上

へ頭をのっけていたらしいが、既にその頭は無惨にも、微塵に轆き砕かれて辺りの砂利の上へ飛び散っていた。

やがて「トントン」の屍骸をとりあえず線路の脇へとり退けると、主任と博士は早速簡単な検屍をはじめた。が、間もなく主任は堪えかねたように立上ると、誰にもなく呟いた。

「いやどうも、ジツに恐ろしい結末ですなア……」

すると、まだ「トントン」の屍骸の前へ蹲るようにして、頻りにその柔かな、両足の裏をひねくり廻していた博士が、不意に顔をあげた。

「結末？」

と、鋭く詰るように云って、博士は、だがひどく悄然と立上った。

どうしたことか今までとは打って変って、その顔色はひどく蒼褪め、烈しい疑惑と苦悶の色が、顔一パイに漲っていた。

「待って下さい……」

やがて博士が呻くように云った。そして苦り切って顔を伏せると、惑うように暫くチラチラと「トントン」の屍骸を見遣っていたが、やがて思い切ったように顔を上げると、

「そうだ、やつぱり待って下さい。……貴方はいま、結末、と云われましたね？……いやどうも、私は、飛んでもない思い違いをしたらしい……主任さん。どうやらまだ、結末ではなさそうですよ」

「な、なんですって？」

とうとう主任は、堪りかねて詰めよった。すると博士は、主任の剣幕にはお構いなく、再びチラツと「トントン」の屍骸を見やりながら、妙なことを云った。

「ところで、赤沢院長の屍体は、まだあの脳病院に置いてありますね？」

四

それから二十分程のち、松永博士は殆ど無理遣むりやりに司法主任を引張って、赤沢脳病院へやって来た。

夜の禿山では、雑木の梢が風にざわめき、どこかで頻しきりに鼻ふくろが鳴いていた。

博士は、母屋で鳥山宇吉をとらえると、院長の屍体を見たい旨を申出た。

「ハイ、まだお許しがございませんので、お通夜も始めないでおります」

云いながら宇吉は、蠟燭に火をともして病舎のほうへ二人を案内して行った。

二号室の前を通ると、部屋の中から、帰って来た「歌姫」のソプラノが、今夜は

流石に眩くような低音で聞えていた。三号室の前まで来ると、電気のついた磨硝子すりガラスの引戸へ大きな影をのめらして、ガラツと細目に引戸を開けた「怪我人」が、いぶかしげな目つきで人々を見送った。四号室から先方さきは電気が廃燈になつていたので、廊下も真暗だ。

宇吉は蠟燭の灯に影をゆらしながら、先に立つて五号室へはいつて行つた。

「まだ棺が出来ませんので、こんなお姿でございます」

宇吉は云いながら、蠟燭を差出した。

院長の屍骸は、部屋の間油紙を敷いて、その上に白布をかぶせて寝かしてあつた。博士は無言で直ぐにその側へ寄添うと、屈み込んで白布をとり退けた。そして屍骸の右足をグツと持ちあげると、宇吉へ、

「灯あかりを見せて下さい」

と云つた。

顫える手で、宇吉が蠟燭を差出すと、博士は両手の親指で、屍骸の足裏をグイグイと揉みはじめた。揉みはじめたのだがその足裏は、どうしたことかひどく硬くて凹へこまない。どうやら大きな胼胝たごらしい。博士は、今度はもう少し足を持ちあげて、その拇指おやの尖端さきを灯の前へ捻ねじ向けるようにした。灯に向けられたその拇指は、だがなんと、大きく脹ふくれあがつて、軽石のようにコチコチだ。

途端に宇吉が、蠟燭を落した。

不意にあたりが真暗になった。そしてその真ッ暗な闇の中で、泣くとも喚くとも判ちぬ世にも恐ろしいな宇吉の音が、

「……ウあああ……そ、それア、『トントン』の足ですウ……」

けれどもその声が止むか止まぬに、もうひとつ別の、松永博士の、鋭い撃くような叫び声が、激しい登音と共に、闇の中を転ろげるように戸口のほうへつツ走った。

「主任ッ！ 直ぐ来て下さいッ！」

続いて廊下で、激しい登音が入乱れたかと思うと、なにかが引戸へぶつかって、ジャリンとガラスの碎ける音——

おッ魂消た司法主任が、夢中で廊下へ飛び出ると、二つの争う人影が、三号室の前で四ツに組んで転ころがっている。駈けつけて、戸惑って、だが直ぐ頭の白い繻帶めじるしを目標に、二十貫の主任の巨軀が、そっちへガウンとぶつかっていった。¹⁰

「怪我人」は直ぐに捕えられた。手錠はめを嵌はめられると、不貞腐ふてくされてその場へベタンと坐り込み、まるで夢でも見たように、妙に浮かぬ顔をして眼をパチパチやり出した。

松永博士は、腰を揉みながら立上ると、片手でズボンの塵ちりを払い払い、

「私は、格闘したのは、これが始めてです」

司法主任は、とうとう堪りかねて、

「いったい、こ、これア、どうしたと云うんです？」

すると博士は「怪我人」の方を見ながら、

「ふん。トボケてるね。……ほんとにトボケてるのか、わざとトボケてるのか、これから実験して見ましょう」

そう云つて「怪我人」の前へ屈み込むと、眼だけ覗いている繻帯頭の顔を、ジーツと睨みつけた。

「怪我人」が再びもがき始めた。

「主任さん。しっかり捕まえていて下さい」

そう云つて博士が、「怪我人」の頭へサツと両手を差伸べると、相手は俄然、死物狂いで暴れだした。主任は、ムキになって押えつける。とうとう二人は力余つて立つてしまった。博士も続いて立上ると、容赦なく頭の繻帯を解きはじめた。白い長いその布が、暴れながらも段々ほどけて、下から……顎……鼻……頬……眼！ と、いままでも博士の後ろで立竦たちすくんでいた宇吉が、肝を潰つぶしたように叫んだ。

「ややッ……これは先生ッ！」

——まったく、皆んなの前には、死んだ筈の赤沢医師が、蒼い顔をしてツツ立っ

ていた。

警察から差廻された自動車の中で、松永博士は云った。

「——こんな狡猾な犯罪は、聞いたことがありませんね。……いつも『脳味噌を詰め替えろ』と叱られた狂人が、とうとう狂人らしい率直さから、その教えを実行してしまった、と見せかけて、実は逆に狂人のほうを殺して、自分が死んだような振りをするなんて……成る程、荒唐治で脳味噌をとったりすれば、顔など誰の顔だか判らなくなってしまうからね。着物をとり替えて置きさえすれば、それでいいんですよ……だが院長、『トントン』と『怪我人』の屍体を間違えるなんて、えらい失敗をやったもんですね。……え？　ああ、銘酒屋の女将の見た男は、『トントン』じゃアなくてむろん院長ですよ。誰かにああ云う場面を見せて置いて、線路へ来ると、^{あつかひ}予め殺して置いた『怪我人』の頭を、いかにも脳味噌をつめ替えるために『トントン』が自身でしたように見せかけて、汽車に轢^ひかしたわけでしょう。この辺は流石に^{さすが}その道の人だけあって、狂人の心理を巧みにとらえていますよ。だが『怪我人』を殺して置いて、その癖自分で、事件の結末を早く完全につけるために、『怪我人』に化けてわざと一時捕まったから、いけないんですよ。そうすれば、いやでも私達は、線路で死んだ男を『トントン』だと思うんですからね。思うだけならいい

んですが、その『トントン』の足裏に、畳を凹くぼますほどにいつも擦りつけていたその足裏に、胼胝たごがなかったりして、駄目になったんです。……そうだ、あれは、先に病院で『怪我人』の方を殺して、線路のところまで『トントン』を殺すと、完全に成功しましたよ。そして二、三日のうちに、どこからか引取人が来たとても云って、贖にせの『怪我人』は、赤沢脳病院から永久に姿を消す……それから、一方赤沢未亡人は、病院を整理して物件を金に代え……そうだ、きつとあの院長には、莫大な生命保険もついていますよ……そして金を握った未亡人は、独りでどこか人に知れない片田舎へ引越して行く……そしてそこで、死んだ筈の主人とうまく落合う……おおかた、そんな風にするつもりじゃなかったでしょうかね。……いやとにかく、あの院長も気の毒な位いあせていたらしいが、しかしどうも、ああ云う無邪気な連中をおとりに使うてのこんな惨酷な仕事には、好意はもてませんね」

博士はそう云って司法主任の顔を見たが、ふとなにかを思い出して、いまいまして、そんな顔をしながら、ちよつと威厳をつくらうて附加えた。

「いやしかし、いずれにしてもこの事件には、教えられるところが多々ありますよ……誰でも、気をつけなければいけませんな」

三の字旅行会

赤帽の伝さんは、もうしばらく前から、その奇妙な婦人の旅客達のこと、気づきはじめていた。

伝さんは、東京駅の赤帽であった。東海道線のプラット・ホームを職場にして、毎日、汽車に乗ったり降りたりするお客を相手に、商売をつづけている伝さんのことであるから、いずれはそのことに気がついたとしても不思議はないのであるが、しかし、気がついてはいても伝さんは、まだそのことについて余り深く考えたことはなかった。

なんしろ、一日に何万という人を、出したり入れたりする大東京の玄関口である。一人や二人の奇妙なお客があったとしても、大して不思議に思うほどのことはないのであるし、第一、一旦列車が到着したとなれば、もう自分のお客を探すことで心中一パイになってしまい、まったくそれどころではないのであった。だから伝さんが、その婦人客達のことについて考えこむようなことがあったとしても、それは精々、お客にでもあぶれた退屈な時くらいのものであった。

ところで、伝さんの気づきはじめて婦人客達というのは、成る程考えてみれば、全く奇妙な旅客達であった。

それは、東京駅から汽車に乗る客ではなく、東京駅で汽車から降りる客の中にあつて、殆んど毎日きまつて、一人ずつ現れるのであつた。毎日、違った顔の婦人ばかりで、容貌といい身装みなりといい、それぞれ勝手気儘で、ほかの婦人客と別に違つたところがあるようでもなかつたが、しかし必らずその客は、東京駅着午後三時の急行列車から降りるのであつた。そして、よく気をつけてみると、必らずその急行列車の前部に連結された三等車の、前から三輛目の車から降りて来るのであつた。しかも、いつでもその婦人客達には、一人の人の好きそうな男が出迎えに出ていて、その出迎えの男に持たせる手荷物には、きまつて、赤インキで筆太に、三の字を書いた、小さな洒落しゃれた荷札やがついていたのであつた。

旅客の持つている手荷物、乃至ないしは手荷物を持つている旅客のお蔭で、オマンマを食べている赤帽の伝さんである。成る程、一見普通の婦人客と区別のつかないような平凡な婦人なぞいつでも満員で、降車客もゴツタ返すような混雑を呈するとはいいながらも、その妙な三の字を書いた荷札やつきの手荷物を持った、三時の急行の三等車の三輛目の婦人客に、いつからともなく気がついたとしても、不思議はないのであつた。

尤も、伝さんが、いちばんはじめその妙な婦人達のことには気のついたき、つかへといふのは、必らずしもその手荷物ばかりでなく、いつもその手荷物を持たされる、

例の人の好きそうな出迎えの男にもあった。

その男は、成る程人の好きそうな顔をしてはいたが、余り風采の立派な男ではなかった。いつでも薄穢うすぢれのした洋服を着て、精々なにかの外交員くらいにしか見えなかった。毎日三時少し前になると、入場券を帽子のリボンの間に挟んで、ひよっこりプラット・ホームへ現れ、ほかの出迎人の中へ混って、汽車の着くのを待つているのであった。汽車が着くと、男は必ず三等車の三輛目の車へはいつて行って、やがて、例の奇妙な婦人客のお供をして降りて来るのであるし、そのお客が男を従えて降りて来る頃には、もう伝さんは自分のお客のことで一生懸命になっているので、その顔を見覚えることなぞ到底出来よう筈もないのであるが、出迎えの男のほうは、なにしろ殆んど毎日のことであるので、いつの間にか顔も見覚えていたのであった。

二

最初のうち伝さんは、その出迎でむかえおとし男を、何処かインチキなホテルの客引かなんかであろうと考えた。そして、五月蠅うるさい商売敵がたきだと思った。しかし、だんだん日数が重なるにつれて、どうも只ただの客引にしては少し腕がよすぎると感づき、つづいて手荷

物の三の字と、三時の三等車の三輛目に気がついて、どうやらこれは只の客引などではなく、何か曰くのある団体の、一種の案内人——といったようなものではあるまいかと、考えなおすようになったのであった。そして結局、伝さんの疑問の中心は、まずその、毎日三時の汽車で上京して来る奇妙な婦人客の上へ、注がれるのであった。

——妙な女達だ。よくよく三という字に、惚れくさっているらしい。伝さんは、あせらずゆっくり考えた。

しかし、もともと余り物事を深く考えることの得意でない伝さんは、いつまでたつても、この問題に解決を与えられそうな、名案を、考え出すことは出来なかった。

そうして、いつの間にか、一月二月と時間が流れて行った。しかもその間、例の三の字気狂いの婦人客は、殆んど毎日のように三時の急行の三等車の三輛目でやって来て、相変らず出迎男を従えて、改札口のほうへ出て行った。考えてみれば、どうもこれは容易なことではない。もういままでに、一日一人で、百人近くのいろいろな婦人達が、気狂いじみたやりかたで上京しているのだ。それも、そもそも伝さんがその事に気づいてからの、大体の計算であつて、この奇妙な旅行者達が、まだ伝さんの気づかなかつた先からこのようなことを続けていたのだとしたなら、いったい何百人の気狂いが、同じように奇怪な方法をとつて上京しているのか、判らな

い。伝さんは、なんだか恐ろしくなつて来た。三という数字に關したものを、思つても見ても考えても、ヘンに気持が苛立いらだつて来て、そろそろ一人でこのことを包み隠している負担に堪えられなくなつて来た。

そこで伝さんは、とうとう思い切つて、例の奇妙な「案内人」にわたりをつけてみようと思ひ決心した。

或る日午後三時十分前。例によつて、ひよっこりプラット・ホームに現れ、多くの出迎人の後へ立つてボンヤリ三時の急行を待つていたその男へ、伝さんは、何気なく近づいて声をかけた。

「毎日ご苦労さんですね」すると男は、急に変テコな顔になつた。そしてひどくあわてた調子で、

「いやどうも、毎日のお客様で、やり切れませんよ」

そういつて、同情を乞うような目つきで、伝さんの顔を見た。伝さんは、すかさずいつた。

「いや、わしもこれで、二十年も赤帽稼業をしているから、お客様を待つ気持のつらさというものは、よく判るですよ。……時に、無躰ぶじつけなことをお聞きするが、あなたのお客様は、どうもまことに、不思議なお客さんばかりですね」

男は黙つたまま目を瞠みはつて、一層変テコな顔をした。

「いや、どうか悪く思わないで下さいよ。わしはどうも物好きな性分ですね。なんしろ、あなたの毎日のお客様を、それとなく拝見しているに、どうも、時間といい、客車はこといい、切符といい、荷札といい、どれもこれも三の字にひどく関係の深い御婦人達のように思われてね。これには何か、面白い因縁咄はなしがおあんなさるんじやねえかと、ついその、物好き根性が頭をあげて、お聞きしたいんですよ」

男は、前より一層困ったような顔をして、しばらく黙ったまま立っていたが、やがて、思い切ったように小声で切り出した。

「実は、お察しの通りですよ。私は、三の字旅行会というのに使われている、ま、一種の案内人といったような者ですがね。なんしろ雇人やといにんですから、深いことは知りませんが、お察しの通り私のお客様には、その三の字旅行会という会との間に、一風変わった因縁咄があるんですよ」

「ほほう。そいつア是非とも、お差支なかつたら、伺いたいものですね」

伝さんは思わず乗り出した。だがこの時、三時の急行列車が烈しい排気エキーストを吐き散らしながら、ホームへ滑り込んで来ると、

「じゃあ又この次お話しいたしましょう」

男は云い残して、いつものように三等車の三輛目へ乗り込み、今日はいつもより一段と美しい、年の頃二十八、九の淑やかな婦人のお供をして、大きなカバンを提げながら、改札口のほうへ向つて、神妙に婦人のあとから地下道の階段をおりて行つた。伝さんも、お客が出来て急に忙しくなつたので、その日はひとまずそのまま、忘れるともなく過してしまつた。

さて、その翌日、三の字旅行会の案内人は、いつものように到着ホームへやつて来ると、何分自分は、一介の雇人であるから、詳しい話は知らないがと、伝さんへ念を押して、昨日の続きをやりだした。が、その話は仲々の永話で、とても汽車を待つてゐる位の短い間で、一度に聞かれるようなものではなく、それから三日四日と度を重ねて、やっと聞かされ終つたところによると——なんでも、その三の字旅行会というのは、只の営利的な旅行協会みたいなものとは全然違つて、一種の慈善的な奉仕会であつて、陰徳を尊ぶ会長の趣意に従つて、会長の名前にしろ、全然秘密であるが、大体その会の仕事というのは、或る一定の地方に住つてゐる両親のなほ三十歳以内の婦人で、東京方面へ旅行をしたいという人のために、汽車賃と滞在費と、それから小遣いの三通りの経費を全部提供して、全く無料の暢気な旅をさせ

ようという、まるで嘘みたいな話であつた。尤も、それだけに条件も一寸面倒臭く、いま云つたような資格者で、その地方にあるその会の支部長の推薦がなければならぬのであつた。なんでもその支部長というのも、その地方ではかなり人望のある慈善家だそうであるが、その支部長の推薦を受けた、資格のある志望者は、例の三の字のマークを貰つて、それを手荷物へ着け、東京着三時の三輛目へ乗つて、上京しなければならぬのであつた。すると、それを目印にしてその案内人が迎えに出かけ、三時三十分までに会の事務所まで案内されて行くと、恰度その時間にやつて来た会長が、その客の旅行に要する経費を、尤もこれは三百円以内でないといけないうそであるが、兎に角その金を渡してくれるのであつた。条件といつてもそれだけで、もうそれからは、自分の勝手に好いたように遊び廻るなり、用事をするなり、することが出来るのであつて、幾日滞在しよう、何処へ泊ろうと、いつ東京を引揚げようと、全く勝手に案内人も見送りしなくてもいいことになっている、という事であつた。ところで、その会長というのが、これが又昔は只の貧乏人であつたそうであるが、いまはなかなかの金持で、もう相当な年寄りであるが、或る事情でその会を始めるようになってからは、降つても照つても必らず毎日午後の三時三十分には事務所へ出て来て、案内されて来た客に面会するのであつた。面会といつても、僅か三分間くらいのもので、会長はただ金を渡すだけでサッサと歸つてしまう。そ

れで、一日に一人しか、案内出来ないことになっているとのことであつた。

ところで、その奇徳な覆面会長が、何故このように妙な奉仕会を始めたか、そして又、何故そんなに三の字づくしのサービスをするのか、その根本的な事情について、ひと通りの話を聞いた伝さんが、質問の矢を向けると、三の字旅行会の案内人は、しんみりした調子に改まつて、こんな風に説明したのであつた。

「……そうそう、あなたも、定めしその点、不思議に思われたことでしょうね。いや、こいつは私も、会の会計をしている方から又聞きしたことです。全く詳しいことは知らないんですが、何んでも会長は、まだ貧乏していた若い頃に、自分のところへ引取ることの出来ないような子供をこしらえたんだそうですよ。女の子で、三枝みつえという名前をつけたそうですが、ところが、それがそもそもこの因縁咄おきの起はじまりで、最初は、母親の手許で育てられたんだそうですが、その娘さんの三つの歳に、可哀相に母親はふとした病気がもとで死んでしまい、娘さんは、関西方面の、或る慈悲深い人の手に渡つて、育てられることになったんですが、ところがこの娘さんが又、育つにつれて大変利口な子供になり、学校へ上るころには、もう自分の身の上をそれとなく気づいてでもいたのか、しきりと東京の空を憧れるようになってたんです。ところが悪いことには、三枝さんは生れつきの病身で、成長するにつれて段々弱くなり、女学校を出る頃にはすっかり病氣になつて、もう床についたまま

起きることも出来ない様になつてしまつたんだそうです。——肺病の一種じゃアないかと、私は思うんですがね。それで、ま、時には良くもなつたり軽くもなつたりしたでしょうが、兎に角憧れの東京へ出て来る程の体にはなれず、殆んど病床にばかり暮して、そのまま十年の月日がたつてしまい、恰度三十の歳の三月に、とうとう病氣に負けてしまい、東京へ行き度い行き度いと叫びながら死んでしまつたんだそうですよ。ところで、もうその頃、東京の父親は、幸運に恵まれて大変な金持になつていたんですが、ふとしたことからその娘の育ての親にめぐり会い、娘の亡くなるまでの可哀想な話を初めて聞かされると、あとに子供の一人もない父親は、氣も狂わんばかりに驚き打たれて、それまでは金儲けのことしか考えなかつた頑固な心に大変動が起り、可哀想な娘の菩提ほだいをとむらうことに自分の全財産を投げ出そうと決心したんです。それでまア、その可哀想な娘の名前と、その運命にまつわる奇妙な三の字に因んで、『三の字旅行会』を作りあげ、育ての親であるその慈悲深い人を支部長に仕立てて、その人の推薦に従つて毎日一人ずつ、物質的には兎も角、親のない淋しい三十歳以下の婦人で東京へ旅行したい人達を、三の字会員として、三の字づくしのサービスをするという——まア、大体そんな風な事情のように、私は聞いておりますがね。いやどうも、永話をいたしましたでしたが、これでまア、私の奇妙なお客さん達と、三の字旅行会の関係がお判りになつたでしょう。……とところで、

ひとつお願いしときますが、何分前にも申上げたように、会長は隠れた徳を尊ばれる方ですから、私の申上げたお話も、どうかあなたの胸にだけに収めていただいて、余り外へお洩らしにならないようにして下さい。……おや、どうやら列車がやって来ましたね」

そういつて、その奇妙な案内人は、永い話に結末をつけると、感じ入って立ち呆けている伝さんへ、軽く会釈を残して、その日のお客を迎えるべく、到着した列車のほうへ馳け去って行くのであった。

四

伝さんは、この話を四日に亘つて聞かされた。一日一回が、ほんの五分か十分の短い間であったが、それでも伝さんは、不思議な話を聞くうちに、その四日間というものは、まるで続き物の講談でも聞いている時のような、楽しさにひたる事が出来たのであった。

そしてそんなことがあつてからは、伝さんと三の字旅行会の案内人とは、急に友達のように親しくなつて来た。と云つても、二人が顔を合せるのは、ほんの短い間のことであるし、二人ともそれぞれに自分のお客を持っている体なので、別に毎日

親しく話し合うとういうようなことは出来なかったが、お互いに顔を見合わせるような時には、快よく挨拶しあうようになって来た。伝さんは、その案内人と、その後にある旅行会と、そしてその会の果報なお客さん達の持つている、いうにいわれぬ劇的な雰囲気の中へ、自分も一本加わっているような気がした。考えてみれば、伝さんの大勢の仲間の中で、この話を知っているのは、どうやらまだ伝さん一人だけらしい。伝さんは、なんだかそれが、得意にさえ思われてならなかった。そうして、十日二十日と、日がたつて行った。

ところが、このままで済んでしまえば、まず何でもなかったのであるが、ふとしたことから、伝さんと三の字旅行会の案内人との、ひそかな親交を、プチ破つてしまふような、飛んでもない事が持上ってしまった。

或る日のこと。赤帽溜だまりで昼飯を食べていた伝さんのところへ、降車口の改札係の宇利うり氏が、ひよっこりやって来て、いきなり云った。

「伝さん。お前さんは赤帽の親分だから、知ってるかも知れないが、毎日三時の汽車で一人ずつやって来て、いつも同じ男に出迎えられて行く女のお客さん達があるようだが、知ってるかい？」

「ええ、知ってます」

「どうだい、何かおかしなところがあるとは思わないかね？」

そこで伝さんは弁当を置くと、口の中のものをゴクゴク呑み込んで、やおら向き直り、

「大有りですとも。三の字旅行会の因縁咄という奴で……。知っているのはこのわしだけ。しかも口止めされているんですが、宇利さんになら、こつそりお話してもよござんしょう」

もう伝さんは、そろそろ心中の得意を、誰かに聞かせてやりたく思っていた矢先だったので、宇利氏の突然の質問に、わけもなく調子込んで、先日案内人から聞かされた話を、残らず得意になって喋ってしまった。すると聞き終った宇利氏は、ニツコリ笑いながら立上って、

「有難^{ありがと}う。ところで、伝さん。折入って頼みたいのだが、今日の三時に、改札の側へ立っていて貰えまいか。手荷物五つ分の手間賃を払うよ。ね、頼むぜ。いいだろう」

伝さんは、むろん二つ返事で引受けた。何のことは知らないが、兎に角、手荷物五つ分の稼ぎである。

やがて、三時がやって来た。宇利氏の後ろでボンヤリ伝さんの立っている改札口へ、三時の急行の旅客達が、雪崩^{なだ}れのように殺到して来た。伝さんは、ふと背伸びをして、旅客達のほうを眺め廻した。

今日の三の字旅行会のお客は、まだ二十を二つ三つ過ぎたばかりの、洋装の娘であった。例の案内人に大きなトランクを持たせて、晴ればれした顔をしながら、真ん中辺を、だんだんこちらへやって来る。宇利氏は、いったい何をしようというのだろうか。伝さんは、なんだか急に心配になつて来た。

ところが、やがてその洋装娘が、宇利氏の前までやって来て切符を差出すと、受けとつた宇利氏は、娘をやり過して置いて、いきなり手を前に出し、あとから妙妙について来て、伝さんへ目で挨拶しながら通り抜けようとした案内人を、ピタリさしとめた。

「一寸、あなた待つて下さい。すぐ済みますからこちらへ寄つていて下さい」
宇利氏は早口にそう云つて、手早く案内人を伝さんのほうへ押しやると、もう後の人の切符を忙しく受取りはじめた。

案内人は急にあわて出した。何か口の中でモグモグ云いながら人ごみの中へ押入るようにながら入場券を宇利氏の手へ差しつけるようにして、出口から五間けんも向うへ行つたところで後ろを振り返つて立止つてゐる例の娘のほうを顎で指し、

「お、お客さんの荷物を持つてゐるんですから、と、とおして呉れなきやア困るですよ」

すると宇利氏は、黙つたまま再び案内人を伝さんのほうへ押しやりながら、非常

な早さで案内人の手からトランクを取り上げると、伝さんへ、きびしい語調で、

「じゃア伝さん。君この荷物を、あのお客さんに上げて呉れ」

「いやいや、これは私の役目じゃから、私が持つて行かねばならん」

「伝さん。早くしてくれ。この方には一寸用があるんだから、荷物は君からお客さんに上げて呉れ！」

もう向うむきになつて、仕事を続けながら、叱るように云うのであつた。

改札係といえ、伝さん達よりは段違いの上役である。伝さんはピリツとして、トランクを持ったまま本能的に柵を飛び越え、立止っている若い婦人客のところへ馳けつけた。

五

するとこの時妙なことが起つた。その妙齡な美人は、いとも御氣嫌斜めな御面体ごめんていで、

「失礼しちゃうワ。そんなもの、あたしんじやアなくつてよ？」

いい捨てて向きなると、すたすたと出口のほうへ歩み去り、ぷい、と見えなくなつてしまつた。

一方改札口では、これ又一騒動持上っていた。何思ったか例の案内人は、宇利氏の背後から押しつけるようにして柵を飛び越そうとしたが、宇利氏に引きとめられて、しばらくゴテゴテと押し合い揉み合い、やがて駆けつけたほかの駅員達に取押えられて、どうやら観念したらしく、事務室のほうへ連れて行つた。宇利氏は再び向きなおつて、さっさと仕事をつづける。静かなものだ。

その晩、非番になつた宇利氏は、赤帽溜へやつて来て、ボンヤリしている伝さんへ、笑いながら切りだした。

「おい、伝さん。しつかりして呉れよ。……いつたいお前さんは、少し講談や小説本に夢中になり過ぎるからいけないんだ。ふん、三の字旅行会だなんて、飛んでもないヨタ咄ばなしにひツかかつてさ。あんなものは皆んな出鱈目でたらめだよ。僕だつて、もう暫く前から、あの案内人や、お客のことには気づいていたんだ。しかし僕は、お蔭でお前さんみたいな飛んでもない勘違いはしなかつたよ。第一、君は、その三の字旅行の婦人客達は、一定の地方からやつて来ると聞かされたろう。しかし、僕がいままで毎日、その婦人客達から受取つた切符の発行駅は、大阪だつたり、静岡だつたり、神戸だつたり、名古屋だつたり、いや全くバラバラで、一定の地方からなんてやつて来たものでは、決してないんだ。それでもまだお前さんは、その変テコな旅

行会を信じたいかね。いや、あつたことにしてもいい。が、兎に角、会長も會計も、それからいままで案内された、何百人というお客さんも、実は全くのヨタ咄で、ありはしないんだ。精々、今日捕まった案内人が会長で、それから某駅に、支部長が一人いるだけなんだ。この支部長の出張する某駅というのを、実は僕は、もう暫く前から調べていたんだ。それが、この頃になつて、大阪駅であることが判つた。

——手つとり早く、ことのあらましを申上げようかね。今日捕まったあの男は、神田の、或る万年筆屋の番頭で、三角太郎みすみたろうつていうどえらい先生なんだ。それで、この万年筆屋は、大阪に工場を持っているんだ。昨年あたりまではこの万年筆屋は、大阪の工場から何万本という万年筆を時々まとめて送らしていたんだ。ところがこの方の仕事も自分の手でやっている三角太郎氏は、今朝あたりもう大阪で捕まつている筈の、同類の『支部長』と一計を案じ出して、運賃詐欺をしはじめたのだ。つまり、時々大量に送る荷物を、毎日少しずつに分けて、カバンでもトランクでも、或はボール箱でも風呂敷包みでもなんでもいい。兎に角手頃な手荷物の恰好にこしらえて、それに例の赤インキで三の字のはいつた荷札をつけ、まず大阪の『支部長』がそれを持って大阪駅で入場券を買い、お客を送るようなふりをして、東京へ三時につく列車の、三等車の三輛目の網棚へ乗つけて、そのまま知らん顔をして引揚げる。列車はお客さんの手荷物と思ひ込んで、黙つて東京駅まで運んで呉れる。さて、

午後の三時には、三角太郎氏が、東京駅で入場券を買って、いかにもお客を迎えに行くようなふりをしてホームへはいり、三時についた急行の、三等車の三輛目の網棚から、『支部長』が置いたままになっている、その三の字のどぎつい目印のついた荷物を持って、誰れでもいいからお客の後ろにくっついて、さもそのお客を迎えに来たお供であるようなふりをしながら駅を出て行く、とまア、そういう寸法なんだ。それが、女の後ばかりついて降りて行ったというのは、これは自然の情でね。どうせ誰のあとへついて行ってもいいのなら、ジジむさい男のあとなぞついて行くよりは、若い女の後ろのほうが、よっぽど気持がいいんだからね。兎に角そのやり方やれば、まず一回一日分何円とかかる筈の運賃が、大阪と東京の二枚の入場券、つまりたったの二十銭で事が足りるんだから、随分便利な方法さ。それも二度や三度ではなく、もうこの一年近くも毎日続けていたらしいんだから、この節約された金高というものは、莫大なものだよ。もう判ったらうね。三の字なんて、荷物を送った列車と、車輛と、その荷物との目印に使ったものに過ぎないんだよ。それを、変に勘違いしたお前さんに、たずねられたので、即座にあんなヨタ咄を作りあげて、物好きなお前さんを煙に巻いたというわけさ。ところで、伝さん。僕も一つ洒落れてみたんだがね……いったい、今日は、何日だっけ？」伝さんは、一寸顔をしかめたが、すぐに飛び上るようにして云った。

「あ、そういえば、今日は、三日でしたっけ！」

（〈新青年〉昭和十四年一月号発表）

死の快走船

太い引きずるような波鳴りの聞えるうらさびた田舎道を、小一時間も馬を進ませつづけていた私達の前方まえには、とうとう岬の、キャプテン深谷邸ふかやが見えはじめた。

藍碧の海をへだてて長く突出した緑色の岬の端には、眼の醒めるような一群の白聖館が、折からの日差しに明々と映えあがる。向つて左の方に、ひときわ高くあたかも船橋ブリッジのような屋上露台テラスを構えたのが主館おもやであろう。進むにつれて同じように白い小さな船室風ケビンの小屋が見えはじめ、小屋の傍らにはこれも又白く塗られた細長い柱マストが、海近く青い空の中へくつきりと聳えだした。邸の周囲には一本の樹木もなく、ただ美しい緑色の雑草が、肌目きめのよい天鵞絨びろろどのようにむっちり敷き詰つて、それが又玩具おもちゃのような白い家々に快い夢のような調和を投げかける。が私達が岬へ近づくと従つて、それは雑草ではなく極めてよく手入れの行き届いた見事な芝生であることが判つて来た。

深谷邸の主人と云うのは、なんでも十年ほど前まで某商船会社で、歐洲航路の優秀船の船長キャプテンを勤めていたと云い、相当な蓄財たくわえもあるらしく退職後はこうして人里はなれた美しい海岸に邸を構えて、どちらかと云えば隠遁的な静かな生活をしていた謂わば隠居船長なのであるが、永い間の海の暮しが身について忘れかねたのか、ま

るで大海の中のような或は絶海の孤島のような荒れ果てたこの地方の、それも海の中へ突出した船形の岬の上へ、しかもまるでそれが船の上の建物でもあるかのよ
うな家を建てて日ねもす波の音を聞き暮すと云う。不幸にして、私はまだ一度もこ
の隠居船長に面識を持たないのであるが、そしていま又こうして夫人の重大な招き
の電話を受けて始めて深谷邸を訪れる機会を持ちながらもいまはもう会おうにも会
えない事情に立ち至つたのであるが、かつて私のところへ二、三度葉を取りに来た
この家の召使の言葉に依れば、なんでも深谷氏のこの奇妙な海への憧れは己れの住
う家の構えや地形のみではあきたらず、日常生活の服装から食事にも海の暮し
をとりいれて、はては夫人召使から時折この家を訪なう外来の客にいたるまで己れ
を呼ぶにキャプテンの敬称を強要すると云う、それはまるで海の生活を殆んどその
まま地獄の果までも引つ提げて行こうほどの激しいひたむきな執念だつた。されば
既に還暦を越した老紳士で人柄としては無口な穏かな人でありながら、家庭と云う
ものにかけてはまことに冷淡で、わけてもひとつの妙な癖を持つていてしばしば家
人を困らしていたとのこと。それはひとくちに云えば並はずれたヨット狂で、それ
も朝から晩まで附近の海を我がもの顔に駆け廻ると云う程度のもではなく、夜に
なつて辺りが闇にとぎされる頃から青白い海霧が寒む寒むと立てこむ夜中にかけて
墨のような闇の海を何処をなにほつつき廻るのか家人が気を揉んで注意をして

も一向に聞きいれないとのこと。もっとも私のところへ取りに寄来よこした薬と云うのが凡て主人の使うもので、それが皆一種の解熱剤であるのを見ても、大分無理な夜更しでもするらしいのは判つていたのだが、それならば私がその折召使こまづけに伝言した忠告も、恐らく家人の注意と同じように聞き捨てられたに違いない。可哀想に、年老いた頑かたくなキャプテン深谷氏は、そうして我れと我が命を落すような怪我あやまちをしでかしたのではあるまいか。老人がそのような夜更しをするさえ既に危険であるのに、殊にこの辺りの海は夜霧が多く話に聞けば兇悪な大鱈ふかさえも出沒すると云う。私は、夫人の慌だしい招きの電話を思い出しながら、きつとこの予感よかんは外れていないように思われるのだった。ともあれ私達は急がねばならない。

やがて私達は石ころの多い代赭たいしや色の、美しい岬の坂道にかかった。ちょうど日曜日で久々に訪ねてくれた水産試験所の東屋三郎あずまやさぶろう氏は、折角計画した遠乗りのコースをこのような海岸に変更されて最初のうち少からず鬱ふさいでいたのだが、けれども途々キャプテン深谷氏に関する私の貧弱な説明を聞き、いま又こうして奇妙な岬の深谷邸を眺めるに及んで、はやくも心中にいつもの好奇の病が首を起したのか、いまはもう私の先に立って進みはじめた。

私達の乗った馬は、倶楽部中で一番優れたものだったし、岬の坂道は思ったよりも緩やかだったので、それから十分としないうちに私達は深谷邸の玄関ポーチに辿りつい

た。折から待ち構えていた下男の手によって、間もなく私達の馬は建物の日蔭の涼しいところへ繋がれ、やがて私達は明るい船室風の応接室で、キャプテン深谷氏の夫人に面会することが出来た。

地味な黒い平服を着て銀のブローチを胸に垂れた深谷夫人は、まだ四十を幾つも越さぬらしい若々しさだ。大粒な黒眼に激しい潤いを湛えて、沈鬱な口調で主人の上にかかりかかった恐ろしい災禍について語るのだった。

私は夫人の話すところを聞くうちに、先程私の抱いた予感が見事に適中しているのに驚いた。夫人の語るところによれば、キャプテン深谷氏は昨夜もあの奇妙な帆走に出掛けたと云う。そして今朝はもう冷たい骸となつて附近の海に愛用のヨットと共に漂つていたので。私は医師としての職責を果すために、直に夫人を促して、別室に置かれた深谷氏の屍体の検査をしなければならなかった。けれどもそこで私は、この事件をかくも異様な恐るべき物語にしてしまったところの驚くべき最初の事実を発見しなければならなかった。

キャプテン深谷氏の屍体は、片足を鱗にもぎとられた見るも無残な痛ましいものであったが、検死を進めるに従つて、はからずも頭蓋の一部にビール瓶様の兇器で殴りつけられた、明かに他殺の証跡が残されているのを発見した。

私は驚きに顫えながらも、つとめて平常を装うようにして、静かに夫人に訊ねた。

「御主人の屍体は、ヨットのの中にありましたか？」

すると夫人は私の顔色を見取つてか、急に不審気なおどおどした調子で答えた。

「いいえ、船尾スターンの浮袋へ、差通されたように引つかかつて、ロープで船に引かれるように水びたしたしになつておりました」

「ヨットは最初誰が見つけましたか？」

私は再び訊ねた。

「下男はやくわの早川はやくわでございます。あれは、白鯨号しじやうめいごうを見つけますと、すぐに泳いで、連れて来てくれました。でも先生、なぜでございます」

「奥さん、これは、大変重大な事件でございます。——御主人は、昨晚何時頃にお出掛けになりましたか？」

「さあ……」と夫人は蒼褪あおぞめて小首かかしを傾げながら不安な様子で、「いつの間に出掛けましたか……なんでも今朝の七時に主人の寢室しんしつに参りました時、始めてそれと気づいたほどでございますので……それに、主人が夜中せいらいんぐに帆走セーリングをいたすことなど、それほど珍らしくもございませんので……」

この時東屋氏が、怵こちえかねたように傍らから口を入れた。

「失礼ですが、御主人は、なぜ夜中になぞ帆走セーリングをなさるのですか？」

すると夫人は困つたように、

「……あれが、あの人の、道楽なのでございます」

そう云つて淋しそうに、笑うとも泣くとも判らぬ表情をした。

「いつも御主人は、お独りで帆走セイリングされるんですか？」

私が訊ねた。

「はい……でも、時々家人を誘いますので、そのような時には、下男に供をさせることにいたしておりました。でも——」

「昨晚は？」

「昨晚は一人でございましたが——」

恰度この時、二人の紳士が室内へはいつて来た。私達は満たされぬ思いでひとまず口を噤つぶんだ。深谷夫人は立上つて、二人の紳士を私達へ紹介した。

「こちらが、主人の友人で黒塚様と被仰おつしやいます。こちらが、私の実弟で洋吉ようきちと申します。どうぞ宜よろしく」

キャプテン深谷氏の友人黒塚と云うのは、見たところまだ四十を五つと越していない、かつ、ぶくのいい隆としたアメリカ型の紳士で、夫人の実弟洋吉と云う方は、黒塚氏に較べて体も小さく年も若く色の白い快活そうな青年だ。二人共同じような純白の三つ揃いを着て、どことなく洒脱な風貌の持主だった。

形ばかりの簡単な挨拶を済ますと、私は早速夫人へ、前の続きを切り出した。

「失礼ですが、只今こちらの御家族は？」

「家族、と申してはなんですが、只いまのところ、この方達も加えまして、女中のおきみと下男の早川と、わたし妾達夫婦の六人でございます」

私は二人の紳士へ訊ねた。

「失礼ですが、御二人とも永らく御滞在ですか？」

「ええ、いや」と洋吉氏が引きとつて答えた。「僕はずつと前からいますが、黒塚さんは、昨夜着かれたばかりです」

「昨夜、ああ左様ですか」と今度は夫人へ、「ではもう一度お訊ねしますが、昨晚御主人は、お独りで帆走セイリングに出られたんですな？」

「ええそれはもう」

夫人はそう云つて、もどかしそうに私を見た。そこで私は思い切つて乗り出すと、「では申し上げますが、実は皆さん……どうもこれは、私の力だけではお役に立たないことになりました。御主人の死は、御自身の過失によるものではありません。一応警察のほうへ、御電話して戴かねばなりません」

すると今まで私の執拗な質問に、先程から何故か妙に落着のない不安気な様子を見せていた深谷夫人は、どうしたことか急に眼の前の空間を凝視みつめたまま、声も出さずに小さく顫えだした。

二人の紳士は、さても面倒なことになったと云う様子で、暫く手を揉み合わせていたが、やがて荒々しく室を出ていった。

居残った私達三人の間には、妙に気不味い沈黙がやって来た。が、まもなく夫人は、なにか意を決したように顔をあげると、訴えるような様子で私達へ云った。

「……こんなことにでもならなければ、と思っていたのですが……実は、あの……昨晩から、主人の様子が、いつもと変っていたのでございます」

「と被仰ると？」

私は思わず訊き返した。

「はい、それが、あの……あれはなんでも、ラジオの演芸が始まる頃でしたから、宵の七時半か八時頃と思いますが、その頃から、なにかあったのか急に主人は落着きを失いまして、ひどくそわそわしはじめたのでございます……」

夫人が一寸言葉を切ると、東屋氏が口を入れた。

「失礼ですが、その頃に御来客はなかったですか？」

「ございませんでしたが」

夫人が眉を顰めた。すると東屋氏は、扉の方を顎で指しながら、

「只今の黒塚さんと被仰る方は？」

「あの方のお出になつたのは、九時頃でございます」

「ああ左様そらうですか。ではその前、つまり御主人がそのようになられる前に、御主人と話をされたような御来客はなかったですか？」

「ええ、お客様はおろか、昨日きのうは郵便物もございませんでした。もつとも、いつだった、此処ここを訪ねて下さる方は、滅多にございませんが——」

夫人はそう云つて先程のあの淋しげな顔色をチラツと見せた。が、すぐに次を続けた。

「……でも確かに、なにかひどく心配なことが起きたに違いございません。それは心配、なぞと云いますよりも、いつそ恐怖とでも申しましようか……こう、ひどく困った風であちらの別館はなれの方の船室ケビンの書斎へ籠りまして、暫く悶えてでもいたようでございますが、恰度心配してこっそり様子を見に参りました私は、そこで主人の、物に怯えるような独言ひとりごとを聞いたのでございます」

「どんなことですか？」

私は思わず急せぎ込んだ。

「はい、あの、恰度私の聞きましたのは、なんでも主人が、こう卓を叩いて、うわずった声で、『明日あすの午後ひるだ、明日あすの午後ひるまでだ』と、それから低い声で、怯えるように、『きつとここまでやって来る』とそれだけでございますが……それから急に主人は、さもじつとしていられないように立上つて室へやを出て来たのでございますが、

恰度そこに立っていました私を見つけますと、一層不機嫌になりまして、いままでついぞ口にしたこともないような卑しい口調で、お前達の知ったことではないと云うように叱りつけるのでございます……でも先生。まさかこのようなことになるうなぞとは、存じもありませんでしたので、それに……こんなことを申上げるのもお恥かしい次第でございますが、あのひとは、平常から邪険な、変った人でございまして、逆らわないに限ると思ひまして、心ならずもそのまま自室へ下つて、先に寝んだのでございます……それが、もう今朝は、こんなことになりました……」

夫人はここで始めて眼頭に光るものを見せると、堪え兼ねたように面を伏せてしまった。

私達は、顔を見合せて、席を外すことにした。

廊下に出ると、私は東屋氏に寄りそうようにして云つた。

「……驚いたねえ……大変なことになったものだ」

すると東屋氏は、考え深そうに、小声で云つた。

「深谷氏の怖れていた奴が、明日の午後、つまり今日、でなくて昨夜やつて来たわけだな」とそれから急に改まって、「君、警察の連中が此処へ着くまでには、まだまだ時間があるよ。遠い凸凹道だから、三時間は充分かかる。ね、ヨットを見せて貰おう。昨夜深谷氏が乗つたと云うその問題のヨットだ。……僕はなんだか、ひどく

この事件に興味を覚えるよ」

そう云つて彼は、私の肩に手をかけた。

本来私は、余り好事家ものずきのほうではないつもりだが、東屋氏にこう誘われると、どうしたものか理性より先に口のほうが「うん、よし」と返事をしてしまった。

そこで私達は来合せた洋吉氏に断つて玄関ホーチへ出ると、下男に案内を頼み、岬の崖道を下つて岩の多い波打際に降り立つた。

二

恰度これから午後にかけて干潮時と見え、艶つるのある引潮の小波さざなみが、静かな音を立てて岩の上を漑さらっていた。

キャプテン深谷氏のヨット、白鮫号は、まだ檣柱マストも帆布セイルも取りつけたままで、船小屋の横の黒い岩の上に横たえてあつた。最新式のマルコニー・スループ型で、全長約二十呎フィート、檣柱マストも船体ハルも全部白塗りのスマートな三人乗りだ。紅あかと白の派手なだんだら縞を染め出した大檣帆メンシルの裾は長い檣柱マストの後側から飛び出したトラペラーを滑つて、恰度カーテンを拵しらげたように展ぜられ、船首ブラウの三角帆ジブと風流フウリウに対して同じ角度を保たせながらロープで止められたままになっている。舵うきは浮囊うきぶくろを縛りつけた

ロープで左寄り十度程の処へ固定され、緑色の海草が、舵板ラダーの蝶番へ少しばかり絡みついていた。

東屋氏はロープの端の浮囊を指差しながら下男に訊ねた。

「御主人の屍体はこの浮囊へ通されて船尾スターンに結びつけてあつたんですね？」

「ええ、そうです」

下男が答えた。

東屋氏は頷きながら、

「きつと、鱧ふかに片附けさすつもりだったんだな……ところで貴方あなたは、昨夜御主人のお供をしなかつたのですね？」

「はい、いつでもキャプテンのお召しがない限り、お供はしないことになっております」

この物堅いハッキリした下男の答は、ひどく私を喜ばした。東屋氏はなおも続ける。

「いったいキャプテンは、何なにしに夜中になぞ、ヨットへ乗るんですか？」

「ただ帆走はしり廻られるだけです。あれが、キャプテンの御趣味なんです」

「結構な御趣味ですね」

東屋氏は皮肉に笑いながら、今度はヨットの中へ乗り込んだ。

「君、警察官が来るまでは、余り現場に触れないほうがいいんだよ」

けれども彼は私の忠告などには耳もかさず、大童おわらわになつてあれこれと船中を物色していたが、やがて檣柱マストの側へ近附くと、大檣帆メンスルの裾の一部を指でこすりながら、

「血が着いているよ。やつぱり深谷氏は、このヨットの途中で殺されたんだな」

私も東屋氏の言葉について動かされて、近附いて見た。成る程紅白だんだら縞のところには血痕らしい飛沫の痕がある。東屋氏は一層乗気になつてヨットの床を調べはじめたが、やがて今度は狭い棧さんの間から、硝子瓶かけの缺らしいものを拾い上げて私に見せた。で私は、

「やつぱり兇器は、ビール瓶だろう」

すると彼は私の肩を叩きながら、

「駄目だよ先生、これをビール瓶だなんて云つちやあ。こいつは海流瓶だよ、まあビール瓶とよく似ているがね。この中へ葉書やカードを密封して、人目につきやすいように、ほら、外側をこんな風にエナメルで着色して、海流の方向速度等を知るために、海の中へ投げ込む原始的な漂流手段だよ」

そう云つて東屋氏は、今度は下男へ、

「この邸には、勿論海流瓶なぞいくつもあつたでしょうな？」

「はい。やはりキャプテンの御趣味でして」

けれども東屋氏はそれには答ええないで、

「まずこれで、兇器も現場も確かめられたわけだ、時に貴方が、今朝この船に泳ぎ着かれた時に、この他に何か船中に残っていませんか？」

「別に、ございませんでしたが……食卓用の、ソフト・チョコレートチューブが一つ落ちていました」

「それはどうしました？」

「空でしたから、海の中へ捨ててしまいました」

「捨てた？」

東屋氏は呆れたように苦笑いしながらヨットを降りかけたが、ふと船尾寄りの小さな船艙に眼をつけて、再び戻ると、その蓋を開けて中を覗き込んだ。が、やがて身がかがめてその中へぐつと上半身を突込むと、黒い大きな貝をひとつ拾いあげた。「おや、面白い貝だね」私は覗き込むようにして云った。「恰度鳥の飛んでいるのを横から見たような恰好だね。なんと云う貝だろう？」

「マベ貝だよ。穢きたない貝さ」

東屋氏が云った。すると下男が、

「この附近には、そんなものはいくらもあります」

けれども東屋氏は暫く黙ってマベ貝を弄いじっていたが、やがて面白くもなさそうに

再び貝を船艙に戻しながら、

「……どうも確かに、深谷氏と云うのは、変り者だね。よくよく海と縁が深いらしい……」

云いながら彼は、片手を船縁ふなぐりに掛けるようにしてヨットから飛び降りた。そして今度は白く塗られた船体ハルの外側に寄添って、船底の真ん中に縦に突き出した重心板センターボードの鉛の肌を軽く平手で叩いて見ながら、

「いいヨットだなあ。バランスもよさそうだ」

と急に重心板センターボードの下端部を、注意深く覗き込みながら、

「こりや君、粘土が喰つ附いてるじゃあないかね？」

私と下男は、云い合したように東屋氏の側へ寄って覗き込んだ。

成る程重心板センターボードの下端部の、鉛と木材の接ぎ目の附近に、薄く引っこすったように柔かな粘土が着いている。

「この白鮫号は、今朝水から上げたなり、まだ一度も降ろさないですね？」

「ええそうです」

下男が答えた。

「するとこの粘土質の泥は新しいものだし、この附近は岩ばかりだし……」と東屋氏は私の方へ笑いながら、

「つまり昨晚深谷氏の乗ったこの白鮫号は、一度何処か粘土質の岸に繋がれた訳だね。そして、この重心板が船底から余分に突出しているために、船底のどの部分よりも一番早く、一番激しく、粘土質の海底と接触する……」

「ふむ」

「そしてその海底には、ほら、その舵板の蝶番に喰つ附いている海藻が、それは長海松と云うんだが、そいつが、一面に繁茂しているに違いない。その種の海藻は、水際

の浅いところに多く繁殖するからね」

私も下男もこの推論には、ただ恐れ入るより他なかった。全く海のことにかけては、私などなんにもならない。

東屋氏は重心板を離れると、今度は横たえられた白鮫号の船体に嘔りついて、スマートな舷側に沿って注意深く鋭い視線を投げかけながら、透したり指で触って見たりしていたが、不意に私達を振り返った。

「一寸見に来給え」

そこで私達も船体に寄り添って、東屋氏の指差す線に眼を落した。

なんのことはない。半分乾枯びかかった茶褐色の泡の羅列が、船縁から平均一呎ほどの下の処に、船縁に沿って、一様に船をぐるっと取り巻くようにして長い線を形造っているだけだ。何処にでも見受けられるありふれた現象だ。例えば、潮の引

いてしまった岩の上にも、砂の上にも――。

「なんだ、泡の行列か……」

思わず云いかけた私も、しかし意味ありげな東屋氏の視線に合つて、直に彼の云おうとしている意味を汲み取つた。

「ああなるほど、君は底に粘土質の泥と長海松の生えている海岸の水面に、この茶褐色の泡が浮いていた、と云うんだね？」

「うむ、だが僕は、もつと素晴らしい事実気がついたんだ」

そう云つて今度は下男に向つて、

「この辺は、波は静かでしょうね？」

「ええ、ま大体……」

「昨夜は？」

「海霧があつたほどですから、無論風でしたでしょう」

「よし、ともかく船を出そう」

東屋氏は進み出た。

この速製の探偵屋に最初のうち少からず危気を覚えていた私も、いまはもう躊躇するどころなく、下男と力を合わせて白鯨号を水際へ押し出した。

やがてヨットが静かな磯波に乗つて軽く水に浮ぶと、東屋氏は元氣よく飛び乗つ

た。そしてなにかひどく自信ありげに、

「さあ。これから、一寸興味ある実験を始める。船の水平を保つように、各自の位置を平均して取つてくれたまえ」

東屋氏は上機嫌で船縁に屈み込むと、子供のように水と舷側の接触線を覗き込んでいたが、不意に立上つて私をふん捉えた。

「君、何貫ある？」

「何貫つて、目方かね？」

「そうだ」

「よく覚えていないが、五十疋キロ内外だね」

「ふむ。よし」

と今度は下男に向つて、

「君は？」

「私もよく覚えていませんが、六十疋キロ以上は充分ありましよう」

「成る程。——僕が約五十六疋キロと……一寸君達、そのままできてくれ給え」

そう云つて両手で抑えるように私達を制すると、そのまま岸に飛びあがつて行った。が、間もなく大きな石を二つ程重そうに抱えて来て、船に積み込ませた。

「さあ、もう一度船の水平を保つために、各自の位置に注意して。いいですか」

そう云つて東屋氏は、前と同じように屈み込んで舷側を覗き込んでいたが、間もなく微笑みながら立上つて云つた。

「よし。これで恰度よい——。ところで、先程僕が面白い発見をしたと云つたのは、これなんだよ。つまり、僕と君とそれから下男と、そしてこの大小二つの石と、合計しただけの重量が、一層正確に云えばいまこの白鮫号に乗つかっているだけの重量と同じだけの重量が、そうだ、人間なら大人三人位の重量が、昨夜この泡のある海面に浮いていた同じ白鮫号の中に乗つかっていたのだ。つまり深谷氏は、昨夜一人だけでヨットへ乗つていたのではない。誰かと一緒に乗つていたのだ」

「成る程」

「そしてだ。その重量は、泡のある海面で、この白鮫号の上から、消えてなくなつたのだよ」

「どうして?」

私は思わず問い返した。

「だって、もしもそうでなかったなら、いま僕は、こうしてこんな発見をすること出来ないよ。その泡の海から、波にびたつ、かれながら白鮫号がここまで漂つて来る間に、柔かな泡は、すっかり波に洗われちまつてる筈だからね」

「うむ。全くだ。判つた、判つた。つまり深谷氏の屍体が、その泡の浮いていると

ところで水中に投げ込まれ、船尾スターンへロープで繋がれたんだな」

「そうだ。だがそれだけじゃあない。ただ深谷氏の屍体が船外に投げ出されただけではなく、深谷氏よりもっと重かった筈の彼以外の重量——人間なら二人の大人だ。そうだ。深谷氏の親愛なる二人の同乗者——それも、恰度その個所で船から降りてしまったのだ。つまり白鮫号はすっかり空かどになったわけさ。ね、いいかい、深谷氏の体重が一つ減った位では、とても白鮫号はそんなに軽く浮かないからね。試みに——」

云いかけて東屋氏は岸に飛び上った。

「それご覧。舷側の吃水線と、君の所謂泡の行列って奴との間隔を注意してくれ給え。僕が一人降りたって、二吋インチとは隔てが出来ないだろう……キャプテン深谷氏だって、僕と大した違いはない筈だ。従ってそればかりの間隔は、船が漂っている内に、殆んど波に犯されてしまうべきだ。殊にヨットは、人が乗っていたりすると、揺れ易いからね。——さあ今度は、皆んな降りてみて下さい」

で私達は、早速岩の上へ飛び上った。

するとヨットは急に軽く浮き上って、泡の線と吃水線の間には、平均五吋インチほどの隔たりが出来てしまった。成る程これでは、小さな浪ぐらいでは、とても全部の泡を消すことなど出来っこない。東屋氏は再び続ける。

「つまり深谷氏の二人の同乗者は、その泡の浮いた粘土質の底の海岸で、深谷氏の屍体を船尾スタインへ繋ぎ、白鯨号をすつかり空からにして自分達も降りてしまったわけだ。ところで、この茶褐色の粘り気のある泡は、普通の潮や波の泡ではない。もつと複雑な空気中の、或いは水中の埃その他無数の微粒子によつて混成されているのだ。そしてこの種の泡は、広い海面よりも、入江や、彎曲した吹き溜りと云うような岸近い特殊な区域に溜っているものだ。——ところで、この邸には秤はかりがありますか？」

東屋氏は下男に訊ねた。

「あります。自動台秤の大型な奴が、別館はなれの物置の方に」

「結構、結構。——さあ、もうこれで、いまこの白鯨号へ乗った全部の重量と、深谷氏の体重を計りさえすれば、二人の同乗者の目方も判ると云うわけだ。極く簡単な引算でいい」

「こりや面白くなって来た」

私は思わず呟いた。東屋氏は笑いながら、

「いやどうも有難う……ではもう、この位でいいだろう。引揚げよう。おっと、この二枚の帆の装置と云うか、トリムと云うか、固定された方向だね。こいつは、右舷の前方から吹き寄せる風に、ひとりでに押されるように仕掛けられた訳だ。そして、左寄り約十度に固定された舵——ははあ、つまり、船を自然に大きく左廻りに

前進させようと云う——泡のある吹溜りで深谷氏の同乗者が仕掛けたテクニックだな。よし。さあ出掛けよう。君、その石を持ってくれ給え」

三

東屋氏は大きな方の石を、私は小さな方の石を、お互に重そうに抱えて、崖道を登りはじめた。軽く吹き始めた潮風が、私達の頬を快く撫で廻す。下男のはやくヨットの艫綱ともしなを岩の間の杭に縛りつけたり、船小屋からシートを取り出してヨットの船体ハルへ打掛けたりしていたので、私達よりもずっと遅れてしまった。

私達が崖道を半分ほど登った時に、深谷家の女中が馳け下りて来て、仕度が出来たから昼食を認めるしたたよう申出た。

ところが東屋氏は、早速彼女をとらえて短刀直入式に質問を始めた。

「こちらの御主人は、いつも夜中に海へ出て、いったい何をされるんですか？」

「さあ……」

と彼女は驚いたように眼を睜みはりながら、

「でも、夜中にヨットへお乗りになるのは、キャプテンの御趣味なんですもの……」「随分変わった趣味ですね……貴女あなたも、お供をしたことがありますか？」

「ええ、暫く以前のことですが、一度ございます……綺麗な、お月夜でございま
た」

「ただこう、海の上を帆はし走り廻るだけですか？」

「ええ。でも素晴らしい帆走セイリングですわ」

「お月様でも出ていればね」

と東屋氏は話題を変えて、「時に、昨日の夕方、他所よそからのお客さんはありません
でしたか？」

「夕方ですか？ ええございませんでした」

「黒塚さんは？」

「あの方は九時過ぎでした」

「電話は？」

「電話？ ええ、掛りません。あの電話は、殆んど飾りでございますわ」

「昨夜御主人は、なにを心配して見えたんですか？」

「え？……さあ、少しも存じません。なんでも大変、お顔の色は悪うございま
した
が——」

彼女は不審気に東屋氏を見た。

「では昨夜は、誰れと一緒にヨットへ乗られたんですか？」

「いいえ、キャプテンお独りだけでございました」

「何時頃出られたんです」

東屋氏は益々執拗だ。

「さあ、存じませんが……早川さんと私は、それぞれお先へ寝まして戴きましたので——」

「ではどうして、キャプテン独りで出られたのが判ったのです？」

「それは……」と彼女は明かに困った風で、「でも、ヨットは今朝、キャプテン独りで漂っていましたので」

東屋氏は一息つくくと、改めて云った。

「キャプテンは、随分変わった方でしたかね？」

「ええ。風変りでいらつしやいました。……そして、なんでも『これは儂の趣味じや』と被仰るのが口癖でございました」

やがて私達は、崖道を登り詰めた。

「物置のある別館と云うと、あれなんですかね？」東屋氏は岬の最尖端の船室造りの建物に向つて、歩きながら言葉を続けた。

「もう少し、私と話をして下さい」

「はい」

彼女は仕方なさそうについて来た。

「あの黒塚さんと云う方は、どう云う人ですか？」

「ああ黒塚様ですか」と彼女は幾分元気づいた様子で、「なんでもあの方は、以前キャプテンの乗っていらした汽船で事務長をなさっていらつしやるとかで、休航毎にああしてお遊びに来られます」

「御年配は？」

「さあ、四十位？　と思いますが……まだお独身ひとりで、快活なお方ですから、キャプテンよりもむしろ奥様や洋吉様とお親しい様子で……」

「ああその洋吉さんと云う方は、奥さんの御舎弟ですってね」

「ええそうです。チョコレートのお好きな、随分モダンな方で、この春大学を御卒業なさってから、ずっとこちらにいらつしやいますわ」

「チョコレートが好き？」

私は瞬間、先程の下男 of 言葉を思い出して、思わず口を入れた。「それで、昨夜何時やす頃に寝やすまれましたか？　洋吉さんは」

「昨夜ですか？　存じません。なんでも黒塚様と御一緒に、久し振りだからって随分遅くまで御散歩のようでしたので——」

恰度この時、下男の早川が私達に追いついて来た。そしてもう別館はなれの物置の入口

まで来ていた私達へ、

「秤は此処にございます。一寸お待ち下さい」

そう云つてポケットから鍵を取り出した。

東屋氏は女中へ云つた。

「いや、もう結構です。有難う」

そこで彼女は、ほつとしたように急いで、主館おもやの方へ引返して行つた。そして間もなく私達は物置の中へはいつて、銘々めいめいに秤へ懸りはじめた。

先ず東屋氏が五六・一二〇キロ、次に私が五五・〇〇キロ、下男の早川が六五・二

〇〇キロ。二つの石は合せて一四・六〇〇キロ。そして合計一九〇・九二〇キロ。――

東屋氏は、以上の数字をノートへ記入しながら、

「合計一九〇・九二〇キロと、さあよし。つまりこれが、昨夜の白鯨号に加えられた、最高の重量と云うわけだ。……じゃあここらで、昼食にありつくとしようか」

そこで私達は物置の外に出た。けれども東屋氏は、物置の直ぐ右隣のスマートな船室ケビン風の室へやを見ると、思いついたように早川へ云つた。

「これが、キャプテンの書斎ですね？」

「ええそうです。船室ケビン、船室ケビンと呼んでいる特別の室でございます。やはりキャプテンの御趣味に従つて七、八年前に建てられたものでして、お許しがなくては誰でも

這入れないことになっております」

「成る程、じゃあもう、永久に這入れないわけですね」

東屋氏は皮肉を云いながら歩き出した。

「ロージを兼かねた美しい主館おもやの食堂では、窓に近い明るい場所にテーブルを構えて、深谷夫人と黒塚、洋吉の三人が、悲嘆のうちにも、もう和やかな食事を始めていた。そこで私達も席について気味さを避けるように窓の外の美しい景色を眺めながら、人々の仲間に加わった。

ここから見ると、海の姿は一段と素晴らしい。遠く左の方には薄紫色の犬崎が、私達の通つて来た海岸へ続くのであろう、この大きな内海を抱きこむようにして、漂渺みぎわたる汀を長々と横えている。向つて右側には、油を流したような静かな内湾地帯だ。幾つもの小さな岬が重なり合つた手前には、ひとときわ目立つて斑まだらな禿山のある美しい岬が、奇妙に身を曲くねらして海の中へ飛出している。凡て右側の湾の多い陸地は、深い山が櫛の歯のように海に迫り、蜘蛛の子を散らしたような磯いそ馴なれ松まつが一面に生い茂っている。この邸以外には人家らしいものとしてなく、見渡す限り渺茫たる海と山との接触だ。青い、ぼかし絵のようなその海を背にして、深谷氏の船室ケビンが白々と輝き、風が出たのか白い柱マストの上空を、足の速い片雲が夥しく東の空へ飛び去っていた。

やがて食事が済むと、紅茶のカップを持ったまま、窓の外を見ながら東屋氏が口を切った。

「あの柱は、何になさるのですか？」

「あああれは、汽船の気分——を出すためとか申しまして」

夫人が物憂げに答えた。「あれも主人の、趣味でございます」

「尖端の方に妙な万力が吊るしてありますな？」

「ええ、そう云えば、時にはあの尖端に燈火を点けることもございました……年に一度か二度のことですが、なんでも、いつもより少し遠く、沖合まで帆走する時の目標にするとか申しまして……」

「ははあ」

と東屋氏はいずまいを改めて、

「いや、随分いい眺望ですなあ」

「お気に召しましたか？」

洋吉氏が口を入れた。

「いや、全く美しいです。こんな美しい海岸でしたら、穢い泡などが浮き溜っているようなところはないでしょうなあ？」

すると洋吉氏は、

「いや。ところがあるんですよ」

と窓の外を指差しながら、「ほら、あそこに、静かな内湾のこちらに、妙に身を曲ねらした、処々に禿山のある岬が見えますね。あの岬は鳥喰崎と呼ばれていますか、あの先端の向う側が、一寸鉤形に曲つていて、そこに小さなよどみと云いますか、入江になった吹き溜りがあります。その吹き溜りには、濃い茶褐色の泡が平常溜っています……去年の夏水泳をしながらあの中へはまり込んで、随分気味の悪い思いをしましたから、よく覚えていますよ」

「ああそうですか。……時に貴方は、大変チョコレートが好きだそうですね？」
このぶつきら棒な質問には、明かに洋吉氏も驚いたと見えて、複雑な表情をして東屋氏を見返した。

「ああ、いや」と東屋氏は妙な独り合点をしながら、「実は今朝、ヨットのの中にチョコレートのチューブがあつたそうですので、私はまた、貴方が昨晚……」

「冗談じゃあない」

洋吉氏が流石に色をなして遮った。「成る程私は、チョコレートが好きです。が、あれは、昨日の午後に、姉と二人で帆走した時の残りものです。昨夜は、僕は黒塚さんと一緒に、おそくから山の手を散歩していたんです」

「ははあ、ではその御散歩中、ひよつと怪しげな人間に逢いませんでしたか？」

「逢いませんでしたよ」

と今度は、いままで黙つて巻葉シガを燻らしていた黒塚氏が乗り出した。

「では、海の上に、白鮫号は見えませんでしたか？」

すると黒塚氏は、口元に軽く憫あわれむような笑いを浮かべながら、

「なにぶん闇夜で、生憎薄霧さえ出ましたからね……」

そこで東屋氏も笑いながら、

「お風邪を召されませんでしたか？」

とそれから急に真顔になって、「ところで、大変あつかましいお願いで恐縮ですが、貴方と洋吉さんのお二人に、一寸お体を拝借したいんですが？」

「よろしいですとも……だが、なにをなさると被仰おつしやるんです？」

「あの物置の、秤かかに懸かつて戴かきたいです」

「と被仰おつしやると……いったい又なんのためにそんな事をなさるんですか？」

「ええその、この事件に就いて、少しく愚案が浮びましたので……」

「はて？ 少しも合点がいきませんか……我々の体を天秤へ乗つける——？」

「つまりですな……犯行当時の白鮫号に、人間が合計三人以上、正確に云えば、一

九〇キロ瓩強の重量が乗つかつていた、と云う私の推定に対する実験のためにです」

「ど、どうしてそんな事が断定出来たのですか？」

「先程拝見しました白鯨号の白い舷側の吃水線から、一樣に五吋程の上のところに、水平な線に沿って、茶褐色の泡の跡が残っております。でこの五吋の開きは、正確な計算によりますと、約一九〇・九二〇疋の積載重量の抵抗、白鯨号の浮力に対する抵抗を証明して居るのです」

すると黒塚氏は軽く笑い出した。そして、冷やかな調子で口を入れた。

「成る程ね。しかしわれわれ玄人側から見ると、貴方のそのお考えには、少々異論が出ますな……」

東屋氏の顔が心持緊張した。私もついつり込まれて、思わずテーブルの上へ乗り出した。

「貴方はローリング、つまり横揺れを考慮に入れていない」と黒塚氏が始めた。

「御承知の通り、このローリングは、どんな船でも多少にかかわらず必ず作用するものでしてね。で、この場合、空の白鯨号の吃水線上五吋のところに泡の線が着いていたにしても、それをもつて直に九〇疋強の重量が積載されていたと断定するのは、甚だ早計な観測だと思ふのです。と云うのは、たとえそれだけの重量の抵抗がなかったとしても、ローリングによって船が左右に傾けば、その角度の大小に従つ

て舷側の吃水線は上下します。そしてもしも海上に泡が浮いていたとすれば、幾度か上下した吃水線のうちの最上の線に沿って、その泡は残ります。つまり空の船が水平に浮かされた場合の標準吃水線以上の位置に、貴方の見られた、第二の別な、泡の吃水線が、何にも乗らなくても、ローリングで作られるのです。成る程あの吹き溜りでは、波はなし、岬の陰で風も少い訳ですから、縦揺ビッチングなどはしないでしよう。が、ローリングは、多少にかかわらず必ずいたします。ですから支那の司馬温公みたいに、池に舟を浮べて象の重さを計るような具合には行きませぬ。貴方の一九〇〇キコ 厄説は、少々早計でしたな」

そう云つて黒塚氏は、葉巻シガーの吸い差しを銀の灰皿の中へポンと投げこんで、両腕を高く組みあげた。

成る程流石さすがに専門家だけあって、論説もなかなか行き届いている。私は急に心配になつて東屋氏の形勢を窺つた。ところが東屋氏は一向に平気で、安心したように緊張を解くと、静かに始めた。

「大変有力なお説です。だがここでひとつ、私の素人臭い反駁をさして貰いましよ。でその前にもう一度申上げて置きますが、あの泡の吃水線は、白鮫号の船体ハルの周囲、舷側全体に亘つて同じ高さを持っているのです。つまり泡の吃水線は船首プロウも船尾スタインもどの部分も一樣に水平であつて、少しの高低もないのです。——で、私の考

えとしましては、只今被仰ったローリングの作用には、原則として必ず中心となる軸、と云いますか、まあこの場合白鯨号の船首と船尾を結ぶ線、首尾線とか竜骨線とか云う奴ですね、とにかくその軸がある筈です。でもし、貴方の被仰ったように、あの泡の吃水線が積載された一九〇キロの重量の抵抗によつて出来たものではなく、ローリングによつて標準吃水線以上の位置に出来たものであるとすれば、そのローリングの軸である船首と船尾の吃水線は、左右の舷側の吃水線に較べて、必ず低くなければならぬ筈です。逆に云えば、両舷側の泡の吃水線は、軸の両端の船首と船尾を遠去かるに従つて高くなる訳です。ところが、再三申上げた通り、白鯨号の吃水線はどの部分にも高低がなく、一樣に水平を保つて着いているのです。なんでしたら、これからひとつ実地検分を願つても好いのです。で、この論点からして、失礼ですが、あの泡の跡がローリングによつて出来たものであると云うお考えを否定しなければなりません。もつとも私は、白鯨号が決してローリングしなかつたとは思いません。現在残っている泡の線を壊さぬ程度の横揺はあつたでしょう。しかし、比較的波の多いこちらの海へ漂流して来る間に、ローリングをして尚且つ泡の線が殆んど全体に亘つて無事でいられたのは、その吹き溜りで白鯨号が、すっかり空になり、急に軽くなつて、吃水が浅くなつたからです」

「……ふん、理窟ですな」

黒塚氏は口惜しそうに呟いた。

「では、先程のお願いを、お聞入れ願いたいと思います」

そこでとうとう、二人は秤に懸ってしまった。

先ず黒塚氏が六六・一〇〇^{キロ}。続いて洋吉氏が四四・五八〇^{キロ}。合計一一〇・六八〇^{キロ}。

「義兄さんの体重も、お知りになる必要があるんでしょう？」

洋吉氏が云った。

「深谷氏のですか？ ええ、是非ひとつ」

「恰度いいですよ。姉の『家庭日記』に、一月毎の記録がある筈ですから」

そう云つて洋吉氏は、主館へ向つて大声で女中に命じた。

間もなく上品な装幀の日記帳が届けられた。洋吉氏は早速頁を捲く。

「ええと、これは先月……これこれ、恰度三日前のが記入してあります」

「ははあ、五三・三四〇^{キロ}ですね……あ、この三八・二二〇^{キロ}と云うのは？ ああ

奥さんのですな。いやどうも、有難うございました」

東屋氏の語尾が掠れるように消えると、瞬間、緊張した、気不味い沈黙がやつて

来た。

東屋氏はそれとなく身を反らして数字をノートへ記入しながら、素早く引算をす

るらしい。私も戸外を見るような振りをして、大急ぎで暗算を始める。例の一九〇・九二〇^{キロ}から深谷氏の五三・三四〇^{キロ}を引くと……一三七・五八〇^{キロ}——これが例の深谷氏の二人の同乗者の重量だ。ところが黒塚、洋吉両氏の合計は一一〇・六八〇^{キロ}。同乗者の乗量より二六・九〇〇^{キロ}も少い。——昨夜深谷氏と共にヨットへ乗っていたのは黒塚、洋吉の両氏ではない。私は何故か軽い失望を覚えて東屋氏を見た。すると彼は、黙ってノートをポケットへ仕舞って、静かに外の芝生のほうへ歩き出した。

大分風が強くなったと見えて、相変らず足の速い片雲の影が、芝生の上に慌だしい明暗を残して掠め去る。——何気ない風を装いながらも、あれで東屋氏も私と同じように、失望したに違いない。が、やがて彼は振り返ると、さも平気な様子で、「如何ですか黒塚さん。白鯨号の泡の跡を御検分なさいますか？」

「もう、それにも及びますまい」

「そうですか。では、警察官が着くまで、暫く白鯨号を、私達にお貸し下さいませんか？」

「どうぞ御自由に」

すると東屋氏は、私の肩を叩きながら、わざと向うへ聞えるような大声で、「おい、鳥喰崎へ行つて見よう」

四

低気圧がやって来ると見えて、海は思ったよりもうねりが高かった。急に吹き始めた強い南風に先の尖った小さな無数の三角波を乗せて、深谷邸のある岬の方へむくむくと押しかけて行く。堪えられないほど陰気な色の雲が、白けた太陽の光を遮る度に、或は濃く或は薄く、水の色が著るしく映え変る。と、横さまの疾風を受けて、藍色の海面は白く光る、小さな風浪に覆いつくされ、毒々しい銀色にきらめき渡る。白い冷たいその海の彼方には、暗緑の鳥喰崎が、折りからの雲の切れ目を鋭い角度で射通した太陽の点光スポットライトに照らされて、心持ち赤茶けながらくつきりと映えあがって来た。

私達の乗った白鮫号は、左舷の前方から強き南風を受けて、射るように速くうねりを切って走り続ける。私も東屋氏もヨットの帆走法セイリングは心得ていたし、それにこのシツクなマルコニー・スループは、恐ろしく船足が軽い。やがて私は、軽く面舵おもかじを入れた。白鮫号の船首ブラウは、緩やかな弧を描いて大きく右転しはじめ。鳥喰崎に近附いたのだ。進むにつれて右舷の海中へ、身を曲くねらして躍り出た巨大な怪獣のよな鳥喰崎の全貌が、大きくのしかかるように迫り寄る。すると、その出鼻を越し

て私達の視野の中へ、鏡のような内湾が静かに横わつて来た。船は緩やかにその内湾の入口に差し掛る。間もなく私達は、無気味な吹溜りを擁していると云う小さな鉤形の岬を曲り始めた。内湾を左に見て段々私達はその岬を折れ曲るに従い、鳥喰の陰鬱な裏側が見え出して来た。確かにそれは陰鬱だった。

水際には少しも岩がなく、それかと云つて、何処の浜にでもある砂地とても殆んどなく、一面に黒光りのする岩のような粘土質の岸の処々に、葦あしに似た禾本科かほんの植物類が丈深く密生して、多少凸凹でこぼこのある岸の平地から後方鳥喰崎の丘にかけて、棘いばらのような細かい雑草や、ひねくれた灌木だの赤味を帯びた羊歯類の植物だのが、遠慮なく繁茂している。そしてその上方には、原始的な喬木の類が重苦しいまでに覆い重なっている。船がこの陰気な小さい入江にはいると、不思議に風がなくなつてしまった。少しの横揺れもしない白鮫号は、惰性の力で滑るように動いている。恰度この時、いままで海面にギラギラ反射しながら照りつけていた太陽の光りが、深い雲の影に遮られると、急に辺りが暗く、だが気味悪いほどハッキリして来た。私は思わず水面を見た。

この小さな海の袋小路の上には、どろどろした、濃い、茶褐色の薄穢い泡の群が、夥しく漂っている。そしてそれが、入江の奥へ行くに従つてどんどん密度を増し、とうとう一面の泡の海と化して来た。

「この辺へ着けよう」

東屋氏の言葉に従って重心板センターボードが海の底へ触れないように、なるべく深味のところを選んで私は船を着けた。

恰度私達が、しつとりした岸の上へ降り立った時に、

「シイツ！——」

と東屋氏が、不意に私を制した。

辺りが恐ろしいほど静かになった。と、その静寂しじまを破つて、遠く、低い、木の枝を踏みつけるような、或は枝の葉擦れのような、慌だしい登音あしが私の耳を掠め去つた。誰かが大急ぎで、密林の中を山の方へ駆け込んで行くのだ。

「誰れだろう？」

私は東屋氏を振り返つた。が、彼はもう登音などには頓着なく、五米突メートルほど隔てた岸に立つて、黒い粘土の上を指差しながら私へ声を掛けた。

「一寸見に来たまえ」

そこで私は東屋氏の側へ歩み寄つて、指差された地上へ眼を落した。水際の粘土質から草地の方へ掛けて、引っこすつたような無数の妙な跡がある。確かに足跡を擦り消した跡だ。

「昨晚、キャプテン深谷氏を殺した男達の足跡だよ。それを、いま密林へ逃げ込ん

で行った男が消したわけさ」

「追っ駆けて捕えよう」

私は思わずいきまいた。

「もう駄目だよ。こんな勝手手の知れない山の中では、僕等の負けにきまつてる」

「ふん……じゃあ怪しい奴は、まだうろうろしてたんだな」

私は口惜しそうに云った。

「そんなことはきまつてるさ」

と東屋氏は、それから意外なことを云った。

「君は、深谷氏を殺した男達が、外部から来たと思つて居るのかい？」

全く私は、先程の秤の実験に失敗してから、今更深谷氏の妙な独言を思い直して、深谷氏の恐れていたのは黒塚ではなく、全く別の、外部そとから来た男だと考え始めていた矢先きだったので、東屋氏のこの言葉には少からず驚いた。

「そりゃあ僕だつて」と東屋氏は笑いながら、「君と同じように、黒塚と洋吉を臭いなと思つたが、先刻さつきのあの実験に失敗してからは、どうやら犯人は我々の知らない全々別の外部の者だな、と思つていたさ。けれども、いまはもう違う。何故つて、この消された足跡を見給え。もしも犯人が外部の者だったなら、何故僕達が鳥喰崎へ来ることを早くも知つたり、足跡を消したりなぞしたんだ。……犯人は、間違い

もなく、深谷家に現在いまにいる人々の中にある」

「成る程。じゃあやつぱり、現在深谷家にいる人々の中に、昨夜深谷氏の恐れていた奴がいるんだね？」

「そう考えるから六ヶ敷むっくなるんだよ。なにも深谷氏の恐れていた奴が、必ずしも犯人だとは限るまい」と東屋氏は改まって、「……とにかく、この辺に、白鯨号の重心板センターボードが喰い込んだ跡がある筈だ」

そこで私達は、恰度干潮で薄穢い泡を満潮線へ残したまま海水の引いてしまった水際へ屈み込んで、どろどろした泡を両手で拭い退けはじめた。この仕事は確かに気持が悪かった。が、間もなく私達は、干潮線の海水に三分の一程浸ひたった幅インチ一吋程の細長い窪みを発見した。そしてその窪みから一呎程フィートのところ、海の底が岩になっなっていて、深緑色の海草、長海松ながみの先端が三四本纏もつれたようにちよろちよろと這い出いていた。

「これで見ると、この重心板センターボードの窪みは、昨晚の満潮時につけられたものだね。昨晚の満潮時と云うと、恰度十二時頃だ。さあこれでよし。今度は、足跡の方向を尋ねて見ようか」

私達は、掻き消された足跡を辿って、草地の方へ歩き出した。二回程海岸と草地の間を往復したらしく、消された足跡は、外はみ出したり重複したりして沢山着いて

いた。そして、その足跡の列の左側に、処々足跡をオーバーして、重い固体を引きずったような幅の広い線が、軽く着いているのに私達は始めて気附いた。

「なんだろう？ 深谷氏の屍体を運んだ跡だろうか？」

私は東屋氏へ声を掛けた。

「うむ、だがしかし、そうとすると、深谷氏は船中で殺されそのまま船尾スタインへロープで縛って海中へ投げ込まれたと云う僕の考えは、一応覆えされることになる……」

東屋氏は考え込みながら草地の処までやって来た。足跡の消された跡は、そこから見えなくなってしまった。昨晩踏みつけられ、又重い物を引きずられた時には、きつと草も敷き倒されたに違いない。が、時間を経ているためにもう、皆んな生々と伸びあがっている。

やがて処々に生い茂った灌木の間を縫うようにして、草地を歩き廻っていた私達は、ひとときわ高く密生した木蔭の内側で、小さな池を発見した。そしてその細かい草の敷かれた岸边には、大型のアセチリン・ランプが一つ転がっていた。そしてもつと私達の注意を惹いたことには、先程海岸の土の上で私達が見たと全く同じな重い物を引きずったような跡が、池の中から出たらしく岸の小石を濡して草地の中へ、しかもいま私達がやって来た海岸の方とは反対に、山の方へ向けて着いていた。重い品物は、ほんの数分間前に池から上げられて引きずられたと見え、草は敷き倒さ

れたままびっしりと、一面に濡れていた。

私達は昂奮しながら、それでも黙って跡を辿りはじめた。やがて細長い草地が行き詰って、密林に立ち塞がれた前方の、今私達が辿っている奇妙な跡の延長線上に、恰度大きな黒犬が蹲った位の、訳の判らぬ品物が見えて来た。私達は心を躍らしながら、大急ぎで駆け寄った。

が、再び私達を驚かしたことには、その黒い品物と云うのは、貝類採取用の小さな桁網けたあみに、先程深谷邸で白鮫号の浮力の実験をした時に東屋氏が発見したと同じなマベ貝の兄弟達が、ギッシリ詰っていた。網の口は、中味が零れないように縛りつけてある。私達は立ち竦すくんでしまった。

「……やっぱり深谷氏の屍体などではなくて、こいつだったんだな。だが、いったいこれはどうしたことだろう？　こんな貝を、しかもこんなに沢山集めて、何んにしようとするのだろう？　そしてなによりも、何故先刻さっきこの木立を逃げて行った人間は、我々にこんなものを見られたくなかったのだろう？……」

東屋氏は、そのまま暫く考え込んでしまった。が、やがて因ったように顔を上げると、急に元気のない調子で、

「……どうも僕は、いままで大変な感違あやまいをしていたらしい」

「と云うと？」

「いや……後で話そう。とにかく、もう此処はこれで沢山だ。引き揚げよう」とそれからマベ貝の詰った桁網の上へ屈みながら、

「済まないが、君も手伝ってくれ給え。こいつは大事な証拠品だから」

私は何んのことだか判らぬながらも、取敢とりあえず彼の申出に従った。やがてひどく重い荷物を二人してやっとこ提さげながら先程の小池の岸へ出て来た私達は、其処でアセチリン・ランプをも荷物の中へ加えて、間もなく元の海岸へ出た。

重い荷物を白鮫号に積み込んだ私達は、この吹き溜りには風がないので、岸伝いに白鮫号の艫網ともづなを引っ張って、風のある入江の口までやって来た。

「此処で昨晚の加害者も、帆セイルや舵の位置を固定して、白鮫号を放流したのだよ。見給え。ほら、やっぱり擦り消された足跡が、ずっと続いて着いている」

東屋氏にそう云われて、始めて私はそれに気がついた。こちらの足跡は最初上陸した附近の足跡よりも先に消したと見えて、消し方がずっと丁寧である。

「さあ。僕等もこの辺で出帆しよう。大分風も強くなつて来た」

私達は船に乗り込んだ。大きな大檣帆メンズルは暫く音を立ててはためいていたが、やがてその位置を風向きに調節されると、白鮫号は静かに走り出した。

東屋氏シガレットは紙巻に火を点けると、舵手の私に向つて口を切った。

「やっぱりそうだ。僕は今まで大変な誤謬を犯していたよ。つまり、先刻さっきこの浮力

の実験をした時に、僕は、昨夜この白鯨号に深谷氏も加えて三人の人間が乗っていたと断定したね。あれがそもそも過失なんだ。勿論重量の一九〇^{キロ}と云うのは間違つてはいないさ。ただ人間の頭数だ。人間の頭数が三人ではないと云うんだ。では何人か？ 二人だ。勿論、一九〇^{キロ}と云う重量は、二人の人間の重量としてはひどく重過ぎる。そこで僕等は、こいつを思い出せば好いんだ。このマベ貝やらアセチリン・ランプやらの重量をね。確かにこれらの荷物が、昨夜、深谷氏と加害者の二人に加わつてこの白鯨号に乗っていたと云う事は、もはや誰にだつて理解出来る筈だ。つまり犯人は二人でなくて一人なんだ。で、僕はここ数十分後に、犯人の大体の体重を知る事が出来る。つまり、一九〇・九二〇^{キロ}から深谷氏の五三・三四〇^{キロ}とこの荷物の重量とをマイナスしたものが、犯人の体重と云うことになるんだ」「成る程、合理的だ」と私は乗り出して、「じゃあもう、この荷物を秤に懸けさえすれば、それでチョンだね？」

「いや君、ところがこの事件は、それでチョンになるような単純なものではないよ。犯人は間もなく判るさ。だがそれは、この事件の大詰めではない。例えば、まずあの『明日の午後だ。明日の午後までだ、きつとここまですて来る』と云う怯えるような深谷氏の独言を思い出し給え。いったい深谷氏はなにをそんなに待ち恐れていたのだろう？……ここで深谷氏の、奇妙な日常生活も一応考えねばならぬ。そして

又、桁網でこんな貝をこんなに沢山拾い集めてなにをしようとするのだろうか……ね、いくら深谷氏だつて、まさか『これも儂の趣味じゃ』なんて云えまいて……」東屋氏はそう云つて、苦々しく紙巻シガレットの吸いさしを海の中へ投げ込んだ。真艦まともに強い疾風を受けた白鯨号は、矢のように速く鳥喰崎を迂廻する。陰気な雲は空一面にどんよりと押し詰つて、もう太陽の影も見えない。

それから程なくして深谷邸に帰り着いた私達は、重い荷物を提げて崖道を登つて行つた。

私達の留守の間に先発の警官達が着いたと見えて、崖道を登り詰めると、顔馴染の司法主任が主館おもやの方から笑いながらやつて来た。

「やあ、先生。殺人事件だと云うのに、ヨット遊びとは驚きましたなあ」

そこで私は、東屋氏による事件探査の異常な発展振りを、簡単にかいつまんで説明した。すると司法主任は、

「先手を打たれたわけですか。いや、結構です。じゃあひとつ、その秤の実験に立会わして下さい」

そこで私達は、早速別館はなれの物置へやつて来た。

もういまここで、犯人が判るのかと思うと、私は内心少からず固くなった。が、

東屋氏は頗る冷淡で、さつきと私に手伝わすと、二つの荷物を秤台の上へ乗つけてしまった。

計量針が、ピ、ピ、ピッと大きく揺れはじめる。そして見る見るその振幅が小さくなって、神経質に震えながら——チツと止まる。

七一・四八〇砵^{キロ}!

瞬間、東屋氏は眼をつぶって暗算を始める。と、急に、どうしたことか、手に持っていたノートを、ぼったり床の上に落してしまった。

彼の眼には、顔には、見る見る驚きの色が漲^{みなぎ}り始める。そしてその驚きの色は、直ぐに深刻な、痛々しい、困惑の影によって覆われてしまった……が、間もなく、かすかに希望が浮ぶ。そして追々に明るく、強く、自信に満ちて……

「判りましたか?」

司法主任が云った。

「判りました」

「犯人は誰です?」

「犯人は……」

云いかけて東屋氏は、

「一寸待つて下さい」

と今後は私の肩を叩いて笑いながら、

「君は、判ったかい？」

「うん、いまその、計算中だよ」

私は周章あわで答えた。すると東屋氏は再び微笑しながら、

「おい先生、僕は君に挑戦するぜ。ひとつ、犯人は誰だか、当ててくれ給え。もう君は、この事件の関係者の中で、誰の体重がどれだけあるか？　そしてどうすれば犯人の体重が判るか？　いやそれだけではない、少くとも犯人を自分で推定することの出来るだけの、凡ての必要な材料データを心得ている筈だ。さあ、見事に当ててくれ給え」

東屋氏はそう云って、私のためにノートを拾いあげてくれた。

「判っていられたなら、さっさと云って下さい」

司法主任だ。

「一寸待って下さい」

と今度は私が遮った。——こうなったら意地でも計算しなければならん。間違わぬように……

——先ず、問題の一九〇・九二〇キロから、深谷氏の五三・三四〇キロを引く……すると、一三七・五八〇キロだ。さて今度は、これからこのマベ貝やランプの七一・四八〇キロを引く……ええと……六六・一〇〇キロだ。六六・一〇〇キロ……はて、なん

だか覚えのある数字だぞ。私は大急ぎでノートの記号を辿る……と、ああまさに、黒塚氏が六六・一〇〇^{キロ}砵！

で早速東屋氏へ、

「判ったよ」

「なに判った？」

と東屋氏は、私の顔をしげしげと見詰めながら、

「よく、考えて見ましたか？」

「馬鹿にし給うなよ」

「じゃあ云ってご覧」

「犯人は黒塚だ！」

「違う！」

五

「違う？……冗談じゃあない」

私は思わず吹き出した。

「全く、冗談じゃあないよ」

と東屋氏は大真面目だ。

そこで私は、いささかむツとして、

「君こそ計算違いだ」

「どうして？」

「だって、いいかい……一九〇・九二〇^{キロ}疋から、深谷氏とこの荷物の重量を引けば、六六・一〇〇^{キロ}疋じゃないか。そしてこれこそは、まさに黒塚氏の体重だ。しかも、ピッタリと合う……」

「だから違うんだよ」

と東屋氏だ。

「何んだって？」

「何んでもないさ」と東屋氏が始めた。

「つまり、ピッタリ合うから、違うんだ。判るだろう？……成る程、君の算術には間違いはない。が、君は、算術と現実とをゴツチャにしてしまった。だからいけないんだ。ね、考えて見給え。僕達は、昨夜犯行当時の白鯨号の中味を、そっくりそのまま秤に懸けたわけじゃあないんだ。今日になつてから、しかもあつちこつちバラバラの寄せ集め式計算だ。おまけに、浮力の実験に際しても、厳密に云えば必ず多少の不正確さは免れなかつた筈だし、搭乗者の服装やその他の細かな変化も、多

少とも見逃しているのだ。だから一九〇・九二〇^キと云う数字は、いや、深谷氏の数字もこの荷物の数字も、凡て犯人推定の引算のために、なくてはならぬ大事な数字には違いないが、それはあくまで大体の数字であつて、その大体の数字に依る計算の現実の結果が、ピッタリ合う筈はない……だから、いま、引算の結果が黒塚氏の体重にピッタリ合つた時には、僕は全くびつくりした。実に見事な偶然だよ。余りに見事過ぎて、君は罫に引つ掛かつたのだ」

「じゃあいつたい、犯人は誰です」

司法主任が云つた。

東屋氏は私の手からノートを取ると、

「六五・二〇〇^キの下男の早川です」

すると司法主任は浮き腰になり、

「下男？——失敗^{しま}つた。そいつは私達の着く前に、町の郵便局まで出掛けたそうです」

「郵便局？」

今度は東屋氏が乗り出した。

「飛んでもない。——この岬から西南の海岸一帯に亘つて、非常線を張つて下さい。山も木立も、それから鳥喰崎も……あいつの『郵便局』はその辺にあるんです」

と私の方をチラツと見て、

「現に僕達は、先刻鳥喰崎の端つぽで早川氏の跽音を拝聴したんだ」

司法主任は直ぐに飛び出して行った。

東屋氏も立上った。

「さあ、忙しくなつて来たぞ」

やがて東屋氏は主館の玄関へやつて来ると、そこで急に騒ぎ出した警官達を見ながら女中と二人でうろろうろしていた深谷夫人を捕えて、早速切り出した。

「奥さん。凶悪な犯人が判りました。下男の早川です」とそれから驚いている夫人へ丁寧に改まつて、「時に、甚だ済みませんが、一寸御主人の船室を拝見さして戴き

たいのですが——」

「ああ書斎でございますか？」

と夫人は一寸躊躇の色を見せたが、直ぐに、

「畏まりました」

そう云つて奥へはいつて行った。が、間もなく戻つて来ると、小さな銀色の鍵を東屋氏に渡しながら、

「どうぞご自由に、お調べ下さいまし」

やがて私達が再び別館の前まで来ると、東屋氏は、物置の秤台に置かれた桁網の

中からマベ貝を二ツ三ツ掴み出して来て、キャプテン深谷の船室へ這入った。

けれどもその室は、ただ船室式に造られていると云うだけで、中は割に平凡なものだった。海に面して大きく開いている棧のはまった丸窓の横には、立派な書架が据えられ、ギッシリ書物が詰っている。総じて渋い装幀の学術的なものが多い。書架と並び合って、大きな硝子戸棚が置かれてあり、その中には、わけのわからぬ道具や品物がいっぱい詰っていたが、黄色い硝子のはまった大きなひとつの吊りランプが私の眼を惹いた。部屋の中央には、およそこの部屋に不似合な一脚の事務机が据えられてあり、その上の隅には、書類用の小筆筒が乗せてある。

東屋氏はひと互り室内を見渡すと、机の上へマベ貝を置いて、椅子に腰掛け、暫くジツと考え込んでいたが、やがて書架の前へ歩み寄ると、鼻先を馬のように蠢かしながら、なにか盛んに書物を漁り始めた。私は、ふと自分達の乗つて来た馬のことを思い出した。この邸へ来た時に日蔭へ縛りつけたなり、まだ一度も水をやってない——で、急に心配になった私は、そのままそそくさと船室を出た。

冷たい水を馬に飲ませている間に、私は、天候がひどく悪化した事に気付いた。辺りはますます暗く、恐ろしい形相の黒雲は、空一面に深く低く立ち迷つて、岬の端の崖の下からは、追々に高くなつた波鳴りの音が、足元を顫わせるように聞えて来る。私は玄関の横の長く張り出された廂の下を選んで、馬を廻した。これらの仕事を、

随分手間取つてやつと為し終えた時に、東屋氏がやつて来た。

「君、多分この家の電話は、長距離だったね？ 濟まないがひとつ交換局を呼び出してくれ給え。そして三重県へ掛けたいのだがね、番号が判らないんだ。多分、鳥羽とぼの三喜山みきやま海産部で好いと思うが、ま、そう云つて問い合して見てくれ給え。そして、大急ぎでそいつを呼び出すんだ」

東屋氏はそのままホールの方へ這入つて行つた。私は廊下の電話室で、命令通り交換局へ問合せた。そしてその呼び出しを依頼して電話室を出ると、廊下伝いにホールの方へやつて来た。

そこでは深谷夫人と黒塚を相手にして、東屋氏が何か尋ねているところだった。

「——すると御主人は、十年前に日本商船をお退ひきになると、直ぐにこちらへお移りになつたんですね」

「左様でございます」

夫人が答えた。

「で、下男の早川は何年前にお雇いになりましたか？」

「恰度その頃からでございます」

「お宅でお雇いになる以前に、早川は何処にいたかご存じですか？」

「あの男の雇入れに関しては、全部主人の独断でございましたので、私は少しも存

じませんが——」

「ああそうですか」と東屋氏は頷きながら、

「ところで、あの船室ケビンの前の白い柱マストの尖端さきへ、御主人が燈火あかりをお吊るしになったのは、度々のことではないですね？」

「ええ、それはもうほんの、年に一度か二度のことですごくごさいます」

「ではもうひとつ、これは、妙なことですが、昨晚お宅では、ニユースの時間に、ラジオを掛けてお置きになりましたか？」

「ええ、あれはいつでも掛けております」

「有難うございました」

東屋氏は紙巻シガレットに火を点けて、ソファの肘掛けに寄り掛った。

恰度この時電話室の方でベルが聞え、やがて女中がやって来た。

「どなたか、鳥羽へお電話をお掛けになりましたか？」

「ああ僕です。有難う」

東屋氏は立ちあがって、そそくさとホールを出て行った。

私達はさっぱりわけがわからないので、ホールの中でキョトンと腰掛けたまま、ろくに話しも出来ずに東屋氏の帰りを待っていた。

が、十分程すると東屋氏は、折から後続の警官達が着いたと見えて、私とは顔馴

染の警察署長を連れてやって来た。そして満面に、軽い和やかな微笑を湛えながら、「さあ。これでどうやら、この事件も解決が出来ました。これからひとつ説明を致します。どうぞ別館はなれの船室ケビンへお出で下さい。あちらの方に色々材料が揃っておりますから——」

そこで私達はホールを出た。深谷夫人は頭が痛むと云うので主館おもやに居止り、東屋氏と私と黒塚、洋吉の両氏、そして署長を加えた五人は、強い疾風の吹き荒ぶ中庭を横切つて、別館の船室ケビン——キャプテン深谷の秘密室ブラック・チェンバーへ走り込んだ。

六

とうとう、嵐がやって来た。

私達が深谷氏の船室ケビンへはいると間もなく、海に面した丸窓の硝子扉ガラスへ、大粒な雨が、激しい音を立てて、横降りに吹き当り始めた。

高く、或は低く、唸るような風の音が、直ぐ眼の下の断崖から、岩壁に逆巻く磯浪の咆哮に反響して、物凄く空気を顫わせ続ける。

私達を前にして椅子に腰掛けた東屋氏は、劈つんぞくような嵐の音の絶え間絶え間に、落着いた口調で事件の真相を語りはじめた。

「まず、兇行の行われた当時の模様を、大体私の想像に従って、簡単に申上げましょう。——昨晚の十二時頃、恰度満潮時に、海流瓶で殴り殺された深谷氏の屍体と、加害者の早川と、例の奇妙な荷物を乗せた白鯨号は、あの無気味な鳥喰崎の吹溜りへ着きます。船底の重心板は粘土質の海底に接触し、舵板の蝶番には長海松が少しばかり絡みつき、そして舷側の吃水線には、一様に薄穢い泡が附着します。さて、そんな事も知らないで下男の早川は、荷物を岸に投げ降ろし、深谷氏の屍体を海中へ投げ込んで船尾へロープで結びつけます。そして、岸伝いに白鯨号を引張って入江の口までやって来ると、帆と舵を固定して、船を左廻りに沖へ向けて放流します。それから早川は元の場所に戻って、荷物を引きずって草地へ這入ります。草地の奥の小さな池の岸にアセチリン・ランプを置き、池の中へ桁網に詰めたマベ貝を浸すと、犯人はそのまま陸伝いにこつそり深谷邸へ帰ります。一方、深谷氏の屍体を引張った白鯨号は、一旦沖へ走り出しますが、御承知の通り昨晚は風でしたので、犬崎から折れ曲って逆流している黒潮海流の支流に押されて、この岬の附近まで漂って来ます——」

ここで東屋氏は一寸語を切った。

外の嵐は益々激しさを増して来た。遠く、掻きむしるように荒れ続ける灰色の海の水平線が、奇妙に膨れあがって、無気味な凸線を描きはじめる。多分颶風を中心

が、あの沖合を通過しているに違いない。東屋氏は再び続ける。

「——只今申上げた通りで、一通りの犯行の過程はお判りになったと思います。が、まだ皆さんの前には、不思議な理解し難い幾つかの謎が残っている筈です。そしてその謎は、最初この事件の解決に当って、割合に単純なこの殺人事件を頗る複雑化したところの代物なんです。例えばまず第一に、不明瞭なこの事件の動機です。そして昨晚ラジオの演芸時間の始まる頃から、急に変られた深谷氏の妙な態度——しかも夫人は、深谷氏の怯えるような独言を聞かれました。いったい深谷氏は『明日の午後』つまり今日のこの午後までに、なにを待ち恐れていたのでしょうか？　そして又桁網にいったい詰ったマベ貝——しかも早川は、私達にそれを見られることをひどく恐れていました——。更に又、夜中にヨットへ乗る深谷氏の奇癖。そして、むつりした邪険な、それでいてひどく海には執心のあつた妙な生活。白い柱マストの尖端さきの信号燈——等々です。で、これらの謎を解くために、最も常識的な順序として、ただ一つの現実的な手掛かりであり、私の最も興味を覚えた品である、このマベ貝の研究にとりかかりました。この方面で生活している私が、いまさらマベ貝の研究などを始めたんですから、全くお恥かしい次第です。ところが、そうして色々ひねくり廻しているうちに、私はふとこの貝が近頃人工真珠養殖の手段として、少しずつ実用化されるようになって来た事実を思い出したんです。これはマベ貝が、普通の

真珠貝、つまりアコヤガイに比較して、大型の真珠を提供するからですが、で、ふと軽い暗示に唆かされた私は、早速このマベ貝を一つ打ち砕いて見ました。私の予感そのは適中しました。これをご覧下さい」

そう云つて東屋氏は、ポケットから一粒の大きな美しい真珠を取り出した。そして、驚いている私達の眼の前の机の上へ、そつと転がしながらなおも語り続けた。

「御覧の通り、これは立派な人工真珠です。ところが、皆さんの御承知の通り、人工真珠の養殖は特許になっています。三重県の三喜山氏が特許権の所有者です。従つてこの真珠は、特許を冒おかして密造されたものになります。そして同時にその密造者は、養殖技術をも特許権の所有者から盗み出した事になるのです。ではその密造者は誰か？ 深谷氏か？ 下男の早川か？ それとも二人の共謀か？ 私は大きさから見て、殆んど直感的に深谷氏と早川の共謀である事を知りました。そして私は、三重県の三喜山養殖場へ、早川が十年前に何等かの関係があつたかどうかを電話で照会して見ました。すると果して、十年前に早川を解雇した事があるとの返事です。そこで、今度は、ひとつこれを見て下さい」

東屋氏は、書式張つた商業書類らしい紙片を数枚取り出しながら、

「これは、この戸棚の書類金庫から一寸拝借したものです。頗る略式化した一種の商品受領証と云つたようなものです。欧文です。で、文中商品の項に青提灯とか、

赤提灯とかしてありますが、勿論これは真珠を指し示しているのです。そして、この下の処に、T・W・W——としてあるのが、荷受人のサインです。お判りになりますか？ つまり深谷氏は、早川と共謀して、外人相手に真珠の密造並に密売をしていられたんです。そして、この七枚の書類の日附けを、深谷夫人にそれぞれ辿って頂いたならば、きつと御夫人は、その各の日の夜遅く、あの白い柱マストの尖端に黄色い信号燈が拳がっていた事を思い出されるでしょう。そしてまさにその時、この海の暗い沖合遙かに一艘の怪し気な汽船の姿を、皆さんは想像する事が出来るでしょう——」

東屋氏は一息ついた。

いつの間にか知らない内に、崩れるような激しい嵐は消え去って、風雨は忘れたように遠去かり、追々に、元の静けさが蘇えって来た。

やがて東屋氏が、

「最後に、私は、キャプテン深谷氏のあの奇妙な、怯えるような独言に就いて——」
と、この時である。

主館おもやの露台テラスの方で、女中の、悲しげな、鋭い絶望的な叫び声が、不意に私達の耳に聞えて来た。

「まあ………いったいどうしたんだろう。海の色が、まるで血のようだ……」

私達は、驚いて窓の硝子扉を、力一杯押し開けた。

と——今までの灰色の、或は鉛色の、身を刺すような痛々しい海の色は、いつの間にか消え去つて、陰鬱な曇天の下に、胸が悪くなるような、濃い、濁った褐色の海が、気味悪い艶を湛えて、一面に伸び拡がっていた。そして見る見る内にその色は、ただならぬ異状を加えて行く。最初は、ただ濃い褐色だった海が、瞬く内に、暗い血のような毒々しい深紅色の海と化して来た。

不意に東屋氏が力強い声で始めた。

「これです！ この物凄い赤潮です。こいつを深谷氏は恐れていたのです。皆さんもきつとお聞きになったでしょう？ 昨晩のラジオのニュースで、黒潮海流に乗った珍らしく大きな赤潮が、九州沖に現れ執拗な北上を始めたと言う事を。そしてそのために、沿海の漁場、殊に貝類の漁場は、絶望的な損失を受けていると言うニュースをですね——。深谷氏もそれを聞いたのです。そしてこの、赤褐色の無数の浮漂微生物の群成に依る赤潮が、真珠養殖に取つての大敵である事を思い出したのです。だから深谷氏は、九州沖からこの附近までの間に於ける黒潮海流の平均速度を、二十四時、つまり一昼夜五〇浬カイリ乃至八〇浬カイリと見て、赤潮の来襲を、今日の午後までと、大体の計算をしたのでしよう。そして今日の午後までに、昨日にしてみれば『明日の午後まで』に、真珠貝の移殖を行わなければならない。そこで深谷氏は、用意を整

え、下男——実は共謀者の早川を連れて、ひそかに邸を出帆したのです。そして、第何回目かの作業を終った時に、早川の胸裡に恐ろしい野心が燃えあがったのでしよう。恐らくその作業場と云うのは、あの鳥喰崎の向うの、美しい、静かな、鏡のような内湾に違いありません。——だが、もうこれで、あのキャプテン深谷氏の秘密人工真珠養殖場のマベ貝は、完全に全滅です——」

東屋氏は云い終つて、煙草の煙を、ぐつと一息深く吸い込んだ。

私達は一様に深い感慨を以て、血のような鳥喰崎の海を見た。斑まだらな禿山の上には、何に驚いたのか鴉の群が、折からの日差しの中に慌だしく舞い上り、そしてその岬の彼方の沖合には、深谷氏の片足をもぎ取った奴であろう、丈余に互る暗灰色の大鱗うろこが、時々濡れた背中を鋭く光らしながら、凄じい飛沫を蹴立てて疾走していた。

〔「新青年」昭和八年七月号、「白鮫号の殺人事件」を改題、改稿〕

闖入者

富士山の北麓、吉田町から南へ一里の裾野の山中に、誰れが建てたのか一軒のものさびた別荘風の館がある。その名を、岳陰荘と呼び、灰色の壁に這い拡がった蔦葛の色も深々と、後方遙かに峨々たる剣丸尾の怪異な熔岩台地を背負い、前方に山湖を取繞る鬱蒼たる樹海をひかえて、小高い尾根の上に絵のように静まり返っていた。——洋画家の川口亜太郎が、辻褃の合わぬ奇妙な一枚の絵を描き残したまま卒然として怪しげな変死を遂げてしまったのは、この静かな山荘の、東に面した二階の一室であつた。

それは春も始めの珍しく晴渡つた日の暮近い午後のことである。この辺りにはついぞ見かけぬ三人の若い男女が、赤外線写真のような裾野道をいくつかの荷物を提げながら辿り辿りやって来た。見るからに画家らしい二人の男は川口亜太郎とその友人の金剛蜻治、女は亜太郎の妻不二、やがて三人が岳陰荘の玄関に着くと、あらかじめ報のあつたものと見えて山荘に留守居する年老いた夫婦の者が一行を迎え入れた。

やがて浴室の煙突からは白い煙が立上り、薪を割る斧の音が辺の樹海に冴え冴えと響き渡る。けれどもそれから二時間としないうちに、山荘へは黒革の鞆を提げた

医者らしい男が慌だしく駈けついたり、数名の警官が爆音もけたたましくオート・バイを乗りつけたりして、岳陰荘はただならぬ気色けしきに包まれてしまった。それはまるで三人の訪問者が、静かな山の家へわざわざ騒ぎの種を持ちこんだようなものだ。恰度美しい夕暮時で、わけても晴れた日のこの辺りは、西北に聳え立つ御坂山脈みさかに焼くような入目を遮られて、あたりの尾根と云い谷と云い一面の樹海は薄暗にとざされそれがまた火のような西空の余映を受けて鈍く仄赤く生物の毒気のように映えかえり、そこかしこに点々と輝く鏡のような五湖の冷たい水の光を鏤めて鮮かにも奇怪な一大裾模様を織りなし、寒々と彼方に屹立する富士の姿をなやかな薄紫の腰のあたりまでひツたりとぼかしこむ。東の空にはけれどもここばかりは拗者すねくれものの本性を現わした箱根山が、どこから吹き寄せたか薄霧の枕屏風を立てこめて、黒い姿を隠したまま夕暗ゆふぐみの中へ陥ちこんで行く。やがて山荘の窓には灯がともった。その窓に慌だしげな人影がうつる。云い忘れたが岳陰荘は二階建の洋館で、北側に門を構え、階下は五室、二階は東南二室からなり、その二室にはそれぞれ東と南を向いて一つずつの大きな窓がついていた。川口亜太郎の死はこの二階の東室で発見された。

まだ旅装も解かぬままにその上へ仕事着ブルーズを着、右手には絵筆をしつかりと握って、部屋の中央にのけぞるように倒れている亜太郎の前には、小型の画架イーゼルに殆ど仕上つ

た一枚の小さな画布カンバスが仕掛けてあり、調色板パレットは乱雑に投げ出されて油壺のリンシード・オイルは床の上に零れこぼ、多分倒れながら亜太郎がその油を踏み滑ったものであろう、くの字なりに引掻くように着いていた。

急報によつて吉田町から駆けつけた医師は、検屍の結果後頭部の打撲による脳震盪が死因であると鑑定し、警官達は早速証人の調査にとりかかった。

最初に訊問を受けた金剛蜻治は、自分達の先輩であり恩師にあたる津田白亭つだはくていが半歳程前にこの岳陰荘を買入れた事、最近川口と二人で岳陰荘の使用を白亭に願ひ出たところが快く承諾を得たので、当分滞在のつもりで三人して先刻さつきここへ着いたばかりである事、死んだ川口は一行が白亭夫妻に送られて今朝東京を発つた時から、なにか妙に腑に落ちぬような顔をしてひどく鬱ふさぎ込んでいたが、それでもこの家へ着いた頃からいくらか元氣が出た事、事件の起きた頃には自分は風呂に這入っていた事、尚川口夫婦は二階の二室を使用し自分は別荘番の老夫婦と一緒に階下を使うようになっていた事などを割に落付いた態度で答えた。

続いて亜太郎の妻不二は、金剛と同じように川口が東京を出た時からの憂鬱について語つたが、夫の事でありながら打明けてくれなかつたのでその憂鬱の中味がどんなものであるか少しも判らない事、それでもこの家へ着くと始めて見るこの辺あたりの風景が氣に入ったのか割に元氣になつて、自分の部屋にきめた東室へ道具を持ち込

むと、金剛へ、早速一枚スケッチしたいから先に入浴してくれるよう云い置いて自室へとじこもってしまった事、自分はその隣りの南室で荷物の整理をしたり室内の飾付をしていた事、五時頃に東室で人の倒れるような物音を聞いて駆けつけ、そこで夫の死を発見みけた事などを小さな声で呟くように答えた。

別荘番の老人戸田安吉とだやすきちは、事件の起きた五時頃の前後約一時間と云うものは、浴室の裏の広場で薪を割り続けていたと云い、その妻のとみは吉田町まで買出しに出ていたと答えた。

四人の陳述は割合に素直で、一見亜太郎の死となんの関係もないように思われたが、先にも述べたように、絵筆を握ったまま倒れた亜太郎の傍らに描き残された妙な一枚の写生画が、その場に居合せた洋画趣味の医師の注意を少からず惹きつけたのだ。

さて、その問題の絵と云うのは、六号の風景カンバスに、直接描法の荒いタッチで描かれた富士山の写生画であるが、カンバスの中央に大きく薄紫の富士山が、上段の夕空を背景にクツキリと聳え立ち、下段に目前五、六十米突メートルの近景として一群の木立が一樣に白緑色で塗り潰されていた。画面も小さく構図も平凡で絵としてはごくつまらない習作であるが、元来川口亜太郎は、その属している画会のひどく急進的なのに反して、亜太郎自身の画風はどちらかと云うと穏健で、写実派の白亭の

門人だけに堅実な写実的画風を以てむしろ特異な新人として認められていた。ところが度々云うようにこの岳陰荘の位置は、富士山の北麓であり、二階に於ける室の配置は、東南二室に分れその各々に東と南を向いてそれぞれ一つずつの大きな窓が切開かれていた。が、それにもかかわらず、この土地へ始めて来たと言う写実派の亜太郎は、その東側に窓の開いた東室にとじこもって夕暮時の富士山をスケッチしたと云うのだ。早い話が川口亜太郎は、東方の景色しか見えない東の室にいて、南方に見える筈の富士山を写生していたのだ。つまり直ぐ隣りの南室へ行けば充分見る事の出来る富士の風景を、わざわざ箱根山しか見えない東室にとじこもって写生していたと云うのだ。これは確かに可怪おかしい。ここへ洋画趣味の医師が疑点を持ったのだ。すると、たとい写実派の川口でも、時には写実を離れて頭だけで描くこともあろうではないか、と金剛蜻治が横槍を入れた。けれども医師は、この絵が決して頭だけで描かれた絵でない証拠として、彼が先刻この家に着いたばかりに、この二階の隣室との境の廊下で、恰度開け放たれていた南室の扉ドクを通して、まだ暮れ切らぬ南室の窓の外に、この油絵と全く同じ風景を見たと言い出した。そして呆気にとられている人々を尻目につけて、鞆を片付けて抱え込むと帽子を無雑作かぶに冠りながら、振り返って吐き出すように云った。

「……ですからこの絵は、この室の窓から見えるべき絵ではないと同時に、明かに

あちらの、南の室の窓からのみ見える絵なんです。ま、明日にでもなったら、試みに調べて御覧なさい」

二

医師の主張は、翌朝見事に確められた。

二階の南室の窓からは、成る程医師の云う通り、川口亜太郎の描き残した写生画と寸分違わぬ風景が明かに眺められた。中天に懸った富士の姿と云い、目前五、六十米突の近景にある白緑色の木立と云い、朝と夕方とでは色彩の上に多少の変化があると云え、全く疑うことの出来ない風景だった。しかも一方、明かに亜太郎の描き残した写生画は、先にも云ったように色々の絵具を幾層にも塗り上げて行つて最後に仕上げをする下塗描法ではなく、一見して最初から大胆直截に描者の最後の目的の色で描き上げた直接描法であるから、この絵はこれで殆んど完成されたものであり、色彩の上にも明かに疑いをさしはさむ余地はなかった。

もつとも亜太郎の倒れていた東室の窓からも、目前五、六十米突のところメートルに南室の窓から見えるのと同じような形の一群の木立があるにはあるが、これは明かに白緑色ではなく、明るい日光の下にハッキリと暗緑色を呈していた。そしてその木立

の彼方には、疑いもなく箱根山の一団がうねうねと横たわっていた。

もはや事態は明瞭である。警官はこの絵が描かれた時の亜太郎の所在に対して疑いを集中して行った。

死人に足が生える——このような言葉があるとすれば、まさにこの場合には適当で、南室で死んだ亜太郎が一人で東室まで歩いて来たなどと云うことがないかぎり、どうしてもこの場の事態をとりつくりうするためには、まず誰れかが、南室で窓の外を写生していた亜太郎の後頭部を鈍器で殴りつけ、亜太郎の死を認めると、何かの目的で屍体を東室に移しかえ、描きかけていた絵の道具もそっくりそのまま東室へ運び込んで、いかにも亜太郎が東室で変死したかの如く装わした、としか考えられなくなる。すると亜太郎の屍体を運んだり、そのようなかがわしい装いを凝らしたのはいったい誰れか？ と開き直る前に当然警官達の疑惑は、事件の当時ずっと南室にいたと云う亜太郎の妻不二の上へ落ちて行った。

不二は怪しい。

川口不二の陳述に嘘はないか？

亜太郎が南室で殺された時に、その妻の不二はといった南室（そご）でなにをしていたのか？

そこで肥（ぶと）つちよの司法主任は、もう一度改めて嚴重な訊問のやり直しを始めた。

ところが二度目の訊問に於ても、川口不二の陳述は最初のそれと少しも違わなかった。続いてなされた金剛蜻治も別荘番の戸田夫婦も、やはり同じように前回と変りはなかった。それどころか金剛と戸田安吉は、川口不二が事件の起きた当時、確かに南室を離れずに頻しきりに窓際で荷物の整理をしていたのを、一人は裏庭の浴室の湯にひたりながら、一人はその浴室の裏の広場で薪を割りながら、二階の大きな窓越しに見ていたと云い合わせたように力説した。そして暫くしてその姿が急に見えなくなったかと思うと、直すくに再び現われて下にいた自分達に大声で亜太郎の死を知らせたのだと戸田がつけ加えた。すると川口不二は、荷物の整理をしながら亜太郎を殴り殺す位の余裕は持てたとしても、とてもその屍体を折曲にまがった廊下を隔てて隣りの東室へ運び込み、あまつさえ写生の道具などをも運んで贖にまの現場を作り上げるなどと云う余裕は持てないことになる。けれどもこれとても二人の証人の云う事を頭から信じてしまう必要はない。仮に信用するとしても、湯にひたったり薪を割りながら、少しも眼を離さずに二階ばかり見ていたなどと云うことがありよう筈はない。では、ひとまず仮りに不二を潔白であったとすれば、いったい誰れが亜太郎を殺して運んだのか？ 不二と亜太郎の以外に、もう一人の人物が二階にいたと考える事は出来ない？

司法主任はウンザリしたように、椅子に腰を下ろしながら不二へ云った。

「奥さん。もう一度伺いますが、あなたが南室で荷物の整理をしていられた時に、御主人は、あなたと同じ南室で、絵を描いていられなかったのですか？」

「主人は南室などにいませんでした。そんな筈はありません」

「では、廊下へ通じる南室の扉は開いていましたか？」

「開いていました」

「廊下に御主人はいませんでしたか？」

「いませんでした」

「御主人以外の誰れか」

「誰れもいません」

「ははア」

司法主任は割に落付きすました美しい不二の眼隈の辺を見詰めながら、これでの女が嘘をついているとすればまるつきりなんのことはない、と思った。そして決心したように立上ると、参考人と云う名目で、金剛と不二の二人を連行して、本署へ引挙げることにした。

苦り切って一行に従った金剛蜻治は、警察署のある町まで来ると、昨日東京を発つた時に見送ってくれた別荘主の津田白亭に、まだ礼状の出してなかったことに気がついた。そこで郵便局へ寄途して礼状ならぬ事件突発の長い電報を打った。

白亭からは、いつまで待っても電報の返事は来なかった。が、その代り、その日の暮近くになって、白亭自身、一人の紳士を連れて蒼惶としてやって来た。紳士と云うのは、白亭とは中学時代の同窓で、いまは錚々たる刑事弁護士の大月対次だ。愛弟子の変死と聞いて少からず驚いた白亭が、多忙の中を無理にも頼んで連れて来たものであろう。

やがて二人は司法室に出頭して、主任から詳細な事件の顛末を報告された。けれども話が垂太郎の描き残した疑問の絵のところまで来ると、何故か白亭はハツとして見る見る顔色を変えると、眉根に皺を寄せて妙に苦り切ってしまった。

三

司法主任は流石さすがに白亭の微妙な変化を見逃さなかった。

事件の報告は急転して、猛烈な、陰険な追求が始まった。が、白亭も流石に人物だ。あれこれと取り繕つくろって、執拗な主任の追求を醸ひるがえすようにしていたが、けれども、とうとう力尽きて、語り出した。

「……どうかこのことは、死んだ者にとつても、生きている者にとつても、大變不名誉なことですから、是非とも此処だけの話にして置いて下さい。……川口と金剛

とは、二人とも十年程前から私が世話をしていますので、私共と二人の家庭とは、大変親しくしていましたが、……これは最近、私の家内が、知ったのですが……川口の細君の不二さんと、金剛とは、どうも……どうも、ま、手ツ取早く云えば、面白くない関係にある、らしいんです。で大変私共も気を揉んだのですが、当の川口は、あの通りの非常な勉強家です、仕事にばかり没頭していて、サツパリ気がつかないのです。それにあの男は、大変神経質で気の小さな男ですから、うっかり注意してやっても、却て悪い結果を齎してはと思ひまして、それとなく機会を覗つていたので。ところが、つい四、五日前に、二人で岳陰荘を使いたいからと申込まれましたので、早速貸してやりました。けれども、昨日東京を出発の際、私共夫婦で見送りに出たんですが、てっきり二人だけと思つていたのに、川口の細君も同行するのだと云つてついて来ているので、少からず驚いた次第でした。何も知らない川口は川口で、当分滞在するのだなどと、すっかり無邪気に躁いでいますし、私共は大変心配しました。……で、こちらへ移つて、三人だけの生活がどんなになるかと思うと、うっかり私も堪らない気持ちになりまして、発車間際の一寸の隙をとらえて、ついそれとなく川口に『あちらへ行つたら、不二さんに注意しなさい』と言つてやりました。……後で、後悔したのですが、やっぱりこれが悪かつたのです」

「と被仰ると?」

司法主任の声は緊張している。

「つまり……私が……」

白亭は一寸戸惑った。

すると主任がさかさずたたみかけた。

「いや、判りました……つまり、富士山は、不二さん、に通ず……なんですね」

「いいえ、そう云うわけでは」

「ああいや、よく判りました……こりや、すっかり考え直しだ」

そう云つて司法主任は、椅子の中へそり反りながら、

「お蔭で、何もかも判り始めました。あの疑問の中心の妙な油絵も、こう判つて見れば、まことに理路整然として来ますよ……そうだ、全く今になつて考えてみれば、あの富士山の絵も、やはり南室で描かれたものではなく、最初の発見通り東室で、被害者の死際に描かれたものですね……あの東室の床の上の油の零れこぼ工合と云い、その上を被害者の足の滑つた跡の工合と云い、全くあれは、贖物にしては出来過ぎていますよ。あの屍体は南室から運ばれたのではなく、始めから東室にあつたんですね。……つまり、今あなたの被仰おっしやつたように、金剛氏と不義関係にあつた被害者の妻が、南室で荷物の整理をしながら、一寸の隙を見て東室へ忍び入り、これから写生をしようとしていた被害者を、後から殴り殺して、再び南室に戻り知らぬ顔をし

ている……一方断末魔の被害者は、倒れながら自分に危害を加えた妻を見て、恐怖にひつつりながらも死物狂いで目の前のカンバスへ、恰度持合わせた絵筆をふるつて、加害者の名前を描く……いや、これは傑作だ……不二は富士、に通ずる……全く傑作です！」

司法主任は、相手にかまわず独りで満足している。こうして白亭の意外な陳述は、忽ち不二の立場を、真ッ暗な穴の中へ陥入れてしまった。屍体の運搬説は転じて奇妙な遺言説？ となり、警察司法部は俄然色めき立って来た。

一方津田白亭は、自分の証言が意外な波紋を惹き起したのにすっかり狼狽してしまい、事態の收拾を大月弁護士に投げ出してしまった。

そこで大月は色々と策戦を練った上、容疑者の検挙に何等の物的証拠のないのを主要な武器として、今度は直接警察署長に向つて猛烈な運動をしはじめた。

この折衝は翌日の正午^{ひる}まで続けられた。そしてその結果、これは大月の名声も大いに与^{あずか}つて力あつた事は否^{いな}めないのだが、ひとまず容疑者の検束は延期になり、やがて一行は岳陰荘へ引挙げて来た。

そしてその翌日、東京へ解剖に送られる亜太郎の屍体と一緒に、津田白亭と川口不二は葬儀、その他の準備のために私服警官付添の上で上京し、一方弁護士の大月対次は岳陰荘に踏み留まつて、金剛蜻治を表面助手として、内心では「こいつも同

じ穴の貉むじなだわい」とひそかに監視しながら、事件の解釈と新しい証拠の拾集に没頭しはじめた。

亜太郎の残した奇怪な油絵については、大月はその絵をひと目見た瞬間から、司法主任の遺言説に深い疑惑を抱いていた。

もしも亜太郎が、その断末魔に臨んで、自分を殺した者が妻の不二であることを第三者に知らせるために、あのような富士山の絵を描き残した、と解釈するにしても、余りにもあの絵には余分な要素が多過ぎる。

例えば木立だとか、空だとか……そうだ。もしも亜太郎が、妻の名前を表わすために描いた絵であったなら、富士山ひとつで充分だ。あのようないくつかの余分な要素を、しかもあれだけ純然たる絵画の形式に纏め上げるだけの意力が、既に死期に臨んだ亜太郎にあつたのならば、もつと直截に、文字で例えば「不二が殺した」とか、或は「犯人は不二だ」とか、まだまだいくらかでも表わしようはある。いやなによりも、窓際に飛び出して、絶叫することすら出来る筈だ。——問題は、もつと別なところにあるに違いない。

二階の東南二室の間を、コツコツと往復ゆききしながら、終日大月は考え続けた。けれども一向曙光は見えない。

翌日は、別荘番の老夫婦を、改めてひそかに観察してみた。が、これとても何の

得るところもなく終った。

大月の巧妙な束縛を受けて、鎖のない囚人のように岳陰荘にとどめられた金剛はと云えば、割に平気で、時々附近の林の中へ出掛けては、なにかと写生して来たりしていた。けれどもその絵を見ると、それはこの地方が地形上特に曇天の日の多いせいか、大体は金剛の画風にもよるであろうが、いやに陰気で、妙にじめじめした感情が画面に盛り上っているのだ。大月はその度に、画家と云うものの神経を疑いたくなつた。

次の日の午後、来合わせた警官から、東京に於ける亜太郎の解剖の結果を聞かされた。けれどもそれは、先に挙げた平凡な後頭部の打撲による脳震盪が死因であると云う以外に、変つたニュースは齋もたらされなかつた。そして大月は、ふと犯人が亜太郎を殴りつけた鈍器を探すことを思いついて、二階へ上つていった。

けれどもこの仕事はなかなか六ヶ敷かつた。亜太郎の後頭部は、兇器に判然と附着するほど出血したのでもなければ、また兇器の何たるかを示す程の骨折をしたのでもない。この場合恐らくステッキでも棍棒でも、又花瓶でも木箱でも兇器となり得る。——大月弁護士は日暮時まで、二階の床をコツコツと鳴らし続けていた。

が、やがてどうしたことか急に階段を降りて来ると、別荘番の戸田を大声で呼びつけた。そして頻しきりに首を傾かしげながら、

「……妙だ……」

「……妙だ……」

と眩きはじめた。

が、やがて安吉老人がやって来ると、幾分顫えを帯びた声で、

「おい君、変なことを訊くがね……二階の東室の窓から、三十間程向うに、一寸した木立が見えるだろう？」

「はい」

と安吉老人は恐る恐る答えた。

すると、

「あの木立は、今日、他所の木と植替えたのかね？」

「そ、そんな馬鹿な筈はありません。第一、旦那様」と安吉は目を瞠りながら「あれだけのものを植替えるなんて、とても一日や二日で出来ることではありません」

「ふうム……妙だ」

「ど、どうかいたしましたか？ 木でもなくなつたんですか？」

「違う……いや確かに妙だ。……時に金剛さんは何処にいる？」

「只今、お風呂でございます」

「そうか」

大月はそのまま二階へ上ってしまった。

四

その翌日は珍しく上天気だった。

司法主任を先頭にして数名の警官達がこれでもう何度目かの兇器の捜査にやって来た。

大月にまでも援助を申出た彼等は、二階の洋服筆筒の隅から階下の台所の流しの下まで、所謂警察式捜査法でバタリピシヤリと虱潰ししらみつぶしにやり始めた。

が、今日は殆ど一日かかつて、午後の四時頃、とうとう司法主任は歓声を上げた。それは、もういままでに何度も何度も手に取って見ていた筈の、事件の当時亜太郎の屍体の側に転がっていた細長い一個の絵具箱であった。

慧眼の司法主任は、ついにこの頑丈な木箱の金具のついた隅の方に、はしなくも一点の針で突いたような血痕を発見したのだ。

主任は、岳陰荘を引挙げながら、勝誇ったように大月へ云った。

「どうやらこれで物的証拠も出来上ったようですな」

弁護士は軽く笑って受け流した。

けれどもやがて一行が引挙げてしまうと、なに思ったのか大月はさつさと二階へ上っていった。そして東室の窓を開けると、手摺に腰掛けて、阿呆のように外の景色に見惚れはじめた。

いつ見ても、晴れた日の樹海の景色は美しい。細かな、柔かな無数の起伏を広々と漉しもなく押し拵げて、彼方には箱根山が、今日もまた狭霧にすっぽりと包まれて、深々と眠っていた。

裏庭の広場からは、薪を割る安吉老人の斧の音が、いつもながら冴え冴えと響きはじめ、やがて静かな宵闇が、あたりの木陰にひたひたと這い寄って来る。浴室の煙突からは、白い煙が立上り、薪割りをしながら湯槽の金剛と交しているらしい安吉老人の話声が、ボソボソと呟くように続く。おとみ婆さんは、夕餉の仕度に忙しい。間もなく岳陰荘では、ささやかな食事がはじまった。が、大月弁護士はまだ二階から降りて来ない。心配したおとみ婆さんが、階段を登りはじめた。と、重い足音がして、大月が降りて来た。

けれどもやがて食卓についた彼の顔色を見て、おとみ婆さんは再び心配を始めた。僅か一時間ばかりの間に、二階から降りて来た大月は、まるで人が変わったようになっていた。血色は優れず、両の眼玉は、あり得べからざるものの姿でも見た人のように、空ろに見開かれて、食器をとる手は、内心の亢奮を包み切れずか絶えず小刻

に顛えていた。

大月は黙つてそそくさと食事を進めた。

食事が済むと、なに思ったのかステッキを提^さげて、闇の戸外へ出て行つた。そして東側の林の方へ、妙な散歩に出掛けはじめた。が間もなく帰つて来ると、人々の相手にもならず、黙り込んで二階へとじこもつてしまった。皆は口もきかずに顔を見合わせる。

翌朝――

司法主任が元気でやつて来た。

昨日の家宅捜査で見事に物的証拠を挙げた彼は、東京に於ける亜太郎の葬儀が済み次第、不二を検挙する旨を満足げに話した。けれども大月は一向浮かぬ顔をして、うわの空で聞いていたが、やがて主任の話が終ると、突然意外なことを云いだした。

「あなたはまだ、川口が殴り殺されたのだと思つていられますね」

「な、なんですつて?……立派な証拠が」

「勿論、その証拠に狂いはないでしょう。川口の致命傷は、確かにあの絵具箱の隅でつけられたものに違いありません。けれども川口は、あの絵具箱で殴り殺されたのではないのですよ」

「と云うと?」

「独りで転んだ時に、絵具箱の隅に触れたんです」

「飛んでもない？ 川口は立派な遺言を残して……」

「ありやあそんな遺言じゃ有りません。もつと外に意味があります」

「と云うと？」

「それが非常に妙なことで、とにかくあの事件の起きた日の日没時に、この東室の窓に、実に意外な奴が現れたんです。そいつは、私達にとつても、確かに一驚に値する奴なんだが。特に川口にとつてはいけなかつたんです。で、吃驚した川口は、思わずよろよると立上った途端に、左手に持ったままの調色板パレットの油壺から零れ落ちた油を、うっかり踏み滑つて、後にあつた絵具箱へ、後頭部をいやと云う程打ちつけたのです。これが、川口垂太郎の、疑うべきもない直接の死因です」

「一寸待つて下さい。……あなたは先刻さつきから、何か盛さかんに話していられるようだが、私にはさっぱり判りません。先日、私が川口不二を容疑者として連行した時に、あなたは、私が物的証拠を掴んでいないのを責められた。で、恰度あの場合と同様に、いま、あなたの云われる話について、なにか正確な証拠を見せて頂きたい」

「判りました」と大月もいささかムキになつた。「必ずお眼に掛けましょう。が、いま直ただちにと云う訳には参りません。私の方からお招きに上るまで、待つて下さい。必ずお眼に掛けます」

「……」

司法主任は、くるりと後を振り向くと、足音も荒く、さっさと帰ってしまった。

五

さて、大月弁護士が、司法主任への約束を果たしたのは、それから二日目の、天気
のよく晴れ渡った日暮時のことであつた。

大月と司法主任は、東室の長椅子ソファーに腰掛けて、窓の方を向いてお茶を飲んでいた。
司法主任は、相変らず御機嫌が悪い。焦立いらだたしげに舌打ちしながら、やがて大月
へ云つた。

「まだですか？」

「ええ」

「まだ、出ないんですか？」

「ええ、もう少し待って下さい」

そこで司法主任は改めてお茶を飲みはじめた。が、暫くすると、一層焦立たしげ
に、

「いったい、その怪しげな奴とやらは、確かに出て来るんですか？」

「ええ、確かに出て来ますとも」

「いったい、そ奴は何者です？」

「いや、もう間もなく出て来ます。もう少し待って下さい」

「……」

司法主任は、不機嫌に外を向いてしまった。

空は美しい夕日に映えて、彼方の箱根山は、今日もまた薄霧の帳とぼりに隠れている。

裏庭の広場では、どうやら安吉老人たききが薪を割り始めたようだ。きつと浴室の煙突からは、白い煙が立上っているに違いない。

と、不意に司法主任が立上った。右手にコーヒー茶碗を持ったまま、呻くように、

「こ、こりやあ、どうしたことだ！」

「……」

「あんなところに……」司法主任の声は顫えている。「あんなところに……むう、富士山が出て来た！……こ、こりやあ妙だ？」

見ればいつのまにか、箱根山を包んだ薄霧の帳とぼりの上へ、このような方角に見ゆべきもない薄紫の富士の姿が、夕空高く、裾のあたりを薄暗うすやみにぼかして、クツキリと聳そびえていた。

「あなたは、こう云う影の現象を、いままでにご存じなかったのですか？」

大月が微笑みながら云った。

「いや私は、最近こちらへ転勤して来たばかりです！……ふうん、成る程。つまりこりやあ、入日を受けて霧の上へ写った、富士山の影ですね」

「では、序ついでに」と大月は前方を指差しながら、「どうです、ひとつ、あの近景の木立を見て頂きましょうか」

「……」

司法主任は黙ってそちらを見た。

「……あれは、なかなか恰好のいい木立でして……」

「やややッ！」と主任は奇声を張りあげた。「むウ……色が変ってしまった！」

成る程、薄暗の中に一層暗くなっていなければならぬ筈の暗緑色の木立は、なんとした事か疑いもなく南室から見える木立と同じように、明かに白緑色を呈している。

「先晩、調べてみましたかね」大月が云った。「あれは合ね歡む木の木立でしたよ。そら、昼のうちは暗緑色の小葉こばを開いていて、夕方になると、眠るように葉の表面をと同じ合わせて、白っぽい裏を出してしまう……」

「成る程……判りました。いや、よく判りました。つまり川口は、あの時、この景色を描いていたんですね」

「そうです」

「じゃあ、それからどうなったんです？」

「……ねえ、主任さん」と大月が開き直った。「私達は始めての土地へ来ると、よく方位上の錯覚を起して、どちらが東か南か、うっかり判らなくなる場合がありますね。……当時の垂太郎も、きつとそれを経験したのです。で、東京を出る時に、見送りに来た白亭氏から、妙な注意をされて、なにも知らない川口氏は、なんのことかさっぱりわからず、持ち前の小心でいろいろと苦に病み、金剛氏等の云うようにすっかり鬱ふさぎ込んでしまったのでしよう。けれども目的地に着いて、この地方の美しい夕方の風光に接すると、画家らしい情熱が湧き上つて来て、心中の疑問も暫く忘れることが出来、早速東室このへやへやって来ると、この窓に恰度こんな風に現れていた影富士を見て、直ただちに方位上の錯覚を起し、感興の涌くままに、本物の富士のつもりで、この薄紫の神秘的な影富士を素速く写生しはじめる……」

「成る程」

「けれども、勿論これは、入日のために箱根地方の霧に写った影富士ですから、当然間もなく消えてしまいます。そこで、ふとカンバスから視線を離れた川口氏は、一寸ちよこの間に富士が消えてしまったのに気づいて、始めから本物だと思い込んでいただけに、この奇蹟的な現象に直面して、ひどく吃驚びっくらしたに違いありません。すると

その瞬間、川口氏の頭の中にその朝東京を出るときに白亭氏から与えられた妙な注意の言葉が、ふと浮びます。あれは、確か……あちらへいったら、ふじさんにきをつけなさい……と云うような言葉でしたね？……」

「むう、素晴らしい。……つまり、やっぱ私が、最初から睨んでいた通り、不二さんは、富士山に、通ずる……ですな……ふム、確かにいい。実に、完全無欠だ！」
司法主任はすっかり満悦の体で身を反らし、小鼻をうごめかしながら、おもむろに窓外を眺め遣った。

そこには、夕風に破られた狭霧の隙間を通して、恰度主任の小鼻のような箱根山が、薄暗の中にもツつり眠っているだけで、もう富士の姿は消えたのか、影も形も見えなかった。

（「ぶろふいる」昭和十一年一月号）

デパートの絞刑吏

多分^{ドイツ}独逸物であつたと思うが、或る映画の試写会で、青山喬介——と知り合いになつてから、二カ月程後の事である。

早朝五時半。社からの電話を受けた私は、喬介と一緒にRデパートへ、その朝早く起こつた飛降り自殺のニュースを取るために、フルスピードでタクシーを飛ばしていた。

喬介は私よりも三年も先輩で、かつては某映画会社の異彩ある監督として特異な地位を占めてはいたが、日本のファンの一般的な趣向と会社の^{コムマアシャーリズム}営利主義とに迎合する事が出来ず、映画界を隠退して、一個の自由研究家として静かな生活を送っていた。勤勉で粘強な彼は、一面に於て、メスの如く鋭敏な感受性と豊富な想像力を以てしばしば私を驚かした。とは言え彼は又あらゆる科学の分野に^{わた}互つて、周到な洞察力と異状に明晰な分析的智力を振り宏大な価値深い学識を貯えていた。

私は喬介とのこの交遊の当初に於てその驚くべき彼の学識を私の職業的な活動の上に利用しようとした。が、日を経るにつれて私の野心は限りない驚嘆と敬慕の念に変わつて行つた。そうして間もなく私は、本郷の下宿を引き払つて彼の住んでいるアパートへ、しかも彼と隣合せの部屋へ移住してしまつた。それ程この青山喬介と言う男は、私にとつて犯し難い魅力を持つていたのである。

六時十分前に、私達はRデパートへ着いた。墜死の現場はこのデパートの裏に当る東北側の露地で、血痕の凝結したアスファルトの道路の上には、附近の店員や労働者や早朝の通行人が、建物の屋上を見上げたり、口々に喧ましく喋り合ったりしていた。

死体は仕入部の商品置場に仮收容され、当局の一行が検死を終わった処であった。私達が其処へ入って行くと、今度〇〇署の司法主任に榮進した私の従兄弟が快く私達を迎えながら、この事件は自殺でなく絞殺による他殺事件である事、被害者はこの店の貴金属部のレジスター係で野口達市と言う二十八歳の独身店員である事、死体の落下点付近に幾つかのダイヤの混じった高価な真珠の首飾が落ちていた事、そしてその首飾は、一昨日被害者の勤務する貴金属部で紛失した二品の内の一つである事、更に又、死体及び首飾は今朝四時に巡廻中の警官に依つて発見されたものなる事、そして最後に、この事件は自分が担任している事を附け加えて、少々得意気に話してくれた。説明が終わると、私達は許しを得て死体に接近し、罌粟の花の様なその姿に見入る事が出来た。

頭蓋骨は粉碎され、極度に歪められた顔面は、凝結した赤黒い血痕に依つて物凄く色彩られていた。頸部には荒々しい絞殺の瘡痕が見え、土色に変色した局部の皮膚は所々破れて少量の出血がタオル地の寝巻の襟に染み込んでいた。検死のために

露出された胸部には、同じ様な土色の蚯蚓腫れが怪しく斜に横たわり、その怪線に沿う左胸部の肋骨の一本は、無惨にもヘシ折られていた。更に又、屍体の所々——両方の掌、肩、下顎部、肘等の露出個所には、無数の軽い擦過傷が痛々しく残り、タオル地の寝巻にも二、三の綻ろびが認められた。

私がこの無惨な光景をノートに取っている間、喬介は大胆にも直接死体に手を触れて掌中その他の擦過傷や頸胸部の絞痕を綿密に観察していた。

「死後何時間を経過していますか？」

喬介は立上ると、物好きにも側にいた警察医に向ってこう質問した。

「六、七時間を経ていますね」

「すると、昨晚の十時から十一時までの間に殺された訳ですね。そしていつ頃に投げ墜されたものでしょう？」

「路上に残された血痕、又は頭部の血痕の凝結状態から見てどうしても午前三時より前の事です。それから、少くとも十二時頃まではあの露地にも通行人がありますから、結局時間の範囲は零時から三時頃までの間に限定されますね」

「私もそう思います。それから被害者が寝巻を着ているのは何故でしょうか？ 被害者は宿直員ではないのでしょうか？」

喬介のこの質問に警察医は黙ってしまった。今まで司法主任に何事か訊問されて

いた寝巻姿の六人の店員の一人が、警察医に代つて喬介の質問に答えた。

「野口君は昨夜宿直ゆうべだったのです。と言うのは、各々違った売場から毎晩順番の交代で宿直するのが、この店の特種な規則12と言いますかまあキマリ12になつて居るので。昨晩の宿直は、店員の中ではこの野口君と私と、其処そこに立っている五人と、都合七人でした。それから雑役の用務員さんの方で彼処あそこにいる三人を加え、全部で十人の宿直でした。そんなわけで同じ宿直室へ寝ながら、宿直員の中ではお互に馴染なじみの少い顔ばかりと言う事になるのです。昨晩の様子ですか？ 御承知の通り只今では毎晩九時まで夜間営業をしていますので、九時に閉店してからすつかり静かになるまでには四十分は充分に掛ります。昨晩私達が、各々手分けをして戸締りを改めてから消燈して寝に就いた時は、もう十時に近い頃でした。野口君は、寝巻に着換えてから一人で出て行かれたようですが多分便所へでも行くのだらうと思つて別に気にも留めませんでした。それから今朝の四時にお巡りさんに起きられるまでは、何にも知らずにぐつすり眠つてしまつたのです。……ええ、宿直室は、用務員さん達のが地階で、私達のは三階の裏側に當つています。六階から屋上に通ずるドアでですか？ 別に錠は下しません」

12 「特種な」はママ

この宿直店員の供述が終ると、喬介は他の八人の宿直員に向つて、昨晚の事に関して今の供述以外のニュースを持つている人はないかを質問した。が、別に新しい報告を齎もたらした者はなかつた。ただ、子供服部に属していると言う一人が、昨晚は歯痛のために一時頃まで眠られなかつた事、その間野口達市のベッドが空からである事には少しも気が附かなかつた事、怪し気な物音などは少しも聞えなかつた事等、ちよつとした陳述をなしたに過ぎなかつた。

次に首飾に関する喬介の質問に対して鼻先の汗をハンカチで拭いながら、貴金属部の主任が次の様に語つた。

「只今知らせを受け驚いて出勤したばかりです。野口君はいい人でしたが残念な事をしました。決して他人ひとから恨みを受ける様な人ではありません。首飾の盗難事件ですか？ どうも野口君に限つて首飾とは関係ないと思ひますね。とにかく首飾は一昨晚の閉店時に紛失したのです。これこれ二品です。合わせてちよつと二万円の代物です。で当時の状況から推おして確かにお客さんの中に犯人が混じつていたと思われまふ。従つて貴金属部の店員は申すに及ばず、全店員の身体検査をするやら建物の上から下まで細密な搜索をするやら、いや全くこの一兩日は大騒ぎでした。それがこの始末です。全く不思議です」

丁度主任の供述が終つた時、屍体の運搬車が来て、三人の雑役係の宿直用務員が

屍体を重そうに提げ、臆病そうにヨタヨタした足取りで運び出して行った。その様子を暫く名残り惜し気に見詰めていた喬介は、やがて振り返るや私の肩を叩きながら元気よく叫んだ。

「君、屋上へ行こう」

もう開店時間に間もないと見えて、どの売場でも何時の間にか出勤した大勢の店員や売子達が、商品の上に覆われた白更紗のシートを畳んだり、新しい商品を選んで忙しく立働いているのを、エレベーターの中から見渡しつつ間もなく私達は屋上へ出た。今までの陰惨な気持を振り捨てて晴れ渡った初秋の空の下に遠く拡がる街々の藪を見下ろしながら、私は深い呼吸を反覆した。

喬介は、被害者野口が墜されたと思われる東北側の隅へ歩み寄り、腰を屈めてタイル張りの床を透かして見たり外廓を取り繞ぐる鉄柵の内側に沿う三尺幅の植込みへ手を突込んで、灌木の根元の土を掻き回す様に調べたりしていたが、間もなく複雑な気色を両の眼に浮べながら、西側の隅で虎に餌を与えている番人の姿や、東側の露台の上で気球係の男が軽気球の修繕をしている景色に見惚れていた私に向って、静かに声を掛けた。

「君、虎を見ているのかね。我々も一つ餌にありつこうじゃないか。……こいつは

なかなか面白い事件だよ」

もう喬介は歩き出した。とうとう喬介はこの事件に乗り出してしまったな、と思
いながらも、底深い好奇的な魅力に誘われた私は、喬介に従って六階へ降りた。其
処で私は電話室に這入り、新聞記者としての私の職責を果すために社への一通りの
報告を済ますと、喬介に連れ立って食堂へ出掛けた。

流石さすがに朝の内と見えて、食堂の内部はひっそりしていた。ただ、隅の窓に寄った
テーブルの一つに、司法主任と彼の部下の一人とが、分厚なサンドウィッチかじに嘯り
附いていた。彼は私達を見附けるや、立上って同じテーブルへ椅子を取り持つてく
れた。私達は快くその椅子に着いた。給仕が私達の註文を取りに來ると、華奢な鉄
格子の填はまった窓を見ていた喬介は、その少女を捕えて、何階の窓にも一様に鉄格子
が填はまっている、と言う事実を確かめていた。

やがて私達の食事が始まると、熱い紅茶を啜りながら司法主任が喋り出した。

「事件は複雑ですが解決は容易ですよ。私は実地検証主義ですからね。それです
な——勿論、殺人は昨晚の十時から十一時までの間で行われ、今朝の零時から三時
頃までの間に屋上から投げ墜されたものです。この時間と言ひ、戸締りが嚴重で外
部から侵入の余地がない点と言ひ、犯人は明かに店内の者です。いいですか、一層
はつきり言えばですね、昨夜この店内にいた者と言うのです。勿論これはあなた方

にだけ申上げるのですが、これから昨晚の宿直員を全部徹底的に調査します。ただ、ここで少し困難を感じる問題は、首飾の一件です。もしも首飾を盗った犯人が野口を殺害したものとすれば、何故犯人は首飾を遺棄したか？ もし又首飾を盗った者を被害者自身とすれば、殺人の動機はどこにあるか？ しかしこれらの問題を解決するためには、私は先ず首飾の指紋を検出して見ますよ。では、ご緩り——」

司法主任は、元氣な挨拶を残し、部下の警官を従えて食堂を出て行った。

今まで無言で食事をしていた喬介は、その口元に軽い微笑を浮かべながら初めて口を切った。

「あの人は君の従兄弟と言ったね。ま、いいや、一体に日本の警察は、犯罪の動機を真つ先に持ち出したがるよ。だからたとえそれが皮相的なものにせよ今度の事件の様に一見動機の不可解な犯罪に逢着すると、直ちに事件そのものを複雑化してしまふ。勿論、動機の探求結構さ。ただ、動機を以て、犯罪探偵の唯一の手掛であると考えたがる単純な公式的な頭脳に対して反駁したいのだ。早い話が、この事件に於て、我々はあの真珠の一件よりも、死体そのものに見られる三つの特徴の方が大事だ。第一に、頸部の絞殺致命傷並に胸部の絞痕——最初私はこの傷を鞭様の兇器で殴り附けたものと感違いした——に与えられた暴力が、非常に強大なものなる事。第二に両手の掌中に残された横線をなす無数の怪し気な擦過傷。その中には幾つか

の胼胝たこも含まれる。第三に、肩、下顎部、肘等の露出個所に与えられた無数の軽い擦過傷。と、まあこの三つだね。

先ず与えられた第一の手掛を分析検討して見よう。すると直ちに私は、犯人は数人又は非常に強力な一人の人間である、と言う推定に達する。同様にして、第二の手掛である掌中の擦過傷は、被害者が何物かを握り締めて摩擦さしたと言う事実を明確に暗示する、次に、第三の手掛である所々の軽い擦過傷を検討して見よう。軽薄ではあるが太く荒々しいあの瘡痕は、明かにナイフその他の金属類に依つて与えられたものでなく、鈍重で粗雑なものであり、且つ又掌中に擦過傷を与えた兇器或は同性質の兇器なる事を暗示する。そうしてこの事は、あの種の擦過傷を与える様なその物体が、犯行の当時現場に、もつと厳格に言えば格闘している被害者の身邊に、あつたか、或は、直接犯人が持つていたかのどちらかだ。が、この場合私は後者だと思ふ。何故なら、加えられた力の量的な差こそあれ、これらの擦過傷はあの頸部胸部の絞殺瘡痕に対して質的な共通点を持つているからだ。君はあの土色に変色した皮膚が擦り破れて、出血していた被害者の頸部を思い出し給え。そうして極めて幼稚な観察と推理に依つてすら、頸部に索溝の残つていない点と言ひ、あの皮膚の擦り破れ方と言ひ、第二第三の擦過傷を与えたと同一の太く粗雑な兇器である事は容易に頷うなずき得る筈だ。

従つて私は、これらの個々の事実の検討から、私の分類した三つの瘡痕に加えられたそれぞれの兇器が、犯行に使用された唯一の兇器である事に帰納する。だから被害者の持っていたあの幾個所かの擦過傷は格闘の際現場に転つていた奇妙な物体に依つて外部的に受けたものではなくて犯人の手から執拗に襲い掛つて来る蛇の様な兇器に依つて与えられたものなのだ。だが、推理を今後の過程に進めるに當つて最も興味深い存在をなすものは、あの掌中に残された奇怪極まる擦過傷だよ。まさか君は、死人が綱引き遊びをしていたなんて言うまいね。

次に、あの無数の軽い擦過傷が明かに格闘に依つて与えられた軽傷である事は、まさしく疑う余地がない。しからば格闘は、従つて犯行は、どこで行われたか？ 勿論、屋外であれ程判然たる他殺の痕跡を加えて殺害したものを、わざわざ運び込んで屋上から投げ墜し墜死に見せかけよう、なんてナンセンスは信じられない。しかもこの場合嚴重な戸締りの問題がある。しからば次のデパートの屋内で犯行が行われたとの解釈はどうか？ この解釈が肯定されるためには、被害者が殺害されるまでの格闘の際、一言の救助をも求めなかった、と言う驚くべき事実だ。従つて犯行は最後の場所、即ち屋上で行われた事になる。この考え方は確かに平凡である。警察も同感だろう。が、同じ同感でも私はその断定を下すまでに少くとも他の一、二の問題を明かに否定している。例えば先程私は被害者の絞殺致命傷の特徴からして、

犯人は数人又は非常に強力な男と断定した。がこの内の「数人の犯人」は、以上の私の検討に依つて既に否定されている。ああ言う組織の宿直員の中では、まず共謀と言う事は成立しないからだ。従つて犯人は力の強い一人の男と言う結果に逢着する。その強力者とは誰だ」

「大分複雑になつたねえ」

喬介の説明に恍惚うろたひとして聞き入つていた私は、とうとうその興奮を爆発さしてしまつた。喬介は、煙草に火を点けてぐつと一息深く吸い込むと、眼を輝かせながら言葉を続けた。

「複雑になつた？ 違ふよ君、簡単になつたのだよ。シャーロック・ホームズ気取りになるがね、『凡オての否定を排除すれば残れるものが肯定である』と、どうだね。そうして犯行は屋上——この場合植込みに足跡のなかつた事を留意して置く必要がある。——次に、所々の特に掌中の奇怪な擦過傷、強い力を持った犯人、執拗な兇器。これらの手掛を基礎として、最後の調査をして見よう。さあ、一つ拡大鏡でも仕入れて、もう一度屋上へ登ろう」

私達は立上つて食堂を出た。何時の間にか入り込んで来た外客のために、辺りは平常のざわめきに立ち返り、階下の楽器部から明朗なジャズの音が、ギャラリイを行き交う人々の流れを縫つてゆるやかに聞えていた。

四階の眼鏡売場で中型の拡大鏡を手に入れた私達は、人々の波を分けて、再び屋上へ出た。事件のあったためか、一般の外客は禁足してあり、ただ数人の係員が、私達の闖入ちんにゆうに対して、好奇の眼を睜みはっていたに過ぎなかった。

喬介は眉根に深い皺しわを刻まして首を傾けながら、屋上の隅から隅へ鋭い観察を投げ掛けていたが、やがて私を促して死体の落下点と思われる東北側の隅へやって来ると、拡大鏡を振り廻して先程よりも一層綿密に鉄柵や植込みを調べ始めた。が、間もなくフツと思ひ切った様に其処を離れると今度は、何事か記憶を思い浮かべるかの様に、小声でぶつぶつ呟つぶきながら、西側の虎の檻に向って歩き出した。其処で喬介は、大きなアフリカ産の牡虎が、屈くつ託たく氣けに昼寝をしている姿を見詰めながら暫く深い思案に陥っていた。が、急に向き直って、晴れ渡った大空の一角に眼をやった。と、彼はその両の眼を生き生きと輝かせながら、東側の露台へ向って大股に歩き出した。

その露台では、今まさに大きな灰色の広告気球バルーンが、その異様な姿態さくらを晒さらけ出して、愉快な青空の中へ、むくむくと上昇し始めていた。私は思わず息を吸い込んだ。

が、そこで私の驚いた事には、広告気球バルーンを揚げ掛けた気球係の男を捕えて、喬介は冷たい訊問を始めた。

「君は今朝何時に此処こゝへ来たかね？」

「ええ、実は昨晩少し天候が悪かったものですから責任上心配して、今朝は何日もより少し早く六時半に出勤しました」

捲取機ローラーのハンドルを逆回転させながら、係の男は愛想よく答えた。

「すると君は、六時半にこのバルコニーへ出た訳だね？」

「いいえ違います。六時半と言うのは店へ着いた時間です、それからあの事件の噂を聞いたり屍体を見たりしていたものですから、此処へ上った時はもう七時でした」

「その時、このバルコニーの上で何にか変った処はなかったかね？」

「別に気付きませんでした、ただ、瓦斯ガスのホースが乱雑に投げ出されてあり、バルーンは非常に浮力が減って、フニャフニャになりながら、今にも墜おちそうに低い処で漂っていました。が、これは天候の荒れた後によくあることです」

「バルーンは夜中にも揚げて置くのですか？」

「ええ、下に降ろして繫留けいりゅうして置くのが普通ですが、天候を油断してそのままにして置く時もあるのです」

「バルーンの浮力が減ったと言うのは？」

「気囊きぶうに穴あが明あいていたのです。もつともその穴は、一月程前に一度修繕した事のある穴ですが——」

「ははあ、それで君は先程気囊の修繕をしていたのだね。ところで、このバルーン

の浮力はどれ位あるかね？」

「標準気圧の元では600^{キロ} 疋は充分あります」

「600^{キロ} 疋と言うと随分な重量だねえ。いや、有難う」

訊き終ると喬介は、広告気球のロープに着いて揚つて行く切り抜き文字を見詰めた。

ちようど^{バルーン} 広告気球が完全に上昇してロープが張り切った時に司法主任がやつて来た。

「やあ、皆さんそんな処で深呼吸をしているのですか！ いや、非常に結構な事です。ところでどうですか。首飾の指紋はやつぱり被害者野口のものでしたよ。ほら、こんなにはつきりと検出されました。」

こう言つて司法主任は私達の^{めのまえ} 眼前へ七色に輝く美しい首飾をぶら下げた。成る程、その大粒な連珠の上には、二つの大きな指跡が、はつきりと浮び出ていた。

「ほう、結構ですね」喬介は微笑んだ。

「ところで、済みませんがその水銀とチョークの混じった何んとやら粉を、私にも一寸拝借さして下さい」

呆気にと取られている司法主任の手から、検出用具を借り受けると、捲取機^{ローラー}に寄り添つて、ハンドルの上へ、灰色の粉を器用な手付きで振り掛け、やがてその上を駱駝^{らくだ}

の刷毛^{はけ}で軽く払い退けた。

「ああ、やっと今気付きましたが、今朝修繕するためにバルーンを降ろした時、瓦斯^{ガス}注入口^{ゲート}の弁が開いたままになっていました」

今まで何事か考えていた係の男が、急に口を切ってこう言った。

「弁が開いていた？」

驚いた様に顔を上げて訊き返した喬介は、暫く考え込んでいたが、

「ほう、非常に有力な証拠だ」

と、独りで呟くと、再び元の姿勢に戻って、拡大鏡でハンドルの表面を調べながら、係の男に言葉を掛けた。

「君は今朝グローブを嵌^はめずに此処へ触れたね？」

「ええ、最初バルーンを降ろす時には、修繕するために急いでいましたので——」
それから喬介は、首飾を司法主任の手から借り受け、ハンドルの上に検出された指紋と、首飾の指紋とを較べ始めた。私も喬介の横へ屈み込んで、両方の指紋を熱心に比較して見た。が、二通りの指紋は、各々全く別個のものである事に私は気附いた。

「ね。君も気附いたろう？ ほら、このハンドルの上には、この人の指紋以外に、この首飾の指紋、つまり被害者の指紋は一つも見られない。これでよろしい。さあ、

バルーンを静かに降ろして下さい」

喬介の言葉に、係の男は一寸不審気な表情を見せたが、間もなく作業手袋を嵌めて、捲取機ローラーのハンドルを廻し出した。

一呎フイット。二呎フイット。—— 広告気球は静かに下降し始めた。

喬介は拡大鏡を、捲き込まれて行くロープに近付けて鋭い視線をその上に配っていた。が、間もなく三十五、六呎フイットも捲き込まれたと思う頃、広告気球バルーンの下降を中止させて、司法主任に声を掛けた。

「犯人を見付けました——」

喬介のこの言葉に少からず驚いた私達は、喬介の指差した太い麻繩のロープの一部に、深く染み込んである少量の赤黒い血痕を認めた。

「これがつまり被害者の頸部の絞傷から流れ出た血痕です。さあ、もうバルーンの用事は済みました。揚げて下さい……ああ一寸待つて下さい。全部降しちやつて下さい。まだ一事忘れていた。当っているかいないか、一寸試して見ますから」

係の男は、呆気あっけに取られたまま、再びクランクを始めた。

司法主任は、極度の興奮のために歯をカチカチ鳴らしながら、静かに降りて来る広告気球バルーンと、喬介の横顔と、そうして係の男の挙動とを、等分に見較べながら立つていた。

やがて広告気球バルーンが降り切つて、その可愛い天体の様な姿を私達の頭上に横たえる
と、喬介は瓦斯注入ガスゲート口の弁を開いてその中へ細い手首を差し込み、暫く気囊の内底
部を掻き廻していたが、間もなく美しい首飾を一つ取り出した。

「図太い野郎だ！」

司法主任が係の男にとびかかろうとした。

「お待ちなさい。人違いですよ。犯人はバルーンです。この軽気球です。ほら、こ
れを御覧なさい」

喬介が、瓦斯注入ガスゲート口の金具、弁、新しく発見された首飾の三点に、先程の「灰色
粉」を振り掛けて刷毛で払うと、三点共に同じ様な幾つかの指紋が、見る見る検出
されて来た。

「御覧なさい。この人の指紋ではないでしょう？」

「ふーむ。確かに被害者野口達市の指紋だ」

司法主任はまるで狐につままれた態かたちだ。喬介は私の方を振向いた。

「君。濟まないがね。中央气象台へ電話を掛けて、昨晚の東京地方の氣象を問い合
せて下さい」

喬介の命ずるままに六階へ降りた私は、其処の電話室で任務を済ますと、結果を
ノートへ記入して再び屋上へ帰つて来た。喬介は、私の渡したノートを受け取ると、

「いや、有難う。753耗ミツの低気圧と西南の強風か。さあ、もう用事は済みましたからバルーンを揚げて下さい。さて、これから結論の説明に移りましょう」

言い終ると喬介は、上昇して行く広告気球バルーンを見上げながら煙草に火を点け、静かに口を切った。

「私は先ず、第一に、犯人は宿直員以外の強力な男である事、——この場合戸締りが嚴重であつた事を考慮に入れて置く——。第二に、犯行は屋上で為なされた事、——この場合植込みにも鉄柵にもタイル床の上にも、何等の痕跡がないと言う消極的な手掛に留意して置く——。第三に、犯行に使用された唯一の兇器が、屈曲の自由な長い粗雑な表面を持った物体、端的に綱様の物である事。第四に、犯罪の動機が決定的でない事等の基礎知識の把握に成功しました。そこで私はこれらの材料をスタートとし、極めて厳格な批判の元で、出来得る限り自由な想像力を働かせ、新しい総合的な推理に踏み出しました。間もなく私は、このバルーンのロープを兇器とする、未だ多分に粗雑ではあるが或る一つの推定に到達しました。そしてその粗雑さを克服するためにこのバルコニーへやって来て、私の概念的な粗雑な断案を、加工し整理すべき新しい材料の拾収を始めました」

ここで喬介は、一寸言葉を切つて、改めて広告気球バルーンを振り仰ぎながら、一段と声を高めて話し始めました。

「つまり、一昨日おとといの晩営業中に、二つの首飾を盗んだ野口達市君は、当然行わるべき身体検査や建物中の厳しい搜索を予期して、最も安全な場所へ、即ちバルーンの内底部へその首飾を隠して置いたのです。勿論君は」と、係の男を見ながら、「夜間にバルーンの番をしてはいないでしょうね？ 宜よろしい。そして昨晚、多分隠した首飾が気に懸ったのでしよう、宿直当番になった被害者は、就寝前の十時頃、バルーンの様子を見るために屋上へ登ったのです。其処で彼は、穴の明いたバルーンが、浮力の減少したためにフニャフニャと降りて来そうなのを発見して非常に驚き、急いで力任せにロープを手繰りたぐりバルーンを降り始めました。浮力が減少したとは言え、瓦斯ガスが充満してさえいれば600キロ瓦の浮力を持つバルーンです。被害者は掌中に幾つもの胼胝たこを作りながら、夢中でバルーンを降してしまいました。そして、瓦斯ガス注入口の弁を開き、多分一度は隠した品物の安全を確かめたでしょう、勿論まだ事件のほとぼりが冷め切っていないために、品物を持ち出す危険は避けたのでしよう。それから瓦斯ガスのホースをあてがい、水素瓦斯ガスの補充を始めます。瓦斯ガスが充満するに従って、バルーンの浮力は増大します。この場合、被害者は重大な過失を犯しています。即ち、最初バルーンを降す時に驚きの余り急いだため捲取機ローラーを使用せずに直接手で手繰りたぐり降してしまった事です。この推定に対しての反証は、今朝急いでグローブなしでハンドルを掴んだこの係の方の指紋以外に、被害者の指紋が検出されない限り無力で

す。従つて、瓦斯^{ガス}注入口^{ゲート}の金具又はロープを手で押さえながら瓦斯^{ガス}の補充を行つていた被害者は、瓦斯^{ガス}が充満されバルーンの浮力が増大するに従つて、初めて捲取機^{ローラー}を使用しなかつた過失に氣附いたのです。多分非常に驚いた彼は、急いでロープを捲取機^{ローラー}の何処かへ引つ掛けて、バルーンの上昇を牽制^{けんせい}しようと思つた事でしょう。が、浮力の増したバルーンは、瓦斯^{ガス}のホースを投げ離し、弁を開けつぱなしたまま容赦なく上昇を始めます。被害者は夢中でその上昇を牽制する。自分の体を引き揚げられない様に注意しながら、ロープを握つた両手に力を加える。が、太い粗雑なそのロープはいたずらに彼の掌中に無数の擦過傷を残したまま、どんどん延び揚^{あが}つて行きます。切り抜き^{サイ}の広告文字^{サイン}ももう飛び揚つてしまつた頃、前に被害者の犯した過失が、ここで恐るべき結果を齎^{もた}らします。即ち、被害者の足元に手繰り取られ、蝨局^{とぐろ}を巻いていたロープが、大騒ぎをしている被害者の体へ、自然と絡み附いたのです。勿論、彼は夢中で格闘を続けます。が、ロープは彼の体の所々、例えば肩、下顎部、肘等の露出個所に無数の軽い擦過傷を与え、寝巻の一、二箇所を引き裂いて、更に頸部と胸部に絡み附きます。動きの取れなくなつた被害者の体は、そのまま天空^{そら}へ引つ張り揚げられます。バルーンが惰性的に上昇し切つてロープが強く張り切つた時に、彼の呼吸は止まり、肋骨は折れ、頸部の皮膚は擦り破れて出血する。野口達市君は、文字通り天国へ登つたのです。さて――」

喬介は、先程私の渡したノートに眼を遣り、

「午前零時から二時半までに、東京地方を通過しているミッ耗の低気圧と西南の強風は、バルーンを垂直上昇線から東北方へ押し出します。穴の明いていたバルーンは、低気圧の通過と相俟つて、ようやくその浮力を減じ、ロープの緊張は弛んで被害者の屍体は振り墜されます。デパートの屋上へではないのですよ。デパートの東北の露路のアスファルトの上へです。屍体が振り墜された時の震動に依つて、気囊の内底部に押し込んであつた首飾の一つが、弁を開けつばなされたままの瓦斯注入口から、死人の後を追います。最後に、勿論御承知のこととは思いますが、絞死による屍体の血液は比較的長時間に亙つて流動状態にあるものですから、死後数時間を経てロープから振り落された屍体といえども、破壊された頭部の傷口からアスファルトの上へ、生々しく出血します——」

言いおわつて喬介は改めて空を振り仰いだ。

九月の美しい青空の中に、くつきりと浮び上つた夢の様な広告気球は、この奇妙なデパートの絞刑吏は、折からの微風に下腹を小さく震わせながら、ふわりふわりと漂っていた。

灯台鬼

わたし達の勤めている臨海試験所のちようど真向いに見える汐巻灯台の灯が、なんの音沙汰もなく突然吹き消すように消えてしまったのは、空気のドンヨリとねばつた、北太平洋名物の紗幕のようなガスの深いある真夜中のことであつた。

水産試験所と灯台とでは管轄上では畑違いだが、仕事の上でおなじように海という共通点を持つているし、人里はなれたこの辺鄙な地方で、小さな入り海をへだてて仲よく暮している関係から——などというよりも、毎日顕微鏡と首つ引きで、魚の卵や昆布の葉質と睨めツくらをしているような味気ないわたし達の雰囲気にひきくらべて、荒海の彼方へ夜ごとに秘めやかな光芒をキラリキラリと投げつけつづけている汐巻灯台の意味ありげな姿が、どんなにも、のずき、なわたし達の心の底に貪婪なあこがれをかき立てていたことか。だから、当直に叩き起された所長の東屋氏とわたしは、異変と聞くやまるで空腹に飯でも掻ッこむような気持で、そそくさと闇の浜道を汐巻岬へ駈けつけたのだつた。

いったい汐巻岬というのは、海中に半湮ほども突き出した岩鼻で、その沖合には悪性の暗礁が多く、三陸沿海を南下してくる千島寒流が、この岬の北方数湮の地点で北上する暖流の一支脈と正面衝突をし、猛悪な底流れと化して汐巻岬の暗礁地帯

に入り、ここで無数の海底隆起部にはばまれて激上するために、海面には騒然たる競潮レイスを現わしていようというところ。だから濃霧の夜などはことに事故が多く、船員仲間からは魔の岬と呼ばれてひどく恐れられていた。

ところがちようど三、四カ月ほど前から、はからずも当時あやうく坐礁沈没ざしやうをまぬがれた一貨物船の乗組員を中心にして、非常に奇妙な噂うわさが流れ始めた。というのは、汐巻灯台の灯が、ことに霧の深い夜など、ときどきヘンテコなことになるというのだ。本来この灯台の灯質は、十五秒ごとに一閃光いつせんくわうを発する閃白光であるが、こいつがときどきどうした風の吹き廻しか、三十秒ごとに一閃光を発するのだ。ところが三十秒ごとに一閃光を発する灯質は、明らかに犬吠灯台いぬほうとうだいのそれであり、だから執拗じつようなガスに苦しめられて数日間にわたる難航をつづけて来た北海帰りの汽船は、毎三十秒に一閃光を発するその怪しげな灯質をうっかり誤認して、うれしや犬吠崎が見えだしたとばかり、右舷うげんに大きく迂回うかいしようものなら、忽ち暗礁たちまに乗り上げて、大渦の中へ巻き込まれてしまうというのだ。船乗りには、かつぎ屋が多い。うそかまことかこのように大それた噂が、枝に葉をつけておいおいに船乗り達の頭へ強靱きやうじんな根を下ろしはじめた矢先き、それはちようど一月ほど前の濃霧の夜、またしても汐巻沖で坐礁大破した一貨物船が、数十分にわたる救難信号エス・オー・エスの中で、汐巻灯台の怪異を繰り返し繰り返し報告しながらそのまま消息を断ってしまったという事件が起

き上った。ここで問題は俄然表沙汰になり、とうとう汐巻灯台へ本省からのきびしい注意があたえられた。

ところがこの灯台は通信省灯台局直轄の三等灯台で、れっきとした看守人が二人おり、その家族や小使を合わせて目下六人もの人々が暮しているのだ。しかもその二人の看守の中の一人というのが、すこぶるしっかり者で、謹厳そのもののような老看守だ。歳は六十に近く、名前を風間丈六といい、娘のミドリと二人暮して、そのどことなく古武士のおもかげをさえもった謹厳な人格は、人々の崇敬の的となっていた。そしてまた一段と頼もしいことに、この老看守は人一倍はげしい科学への情熱を持っており、歳に似ず非迷信的で、本省からの調査忠告に対しても、「灯台には毎夜交替で看守がつくのだから、そのような馬鹿気たことはあるはずがない、それは多分、深いガスのながれや、またそのガスの中から光を慕って蝟集するおびただしい渡り鳥の大群などによって、偶然にも作られた明暗であり、それがまた尾をつけ鱗ひれをつけて疑心暗鬼を生むのであろう」と、けんもほろろにはねつけた。

けれどもこの謹厳な老看守の声明を裏切つて、汐巻灯台は、とうとう決定的な異変をひき起したのだ。

はじめ、正確に放たれていた十五秒ごとの閃光が、不意に不気味な不動光に変つたかと思うと、灰色のガスの中へなにか神秘的な光の尾を、そのままわずかに二秒ほども遠火のように漂わせて、それから急に、しかもハッキリと不吉な暗に溶けこんでしまった。ただ、救いを求めるような霧笛だけが、ときどき低く重く、潮鳴の絶え間絶え間に聞えていた。

さて——なんかといううちに、間もなく汐巻岬の突端にたどりついたわたし達は、光を失つた三十メートルの巨大な白塔が、ガスの中からノツソリと見え始めたころ、不意に前方の闇の中からもいわずに歩いて来た二人の男に出会った。灯台の三田村無電技手と小使の佐野だ。

「……あ、皆様……」

と小男の小使は、わたし達を認めると、すぐに走り出て声をかけた。

「これはこれはよく来て下さいました」

すると三田村技手が、押しかぶせるように、

「故障で、無電がきかないんです。ちょうどこれから、試験所までお願いに上がろうと思つていたところですよ」

なにか妙にそわそわしたきこちない二人の物腰からわたしは、なみなみならぬ事件が起きたのだな、と思つた。わたし達と一緒に、引き返して歩きながら三田村技

手が言った。

「じつは、当直の友田看守が、ひどいことになったです。それがとても妙なんで、ま、風間さんが詳しくお話しするでしょうが」

するとわたし達のうしろで、小使がふるえ声で突飛もないことをいった。

「とうとう、出ましただ」

「なに、出た？」

と東屋所長が聞きとがめた。すると小使は、自分の言葉を忌むように二、三度首を横にふりながら、

「……はい……ゆ、幽霊が、出ましただ……」

二

やがてわたし達は、コンクリートの門をくぐって明るい灯台の構内へ入った。向って右側に並んだ小さな三棟の官舎や左側の無電室には、明るい灯がともっているが、真ん中の海に面した灯台の頭は真つ暗闇だ。地上の灯の余映を受けて、闇の中へ女角力の腹のようにボンヤリと浮き上ったその白塔の下では、胡麻塩髭を生やしおんななすもろうて乃木大將然とした風間老看守が、色白な中年の女をとらえて、なにやらしきりに

引き留めているような様子だったが、わたし達を認めると、ただちに小使の佐野に女のほうをまかせて官舎の方へ追い払うと、やって来た。

「あれは友田君の細君のあきさんです。ひどい心気病みですから、もう少し落ちつかないことには、現場が見せられないんです。いやどうも、とんでもないことになりました」

そう言つて、風間老看守は、手燭てしよくの蝋燭ろうそくに火をつけようとするのだが、手がふるえて火が消えるので、何度も何度もマツチをすりつづけた。

わたしは今までも数回この老看守には会つてはいるのだが、こんなに彼が蹠踉せうろうとしてゐるのを見たのは初めてだ。あの謹厳な古武士のようなおもかげは、いまはもう微塵みじんも見えず、蝋燭ろうそくの焰ほのおを絶えず細かにふるわせながら、わたし達の先に立つて、灯台の入口のドアをしずかに開きながら、ふり返つて言つた。

「……ま、とにかく、現場を一度見てやつて下さい」

そこで東屋所長とわたしと三田村技手の三人は、老看守の後につづいて、うす暗い階段室に入った。ところが塔内に入ってドアを締め終つた老看守は今度は身をすりつけるようにして急に声をおとすと、訴えるように言つた。

「……わたしは、生まれてはじめて、幽霊をみました……」

あのしつかり者で聞えた風間老人までが、うって変つてこのようなことを言うのに、わたしは思わず身の固くなるのを覚えた。

「……いや、初めからお話しましょう」

と風間老人は、わたし達の先に立つて、暗い急な螺旋階段らせんを登りながら言った。その声がまた、長い高い塔内に反響して、なんとも言えない陰いんにこもつた眩つぶやくような木霊こだまを伴うのだった。

「……わたしは今夜は非番でしたが、あの友田看守は、このごろ昼間無電のほうをチョイチョイ手伝いますので、つい疲れてときどき居眠りをするようですし、変な噂はたつし、それに、今夜はわたしの横着娘が少しばかり加減が悪いので、それやこれやで、どうも思うように熟睡出来ませんでした……それはちようど、一時間ほど前のことです……まずわたしは、最初ゆめうつつの中で、突然屋根の上のほうでガラスの割れるような大きな音を聞いたのです。するとほとんどそれと同時に、おなじ方角で、なにかしら、機械でもこわれるようななはげしい金属的な音がいたしました。で、びつくりして飛び起きたわたしは、しばらく杳然ぼうぜんとしておりましたが、なにしろ天井の方角でそのような音がしたとすれば、この灯台よりほかにありませんので、急に堪たまらない不安にかられて官舎の玄関までとび出しました。見れば塔の

頂上のランプ室は灯が消えて真つ暗です。わたしは思わず大声をはり上げて、ランプ室に当直しているはずの友田君を呼び上げました。すると、その返事のかわりに、こんどはこの塔の根元で、突然大きな地響きがありました。こいつア大変だと急いでとび出したときに、向うの無電室からわたしとおなじようにとび出して来た、三田村君に出会いました」

老看守はここで一息ついた。なにかしら錯覚でもおこしそうなこの螺旋階段は、ひどくわたしの神経を疲れさす。わたし達の後から登って来た三田村技手が、このとき口を入れた。

「全くそのとおりです。わたしも風間さんとおなじように気味の悪い音を聞きました。そしてこの下の入口のところへ来たときに、この塔の頂上のほうから、低いながらも身の毛のよだつような呻き声うめを聞きました……友田さんのでしょうか……そしてその呻き声がやむかやまぬに、今度はなんとも名状しがたい幽霊の声を聞いたのです」

「幽霊の声？」

東屋氏が真剣に聞きとがめた。

「ええ幽霊の声ですとも。あれが人間の声であるのですか……それは、笑うようでもあれば、泣くようでもあり……そうそう、まるで玩具おもちゃの風船笛みたいでした」

「渡り鳥の中にも、あれに似た声を出すのがあったが」と老看守だ。

「いや、似ていますが、あれとはまた全然違います。むしろさ、かり、時の猫の声のほ
うが、余程似ています」

「ああそうそう、そうだったな」

と風間看守が引き取つて言った。「……そこでわたしは、とりあえず三田村君に無
電の方を頼んで、蝋燭の火をたよりにこの階段を登つたのです。そしてこの頂上の
ランプ室兼当直室で、とうとう、恐ろしいものを……」

「幽霊かね？」

と東屋所長が言った。

「そうです……あいつは、ランプ室の周囲の大事な玻璃窓を、外から大石でぶち破つ
て侵入したのです」

ちようどこのとき、三田村技手が、目の前の階段を指さしながら、大きな叫びを
上げた。見れば、うす暗い蝋燭の火に照らし出されて、階段の踏面にたまったどす
黒い血の流れが、蹴上げからポタリポタリとだんだん下へしたたり落ちていた。わ
たしは思わず息を飲みこんだ。そしてものも言わずにランプ室に躍り込んだわたし
達は、とうとうそこでほんとうに化け物の狼籍の跡を見たのだった。

円筒形にランプ室の周囲を取り巻いた大きなガラス窓の、暗黒の外海に面したほうには、大きな穴があき、蜘蛛くもの巣のようなひびが八方にひろがり、その穴から冷たい海風がサツとガスを吹き込むと、危なげな蠟燭の火がジジツと焦立いらだつ。うす暗いその光に照らされて、小さな円い室へやの中央にドツシリと据えられた、大きなフレネル・レンズのはまった三角筒の大ランプは、その一部に大破損を来し、暗黒のその火口からは、石油ガスが漏れているらしく、シューシューとかすかな音を立てていた。そしてその大きなカップ状の水銀槽にささえ浮うかめられた大ランプの台枠たいわくの縁ふちには、回転式灯台特有の大きな歯車が仕掛けてあるのだが、その歯車に連なる精巧な旋回装置は無残にも粉砕されて、ランプの回転動力なる重錘おもりを、塔の中心の空洞につるしているはずのロープは、もろくも叩たたき切られていた。

けれども何にもまして無惨で思わずわたし達の眼をそむけさせたのは、破壊された旋回機のかたわらに、口から血を吐き、両の眼玉をとび出さして、へなへなとつく、ねたように横たわっている友田看守の死体だった。そしてなんとその腹の上には、ひどく湿りをおびた巨大な岩片いわわが、喰くい込むように坐すわっているのだ。

「……これやアひどい……ずいぶん大きな石ですね」

東屋氏が口を切った。

「さあ、四、五十貫はありますね」と三田村技手が言った。

「こいつア大の男が二人かかってても、この塔の上まではちよつと運ばせんね……まして、外の海のほうから、三十メートルの高さのこのガラス窓を破って投げ込むなんて、正に妖怪よまかいの仕業しわざですよ」

「で、あなたを見た幽霊ゆうれいというのは？」

と東屋氏が、風間老看守のほうへ向き直った。すると老看守は引ツつるように顔をしか顰めながら、

「……先ほど申しましたように、わたしはこの室へやへ入った瞬間に、その割れた玻璃窓の外のデツキから、それは恐ろしいやつが、海のほうへ飛び込んだのです……それは、なんでも、ひどく大きな茹蛸ゆでたこみたいに、ねツとりと水にぬれた、グニヤグニヤの赤いやつでした……」

「蛸？」

と東屋所長が首をかしげた。

「蛸なら吸盤があるから、ここまで登つて来るかもしれないね」

とわたしは冗談らしく言った。すると東屋氏は、

「いや、この近海のように寒流の影響のある海には、二、三メートルからの巨大なミズタコというやつはいるが……けれども、そんな赤いものではない」

そう言つて、しきりに首をひねり始めた。

見ればリノリウムを敷き詰めた床の上には、なるほどそのような妖怪の暴れた跡らしく、点々としておびただしいガラスのかけや血海のほかに、なんとなくぬらぬらした穢らしい色の液体が、ところかまわずベタベタと一面にこぼれており、それがまたなんとも言えない生臭いような臭気をさえ、室中に漂わせているのだ。

三

「……わからん」

ややあつて、東屋氏が投げ出すように言った。

「さっぱりわからん……けれども、これだけのことはわかるね」と腕組みを解きながら、「とにかくわたし達試験所の当直の報告や、あなた方のお話を総合してみても、……まずこの大石が、玻璃窓を破って室内に飛び込み、ランプや旋回機を破壊して当直を叩き殺す。でそのとたんに、ランプの回転が止って閃光が不動光になり、間もなくガス管の故障で灯も消える……一方粉碎された旋回機に巻きついていたロープは切れて、回転動力の重錘とか分銅とか、とにかくそいつが、この塔の中心を上下に貫いている三十メートルの円筒の底へドシンと落ちて地響きを立てる……当直が断末魔の呻き声を上げる……そうだ。そしてそのとき、変な鳴き声

を出して、こんな気味のわるい分泌物をたらしながら、幽霊が侵入する……だが、それから先は、さっぱりわからん………」

「わたしは、こんな目に出合ったのは、生まれて初めてだ！」

風間老看守が吐き出すように言った。すると東屋所長が老看守に向って、

「とにかくあなたは、この惨劇をみつけてから、どうされたんです」

「わたしはびっくりして、下へ降りて行き途中で、登って来る三田村君に逢いました」

「無電が通じなかったからです」

三田村技手が言った。すると風間老人が、

「むこうの鉄柱からこの玻璃窓の前の手すりへはったアンテナが、大石のために切れてしまったからです……で、それから、わたしは小使を起そうと思つて下へ、三田村君は現場へと、すぐに別れました。でも、とにかくなんとかしなければなりませんので、しばらく迷つたあげく、三田村君と小使に、とりあえず試験所へご後援を願ひに向わせたんです」

「いやそうですか。一向お役にも立ちませんが」と東屋氏が、われに帰つたように言った。「じゃあとにかく、こうしてもいられませんから……そうだ、風間さん、あなたは、現場の証拠品に手をつけないようにして、早速予備灯の支度をなさつては

いかがですか。海は、真つ暗ですよ。……それから三田村さんは、アンテナを修繕して、少しも早く通信を始めて下さい。わたし達もお手伝いしましょう」

そこで二人はしばらく戸惑うようにしていたが、やがて波の音にせき立てられるように、そわそわと降りて行つた。そしてわたし達は、それぞれにはげしい興奮を押しながら、あらためて取り散らされた室内を呆然と見廻すのだった。

ところがここで、はからずもわたしは重大な発見をした。それは一丁のなまくらな手斧を、室内のうす暗い片隅から拾い上げたのだ。しかもそのにぶい刃先には、なんと赤黒い血がこびりついていた。

この発見で顔色を変えた東屋氏は、早速かがみ込んで、あらためてしげしげと友田看守の死体を眺め始めた。が、間もなく死人の頭の右耳の上に、この手斧でなくりつけたらしい新しい致命傷をみつけて立ち上つた。

「これアきみ、傷口の血のかたまり工合から見ても、この傷のほうか、先に加えられたほんとうの致命傷らしいね……すると、あの石の飛び込んだときには、もう友田看守は死んでいたんだ……だが、そうすると、あの石の飛び込んだ音の後から聞いたという呻き声は、死人のものなどではないことになる……これアだいぶん事情が違つてきた」

「じゃあやつぱりあれも、幽霊の唸り声？」

とわたしは思わず声を出した。

けれども東屋氏は、それには答えないでしきりに苦吟しつづけていたが、やがて語調をあらためて言った。

「ねえきみ……ぼくはまず、なんと言っても、この奇怪な暴れ石の出所のほうが先決問題だと思うよ……ね、この岩片いしには、この辺の海岸にはいくらでもいるフジツボやアマガイのような岩礁生物がんしやうが、少しもついていないところをみると、どうしてもこいつは、満潮線以下にあったものではないね。といつても、このしめり工合くあいじゃあ、まさか山の中のものじゃないし、どうだい、こうしている間に、ちよつとこの下のしぶきのかかりそうな波打ち際を散歩してみないかい」

というわけで、やがてわたし達は、灯台の根元の波打ち際へ降り立つた。

そこでは、閨の外洋から吹き寄せる身を切るような風が、磯波いそなみの飛沫ひまつとガスをいやというほどわたし達に浴びせかけた。けれどもすぐにわたし達は、塔の根元の一は番は烈はしい波打ち際の一段高くそびえた岩の上で、おなじような岩片が飛沫にぬれていくつも転がっているのを、ほとんど手さぐりで発見した。

ところがはからずもわたしは、おなじ岩の上で、わたしの足元から、岩の裂け目をクネクネと伝わって、一本の太い綱が、波打ち際から海の中へ浸ひたっているらしいのを、拾い上げた。はてな？　と思つて引つ張つて見ると、ずるずると出てくる。い

い気になって手繰りよせる。なかなか長い。やがてその先端がきたかと思うと、妙なことに、そこにはまた別の、今度はずっと細かい紐の先がしっかりと撚りつけてある。引つ張る。ところがこれがまたおなじようになかなか長い。やつと全部手繰り終つたわたしは、

「妙なものですね」

とわれながら妙な声を出した。すると今までずっとわたしの奇妙な収穫物を見つめていた東屋氏は、

「……こいつ面白くなってきた。ねきみ、これが考えられずにいられるものか！」
そう言つてわたしからその綱を取り上げると、

「何に使つたものか、聞いてみよう」
と歩きだした。

構内へ戻ると、ちょうど倉庫の前で三田村技手が、針金の束を引つ張り出してしきりになにかやつている。東屋氏は早速始めた。

「この綱は灯台のでしょうか？」

「そうです。倉庫にいくらも入れてあるやつです。おや、こんな紐のついたのは……はて、どこから拾つてこられたんですか？」

けれども東屋氏は答えようもしないで、しきりに暗の空をふり仰いでいたが、

やがて突飛もないことを訊きだした。

「この灯台の高さは、ランプ室の床までで三十メートルでしたね。じゃあきみ、この綱の長さを計って下さい」

三田村技手は、手もとの巻尺ではかり始めた。

「……綱も紐も、両方とも二十六メートルずつあります」

「なに二十六メートル？……待アてよ？」

とまたしばらく闇空を睨めていたが、

「ね、三田村さん。あの回転ランプの重量は、どれぐらいありますか？」

「さあ、一トンはあるでしょう」

「一トン……一トンというと二百六十六貫強ですね。じゃああのランプをグルグル廻しながら、三十六メートルの円筒内を下つて来る、あの原動力の重錘とか分銅は、随分重いでしょね？」

「そうですね、八十貫は充分ありますよ……大きな石臼みたいですよ……そいつがジリジリ下まで降り切ってしまうと、また捲き上げるんです」

「なるほど、最近捲き上げたのはいつですか？」

「昨日の午後です」

「じゃあ今夜は、分銅はまだ塔の上のほうにあったわけですね？」

「そうです」

「いやどうも有難う。あ、それから、この無電室でちよつと一服やらしてもらいますよ」

そう言つて東屋氏は、わたしを引つ張つて無電室へ入ると、ドアをしめて、

「さあきみ、少しずつわかつて来たぞ。まずはぼくの組み立てた仮説を聞いてくれたまえ」

四

東屋氏はそばの椅子いすに腰をおろすと、一服つけながら、話し始めた。

「まず、化け物にせよ人間にせよ、とにかくあの不敵な狼藉者ろうぜきものが、この太い綱の一方の端をあつた塔の頂きのランプ室から、玻璃窓の下の小さな通風孔をとおして、外の高い岩の上へたれておく。それから下へ降りて来て岩の上で例の岩片いしをたれていく太い綱の端でしばつておいてふたたび塔上へ登る。そしてランプ室においてあるほうの綱の端を、旋回機ふたの蓋をあけて、円筒内の頂きへほとんど一杯に上つてい

分銅の把手へ、かたわな結び¹⁵というかひつ、つとき、結びというか、とにかくそれで縛りつけ、そのちよつと引つ張ると解けるひつ、つとき、結びの短い一端へ、この細紐をこのとおりに結びつけて、さて旋回機のウインチに捲きついているロープを、そうだ、あの手斧^{ておの}で叩ツ切る。すると……」

「ああつまり釣瓶^{つるべ}みたいだ」

とわたしは思わず口を入れた。

「百貫近いその分銅のすさまじい重力を利用して、大石を暴れ込ましたというんですね。だが、そうすると、玻璃窓や機械のこわれる音とほとんど同時に、分銅の地響きがしなければなりません」

「もちろんその点も考えたよ」と東屋氏もつづける。「ところがきみ、ほら、綱は分銅の落ちる三十メートルの円筒の深さよりも、故意か偶然か、四メートルも短いじゃないか。だからつまり、あの地響きは、——海上から化け物が投げ込んだ暴れ石に、旋回機が碎かれたときに傷ついたロープが、そのあとだんだん痛んでいって、ついに切れて自然に分銅が落ちて地響きがした——などというのではなくて、友田看守を殺し、あのランプ室の破壊をほくがい言ったような方法で行った怪物が、

15 「かたわな」は底本では「かたわな」

一端を分銅の把手とってのひつとき、結びの端へ縛り他の一端をランプ室で手もとへ残しておいたところの、あの細紐を、破壊後に引つ張ると、果してひつとき、結びは解けて、それまで途中にぶら下っていた分銅は、俄然がぜん円筒底へ落ちる。そして二人の証人が、ガラスや機械のこわれる音のしばらく後から聞いたという、地響きを立てたのだ」

「なるほど」

わたしは頷うなずいてみせた。

「一方その怪人物は、解けた綱を手繰り上げると、友田看守の腹の上に坐った岩片いしのほうも解いて、階段から降りると物音に驚いて登って来る人に見られるから、ランプ室の外のデッキの手すりへおなじように綱をひつとき、結びにして、それをつたつて下の高い岩の上へ降りる。塔の根元よりは五、六メートルも高い岩だ。そしてひつとき、結びを解いて、不要になった綱を海中へ投げ込む……」

「なるほど、素晴らしい」

わたしは思わず嘆声を上げた。「それならどんな力のない男でも、少し動きさえすれば楽にやれますね。じゃ一体、それは幽霊の仕業しわざか、それとも人間の仕業か、ということになりませぬ」

「さあ、それが問題だよ」と東屋所長は立ち上りながら言った。

「暴れ石のからくりもこうわかってみれば、たしかに人間の仕業としか思われぬい

こまかきがある。けれども一方、あの謹厳な正直者の風間看守は、たしかに怪異の姿を見たと言うし、ランプ室の床に四散していた汚水といい、妙な唸り声や、鳴き声といい……ああとにかく、もう一度塔の上へ登ってみよう」

そこでわたし達は、ふたたび塔上のうす暗いランプ室へやって来た。けれどもそこには、三田村技手がいくつかの荷物を持って、わたし達よりも一足先に登って来ていた。そしてわたし達を見ると、これからアンテナの取付工事をするのだが、失礼ながらちよつと手伝っていただきたい、と申し出た。そこでわたしは、玻璃窓の外側の危な気なデッキに立って、なんのことはない、幾本かの針金の端を持って、即製の電気屋になった。

だいぶん風が出て来て、さしものふかいガスも少しずつ吹き散らされてきたようだが、そのかわり波が高くなって、わたし達の立っているデッキから三十メートル真下の岩鼻に、眩暈めまいのしそうな波頭がパツパツと白く嘯かみ砕ける。

「ずいぶん高いね」と東屋氏が言った。

「これだけのところを、綱につたわって降りるのは大変だ……」とそれから、突然元氣な調子になって、そばに仕事をしていた三田村技手へ、急に妙なことを言い出した。

「すみませんが、ちよつとあなたのでのひらを見せて下さい」

——ああ東屋氏は、てのひらの胼胝で怪人物を突き止めるつもりだ。なるほどこれは名案だ！

けれども、三田村技手のてのひらには胼胝は出来ていなかった。東屋氏は急にそわそわし始めると、テレ臭そうにわたしと三田村技手を塔上に残してそそくさと降りて行った。

アンテナ工事を手伝いながら見ていると、間もなく地上へ降り立った東屋氏は、ちようど官舎のほうから出て来た風間老人へ、

「まだ予備灯の仕度は出来ませんか？」と言った。

「ええ、まだこれから、掃除をしなければなりませんから」

風間老人の声は、なぜか元気がない。

「すみませんが、ちよつとあなたのてのひらを見せて下さい」

と案の定切り出した。これは面白くなって来た、と思つたのも束の間、やっぱり風間老人のてのひらにも胼胝は出来ていなかったと見えて、やがて老看守は倉庫の中へ入り、東屋氏は、今度は官舎のほうへ出掛けて行った。そしてわたし達の視野から姿を消してしまった。

アンテナ工事はなかなか困難だ。わたしの両手は折れそうに痛くなった。その上ここはひどく寒くて、眩暈もする。けれどもやがてその困難な仕事がほとんど出来

上ったところに、東屋所長が非常に緊張した顔つきで、飛び込むように帰って来た。東屋氏は明らかにただならぬ興奮を押しつけているらしく、途切れ途切れに言った。

「……あの細君、自分の亭主の死体が、見られないはずはないって、小使に喰くってかかってたよ……早く見せて上げたほうが、かえっていいと思うが……」

「てのひらはどうでした？」わたしは待ちかねて尋ねた。

「なにてのひら……うん、小使にも細君にも、胼胝たこなどは出来ていなかったよ」

「じゃあ、やっぱり妖怪の……」

「いや、まあ待ちたまえ……ぼくはそれから、そのお隣の風間さんの官舎へ、ちよつと失礼して上らしてもらったんだ、もちろん娘さんに逢あうつもりでね……そしてそこで、大発見をした！」

「大発見？　じゃあ、寝ている娘のミドリさんのてのひらに胼胝でもあったんですか？」

「いや、違う。それどころじゃあない」

「すると娘さんの身に、何か異変でも？」

「冗談じゃあないよ。ぼくはてんから、娘さんなど見はしない。彼女は、どこの部屋にもいやしなかった」

「ミドリさんがいなかったですって!!」

三田村技手が聞きとがめた。すると東屋氏は、うす暗い蝋燭ろうそくの灯に、大きな自分の影法師をニユツとのめらしながら、

「うん、そのかわり、さつき老人がここで見たという……あの赤いグニヤグニヤの幽霊に出会ったよ!」

五

やがて東屋氏は、驚いているわたしを尻目しりめにかけ、三田村技手へあらたまった調子で言った。

「ところで三田村さん。あなたは事件のあった直後にここへ登って来られたとき、階段の途中で風間さんに逢われたのでしたね。風間さんは、何か手に持っていますか?」

「……そういえば、洋服の上着を脱いで、こう、右手に持っていました」

「なるほど。有難う。じゃあもう一つ訊かせて下さい。あの娘さんは、何歳いくつですか?」

「ええと、多分、二十八です」

「品行はどうですか?」

「えッ、品行？……ええ、いや、なんでも、大変利口な、いい娘だつたそうですが……」
「いや、ここだけの話ですから、遠慮なく聞かせて下さい」

「はア……以前は、よかつたんですが……それが、その……」と三田村技手はひどく困つたふうで、

「……ちようど去年の今ごろのことでしたが、当時風間さんの宅に、しばらく厄介になつていたあ或る貨物船の機関士と、いい仲になつて、家を飛び出したのがそもそもよくなかつたんです……なんでもその後、横浜あたりでどうにかやつていたそうですが、なんしろ相手がよくない船乗りのことで、定石じょうせきどおり、子供ははぢ孕む、情夫おとこには捨てられたということになつて、半年ほど前に、すぐすぐ帰つて来たんです」

「ふむ、それで……」

「……それで、大変朗かな娘さんでしたが、それからガラツと人間が變つたようになりました……そんなふうですから、自然と父親の風間さんからも、なにかにつけて、いつも白い眼で見られていたようです。……全く、考えてみれば、気の毒です……」

そう言つて三田村技手は、思わず自分の軽口を悔むような、いやな顔をして両手を揉もみ合わせた。けれども、いままでじつと聞いていた東屋氏は、やがて暗い顔を上げると、眩つふやくように言つた。

「……ぼくは、あの暴れ石のからくりを弄ろうしたものが、なんだかわかりかけてきたようだ」

「いったいそれはだれです！ 娘さんですか、それとも……」

「もちろんそれは、娘のミドリさんだよ」

とそれから東屋氏は、そばの椅子へしずかに腰を下ろし、両膝りょうひざに両肘りょうひじをのせて指を前に組み合せ、ためらうように首を捻ひねりながら、ボツリボツリと切り出した。

「……これは、どうも少し、臆測おくそくに過ぎるかもしれない……けれども、どうしてもぼくの想像は、こんなふうにはばかり傾かたいてくるんだ。それに、どうもロマンスというやつは、畑はたけ違いでぼくには苦手だが、ま、……ここに一人の、純心な灯台守の娘があつたとする。あるとき難波船から救い上げた一人の船員と、彼女は恋に陥る。ところが父親は非常に厳格な人で、娘のそのような気持を受け容ゆるれない。当然若い二人は、相携あひたえて甘い夢を追い求める……けれども、やがて彼女の身に愛の実の穂みるころには、おとこの心は船に乗って、遠い国へ旅立つ……そしてひとすじの心を偽いつはりられた彼女は、堪え難い憎しみを抱いて、故郷へ帰る……けれども父親の冷たいもてなしは、彼女の心を狂おしいまでに搔かき立て、そして夜ごと日ごとに沖合をとおる夢のような船の姿は、彼女の心に憎しみの極印を焼きつける。おとこへの憎しみは船乗りへの憎しみとなり、船乗りへの憎しみは船への憎しみとなり、船という

船を沈めつくさんとしてか、とうとうきびしい掟おきてを犯して船乗りの命の綱の灯台へ、ガスの深い夜ごとに、看守の居眠り時を利用して沙汰限りの悪戯わるさをしかける……けれども、ある夜とうとう看守にみつけられた彼女は、驚きのあまりそばにありあわせた手斧てのおを振るって看守の頭へ打ち下ろす。そして自分の犯した恐ろしい罪に戸惑いながらも、犯跡を晦くらますために暴れ石のからくりを弄ろうする……そうだ、これはまた、前から組み立てていた灯台破壊の計画と見てもいい……」

「じゃあ、いったい、あの恐ろしい化け物はどうなるんです」

わたしは思わず口を入れた。

「そんなものはなかったよ」

「だって、あなた自身」

「まあ待ちたまえ。話をぶちこわさないでくれたまえ……あの親爺おやじさんは、大変厳格で正直で責任感が強く、ただでさえ白い眼で見っていた娘の、こんなにも大それた罪を許そうはずはない。けれども、それにもかかわらず、物音を聞いてここへかけ登って来た瞬間から、老人の気持はガラツと変って、生涯に一度の大嘘おとうそをつけて化け物を捏造ねつぞうし、娘の罪を隠し始めたのだった」

「だってそうすると、この化け物の狼藉ろうぜきの跡は、いったいどうなるんです。この怪しげな水や、三田村さんもたしかに聞いたというあの呻うめき声や、変な鳴き声は？」

「まあ聞きたまえ……ね、あのとき、蠟燭をともして恐怖にわななきながら、その階段を登つて来た老看守は、このランプ室でいつたいなにを見たと思う？……破れたガラス窓でもない。こわれた機械でもない。友田看守の死体でもない。いいかい。二人の生きた人間を見たのだよ！……恐ろしい罪を犯し、それをまたきびしい父親にみつけられて、半狂乱でガラス窓の外から、真逆様に海中へ飛び込んだ救うべくもない不幸な娘と、それから、もう一人……蛸のようにツルツルでグニヤグニヤの、赤い、柔らかな……そうだ、精神的なシヨックや、過労の刺戟のために、月満たずして早産れおちたすこやかな彼の初孫なんだ！……」

わたしは思わずハツとした。

——ああそうか、そうだったのか！ それでこそあの怪しげな呻き声も、のたうつような戦慄陣痛の苦悶であり、奇妙な風船笛のような鳴き声も、すこやかな産声であり、怪しげな濁り水も、胎児の保護を終えた軽やかな羊水であったのか、とわれながらいまさらのように呆れ返るのだった。そして可愛い初孫の顔を見た瞬間に、勃然として心の底に人間の弱さをおぼえた風間老看守の心境も、なんだか、わかるような気がしきりにし始めるのだった。

ちようどこのとき、わたしの快い夢を破つて、しずかにドアのきしむ音が聞え、やがてうちしおれた老看守風間丈六が、腫れぼったい瞼を暗い灯にぶく光らせな

がら、悄然しやうぜんと入口に立ち現われた。

とむらい機関車

——いや、全く左様ですよ。こう時候がよくなくなりますと、こうして汽車の旅をするのも、大変楽ですな……時に、貴下はどちらまで？……ああ東京ですか。やはり大
学も東京の方で……ああ左様ですか。いや結構な事ですな……え、私？ ああ私は、
ついこの先方のH市まで参ります。ええそうです。あの機関庫のあるところですよ。

——これでも私は、二年前までは従業員でしたな。あのH駅の機関庫に、永い間
勤めていたんです……いやその、一寸訳がありましてな、退職したんですが、でも
毎年、今日——つまり三月の十八日には、きまつてこうしてH市まで、或る一人の
可哀な女のために、大変因果な用事で出掛けるんですよ……え？ 私が何故鉄道
を退職たのかですって？……いや、不思議なもんですな。恰度一年前の三月十八
日にも、私はH市へ行く車中で、やはり貴下の様な立派な大学生と道連れになりま
してな、そして貴下と同じ様に、その事に就いて訊ねて頂きましたよ……これと言
うのも、きつとホトケ様のお思召なんでしょう……いや、とにかく嬉んでお話し
しましょう。全く、学生さんは、皆んなサツパリしていられるから……。

——私が何故鉄道を退職たか、そして何故毎年三月十八日にH市へ出掛けるか、
と言いますと、実はこれには、少しばかり風変りな事情があるんですよ。でも、そ
の事情と言うのが、見様に依つては、大変因縁咄めておりましたな、貴下方の様
に新しい学問を修められた方には、少々ムキが悪いかも知れませんが、でもまあ、

車中の徒然つれづれに——とでもお思ひになつて、聞いて頂きましょう。

——話、と言うのは数年前さかのぼに遡りますが、私の勤めていたH駅のあの扇形をした機関庫に……あれは普通にラウンド・ハウスと言われていますが……其処そこに、大勢の掛員達から「葬式機関車」と呼ばれている、黒々と燻すすけた、古い、大きな姿体の機関車があります。形式、番号は、D50・444号で、碾臼ひきうすの様に頑固で逞しい四対の聯結主働輪の上に、まるで妊婦みもちおんなのオナカみたいな太った罐かまを乗のっけその又上に茶釜の様な煙突や、福助頭フクノカミの様な蒸汽貯蔵罐ムを頂いた、堂々たる貨物列車用の炭水車付機関車なんです。

ところが、妙な事にこの機関車は、H駅の機関庫に所属している沢山の機関車の中でも、ま、偶然と言うんでしようが、一番轢殺れきさつ事故をよく起す粗忽屋そごつでして、大正十二年に川崎で製作され、直ただちに東海道線の貨物列車用として運転に就いて以来、当時までに、どうです実に二十数件と言う轢殺事故を惹起ひきして、いまではもう押しも押されもせぬ最大の、何んと言いますか……記録保持者レコード・ホルダー? として、H機関庫に前科者の覇権を握にぎっていると言う、なかなかやかましい代物です。

ところでここにもうひとつ妙な事には、この因果なテンダー機関車にまことに運が悪いと言いますか、宿命とでも言うのですか、十年近くもの永い歳月に亙わたつて、機関車が事故を起す度毎たびごとに、運転乗務員として必ず乗込んでいた二人の気の毒な男

があつたんです。

一人は機関手で長田泉三おさだせんぞうと言ひましてな、N鉄道局教習所の古い卒業生で、当時年齢三十七歳、鼻の下の賈物のチョビ髭を取つてしまえば何処となく菊五郎おとわや張りの、デップリした歳よりはずつと若く見える大男で、機関庫の人々の間ではもろに「オサ泉セン」で通用とおつていました。で、後の一人は、機関助手すきもとの杉本福太郎ふくとろうと言うまだ三十に手の届かぬ小男でして、色が生白く体が痩せていて、いつも鼻の下にまるで「オサ泉」の髭の様に、煤すすをコビリ着かせている奴なんです。

二人共呑気屋で、お人好で、酒など飲んだ後などはただわけもなく女共に挑いどみ掛つては躁はしやぎ廻る程の男なんですが、それでもD50・44号の無気味な経歴に対しては少からず敬遠——とでも言ひますが、内心よんどころない恐怖を抱いていたんです。で二人共最初の内はそんな恐怖など互いにオクビにも出さない様にしていたんです。が、そうした余り気持のよくない事故が度重なるに従つて、追々にやり切れなくなつて来たんです。そしてとうとう、当時より三年前の或る秋の夜——恰度その夜は冷しづい時雨しづれがソボソボと降つておりましたがな——H駅フリツジの近くの陸橋の下で、気の狂つた四十女の肉体を轢潰ひきつぶしてしまつた時から、「オサ泉」の主張で彼等の間に、ひとつの風変りな自慰が取上げられたんです。と言うのは、つまり被害者の霊に対するささやかな供養の意味で、小さな安物の花環ハヤシを操縦室キャップの天井へ、七七日の間ブラ下げ

て疾走ると言う訳なんです。二人は早速それを実行に移しました。

この一寸した催しは、間もなく同じ職場の仲間達の間にも俄然いい反響を惹起しました。そして人々は、この髭男の感傷に対して、一様に真面目な好感を抱く様になって来たんです。さあそうなると可笑しなものでしてな、「オサ泉」も助手の杉本も、追々に心から自分達の思い付きが如何にも張合のある有意義な営みの様に思われて来て、その後も相変らず事故の起つた度毎に、新しい花環を操縦室の天井へ四十九日間ブラ下げる事を殊勝にも忘れようとはしなかつたんです。そして何日の頃からとなく人々は、D50・444号を、「葬式機関車」と呼ぶ様になつていたんです。

いや、学生さん。

ところがここ二年前の冬に到つて、このD50・444号が、実に奇妙な事故に、しかも数回に亘つて見舞われたんです。

それは二月に這入つて間もない頃の、霜の烈しい或る朝の事でした。

当時一昼夜一往復でY——N間の貨物列車運転に従事していたD50・444号は、定刻の午前五時三十分に、霜よりも白い廃汽を吐き出しながら、上り列車としてH駅の貨物ホームに到着しました。

で、早速ホームでは車掌、貨物掛等の指揮に従つて貨物の積降が開始され、駅助役は手提燈で列車の点検に出掛けます——。一方、機関助手の杉本は、ゴールデン・

バットに炉口ブラスの火を点けてそいつを横ツちよに銜くぶえると、油差を片手に鼻唄を唄いながら鉄梯子タラップを降りて行つたんです。

が、間もなく杉本は顔色を変えて物も言わずに操縦室キャップへ駆け戻ると、圧力計ゲージと睨めツくらをしていた「オサ泉」の前へ腰を降ろし、妙に落着いて帽子と手袋を脱とり瘦せた掌ての甲へ息を吹掛けると、そいつで鼻の下の煤を綺麗に拭き取つたんです——これが、機関車の車輪に轢死者の肉片が引ツ掛つていた場合の、杉本の一種の合図、と言いますか、まあ、癖なんです。一寸断つて置きますが、あの巨大な機関車が、夜中に人間の一匹や二匹を轢殺ひきころしたかつて、乗務員が知らん顔をしている様な事はいくらもあるんですよ。

で、「オサ泉」は気を悪くして立上りました。そして黄色い声で駅員達を呼び寄せるので。——間もなく助役の指図で機関車は臨時に交換され、D50・444号は二人の乗務員と共に機関庫へ入院させられました。

ここで二、三名の機関庫掛員に手伝わられて、機関車の一寸した掃除が始まるんですが、およそ従業員にとつてこの掃除程厄介な気持の悪いものは、そうザラにはありませんよ。例えば轢死者が腕を千切られたとか、両脚を切断されたとか、或は胴体と首が真ツ二つに別れたとか、ま、そう言う風に割に整つたまるで刃物で傷付られた時の様な、サツパリした殺され方をした場合には、機関車の車輪には時たまひ

からびた霜降りの牛肉みたいな奴が二切三切引ッ掛っている位のもので、後はただ
処々に黒い染しみがボンヤリ着いて見えるだけなんです。で、そんな場合には少し神経
の春めいた男でしたなら、なんの事はないまるで肉屋の賄板まないたを掃除するだけの誠意
さえあれば事は足りるんですが、一旦轢死者ろくしやが、機関車の車台トラックのど真ん中へ絡まり
込んで、首ッ玉を車軸の中へ吸い込まれたり、ホイール・センター・コネクティング・ロッド輪心や連結桿コネクティング・ロッドに手足を引掛け
られて全速力で全身の物凄い分解をさせられた場合なんぞは、機関車の下ッ腹はメ
チャメチャに赤黒いミソミソを吹き着けられて、夥しい血の匂いを、発散するんです。
そして又そんな時には、きまつて被害者の衣服はそれが男の洋服であろうと女のキ
モノであろうと着ぐるみすつかり剥はぎ千切られて、機関車の下ッ腹の何処かへ引ッ
掛ってしまうんです。こんな場合の車の掃除が、所謂「ミソミソになる轢死者」でして、
機関庫の人々をクサらせるんです。

ところで、いま、転車台でクルリと一廻りして扇形機関庫ラウンドハウスへ連れ込まれたD50・
44号ですが、一寸調べて見ると、何処でいつの間に轢潰ひきつぶして来たのか、こいつが
その「ミソ」の部類に属する奴なんです。

杉本は顔をしか顰めてタオルに安香水を振り蒔き、そいつをマスクにして頭の後でキ
リッと結ぶとゴムの水管ホースの先端さきを持って、恰度機関車の真下の軌間きかんにパツクリ口を
開いている深さ三尺余りの細長い灰坑の中へ這入って行きましました——。

ところが、ここで奇妙な事が発見されたんです。と言うのは、こんな場合いつでもする様に、杉本は機関車の下ツ腹へ水を引ツ掛けながら、さて何処やらに若い娘のキモノでも絡まり込んでいないかなと注意して見たんです。が、轢死者の衣類と思われる様なものは、襦袢じゆばんの袖ひとつすらも発見みつからなかったんです。けれどもその代りに、杉本は、妙な毛の生えた小さな肉片を、まるでジグソー・パズルでもする様な意気込んだ調子で鉄火箸かねひしの先に挟はさんで持出して来ました。で、早速皆んなで突廻して鑑定している内に、検車係の平田と言う男が、人間の肉片にしては毛が硬くて太過ぎる、と主張し始めたんです。で、騒ぎ始めた一同は、二、三の年寄連中を連れて来て再び調べ始めたんです。そしてその結果、どうです。意外にも黒豚の下腹部の皮膚であろう、と言う事に決定したんです！

いやところが、この意外にも奇妙な決定を裏書する報告が、それから二時間程後にH駅所属の線路工手に依もたつて齋またらされました。と言うのはですな、H駅を去る西方約六哩マイル、B駅近くの曲線カーブになつて上り線路上に、相当成熟し切つたものらしい大きな黒豚の無惨なバラバラ屍体が発見されたんです。B駅と言うのは、多分御承知の事とは思いますが、県立農蚕学校の所在地として知られた同じ名の一寸した町にありましてな、その町の近郊の農家では副業としての養豚が非常に盛んなんです。で、多分、何かの拍子で豚舎の柵を飛び出した黒豚が、気ままにカーブ附近の

線路を散歩中不慮の災難に出合ったものに違いない——とまあ、そんな風に機関庫の人々は片付けて、やがてこの事件も割合簡単にケリがついたんです。そして人の好いあくまで親切な「オサ泉」は、粗末ながらも新調の花環キャップを操縦室の天井へブラ下げて、再び仕事に就き始めました。

すると、それから数日を経た或る朝、やはりH駅へ午前五時三十分着のD50・444号の車輪に、再び新しい黒豚のミソ、がくつ着いて来たんです。調査の結果、轢死地点は前回と同じB駅に程近いカーブの上り線路上である事が判りました。不思議と言えば不思議ですが、偶然——と言ってしまえばそれまでです。で、「オサ泉」も助手の杉本も、四十九日どころかまだ初七日にしかならない前の黒豚の花環の横ッちよへ、もうひとつの新しい奴を並べなければならなかったんです。

ところが、学生さん。

故意か、偶然か、又しても数日後の或る朝、同じD50・444号の車輪に、今度はさだめし柔かそうな白豚のミソ、がくつ着いて来たんです。助手の杉本は、早速鼻の下の煤を拭き取りました。まさに三度目です。時刻も場所も前二回と全く同じです。機関庫主任の岩瀬さんはどうとうB町の巡査派出所へワタリをつけました。

派出所の安藤巡査からの報告に依りますと、三匹の豚は、やはりB町附近のそれぞれ別々の所有者から、それぞれの時日に盗まれたものである事が判りました。が、何

者の悪戯わるさかサツパリ判りません。ただ「葬式とむらい機関車」D50・444号は、まるで彼岸会ひがんえの坊主ぼくしみたいに忙しかったんです。

でも、ここで私は、もう一度……いや、学生さん全く冗談じゃあないんですよ。本当にもういちど、同じ様な轢殺事件ひきころがもちあがつたんです。——凡ての条件は、前三回と殆ど同じでした。轢殺された豚は白豚で、トンネルの洞門ひまなみたいな猪鼻ぶたのびが……どうです、主働輪クラウンクの曲柄クランクにチョコナンと引ッ掛つて、機関車が走る度毎かさぐるまに風車かざぐるまの様にクルリクルリと廻つてるじゃありませんか。

岩瀬機関車、七原ななはら検車所の両主任は、カンカンに怒つてしまいましたよ。——全く、悪戯わるさにしては少し度が過ぎるんですからな。で、早速機関車助役の片山さんを指揮者とする三名の調査委員を選抜して、B町へ出張調査させる事になったんです。

さて、これから、その片山助役を大将とする連中の、奇妙な事件に対する所謂探偵譚たん——になる訳なんですがな、これが又なかなか面白いんです。で、まあとにかく、事件後その探偵連中から聞かされた知識の範囲内で、ひと通りお話いたしましたよう。

この片山機関車助役と言う人は帝大出身のパリパリでしてな、まだ鉄道としては新人の方なんですが、頭もいいし人格もあるし、それになかなか機智に富んだ敏腕家べんわんでして、いまではもう出世して本省の監督局におさまっていられますが、この人が当時の部下であるこの機関車係員を連れ、既にひと通りの下調べを済ました保線

課の係員を案内役として、翌日の午後二時発の下り列車で、早速B町へやって来たんです。

現場の曲線線路カーブと言うのは、B駅から一哩マイル足らずのH駅寄りにあつてカーブの内側は上り線に沿つて松林、外側は下り線に沿つて一面の桑畑なんです。で、一同が数字の書かれたコンクリートの里程標マイル・ポストの立つている処までやつて来ますと、案内役の保線課員は片山助役へ、四遍目の事故があつたのは昨日の事だからもう後片付けは綺麗に済んでゐる旨を断つて、現場に関する一通りの説明を始めたんです。それに依りますと事故の現場は四遍共全く同じその地点であつて、その度毎に、そこに立つている里程標マイル・ポストと、それから枕木の四頭釘よつあたまくぎ——これはカーブに於ける線路の匍進ふくしんを防ぐために、軌条レールに接して枕木の上へ止木を固定させる頑固な釘なんですが、その頭は、どの止木チヨツクのそれもそうである様に、普通五分位飛び出ているんです——で、つまりその釘の頭と里程標マイル・ポストの両方に、それぞれ普通の藁繩の切れ端が着けられたままで残つておりました。

「……で、要するに」と保線課員が最後に附加えました。「……つまり犯人は、軌条レールの外側の止木チヨツクの釘と、反対側にある里程標マイル・ポストとの間へ繩を渡し、その軌条レールの中心に当る部分へ豚を縛りつけて轢殺したものであろう、と私達は思うのですが——」

すると片山助役がこう言いました。

「じゃあ、どの豚公も皆殺される前までは生きてたんだね。でもそうすると、よくも縄で縛った位の事で逃げなかつたものだ——犯人がカーブの地点を利用したのは、成る程、縛つてある豚を機関車に発見されて停車されるのを恐れたからだろうが、それでも、豚公の方では近附く轟音に驚いて、そんな藁縄位切つてしまひそうなのだ——」

と、それから助役は、もうこの現場にはこれ以上の収穫がないと思つたのか、案内役へ、豚を盗まれた農家を訪ねたい旨を申出しました。

やがて一行は桑畑の中の野道を通り越して、間もなく静かなB町の派出所へやつて来ました。そこで厳しい八字髭の安藤巡査に案内を頼んで、四遍目の犠牲者を出した農家を訪ねる事が出来たんです。

その家の主人と言うのは、五十がらみの体の大きなアバタ面の農夫ですが、一行を迎えると、臆病そうに幾度か頭を下げながら穢いムツとする様な杉皮葺の豚舎へ案内しました。そしてそこで、盗まれた白豚は自分の家の豚の中でも最も大切にしていたヨークシャー系の大白種で六十貫もある大牝だとか、あんなにムザムザ機関車に喰われてしまったんでは泣くに泣けんと言う様な事を、鼻声で愚痴り始めたんです。

そこで片山助役は、安藤巡査へ、

「盗まれたのは、勿論轢かれた朝の夜中の事でしょうね？」
と訊ねました。

「四件ともそうです」

安藤巡査が答えました。

「一体どうやって盗み出すのですか？」

すると安藤巡査は、

「この低い柵の開き扉どを開けると、眠っていても直ぐ起きて来ますからそいつへ干菓子ひがしをくれてやるんです。喜んで従ついて来ます」

と、そこで助役が訊ねました。

「四遍共調査なさった結果、そうして盗まれたと言う事が判ったんですね？」

「そうです。四人の被害者の陳述は、大体そう言う風に一致しておりますからな」

すると助役が言いました。

「一寸ご面倒ですが、前後四件の、それぞれの日附を聞かして下さいませんか？」

「正確な日附ですか？……ええと」安藤巡査はポケットからノートを取り出して、「え

え最初は、二月の、十一日……次が、ええ二月十八日……それから、二月二十五日。

そして昨日きのうの三月四日——と、それぞれの午前五時頃までの真夜中です」

「……ははあ、じゃあヤッぱり……いや、すると七日目毎とに盗られたと言う事にな

るじやあないですか!! とすると、今日は月曜日ですから、日月……と、つまり日曜日の朝毎に盗られたんですね」と助役は暫く考えていましたが、やがて「……いま、この町で、日曜日、いや日曜以外の日でもいいんですが、とにかく一週間に一度ずつ定期的に繰返される一切の変化——それはどんなに一寸したつまらないものもいいのですが、例えば、会社、学校が毎日曜日に休むとか床屋、銭湯が何曜日に休業するとか、或は又何かの市が毎週何曜日に立つとか、どんな事でもいいんですから、とにかくこの町で七日目毎に起る事を、全部一度聞かせて見てくれませんか?」この質問には流石に安藤巡査も呆れたと見えまして、暫く眉根を顰めながら考えを絞っていました。が、やがて顔を挙げると、

「……会社、と言つてもH銀行の支店ですが、町役場、信用組合事務所、農蚕学校、小学校、まあ日曜日に休むのはそんなものです。製糸工場は、確か一日と十五日。床屋は七のつく日で月に二回、銭湯は五のつく日でやはり月に二回、それだけが公休で毎週ではありません……ええと、それから繭市はまだ出ませんが、卵市なら五日置きにあります……まあ、その他には……そうそう、農蚕学校で毎週土曜日の午後に農科の一寸したバザーがある位のもんです」

「はあ、その農蚕学校のバザーでは何を売るんですか?」
そこで安藤巡査はこう答えました。

「農科の方ですから、主として学生達の栽培した野菜や果実、草花などです。……仲々繁昌します」

すると片山助役は、その答弁にどうやら元氣をつけられたらしく今度は話題を変えて、

「犯人がまだ挙げられないとしますと、捜査や、事後の警戒はどうなっていますか？」

すると安藤巡査は昂然として、

「勿論処置は取ってあります。しかしどうも、手不足でしてな」

「いや、何分なにぶんお願いします。でも、却って余り騒がない方がいいと思います。じゃあ、もうこれ位で……」

助役はそう言つて、部下の機関庫係員や案内役を促しました。そして一行は、間もなく静かな夕暮のB町を引挙げたんです。

——一体、機関庫助役の片山と言う人は、もう部下達も相当期間つきあ交際つてたんですが、どうもまだ、時々人を不審がらせる様な変な態度に出るのが、彼等には甚だ遺憾に思われてたんです。何故つて、例えばB町を引挙げた助役は、H機関庫に帰つて来ると、直ちに翌日からまるで「葬式とむちい機関車」の奇妙な事件なぞはもう忘れてしまった様に、イケ酒蛙しやあしやあ酒蛙と平常ふだんの仕事を続け出したんです。二日経つても、三日

経つても依然としてそのままなんです。で、堪えかねた部下の一人が五日目の朝になってその事を詰問？すると、その又返事が実に人を喰つとるんです。「だって君。何もする事がなければ仕方がないじゃあないか」——てんですよ。

でも、その日の真夜中になって、助役のこの態度はガラリと一変しました。

それは多分、夜中の三時頃でしたでしょうか、助役は部下の一人——吉岡と言う男ですが——を叩き起して外出の支度をする、眠不足でフラフラしている彼を引張る様にして、自動車に乗り込んだのです。

何処をどう疾つたのか吉岡には一向に判りませんでした、とにかく半時間近くも闇の中を飛ばし続けた片山助役は、と或る野原で自動車を降りると、自動車は其処へ待たして置いて、吉岡へ静かに従いて来る様眼配せして傍らの松林へ這入つて行つたんです。吉岡は段々眼が覚めて来ました。そして間もなく灌木の間の闇の中へ助役と二人でどつかと腰を下ろした時には、彼等の前方十間位の処が松林の外れになっていて、その直ぐ向うはあのB駅に近いカーブの鉄道線路である事が判つたんです。夜露で、寒くなつて来るにつれて、吉岡の頭は少しずつハッキリして来ました。そして追々に助役のしている事が判つて来たんです。助役の腕の夜光時計は四時三十分を指しています。成る程考えて見ればいまはまさに三月十一日——日曜日の早朝です。あの奇怪な豚盗人が、五度ここへやつて来るものと助役は睨んでい

るに違いない——そう思うと吉岡は一層身内が引緊る様な寒気を覚えて、外套の襟に顔を埋めながら助役の側へ小さくなつてしまします。

恰度四時四十二分に夜行の旅客列車が物凄いい唸りを立てて、直ぐ眼の前の上り線路を驀進して行きました。そして辺は再び元の静寂に返つたのです。が、それからものの五分と経たない内に、助役が急にキツとなつて吉岡の肩先をしたたかにこ、突いたんです。

吉岡は思わず固睡を飲みました。

——成る程、桑畑の間の野道の方から、極めて遠くはあるが、小さな、低い、それでいて何となく満足そうな豚の鳴声が夢の様に聞えて来ます。

二分もする内に追々にその声は近付き、間もなく道床の砂利を踏む蹙音が聞えて、線路の上へ真ツ黒い人影が現れました。星明りにすかして見れば、どうやら外套らしいものの裾にズボンをはいた足が見えます。そしてその足の向側を、今度は何処の農家から盗まれて来たのか大きな白豚が、ヴイ、ヴイ、と鳴きながら縄らしいもので引かれて来るんです。男は時々腰を屈めては何か餌らしいものをくれてやりながら、下り線を越えて彼等の真ン前から少しばかり西へ寄つた上り線路の上へ立止ると、白豚へ再び餌を与えてそれからクルリと周囲を見廻したんです。——どんな男だか、暗くてサツパリ判りません。

やがて豚盗人は仕事に掛りました。五日前に此処で案内役の保線課員が彼等に話した推定は全く正しく、その通りに黒い男は豚を縛って、そしてその哀れな犠牲者の前へ沢山餌をバラ蒔いているんです。二人は静かに立上りました。そしてソロリソロリ歩き始めました。

だが、ナンと言う事でしょう。ものの二十歩も進まない内に、吉岡の靴の下の闇の中で枯枝らしい奴が大きな音を立てたんです。吉岡はハツとなると、もう夢中で線路めがけて馳け出しました。

瞬間——豚盗人は、一寸松林の方を振向いて、何でもこう鳥の鳴く様な異様な叫びを挙げると、いきなり円まくなって線路伝いに馳け出したんです。吉岡は直ぐに線路に飛び出してその黒い影を追跡しました。けれども二丁と走らない内に、もう彼はその影を見失ってしまったんです。やがて、

「お——い！」

と、助役の呼んでいる声が聞えました。

で、吉岡は、何だか責任みたいなものを感じながらも、ま、仕方なしにカーブの処まで戻って来ました。

すると、「なに、構わないよ」と片山助役が呼び掛けました。「急あせる事はないさ。それよりも、まず、この豚公を御覧よ……どうも僕は、ただ縄で縛って置くだけで

はそう何度もうまい工合に轢かれる筈はない、と最初から睨んでいたんだ」

見ると、成る程豚は少し変です。四足を妙な恰好に踏ん張って時々頭を前後に動かしながら、苦しそうに喉を鳴らして盛んに何かを吐出しているんです。

「毒を飲まされたのさ」

そう言つて助役は、結んである縄を解き始めました。そして間もなく二人は、可哀な豚を引摺る様にして、自動車くるまの待たしてある方角へ松林の中を歩き出しました。けれども途中幾度か激しい吐瀉としゃに見舞われた豚は、自動車のある処まで来るととうとう動かなくなつてしまいました。痙攣けいれんを起したんです。で、仕方なく側の立木へ縛つて置いて、驚いている運転手へ彼等だけB町の派出所へ遣やる様に命じました。そして恰度二人が自動車へ乗つた時に松林の向うを疾はる汽車の音が聞えて来ると、

「あれがD50・444号の貨物列車だよ」

と、助役が言いました。

それから役等はB町へ出掛けて安藤巡査に豚の処置を依頼すると、そのまま自動車くるまで、もうすっかり明け放れたすがすがしい朝の郊外を、H駅まで疾はる事になつたん

です。

車中で、吉岡は助役に訊ねました。

「あの豚は殺して解剖するんですか？」

すると助役は、

「ううん。もう豚公には用はないよ。僕は、彼奴が食余した餌と毒を、手に入れたからね」とそう言つて外套のポケットから、三、四枚の花の様な煎餅を出して見せました。それは斑に赤や青の着色があつて、その表面には小豆を二つに割つた位の小さな木の実みたいなのが一面に貼り着けてあるんです。

「先刻の冒険の」と助役が言いました。「一番主だった僕の目的と言うのは、始めからこいつにあつたのさ。もつともこんな煎餅を手に入れようとは思わなかつたがね。つまり僕は、——盗んだ豚を殺してからではとても一人では持てないから、生かしたままで線路まで連れて来て、さてそこで上手に汽車に轢かせる様にするためには、単に縄を枕木の端の止木の釘と反対側に立っている里程標との間へ渡して、その真ん中へ豚を縛つた位では到底三遍も四遍も成功する事は出来まい。だから当然、盗んだ男は、線路の上へ縛りつけてから、豚を殺すか、動けなくする必要がある。と僕は思つたんだ。ところが鈍器で殴り殺すとか、又は刃物で突殺すとか、或は劇毒で殺すとか、とにかくそうした手段で即死させるんだつたら、なにもあんなに

縛り着けて置く必要はない。殺して、そのまま線路の上へ投げ出して置けばいい筈だ。それにもかかわらず犯人はそうしていない。で、僕はいまこう考える——この干菓子の中にある毒は急激な反応を持ったものではなくて、犯人は途々毒の入った餌で豚を釣りながら線路の上まで連れて来ると、それから軌条の間へ動かない様に縛って尚幾何かの毒餌を与える。次第に毒の作用が始まる。D50・444号がやって来る——とまあ大体そんな風にね。……だがそれにしても、この干菓子は一体何だろう？　僕はこんな玩具みたいな煎餅は始めて見る。君、知ってるかい？」

と、そこで吉岡は早速首を横に振りました。そして間もなくH駅へ帰り着いた二人は、機関庫の事務室を根拠地にして、あの冒険で獲得した妙な手掛りに対する研究を始めたんです。

最初の日は、助役は一日中落着いて室内で例の干菓子を相手にあれやこれやと考え廻っていた様でしたが、二日目にはとうとう外出して調べ始めました。そして夕方方へ帰って来て仕出しの料理で晩飯を終えると、早速吉岡ともう一人の調査員を捕えて、こんな事を言ったんです。

「君達、明朝でいいから一寸B町まで行ってくれ給え。外でもないんだが……ま、とにかく一応説明しよう」そう言って例の干菓子を二人の前に並べながら、「僕は今までかかって調べた結果、やっとこの煎餅の正体が判ったよ。この奇妙な子供の

玩具の小さな風車みたいな、如何にも不味まずそうな煎餅は、普通に食用に供するものではなく、干菓子の中でも一番下等な焼物の一種で、所謂飾菓子かざりと言う奴だ。そしてこの地方では、しかも一般にこの菓子を『貼菓子はり』と呼んで……ほら、見た事があるだろう？……葬儀用専門の飾菓子になつてゐるんだ。ところで、この煎餅の表面の、後から糊で貼り着けたらしい小さな小豆を砕いた様な木の実だが、色々調べた結果、学名は日本産大茴香だいけいきょう、普通に莽草しきみ又はハナシバナなどと呼ばれる木蘭科もくらんの常緑小喬木の果実であつてな。シキミン酸と呼ぶ有毒成分を持つてゐるんだ。シキミン酸と言うのは、ピクロトキシシン属の痙攣毒とか言う奴で、一寸専門的になるが、その生理化学的な反応は、延髄の痙攣中枢てんかんに依つて、恰度癲癇てんかんの様な痙攣を起し、その痙攣中に一時意識を失うのだ。時としてはそのまま死ぬ事もあるが、ま、猛毒ではないそうだ。日本内地でも中部以南の山野にいくらも自生しているものだよ。ところで、もうひとつこの莽草の樹の用途なんだがね……こいつが実に面白いんだ……と言うのは、昔から仏前用として墓地に植えたり、又地方に依つては、その枝葉を、棺桶の中へ死人と一緒に詰めたりする外、一般には、その葉を乾したり樹皮を砕いたりして、仏前や墓前で燻たく、あの抹香まっこうを製造する原料にされてゐるんだ。判るかい。つまりこの煎餅と言ひ、莽草の実と言ひ、二つながら手掛てがかりとしては非常に特殊な代物である事に注意し給え。ところで、話はあの豚公に

戻るんだが、もしも僕があの場合の犯人であつたなら、なにもこんな風変りな品物を使わなくて、例えば、人参でもいい、ごくありふれた餌で豚公を連れ出し、さて線路上へ来て、縄で縛るなんて面倒な事はせず、玄翁げんのおうか何かで一度に叩ツ殺し、そのまま線路上へ投げ出して置く——が、しかし、この場合の犯人は、既に僕等も見て来た様に、実に不自然な、むしろ芝居染じみた道具立をしている。ね。ここんとかだよ。こんな風変りな特殊な品物を、しかも毎々利用するのは、それらの品物が、犯人が何よりも簡単に入手出来る様な手近なところに、つまり犯人が、それらの品物を商売している事を意味するんだ。で、僕のお願いと云うのはB町及びB町附近に、あの葬儀用の『貼菓子』と、抹香の製造販売をしている葬具屋が、有るか無いか君達二人に調べて貰いたいんだ」

とまあそんな訳で、翌朝二人はB町へ出掛けたんです。

ところが、小さな田舎町の事ですから、巡查派出所、町役場等で問い合せた結果、間もなく片山助役の註文に符合する様な葬具屋の無い事が判りました。

で、二人の部下は力を落してH駅へ引返すと、助役にその旨を報告しました。すると助役は、意外にも嬉しそうな調子で、こう言うんです。

「多分そうだろうと思つていたよ。いや、それでいいんだ。君達の留守中に、僕は機関庫へ行つて、あの『葬式機関車』の『オサ泉』せんが、いつも花環を買う店は何処だ

と訊いて見たら、直ぐ機関庫の裏手附近の、H市の裏町にある十方舎と呼ぶ葬具屋である事が判ったんだ。そしてしかもその店では、『貼菓子』は勿論、抹香の製造販売もしているらしい事が判ったんだ。これから直ぐに出掛けよう。そして直接当たって調べた結果、十方舎と、B町の何か——との間に、一週に一度ずつ何等かの関係の有る事さえ判れば、もう事件は、最も合理的に一躍解決へ進む事になるんだ」と、そこで早速彼等は出掛けました。

そして機関庫の裏を廻って、間もなく薄穢い二階建の葬具屋——十方舎へやって来ました。

助役は先に立って這入ると、早速馴れた調子で小さな花環を一つ注文しました。成る程、その店の主人らしい、頸の太い、禿頭の先端の尖^とがった、赭^{あか}ら顔の五十男が、恐ろしく憂鬱^おな表情をしながら、盛んに木の葉を乾かした奴を葉研^{やけん}でゴリゴリこなしていましたが、助役の注文を受けると、早速緑色のテープを巻いた小さな円い花環^{わらわい}の藁^{わら}台へ、白っぽい造花を差し始めたんです。そこで片山助役はギロリと室内を見廻しました。

——その仕事場の後には、成る程「貼菓子」らしい品物を並べた大きな硝子^{ガラス}戸棚があつて、その戸棚の向うには、奥座敷へ続くらしい障子扉^どが少しばかり明け放してあるんですが、その隙間から、多分この店の娘らしい若い女が、随分妙な姿勢を

執とつていると見えて、へんな高さの処から、こう顔だけ出して——もつともその女は、彼等がこの店へ這入つて来た時から、もうそんな風に顔だけ覗のぞかしていたんですが、こんなにも妙に心を魅ひかれる顔を、助役は始めて見ました。髪は地味な束髪ですが、ポツテリした丸顔で、皮膚は蠟燭の様に白く透す通り、鼻は低いが口元は小さく、その丸い両の眼玉は素絹そぎぬを敷いた様に少しポーツとしてはいますが、これが又何と言いますか、恐ろしく甘い魅力に富んでいるんです。そして助役の一行を見ると、如何にもそれと判る無理なつくり笑いをしながら、とんきような声で、「いらつしやいませ」と挨拶したんです。

——この事は後程のちほどになつて、何度も何度も聞かされた事なんですが。とにかく片山助役は、その娘を始めてチラツと見た時に、もう一生忘れる事の出来ない様な何んとも彼かとも言いようのない、や、あな、印象を、眼のクリ玉のドン底へハツキリと焼きつけられたんです。そしてこの奇妙な娘と言ひ、恐ろしく面ツ構えの変おつた親爺おやじと言ひ……ははあ、成る程この家うちには、何か深い秘密めいた事情があるんだな……とまあ、直感つて奴ですな、それを感じたんです。——いや、どうも私は女の話になると、つい長くなつていけません。

さて、暫く黙つたままでそれとなく店中を眺め廻していた片山助役は、やがてその眼に喜びの色を湛みえて、直ぐ彼等の横にあつた水槽みずおけの中の美しい色々の草花を指

差しながら、盛んに花環を拵えている親爺へ、言いました。

「小父おじさん。綺麗な花ですな。こんな綺麗な奴が、この寒空に出来るんですか？」
すると親爺は一寸顔を挙げて、

「出来ますとも。B町の農蚕学校の温室でね——。土曜日の晩方ばんがたに行けば、貴方達あなたにだって売ってくれますよ。……さあ、出来上りました。六十銭頂きます。ハイ」
と、そこで助役はすまし込んで花環を受取ると、代金を払って、そのままふいと表へ出てしまいました。吉岡も早速助役の後に続いたんですが、門口かどぐちを出しなにチラツと奥を見ると、あの感じの陰気なその癖妙に可愛らしい娘は、まだ相変らず顔だけ出して、表の方を覗いていました。

外へ出ると、助役達はもう十間程先を歩いていきます。で、吉岡は急いで追いつくと、その肩へ手を掛けながら、気色ばんで言いました。

「助役さん。あの親爺、とうとう毎土曜日ついでの午後にB町へ行く事を白状したんですから、何故序ついでに捕えちまわんです」

すると、

「吾々は検事じゃないんだからな」と助役が言いました。「——無暗むやみに急あせるなよ。それに第一捕えるにしても、吾々は、どれだけ確固とした証拠を持っていると言うんだ。——成る程あの親爺は、確かに先夜君に追われた犯人に、九分九厘違いない。

がしかし、いま捕えるよりも、もう二、三日待つて今度の土曜日の真夜中に、例の場所でも無を言わざず現行犯を捕えた方がハッキリしてるじゃないか。あの親爺はまだまだ豚を盗むよ。何か深い理があるんだ。さあ、土曜日までもう一度静かな気持ちになつて、その『最後の謎』を考えられるだけ考えてみよう」

で彼等は、素直に機関庫へ引挙げる事にしました。

そして片山助役は、翌日から彼の言明通り、あの陰気な十方舎の親娘の身邊に關して、近隣の住人やその他に依る熱心な聞き込み調査を始めたんです。

一日、二日とする内に——彼等は全く二人きりの寂しい親娘であつて、生計は豊かでなく近所の交際もよくない事。娘はトヨと言う名の我儘な駄々ッ児で、妙な事にはここ二、三年来少しも家より外へ出ず、年から年中日がな一日ああしてあの奥の間へ通ずる障子の隙間から、まるで何者かを期待するかの様に表の往還を眺め暮している事。そうした事から、どうやら彼女は、何か気味の悪い片輪者ではあるまいかとの事。そしてその父親と言うのが、これが又無類の子煩悩で何かにつけてもトヨやトヨやと可愛がり、歳柄もなく娘が愚図り始めた時などは、さあもう傍で見ても眼も気の毒な位にオドオドして、なだめたりすかしたりはては自分までポロポロと涙を流して「おおよしよし」とばかり娘の言いなり放題にしているとの事。尚又その娘のむしろヒステリカルな我儘は、最近三月、半年と段々日を経るにつれて

激しくなつて来たが、妙な事にはこのひと月程以前からどうした事かハタと止んで、その代りヘンに甘酢ツばい子供の様に躁はしゃいだ声で、時々古臭い「カチューシャ」や「沈鐘」の流行唄はやりうたを唄つたり、大声で嬉しそうに父親に話し掛けたりしていたとの事。ところが、それが又どうした事かこの四、五日前から、再び以前の様にヒステリカルな雰囲気に戻つたとの事——等々が、追々に明るみへ出されて来たんです。

——いやどうも、片山助役のこの徹底した調査振りには、少からず私も驚きましたよ。と言うのは、私も当時よくその家へ買物に出掛けた事があるんですが、全くその度毎にその娘は、障子の隙間から、顔だけ出して何とも言いようのないエロチックな笑いを浮べながら、あの薄い素絹を敷いた様なつぶな円らな両の瞳を見開いて、柔かな、でもむさぼる様な視線を私のこの顔中へ——それはもう本当に「ああい、やらしいな」と思われる位に、しつこく注ぎ掛けるのです。そして又その親爺と言うのが、全く助役の調査通りでして、例えば仕事をしながらも、溢れる様な慈愛に満ちた眼差まなざしでセカセカと娘の方を振り返つては、「そんなに障子を明けると風邪を引くよ」とか、「さあ、お客様に汽車のお話でも聞くがいいよ」などと、それはそれはまるで触ると毀れるものの様にオドオドした可愛がり様を、一再ならず私は見せつけられたものです。……

ま、それはさておき、とにかくそんな調子でドシドシ洗い上げた片山助役は、やが

て殆ど満足な結論にでも達したのか次の土曜日之夜には、正確に言うとい曜日——三月十八日の午前四時三十分には、もう涼しい顔をして、あの曲線線路カーブの松林で、その娘の親爺を捕えるべく、例の二人の部下とそれからH署の巡査と四人で、黙々と闇の中へ、蹲うずくまっていたんです。

ところが、ここで片山助役の失敗が持上ったんです。と言うのは、四時四十二分に例の旅客列車が通過して、五分過ぎましたが、意外にも豚盗人はやって来ないんです。

十分、二十分、一行は息をひそめて待ちましたが、この前で懲りたのか大将一向にやって来ません。そしてとうとう肝心要かなめのD50・444号の貨物列車が通り過ぎてしまったんです。

「……ふむ。先生、この張込みに感付いたな。よし。もうこの上は、直接十方舎へ乗り込もう」

とうとう助役は、そう言って不機嫌そうに立上りました。

やがて一行は、B駅から直ぐ次の旅客列車に乗ってH駅へ来ました。そしてもう夜の明け切った構内を横切つて、十方舎へ行くべく機関庫の方へ歩いて行つたんです。と、どうした事でしょう、「葬式機関車」の「オサ泉」と助手の杉本が、テクテクやって来るんです。見れば、杉本の例の鼻の下の煤が、いつの間にか綺麗に拭き

取られているんじゃないですか！

杉本は、一行を認めると大袈裟な顔付で、

「とうとう又殺やつちやいましたよ」

「なに又殺つた!?!」

と、助役が思わず叫びました。

すると杉本は、

「ええ、確かに手応てしたえがありましたよ。この駅のホンの一丁程向うの陸橋ブリッジの下です。しかもねえ、機関車おかまの車輪わっばにやあ、今度ア女の髪の毛が引ツ掛つてましたよ。豚じゃねえんです——」

で早速彼等は、十方舎の親爺の逮捕をとりあえず警官に任せて、大急ぎで逆戻りしました。そして間もなく、H駅の西へ少し出外ではすれた轢死の現場へやって来たんです。

恰度朝の事で、冷え冷えとした陸橋ブリッジの上にも、露に濡れた線路の上にも、もう附近の弥次馬達やじうまが、夥しい黒山を作っていました。——その黒山を推崩す様にして分け入った一行の感覚へ、真ツ先にピンと来た奴は、ナマ、ナマ、しい血肉の匂いです。続いて彼等は足元に転っている凄惨な女の生首なまくびを見ました。——頭顱あたまが上半分欠けて、中の脳味噌と両方の眼玉が何処かへ飛んでしまい、眼窩めのおなから頭蓋腔あたまのなかを通して、黒血

のコビリ着いた線路の砂利が見えます。——でもその眼玉のガラン洞になった半欠はんかけの女の顔を見ている内に、追々に彼等は、それが、あの、葬具屋の娘——である事に気付いて来たんです。

それから彼等は、助役に引ッ張られて、顫ふるえながらもうひとつ奥へ進んで行きました。そしてそこで、線路の上へ転っているものを見た時に、一行は思わず嘔吐を催しました。

——それは、股の着根つけねから切断された両脚らしいものですが、殆ど全体に互あつて太さが直径八、九寸近くもある、まるで丸太ン棒です。おまけにその皮膚の色は、血の気が失せて鉛色なんです。助役は青い顔をして屈み込むと、でも、平気でその肌へ指をグツと押付けました。するとその部分の皮膚は、ただ無数のいとも不快な皺を寄せただけで、少しも凹へこまないんです。——助役は六ヶ敷い顔で立上ると、重い調子で言いました。

「……こりやあ。切断のために出来た浮腫はれじやあないよ。君達は、あのフィラリヤリンバつて言う寄生虫のために淋巴管リンパが閉塞ふさがれて、淋巴の鬱積うっせきを来した場合だとか、或は又、一寸した傷口から連鎖状球菌の浸入に依よつて、浮腫性ふしゅうしょうの病後に続発的に現れる象皮病——って奴を知ってるかい？……こいつがそれだよ。僕の大学時代の友人に、これを病んだ奴が一人あつたよ。患部は主に脚で、炎症のために皮膚が次第に肥厚はれあがつ

て、移動性を失つて来るんだ。象皮病で死んだと言う事は余り聞かないが、旧態通りに治癒るつて事は、ま、大体絶望らしいな」と助役はここで一寸いずまいを正して、「……どうやらこれでこの事件も幕になったらしいね……あの豚の轢殺事件が、こんな悲劇に終ろうとは思わなかったよ……いや、僕の手抜きだった。この娘は恐らく自殺なんだろう。と言うのは……いやとにかく、歩きながら話すとして、とりあえず十方舎へ出掛けよう……あの親爺め、可愛い娘のこんな死態を見たならきつと気狂いにでもなっちまうよ……」

そう言つて助役は、歩きながらこの奇妙な事件の最後の謎——つまり十方舎の親爺が豚を盗んだ動機を彼のその優れた直観力で、どんな風に観破つたかと言う事を、手短かに話し始めたんです。

いや、学生さん。

ところがその助役の直観力つて奴は、幸か不幸か当つてたんですよ。そしてその事の正しさは、間もなく検屍官の手に依つて娘の懐中から発見された、意外にも「葬式機関車」の「オサ泉」宛の遺書に依つて、いよいよ明かにされたんです。

で、その娘の手紙なんですがね……実は、いま、こうして私が持つてるんですよ……いや、助役の話なんぞ繰返すよりも、一層の事この手紙をお眼に掛けましよう。それに第一私としても、いまここで、助役のそのしたり、顔な説明なんぞを、再

び私の口からお話するのは、とてもつらいんです。と言うのは、その話つてのが、そもそも私の過去に致命的な打撃を与えた、苦しい思い出だからなんです……さあ、この穢きたならしい手紙なんですが……どうぞ、ご覧下さい……

お懐しいオサセン様。

妻わたしは、十方舎の一人娘トヨでございます。この手紙を貴男あなたがおヨミになる頃には、もう妻は少しも恥かしい事を知らない国へ行つております。だから妻は、どんな事でも申上げられると思います。どうぞ私の話を、お聞き下さい。

妻は、子供の頃からふしあわせてございました。妻の家にはあまりお金がありませんでしたので、妻の父や母は、妻をヨソの子供さん達の様にしあわせにはしてくれませんでした。だから妻は恰度いまから四年前の十九の年に、ふとした事から右足に小さなキズをした時にも充分に医者にかかる事も出来ませんでした。するとそのキズからバイキンが入つて、妻はタンドクと言う病気にかかりました。でもおどろいて医者にかかりましたのでその病気はまもなく治りましたが、又半年程すると、今度はサイハツタンドクと言う、先の病気とよく似た病気にかかりました。今度はなかなか治りませんでした。そして妻は、ゾウヒビヨウと言う恐ろしい病気に続かなかかってしまい、妻の両脚はとても人様に見せられな

い様な、それはそれはみにくいものになってしまいました。医者は死ぬ様な事はないが、元の通りには治らないと言いました。そして毎年春や秋が近づくと、妾の両脚は、一層ひどくはれるのでご座います。

お懐しいオサセン様。

なんと言う妾はふしあわせな女でしょう。妾は父や母をノ口いたくなりました。でもその頃から、父や母の妾に対するたいどは、ガラリと変りました。

父はもう夢中で、妾を何より大事にしてくれる様になりました。母は、毎日毎日妾に対してすまないすまない、気狂いの様に言っておりました。ああそして、本当に母は気狂いになってしまいました。

それは恰度三年前の、冷い雨の降る秋の夜の事でした。気の狂った母は裸足のままで家を飛び出して、とうとう陸橋の下で汽車にひかれて死んでしまったのです。

でもお懐しいオサセン様。

その時の汽車の運テン手が、貴男あなただったのでご座います。そして、なんと言う貴男は親切なおかたでしょう。妾の母のタマシイのために、貴男は花環をたむけて下さいました。そしてそれから後も、時々人をひく度に、妾の家へ花環を買いに来られました。なんと言う美しいお心でしょう。

でもああお懐しいオサセン様。

妾は始めて貴男をお店で見たとその時から、貴男がとてとても大好きになってしまつて、ホンの少しの間でも貴男をわすれる事が出来なくなつてしまつたのでございます。間もなく父は、妾の氣持に氣づきました。そしてもうその頃では、夢中で妾を大事にしていてくれましたので、時たま貴男が花環を買いに来て下さると、父は出来るだけ手間をとつて貴男の花環をこしらえる様にさえしてくれました。

でも恋しいオサセン様。

妾はみにくい体を持つておりますので、貴男のお側へそばそれ以上に近づく事の出来ないのをだんだん不平に思う様になり、そして日ましに氣が短かくなつて我ままになり、一年に二、三度位しか花環を買いに来て下さらない貴男のおすがたを見るために、いくたび父を門口に立たせた事でしょう。でも毎日毎日奥の間の障子のかげから顔だけ出して、貴男の来られるのをいつまでも待ち続けている妾を見兼ねたのか、とうとう父は恰度いまからひと月程前、B町へ毎シユウ草花を買いに行く度に、なんでも大変キキメのある神様へオガンをかけて来る様に約束してくれました。するとどうでしょう。その大変キキメのある神様は哀れな妾のねがいをお聞き下さつて、日ヨウ日毎に貴男にお眼にかかれる様にして下さいました。

ああその頃の妾は、なんと言うしあわせ者でしたでしょう。毎日毎日唄を唄ったり、父とユカイに話をしたり……。

でも、それはホンのつかのまの事で、この前の日ヨウ日には、もう貴男はおいでになりませんでした。そして何事があつたのか父はもうバチが当るからオガンをかけるのはイヤだと言いだして、だから今夜も花だけ買って早く帰って来てしまいました。そしておさえ切れなくなった妾は、とうとう父とみにくい口あらそいを始めたのでご座います。

そしてああ恋しいオサセン様。

とうとう妾は、恰度手に持っていた棺板に穴をあけるヨツメ・キリで、あやまつて父を殺してしまったのでご座います。

妾は、もう生きているノゾミをなくしてしまいました。妾は、この手紙を抱いて、貴男のお手にかかって母のいる国へ行きます。妾の家のお店に、妾がこの手紙をかいてから、急いでこしらえた花環がご座います。どうぞその花環を、哀れな妾のために汽車へ吊してやって下さい。

三月十七日夜

十方舎のトヨより

……やれやれ、お読みにになりましたかな……いや、手紙そこにも書いてあります様に、助役の一行が十方舎へ乗込んだ時には、もうその娘の親爺は、脇腹から心臓めがけて大きな錐きりを突立てられたまま、造りかかりの棺桶の中へノメリ込む様にして冷くなっていましたよ……

いや、学生さん——

……これで、何故私が鉄道稼やぎを退職める様な気持になったか、そして又何故毎年三月十八日、つまり十方舎の娘の命日に、こうしてH市の共同墓地へ墓参りに出掛けるか、お判りになった事と思います……え？ ああそうそう……もうとつくにお判りの事と思いますが、実はこの私が、「葬式機関車とむらい」の「オサ泉」事、長田泉三さんです……いやどうも、永々と喋らして頂きましたな……どうやら、ボツボツH駅に近づいたようです……では、これで失礼いたします。

（「ぷろふいる」昭和九年九月号）

白妖

むし暑い闇夜のことだった。

一台の幌型自動車^{フエルトン}が、熱海から山伝いに箱根へ向けて、十国峠へ登る複雑な登山道を疾走^{はし}り続けていた。S字型のジグザグ道路で、鋸^{のこぎり}の歯のような猛烈なスイッチバックの中を襞^{ひだ}積のように派出する真黒な山の支脈に沿って、右に左に、谷を渡り山肌を切り開いて慌しく馳け続ける。全くそれは慌しかった。自動車それ自身は決してハイ・スピードではないのだが、なんしろ大腸の解剖図みたいな山道だ。向うの山鼻で、ヘッド・ライトがキラツと光ったかと思うと、こちらの木蔭で警笛^{ひび}がなると、重苦しい爆音を残して再びスーツと光の尾が襞^{ひだ}積の向うへ走り去る。同じところをグルグル廻っているようだが、それでいて少しずつ高度を増して行く。

タクシーらしいが最新型のフエルトンだった。シエードを除^といた客席では、一人の中年紳士が黒革の鞆を膝の上に乗せて、激しく揺^{ゆら}れながらもとろとろとまどろみ続ける。背鏡^{バックミラー}で時どきそれを盗み見ながら、ロシア帽子の運転手は物憂い調子でハンドルを切る。

この道はこのままぐんぐん登りつめて、やがて十国峠から箱根峠まで、岳南^{がくなん}鉄道株式会社^株の経営による自動車専用の有料道路^{ペイロード}に通ずるのだ。代表的な観光道路で、

白地に黒線のマークを入れた道路標識が、スマートな姿体で夜目にも鮮かに車窓を掠め去る。

やがて自動車は、ひときわ鋭いヘヤーピンのような山鼻のカーブに差しかかった。運転手は体乗り出すようにして、急激にハンドルを右へ右へと廻し続ける。——ググググと、いままで空間を空撫でしていたヘッド・ライトの光芒が、谷間の闇を越して向うの山の巒積へぼやけたスポット・ライトを二つダブルらせながらサツと当つて、土台の悪い幻燈みたいにグラグラと揺れながら目まぐるしく流れる。と、その巒積の中腹にこの道路の延長があるのか、一台の華奢なクリーム色の二人乗自動車が、一足先を矢のようにつつ走つて、見る見る急角度に暗の中へ折曲つてしまった。「チエツ！」運転手が舌打ちした。

退屈が自動車の中から飛び去つた。速度計は最高の数字を表わし、放熱器からは、小さな雲のような湯気がスツスツと洩れては千切れ飛んだ。車全体がブーンと張り切つた激しい震動の中で、客席の紳士が眼を醒した。

「有料道路はまだかね？」

「もう直です」

運転手は振向きもしないで答えた。とその瞬間、またしても向うの山の巒積へ、疾走するクーペの姿がチラツと写つた。

「おやツ」と紳士が乗り出した。「あんなところにも走ってるね？　ひどくハイカラな奴が……いったいなに、様だろう？」

「箱根の別荘から、熱海へ遠征に出た、酔いどれ紳士かなんかでしょう」
運転手が投げ出すように云った。

「追馳おっかけてみようか？」

「駄目ですよ。先刻さっきからやつてるんですが……自動車くるまが違ちがうんです」

紳士は首を屈かめて、外の闇を覗き込んだ。——急に低くなつた眼の前の黒い山影の隙間を通して、突然強烈な白色光が、ギラツと閃ひらめいて直ぐに消えた。紳士はなにやら悲壮な尊い力を覚えて、ふと威儀を正した。

その瞬間のことだった。不意に自動車くるまがスピードを落し、ダダツと見る間に彼は前のめりになって、思わず運転手の肩に手を突いた。——急停車だ。

二

見れば、ヘッド・ライトの光に照らされて、前方の路上に人が倒れている。首をもたげてこっちへ顔を向けながら、盛んに片手を振っている。

運転手はもう自動車くるまを飛び降りて馳けだして行つた。紳士もあたふたとその後うしろに

続いた。倒れていたのは、歳をとったルンペン風の男だった。ひどい怪我だ。

「……いま行った……気狂い自動車ですよ……」

怪我人が喘ぎ喘ぎ云った。紳士は早速運転手に手伝わせて怪我人を抱き上げ、自動車の中へ運び込んだ。

「……すみません……」怪我人が苦しげに息づきながら云った。「……わっしア、ご覧の通り……夜旅のもんです……あいつめ、急に後ろから来て……わっしが、逃げようとするほうへ……旦那……なにぶん、お願いします……」

怪我人はそう云って、もうこれ以上喋れないと云う風に、クツシヨンへぐったりと転ころがって、口を開け、眼を細くした。

紳士は大きく頷いて見せると、鞆を持って運転手の横の助手席へ移った。

「さあ出よう。大急ぎだ。箱根までは、医者はないだろう？」

「ありません」

自動車は、再び全速力で走りだした。

とうとう峠にやって来た。

道が急に平坦になって、旋回している航空燈台の閃光が、時々あたりを昼のように照し出す。もう此処こゝまでやって来ると、樹木は少しも見当らない、一面に剪かり込んだような芝草山の波だ。

と、向うから自動車が一台やって来た。ヘッド・ライトの眩射が、痛々しく目を射る。——先刻のクーペだろうか？

だがその自動車は、似ても似つかぬ箱型だった。客席には新婚らしい若い男女が、寝呆け顔をして収まっていた。

「いま、クーペに逢ったろう？」

徐行しながら運転手が、向うの同業者へ呼びかけた。

「逢ったよ。有料道路の入口だ！」

そう叫んで、笑顔を見せながら、新婚車は馳け去って行った。

間もなく有料道路の十国峠口が見えだした。

電燈の明るくともった小さな白塗のモダンな停車場の前には、鉄道の踏切みみたいな遮断機が、関所のように道路を断ち切っている。

その道の真中に二人の男が立って、遮断機の前でなにやらしていたが、自動車が前まで来て止まると、その内の一人は事務所を兼ねている出札口へ這入って行った。紳士は真ツ先に飛び降りて、出札口へ馳けつけた。そして墓口から料金を出しながら、切符とは別なことを切り出した。

「いま私達より一足先に、クリーム色の派手なクーペが通ったでしょう？」

「通りました」出札係が事務的に答えた。

「どんな男でした？ 乗ってたのは……」

「見えませんでした」

「見えなかった？ だって切符を買いに来たでしょう？」

「いえ、来ません。あれは大将の自動車くるまです」

「なに、大将？」紳士は急せぎ込んだ。

「はい」事務員は切符に銚はさみを入れて出しながら、「この会社の重役で堀見ほりみ様の自動車くるまですから、切符なぞ売りません」

「なに、堀見？……ははア、あの岳南鉄道の少壮重役だな。じゃあ、クーペの操縦者は、堀見氏だったんだね？」

「さあ、それが……」

「二人乗ってたでしょう？」

「いいえ、違います。一人です。それは間違いありません」

紳士の態度を警察官とでも感違あやまりしたのか事務員は割に丁寧ていねいになった。

「いずれにしても」紳士が事務員へ云いった。「大変なんだ。実は、あのクーペが、歩行者ひやくしやを一人轢ひき逃げしたんだ」

「轢逃げ？」事務員が叫んだ。「で、怪我人は？」

「僕の自動車へ収容して来た」

「大丈夫ですか？」

「それが、とてもひどい……恐らく、箱根まで持つまい」

こう話している内にも、事務員は明らかに驚いたらしく、見る見る顔色が蒼褪めて来た。

「……そうでしたか……道理で可怪しいと思いましたが……いや、申し上げますが、実は、此処でも変なことがあったんです」

「なに、変なこと？」紳士が乗り出した。

「ええ、それが、なんしろ、重役の自動車ですから、其処で止まったと思うと、直ぐに私は飛出して、遮断機を上げ掛けたんです。すると、余程急ぐとみえてまだ私が遮断機を全部上げ切らないうちに、自動車はスタートして、アツと思う間に前部の屋根でこの遮断機を叩きつけたまま、気狂いみたいに馳け出してしまったんです」と表の道路の方を顎で差しながら、「……いままで二人して、応急の修理をしていたところですよ」

こんどは紳士のほうが驚いたらしい。

「ふうむ、とにかく僕は、これから直ぐに箱根へ行くのだが——おツと、ここには

電話があるだろうか？」

「あります」

「よし。箱根の警察へ掛けてくれ給え。いま行ったクーペを直ぐにひっ捕えるように。いいかね。よしんば重役でも、社長でも、構わん」

「そんなら、とてもいい方法がありますよ。向うの箱根峠口の、有料道路の停車場へ電話して、遮断機を絶対に上げさせないんです」

「そいつア名案だ。だが、いまの調子で、遮断機をぶち破って行ってしまいはせんかな？」

「大丈夫です。遮断機には鉄の芯がはいつていますから、私みたいに上げさえしなければ絶対に通れません」

「そうか。いや、そいつア面白い。つまり関所止め、と云う寸法だね。まだクーペは、向うへは着かないだろうか？」

「半分も行かないでしょう」

「よし。じゃあ直ぐ電話してくれ給え。絶対に遮断機を上げないようにね」

事務員は停車場スタッドの中へ馳け込んで行った。

間もなく電話のベルが甲高く鳴り響き、壊れかかった遮断機が上って、瀕死の怪我人を乗せた紳士の幌型自動車は、深夜の有料道路ペイロードを箱根峠めがけてまっしぐらに

疾走しはじめた。

三

さて、読者諸君の大半は、箱根——十国間の自動車専用有料道路なるものがどのような性質を持っているか、既に御承知の事とは思いますが、これから数分後に起つた異様な事件を正確に理解して戴くために、二、三簡単な説明をさして戴かねばならない。

いったいこの有料道路ペイ・ロードの敷設されている十国峠と箱根峠とを結ぶ山脈線は、伊豆半島のつけ根を中心に南北に縦走する富士火山脈の主流であつて、東に相模灘さがみなだ、西に駿河湾を俯瞰しつ一面の芝草山が馬の背のような際立つた分水嶺を形作つていゝるのだが、岳南鉄道株式会社はこの平均標高二千五百呎フットの馬の背の尾根伝いに山地を買収して、近代的な明るい自動車道トラフィック・ウェイを切り開き、昔風に言えば関錢を取つて自動車旅行者に明快雄大な風景を満喫させようという趣向だつた。だから南北約六哩マイルの有料道路は独立した一個の私線路であつて、十国口と箱根口との両端に二ヶ所の停車場スタンドがあるだけで枝道一本ついてない。しかもその停車場には前述のように道路の上に遮断機が下りていて番人の嚴重な看視モトの下に切符なしでは一般に通行を許さ

ない。だから途中からこの有料道路へ乗り込んで走り抜ける訳にも行かなければ、又途中から有料道路を抜け出して走り去ることも出来つこない。

もつとも尾根伝いの一本道とは云つても、数哩ぶつ通しの直線道路ではなく、主として娯楽本位の観光道路だから、直線そのものの美しさも旅行者に倦怠を覚えさせない程度のそれであつて到るところに快いスムーズなカーブがあり、ジグザグがあり、S字型、C字型、U字型等々さまざまの曲線が無限の変化を見せて谷に面し山頂に沿つて蜿蜒として走り続ける。

けれどもこの愉快な有料道路も、夜となつてはほとんど見晴らしが利かない。わけても今夜のように雲が低くのかかたむし暑い闇夜には、遠く水平線のあたりにジワジワと湧き出したような微光を背にして夥しい禿山の起伏が黒々と果しもなく続くばかりでどこかこの世ならぬ地獄の山の影絵のよう。その影絵の山の頂を縫うようにして紳士と怪我人を乗せた自動車は、いまでも有料道路の真ん中あたりをものに追われるように馳け続けていた。

「そういえば、なんだか見たことのある自動車だと思ひましたよ」

ハンドルを切りながら運転手が云つた。

「君は堀見氏を知つてる？」隣席の紳士だ。

「いいえ、新聞の写真で見ただけです。でも、あの人の熱海の別荘は知つてます。

山の手にあります」

「いま熱海にいるのかね？　堀見氏は」

「さア、そいつは存じませんが……とにかく、車庫ギャレージつきの別荘ですよ」

紳士は煙草に火をつけて、満足そうに微笑みながら、

「一台も自動車クルマには行き逢まわなかったね。……もうあのクーペ、いま頃は関所止めになって、箱根口でうろうろしているだろう」

遙かに左手の下方にあたって、闇の中に火の粉のような一群の遠火が見える。多分、三島の町だろう。

やがて自動車は、ゴールにはいるランナーのように、砂埃さじんを立てて一段とヘビーをかけた。直線コースにはいるに従って、白塗の停車場スタンドがキラキラ光って見えはじめた。

「おやツ？」紳士が叫んだ。

「いないですね！」同時に運転手の声だ。

全く、道の真ん中には遮断機が下りているだけでクーペの姿はどこにも見えない。そこへ事務員らしい黒い男が飛び出して来て、大手を拡げて道の真ん中に立塞たちふさがった。

紳士は飛び下りて、ボタンと扉ドアを締めると同時に叫んだ。

「電話が掛つたらう？」

「掛りました」

「それに、何故通したのだ！」

「えッ？」

「何故自動車を通したと云うんだ！」

「……？」

事務員はひどく魂消た様子だ。バタバタ音がして、事務所のほうからもう一人の男が出て来た。紳士は二人を見較べるようにしながら、重々しい調子で云つた。

「――僕は、刑事弁護士の大月おほつきというものだが、たとえあのクーペが有名な実業家の自動車であろうと、いやしくも人間一人を轢逃げひきにするからは、断じて見逃さん。君達は、自分の良心に恥じるがいい」

「ちよ、ちよと待って下さい」

あとから出て来た事務員が乗り出した。額の広い真面目そうな青年だ。

「お言葉ですが、ハッキリお答えします。――この箱根口の停車場スタンドへは、貴方がたの自動車くるま以外に、クーペはおろか猫の仔一匹参りません！」

それから数分後——電話を掛ける大月氏のうわずつた声が、ベルの余韻に押かぶさるようにして、停車場スタッドの中から聞えて来た。

——ああ、もしもし——十国峠の停車場スタッドですか？……箱根口です、先刻さつきの怪我人を乗せた自動車の者だがね、そちらへあのクーペが戻って行かなかつたかね？……え？……なに、行かない……やっぱり、そうか……ううん、こちらにもいない……本当にいないんだ、全々ぜんぜん来ないそうだ、途中で？……むろん、逢わなかつたさ……うん大変だよ、よしよし、ありがとう……。

——ああ、もしもし、熱海署ですか？……当直の方ですか？……僕は
大月弁護士ですが、誰れかいませんか？……夏山なつやまさん？……いいです、代つて下さい……。

——夏山警部補ですか？……大月です……いや、却つて失礼しました……ところ
で突然ですが、一寸妙な事件が起きてましてね……実は箱根口の有料道路ペイロードの停車場スタッドに
います……ええ、自動車の轢逃げなんですがね、それがとても妙なんです、ただの
轢逃げ事件だけじゃアないらしいんです……ええ……、そうです……ええ、……む
ろん、追ッ駆けましたよ……両方の停車場スタッドを閉塞して、有料道路ペイロードへ追い込んだんで

す……ところがいいんです……本当ですとも……え？……ええ、ええ、お待ちしてます……そうですか、じゃあ大急ぎで来て下さい……ああ、それからね、オート・バイでなしに、自動車に来て下さい……ええ、僕の自動車は、怪我人くろまを乗せて、箱根へやつちまったんです……なんしろ大怪我ですからね……じゃあ後ほど、さようなら……。

——ああ、もしもし……もしもし……そちらは、熱海の堀見さんですか？ いや、どうも、晚おそくから済みません……失礼ですが、貴女あなたは？……ああ、そうですか、私は、弁護士の大月と云うものですが、一寸火急の用件が出来まして……御主人は御在宅ですか？……え？……お留守？……東京の御本宅の方？……じゃアどなたか御家族の方はいらつしやいませんか？……なに、え？ お嬢さん？ 鎌倉へ行かれた？……他にどなたも、いらつしやいませんか？……え？ え？ お客様が一人？……お客様じゃア仕様がな……じゃアね、変なことをお訊ねしますが、お宅の車庫ギャレージには、自動車がありますか？……え？ 有る？ そうですか、いや妙ですなア……実は、つい今しがた、箱根の近くで、お宅の自動車にお目にかかったんですよ……乗つてた人は判りませんが、間違いもなくクリーム色のクーペです、嘘だと思つたら、車庫ギャレージを調べて下さい……え？ そうですか、お睡ねむいところを済みませんな、じゃア待つ

てますから早く調べて下さい……。

——やア、どうも済みませんでした……で、^{ギャレージ}車庫のほうはどうでした？ やっぱ
^{ギャレージ}車庫は藻^も抜^ぬけの空^{から}、それで……それで……なに、なんだって？ お客さまが殺さ
 れている!!……

ガチリと大月氏は、受話器を叩き落した。そして、なにか身構えるような恰好で、
 後から駆込んだ事務員達を、黙って真^まッ蒼^{さお}い顔をしながら睨め廻した。氷のような
 沈黙が流れたが、直ぐに大月氏は、気をとりなおすと、ベルを鳴らし、再び慌しく
 受話器をとり上げた。

——熱海署だ!……ああ、もしもし熱海署ですか?……夏山さんはもう出られま
 したか?……なに、いま出るところ?……大変なんだ、直ぐ代つてくれ……。

——ああ、夏山さん……いやどうも、大変なんです……ええ、さっきの自動車な
 んですがね、ところがね、その自動^く車^まは、ほら、あの岳南鉄道の堀見さんのものな
 んです、で、早速いま、そちらの別荘の方へ電話したんです、すると、すると、別
 荘に人が殺されてるってんです……ええ、そうそう、殺した奴が自動^く車^まで逃げたわ
 けです……さあ、その乗ってた犯人が誰だか、そいつア判らんですが、とにかく私
 は、逃げられないように、^{スタンド}両方の停車場を嚴重に監視してますから、あなたは別荘へ

廻つて、そこを調べたら、直ぐにこちらへ来て下さい……じやアお願いします……。

五

堀見氏の別荘は、熱海でも山の手の、静かなところに建っていた。主人の堀見夫妻は、もう夏の始めから東京の本宅へ引挙げていた。その代り、一人娘の富子とみこが、外人の家庭教師と二人で、この十日ほど前からやって来ていた、が、その二人も、今日の午後になつて、大嫌いな客がやって来ると、そそくさと逃げるようにして鎌倉の方へ飛び出して行つた。殺されたのは、その客であつた。押山英一おしやまえいいちと云い、富裕な青年紳士だつた。

いったい堀見亮三氏は、岳南鉄道以外にも幾つかの会社に関係していたそうそう。手腕家なのだが、この数年来二進にっちも三進さつちも行かない打撃を受けて、押山の父から莫大な負債を背負わされていた。そうした弱味を意識してかしないでか、英一は、まだ婚期にも達しない若い富子を、なにかと求め、追いまわすのだった。

むろん富子は、押山を毛虫のように嫌っていた。それで、英一がやって来ると、家庭教師のエヴァンスと二人で、落着きもなく別荘をあとにしたのだった。エヴァンスは、まだ富子が子供の頃から、堀見家と親しくしているアメリカ生れの老婦人

だった。富子が女学校に這入る頃から、富子の家庭教師ともなつて富子に英語を教
えて来た。彼女は富子を、自分の娘のようにも、孫のようにも愛していた。

別荘には、留守番をする母娘おやこの女中がいた。大月氏の慌しい電話を受けて、最初
に深い眠りから醒さされたのは母の方のキヨだった。

睡ねむい眼をこすりながら電話口に立ったキヨは、相手の異様な言葉に驚かされて直
ぐに戸外に出て見たのだが、車庫ギャレージにあるべき筈の自動車がなく、表門が開け放され
ているのをみつけると、なんて物好きなお客さまだろうと思ひながら、客室の扉ドアを
開けてみたのだが、開けてみてそのベッドの横にパジャマのままの押山が、朱あけに
染つて倒れているのを見ると、そのまま電話口へ引返した。

大月氏への返事を済すと、キヨは直ぐに警察へ掛けた。掛け終つてそのまま動く
ことも出来ずに、顫えながら電話室に立竦たちすくんでいた。

夏山警部補は、重なる電話にうろたえながらも、とりあえず一部の警官を有料道路
へ走らせ、自分は部下を連れて堀見氏の別荘へ駆けつけて来た。続いてやつて来た
警察医は、押山の死因をナイフ様の兇器で心臓へ二度ほど突き立てた致命傷による
ものと鑑定した。二つの傷の一つは、突きそこなつたのか横の方へ引掻くようにそ
びれていた。殺されてからまだ一時間もたつていない死体だった。

夏山警部補は、キヨをとらえて、とりあえず簡単な訊問を始めた。すっかりあがつ

てしまつて、少からずへどもどしながらもキヨは、事の起つたままをあらまし答えて行つた。

「……なんでもそんなわけです、昨晩^{ゆうべ}押山様は、大変遅くまで外出なさり、お酒を召してお帰りのようでしたが、それから私達はグツスリ眠りましたので、大月様とかからお電話を頂くまでは、なんにも知らなかつたんでございます」

キヨがそう結ぶと、夏山警部補は、玄関から外へ出て見たが、そこで車庫^{ギャレージ}の方へ歩きながら警部補は、懐中電燈の光で、地面の上の水溜りの近くに、車庫^{ギャレージ}の方へ向つて急ぎ足についている女の靴の跡を、二つ三つみつけ出した。

車庫^{ギャレージ}には自動^{くるま}車^まはなくて、油の匂いが漂つていた。

夏山警部補は、暫くの間、空^{から}の車庫^{ギャレージ}をあちこちと調べていたが、やがて「ウーム」と呟くように唸ると、屈みながら顫える手でハンケチをとり出し、そいつで包むようにしながら、床のたたきの上からキラリと光るものを拾いあげた。

血にまみれたナイフだった。それも、見たこともないような立派なナイフだった。見るからに婦人持らしい華奢な形^{しやれ}で洒落^{しゃれ}た浮彫りのある象牙^{えい}の柄^えには、見れば隅の方になにか細かな文字が彫りつらねてある。警部補は、片手の電気を近づけ、覗き込むようにして見た。

(第十七回の誕生日を祝つて。1936. 2. 29)

警部補は見る見る眼を輝かしながら、そおつとナイフをハンケチに包むようにしてポケットへ仕舞い込み、そのまま急いで母屋おもやのほうへやって来ると、そこでまごまごしていたキヨをとらえて早速切りだした。

「時に、あんたは、歳としはいくつだ？　もう五十は越したな？」

「いいえ、まだ、わたし恰度でございます。恰度五十で……」

「ふむ。では、あんたの娘さんは？」

「敏としやでございますか？　あれは十八になりますが……」

「じゃア、エヴァンスさんは？」

「あの方はもう、六十をとつくにお越しです」

「富子さんは？」

「お嬢様は、今年十七でいらつしやいます」

「有難う」夏山警部補は満足そうにニヤリと笑うと、「ではもう一つ、他にもないが、掘見家の人々は、皆んなこの別荘の合鍵を持っているね？」

「はい」

「むろんお嬢さんも？」

「はア、多分……」

「有難う」とそれから傍らの部下を振返つて、元氣よく云つた。「さア、もうこれで

ここはいいよ。裁判所の連中が来るまでは、警察医に残っていて貰うことにして、これから直ぐに有料道路へ出掛けるんだ」

六

夏山警部補が有料道路の十国峠口へ着いた時には、もう大月氏は、先に廻された警察自動車で箱根口から引返して、その停車場で一行を待ちうけていた。

両方の停車場には、先着の警官達が二手に分れて監視していた。大月氏は、警部補を見ると直ぐに口を切った。

「もう別荘のほうは、済みましたか？」

「済むも済まぬもないですよ。なんしろ犯人は此処へ逃げ込んだって云うんですから、大急ぎでやって来たわけです……が、まあ、だいたい目星はつきましたよ」

「もう判ったんですか？ 誰です、いったい、犯人は？」

「いや、誰れ彼れと云うよりも、まだその、問題の自動車はみつからないんですか？」
すると大月氏は、いらいらと手を振りながら、

「いや、それですがね。どうもこれは、谷底へでも墜落したとより他にとりようがないんです」

「私もそう思いますよ。探しましょう」

「いや、その探すのが問題なんです。私もいま、こちらへ来ながら道の片側だけは見て来ましたが……この闇夜で、しかも……この有料道路の長さが六哩近くもあるんですから、それに沿った谷の長さもなかなかあるんですよ。おまけに路面が乾燥していて、車の跡もなにもありやアしないんだから、大体の墜落位置の見当もつきませんよ」

「しかし愚図愚図してるわけにもいきませんよ」

「そうですね。じゃア、とにかく残った片側を探して見ましょう。……だが、いたい犯人は誰なんです？」

「犯人？……堀見氏の令嬢ですよ」

云い捨てるように警部補は自動車に乗り込んだ。そのあとから、啞然たる一行が乗込む。自動車はバックして、箱根口へ向って走り出した。時速十哩の徐行だ。

けれどもこの捜査の困難さは、半哩と走らない内に、人々を焦躁のどん底へ突き落した。谷沿いの徐行だから、ヘッド・ライトの光の中には、谷に面した道路の片端がいつも見えているのだが、路面は全く乾燥していて、何処から滑り落ちたか車の跡さえ判らない。せめて道端に胸壁でもあって、それが壊れていれば墜落個所の見当はつくのだが、この道は人の通らない自動車専用の道路だから、そのような胸

壁や駒止めも、白塗のスマートな奴が、処々裝飾的に組まれてあるだけで、とんと頼りにならない。

無意味な、憂鬱な捜査が暫く続いて、やがて自動車は、胸壁のない猛烈なS字型のカーブに差しかかった。警部補は苛立たしげに舌打ちする。自動車はクルリとカーブを折れて、いままでの進路と逆行するように、十国峠の方を向いて走りだした。

S字カーブの尻は、大きな角張ったC字カーブになっている。Lの字を逆立ちさせたような矢標のついた道路標識を越して、二十米突も走った時だった。なにを見たのか大月氏は不意にギクツとなつて慌しく腰を浮かしながら、

「止めて下さい！」

——巡査は直ぐにブレーキを入れた。

大月氏は扉を開けてステツプの上へ立ち上つたまま中の巡査へ云つた。

「この向きで、このままバックして下さい……そう、そう……もつと、もつと……よろしい、ストップ！」

人々には、サツパリわけが判らない。

大月氏は助手席へ就くと、以前の姿勢に戻つて云つた。ひどく緊張した顫え声だ。「さあ、もう一度今度は前進して下さい。最後行で頼みます——おっと、問題のクーパーは、ルーム・ランプが消えていたんだ。室内が明るくちやアいかん。消して下さい

「い」

自動車は灯を消して動き出した。

「いったい、どうしたんです？」

暗やみの中で警部補が堪たま兼ねたように叫んだ。

「いや判りかけたんです。真相が判りかけたんです。いまに出来ますよ」

「何が出て来るんです？」

「直ぐですから待つて下さい」

自動車は先刻さっきの位置へ徐行を続ける。C字カーブの終りの角の直前だ。道がグツと左に折れているので、ヘッド・ライトの光の中には、真黒まっくろな谷間の澄んだ空間があるだけだ。

前を見ていた大月氏が、突然叫んだ。

「そら出た。止めて！」

「なにが出たんです？」警部補だ。

「もう消えました。直ぐまた出ます。そこでは見えません。ズツとこちらへ来て下さい」

警部補は乗り出して、操縦席の大月氏の横へひよいと顔を出して前を見た。

「何も見えませんよ」

「いや。直ぐ出ます。……そら！ 出たでしょう。いや、自動車の外じゃあない。直ぐ眼の前の硝子窓です」

「ああ！」

——直ぐ眼の前の窓硝子の表面には、L字を逆立ちさせたような、有り得べからざる右曲りの矢標を書いた標識が、明るく、近く、ハッキリと写った。が、直ぐにそれは、吸い込まれるように闇の中へ消えてしまった。

眼前の道路は左に折れているのだが、幻の標識は右曲りだ！

七

「いや、あなたが硝子に写ったものを見て、直ぐに後ろの窓を振返ったのは、正しいです」

やがて大月氏は、そう云つて感心したように、警部補の肩を叩くのだった。

——全く、座席の後ろの四角い硝子窓からは、テール・ランプに照らされて仄赤くぼやけた路面が、直ぐ眼の下に見えるだけで、あとは墨のような闇だったのだが、直ぐにその闇の中に、何処からか洩れて来る強烈な光に照らされて、いま自動車が通り越したばかりの道端の道路標識が、鮮やかに浮きあがるのだ。そしてその幻

のような闇の中の標識は浮きあがるかと思えば直ぐに消え、やがてまた浮きあがり直ぐに消え、見る人々の眼の底に鮮やかな残像をいくつもいくつもダブらせて行くのだった。

「偶然の悪戯いたずらですよ」大月氏が云った。「あれは、直ぐ横の小山の向うから、斜めに差し込む航空燈台の閃光です。つまりこちらから見ると、向うの左曲りのカーブを教えるために正しく左曲りを示している暗やみの中の標識が、閃光に照らされた途端に、後ろの窓を抜けて、前のこの硝子窓ガラスへ右曲りの標識となつて、写るんです。……クーペはルーム・ライトを消してたし、前の谷が空気は清澄で、ヘッド・ライトは闇の中へ溶け込んでいます。おまけにこの硝子ガラスは、少しばかり傾斜していますので、反射した映像は、操縦席で前屈みになつてゐる人でなくては見えません。……でも、それにしても、ふツと写つたこの虚像を、本物と見間違えて谷へ飛び込むなんてただの人間じゃアないですね」

「よく判りました。とにかく、早速下りて見ましよう」

警部補の発言で、人々は自動車くるまを捨てて谷際たにぎわへ立った。ヘッド・ライトの光の中へ屈み込んで調べると、間もなく道端の芝草まぎわの生際に、クーペが谷へ滑り込んだそれらしい痕あとがみつかった。

「この辺あたりなら下りられますね。傾斜スロープは緩ゆるやかなもんですよ」

夏山警部補はそう云つて、山肌へ懐中電燈をあちこちと振り廻しながら、先に立つて下りはじめた。

「夏山さん」後から続いて下りながら、大月氏が声を掛けた。「それにしても、犯人が堀見氏のお嬢さんだつて、なにか証拠があるんですか？」

「兇器ですよ」警部補は歩きながら投げ捨てるように云つた。「婦人持ちの洒落たナイフに、十七回誕生日の記念文字が彫つてあるんです。しかも、今年の春の日附まで……そして、お嬢さんの富子さんは、今年十七です」

大月氏は黙つて頷くと、そのまま草を踏付けるようにしながら、小さな燈あかりをたよりに山肌を下りて行つた。が、やがてふと立止つた。

「夏山さん……生れて、二つになつて、第一回の誕生日が来る。三つになつて、第二回の誕生日が来る……そうだ、今年十七の人なら、十六回の誕生日ですよ」

「えッ、なに？」

警部補が思わず振返つた。

「夏山さん……十七回の誕生日なら、ナイフの主は十八ですよ」

「十八？……」と警部補は、暫く放心したように立竦んでいたが、直ぐに周章あわててポケットからノートをとり出し、顫える手でひろげると、「いやどうも面目ない。全くその通りですよ。それに……ちゃんと十八の娘があるんです」

「誰です、それは？」

「女中の敏やです！」

恰度この時、警官の懐中電燈に照らされて、山肌の一寸平らなところに、ほぐられたような大きな痕がみつかった。

「あそこでも、んどり、打ったんだな。自動車が……」

大月氏が叫んだ。

「もう直ぐだ。急ぎましょう」

人々は無言でさまよいはじめた。このあたりから、茨いばらや名も知らぬ灌木が、雑草の中に混りはじめた。やがて大月氏が枯れかかった灌木の蔭で、転っていたクーペの予備車輪を拾いあげた。人々は益々無言で焦あせり立った。小さな光が山肌を飛び交して、裾擦れの音がガサガサと聞える。と、警部補がギクツとなつて立止った。

直ぐ眼の下の窪地に、まがいもないクリーム色のクーペが、真黒な腹を見せて無残な逆立ちをやっている。

警部補も大月氏も無言で窪地へ飛び下りると、クーペの扉ドアを逆さのままにこじ開けた。

「おやツ」と警部補が叫んだ。

自動車くるまの中は藻も抜かけらの空からだ。けれどもやがて大月氏は、屈み込んで、操縦席の後の

シーートの肌から、血に穢れて異様にからまつた、長い、幾筋かの白髪を掴みあげた。全く無残なクーパーの姿だった。硝子と云う硝子は凡て碎け散り、後部車軸は脆くもひん曲つて、向側の扉は千切り取られて何処かへはね飛ばされていた。細々とした付属品など影も形もない。

けれども間もなく人々は、その千切り取られた扉口から向うの雑草の上にまで、点々として連らなる血の痕をみつけた。犯人は、負傷こそすれ奇蹟的に助かつているのだ。人々は直ぐに血の痕をつけはじめた。

「こりやア、髪の毛の白い娘——と云うことになったね……ふん、いったいあなたは、どんな証拠を押えたんです？ そのナイフと云うのを見せて下さい」

大月氏の言葉に、歩きながら警部補は、不機嫌そうにポケットからハンケチに包んだ例のナイフをとり出した。

大月氏は、歩きながらそのナイフを受取つて、電気の光をさしつけながら象牙の柄に彫られた文字を読みはじめた。がやがてみるみる眼を輝かせながら立止ると、警部補の肩をどやしつけた。

「あなたは、この日附が見えなかつたんですか？ まさか盲じやアあるまいし……ね、二月二十九日に誕生日をする人は二月二十九日に生れたんでしょう。ところが二月二十九日は閏年にあるんで……だからこの人の誕生日は四年に一度しか来ない

わけで。その人が十七回の誕生日を迎える時には、幾つになると思います。……六十過ぎですよ」

「判った」

警部補があわてて馳け出そうとすると、大月氏は不意に手を上げて制した。

直ぐ眼の前のひとときわ大きな灌木の茂みの向うで、ガサガサと慌しげな葉擦れの音がした。人々は足音を忍ばせて近寄った。茂みの蔭を廻ったところで、警部補が懐中電燈の光をサツと向うへ浴びせかけた。

思ったよりも小さな、黒い、四ツン這いになったものが、苦しそうにチンバをひきながら、それでも夢中で草の中を向う向きに這出して行つた。が、それも光を背に受けると直ぐに止まって、ひよいとこちらを振り向いた。

「エヴァンスだ！」

全く——白髪頭の、小さな白いエヴァンスの顔だつた。愛する富子の清浄をどこまでも守り通した気品と、罪への恐怖と悔恨に、引き歪められたエヴァンスの顔だつた。

花束の虫

岸田直介が奇怪な死を遂げたとの急報に接した弁護士の大月対次は、恰度忙しい事務もひと息ついた形だったので、歳若いながらも仕事に掛けては実直な秘書の秋田を同伴して、取るものも不取敢大急ぎで両国駅から銚子行の列車に乗り込んだ。

岸田直介——と言うのは、最近東京に於て結成された瑪瑙座と言う新しい劇団の出資者で、大月と同じ大学を卒えた齢若い資産家であるが、不幸にして一人の身寄をも持たなかった代りに、以前飯田橋舞踏場でダンサーをしていたと言う美しい比露子夫人とたった二人で充分な財産にひたりながら、相当に派手な生活を営んでいた。もともと東京の人で、数ヶ月前から健康を害した為房総の屏風浦にあるささやかな海岸の別荘へ移つて転地療養をしてはいたが、その後の経過も大変好く最近では殆ど健康を取戻していたし、茲数日後に瑪瑙座の創立記念公演があると言うので、関係者からはそれとなく出京を促されていた為、一兩日の中に帰京する筈になつていた。が、その帰京に先立って、意外な不幸に見舞われたのだ。——勿論、知己と迄言う程の深いものではなかったが、身寄のない直介の財産の良き相談相手であり同窓の友であると言う意外に於て、だから大月は、夫人から悲報を真つ先に受けたわけである。

冬とは言え珍らしい小春日和で、列車内はスチームの熱気でムツとする程の暖さだった。銚子に着いたのが午後の一時過ぎ。東京から銚子迄にさえ相当距離がある上に、銚子で汽車を降りてから屏風浦付近の小さな町迄の間がこれ又案外の交通不便と来ている。だから大月と秘書の秋田が寂しい町外れの岸田家の別荘へ着いた時には、もうとつくに午後二時を回っていた。

この付近の海岸は一帶に地面が恐ろしく高く、殆ど切断した様な断崖で、洋風きりたの小さな岸田家の別荘は、その静かな海岸に面した見晴の好い処に雑木林に囲まれながら暖い南風を真面まおもに受ける様にして建てられていた。

金雀児えにしだの生垣に挟まれた表現派風の可愛いポーチには、奇妙に大きなカイゼル髭を生した一人の警官が物々しく頑張っていたが、大月が名刺を示して夫人から依頼されている旨を知らせると、急に態度を柔げ、大月の早速の問に対して、岸田直介の急死はこの先の断崖から真逆様に突墜つきたされた他殺である事。加害者は白っぽい水色の服を着た小柄な男である事。而も兇行の現場を被害者の夫人と他にもう二人の証人が目撃していたにも不拘かかわらずいまだに犯人は逮捕されない事。既にひと通りの調査は済まされて係官はひとまず引挙げ屍体は事件の性質上一応千葉医大の解剖室へ運ばれた事。等々を手短かに語り聞かせて呉れた。

聴やがてカイゼル氏の案内で、間もなく大月と秋田は、ささやかなサロンで比露子夫

人と対座した。

悲しみの為か心なしやつれの見える夫人の容貌は、暗緑の勝ったアフタヌーン・ドレスの落着いた色地によくうつりあつて、それが又二人の訪問者には甚らなく痛々しげに思われた。こんな時誰でもが交す様なあの変に物静かなお定りの挨拶が済むと、臉をしばたたきながら、夫人は大月の間に促されて目撃したと言う兇行の有様に就いて語り始めた。

「——順序立てて申上げますれば、今朝の九時頃で御座居ました。朝食を済まして主人は珍しく散歩に出掛けたので御座居ます。今日は朝からこの通りの暖さで御座居ますし、それに御承知の通り近頃ではもう直介の健康もすっかり回復いたしました。実は明日帰京する様な予定になっていましたので、お名残の散歩だと言う様な事をさえ口にして出て行きました程で御座居ます。女中は、予め本宅の方の掃除から、その他の色々の仕度をさせますので、妾達より一足先に今朝早く帰京させました為、主人の外出しました後は、妾一人で身回りの荷仕度などしていたので御座居ます。ところが十時過ぎてもまだ主人が戻りませんのでその辺を探しがてら町の運送屋迄出掛けるつもりで家を出たので御座居ます。一寸、あの、お断りいたしておきますが、御承知の通りこの辺一帯の海岸は高い崖になっておりまして、此処から凡そ一丁半程の西に、一段高く海に向つて突出した普通に梟山と呼ぶ丘が御座居ます。恰

度妾が家を出て二三十歩き掛けた頃で御座居ました。雑木林の幹と幹との隙間を通じて、梟山の断崖の上でチラリと二人の人影が見えたのです。何分遠方の事で充分には判り兼ねましたが、ふと何気なく注意して見ますと、その一人は外ならぬ主人なので御座居ます。が、他の一人は主人よりずっと小柄の男で、も一人の証人が申される通り水色の服をきていた様で御座居ますが、これが一向に見覚えのない、と申しますより遠距離で容貌その他の細かな点が少しもハッキリ見えないので御座居ます。妾は立止った儘ままジツと目の間から断崖の上を見詰めていました。——すると、突然二人は争い始めたので御座居ます。そして……それから……」

夫人はフツと言葉を切ると、そのまま堪え兼ねた様に差俯さしうつむ向いて了しまつた。

「いや、御尤ごちよともです。——すると、兇行の時間は、十時……?」

大月おほつきが訊きねた。

「ええ。ま、十時十五分から二十分頃迄だろうと思います。何分、不意に恐ろしい場面を見て、すっかり取のぼせて了しましたので——」

恰度この時いつの間にかやつて来た例のカイゼル氏が、二人の会話に口を入れた。

「——つまり奥さんは、もう一人の証人である百姓の男に助けられる迄は、その場で昏倒こんとうしていられたんです」

で、大月はその方へ向き直つて、

「すると、その百姓の男と言うのは？」

「つまり奥さんと同じ様に、兇行の目撃者なんですがな。——いや、それに就いて若し貴方がなんでしたなら、その男を呼んであげましょう。……もう、一応の取調べはすんだのだから、直ぐ近くの畑で仕事をしているに違いない」

親切にもそう言つて警官は出て行つた。

大月は、それから夫人に向つて、この兇行の動機となる様なものに就いて、何か心当りはないか、と訊ねた。夫人はそれに対して、夫は決して他人に恨みを買う様な事はなかつた事。又この兇行に依つて物質的な被害は受けていない事。若しそれ等以外の動機があつたとしても、自分には一向心当りが無い事。等々を答えた。

聽て十分もすると、先程の警官が、人の好きそうな中年者の百姓を一人連れて来た。

大月の前へ立たされたその男は、まるで弁護士と検事を勘違いした様な物腰で、こべこ頭を下げながら、素朴な口調で喋り出した。

「——左様で御座居ます。手前共が家内と二人でそれを見ましたのは、何でも朝の十時頃で御座居ました。尤も見たと言ひましても始めからずうと見ていたのではなく、始めと終りと、つまり二度に見たわけ御座居ます。始め見たのは殺された男の方が水色の洋服を着たやや小柄な細っそりとした男と二人で梟山の方へ歩いて行つ

たのを見たんで御座居ますが、何分手前共の仕事をしていました畑は其処から大分離れとりますし、それに第一あんな事になろうとは思つてませんので容貌かおやその他の細こまな事は判らなかつたで御座居ます」

「一寸、待つて下さい」

証人の言葉を興味深げに聞いていた大月が口を入れた。

「その水色の服を着た男と言うのは、オーバーを着てはいなかつたのですね。——それとも手に持つていましたか？」

そう言つて大月は百姓と、それから夫人を促す様に見較べた。

「持つても着てもいませんでした」

夫人も百姓も同じ様に答えた。

「帽子は冠かむつていましたか？」

大月が再び訊ねた。この問に対しては百姓は冠つていなかつたと言ひ、夫人は良くは判らなかつたが若もし冠つていたとすればベレー帽だろう、と述べた。すると百姓が、

「や、今思い出しましたが、その時、殺されたこちらの旦那は、小型の黒いトランクを持つていました」

「ほう。——」大月はそう言つて夫人の方を見た。夫人は、そんなものを持つて直

介が散歩に出た筈はないし、又全然吾々の家庭には黒いトランクなどはない、と答えた。

「成程、では、貴方が二度目に二人を見られた時の事を話して下さい」
大月に促されて、再び証人は語り続けた。

「——左様で御座居ます。二度目に見ましたのはそれからほんの暫く後で御座居ましたが、急に家内の奴が海の方を指差しながら手前を呼びますので、何気なくそちらを見ると、雑木林の陰になつてはつきりとは判らなかつたので御座居ますが、こちらの奥さんも仰有つた通り、梟山の崖ツ縁で、何でも、こう、水色の服を着た男がこちらの旦那に組付いて喧嘩してたかと思うと、間もなくあつさり、と旦那を崖の下へ突墜して、それから一寸まごまごしてましたが、例の黒いトランクを持って雑木林の中へ逃げ込んで行きました。——直ぐその後を追馳けて行けば、屹度どんな男か正体位は見届ける事も出来たで御座居ますが、何分不意の事で手前共も周章ておりましたし、それに何より突墜された人の方が心配で御座居ましたんで、真つ先に一生懸命崖の下の波打際へ降りたんで御座居ます。するともう墜された人は息絶ていたし、手前共二人だけでは逆もあのない、崖の上迄仏様を運び上げる事は出来ませんので、兎に角この事を警察の旦那方に知らせる為に、仕方なくもう一返苦勞して崖を登り、町へ飛んで行つたんで御座居ます。その途中、直ぐ其処の道端で、

気を失つて倒れていられたこちらの奥さんを救けたんで御座居ます。——はい」

証人は語り終つて、もう一度びよこんと頭を下げた。

大月は巻煙草シガレットを燻くゆらしながら、恰あたかもこの事件に対して深い興味でも覺えたかの如く、暫くうつとりとした冥想に陥つていたが、聽て夫人に向つて、

「御主人が御病気でこの海岸へ転地されてからも、勿論別荘こちらへは訪問者が御座居ましたでしような？」

「ええ、それは、度々たびたびに御座居ました。でも、殆ど今度出来ました新しい劇団の關係者ばかりで御座居ます」

「ははあ。瑪瑙座の——ですな。で、最近は如何でしたか？」

「ええ。三人程来られました。やはり劇団の方達です」

「その人達に就いて、もう少し伺えないでしょうか？」

「申上げます。——三人の内一人は瑪瑙座の総務部長で脚本家の上杉逸二うえすぎいつじさんですが、この方は確か三日前東京からおいでになり、今日迄ずっと町の旅館に滞在していられました。別荘たくへは昨日、一昨日と、都合二度程来りましたが二度共劇団に関するお話を主人となさった様です。後の二人は女優さんで、中野藤枝なかのふじえさんに堀江時子ほりえときこさんと申されるモダンな美しい方達ですが、劇団がまだ職業的なものになっていませんのでそれぞれ職業なり地位なりをお持ちでしょうが、それ等の詳しい事情は

妾は存じないので御座居ます。この方達は、昨日、やはり町の旅館の方へお泊りになって、別荘たくへも昨晚一度御挨拶に来られました。今日、上杉さんと御一緒に帰京されたそうで御座居ます。二人とも上杉さんとはお識合しりあひの様に聞いております」「すると、その三人の客人達は、今日の何時頃に銚子たを発たれたのですか？」

大月の質問に、今度はカイゼル氏が乗り出した。

「それがその、調べて見ると正午の汽車で帰京しているんです。勿論もちろん、兇行時間むらうじんかんに約一時間半の開きがありますし、各方面での今迄の調査に依れば、他に容疑者らしい人物がこの町へ這入った形跡は殆どないし、尚旅館の方の調査の結果、彼等は三人とも各々バラバラで随分勝手気儘な行動をしていたらしく、殊ことに上杉などは完全な現場不在ア証明イもない様な次第ですから、当局にしても一応の処置は取っております。——ところが、証人の陳述に依る加害者の風貌と、調査に依る上杉逸二の風貌とは、大変違うんです。つまり上杉は、被害者の岸田さんなどよりもまだ背の高い男なんです。だから、その意味で、上杉へ確実な嫌疑を向ける事は結局出来なくなるのです。——」

茲で警官は、捜査の機密に触れるのを恐れるかの様に、黙り込んで了った。

大月は秘書の秋田を顧みながら、内心の亢奮を押隠すかの様な口調で静かに言った。

「兎に角、一度、その断崖の犯罪現場へ行つて見よう」

二

殆ど一面に美しい天鷲絨ピロロイド¹⁸の様な芝草に覆われ、処々に背の低い灌木の群を横えたその丘は、恰度木の枝に梟が止つた様な形をして、海に面した断崖沿いに一段と峻しく突出していた。遠く東の海には犬吠が横わり、夢見る様な水平線の彼方を、シートル行きの外国船らしい白い船の姿が、黒い煙を長々と曳いて動くともなく動いていた。

到頭本来の仕事よりもこの事件の持つ謎自身の方へ強くひかれて了つたらしい大月と、それから秘書の秋田は、間もなく先程の証人の男に案内されて、見晴の良いその丘の頂へやつて来た。

証人は海に面した断崖の縁を指差しながら、大月へ言った。

「あそこに喧嘩の足跡が御座居ます。——警察の旦那方が見付けましたんで」
そこで彼等はその方へ歩いて行つた。歩きながら大月が秘書へ言った。

18 「天鷲絨」は底本では「天鷲絨」

「ね、君。考えて見給え随分非常識な話じゃないかね。——いくら今日は暖かだったからつて、不自然にもそんな白っぽい水色の服など着て、オーバーもなしでいたと言う犯人は、どうも今日ひよっこり遠方からこんな田舎へやつて来た人間じゃないね。僕は、屹度きつと犯人はこの土地で、少くとも服装を自然に改め得る位以上の余裕ある滞在をした男だ、と考えるよ。そしてその男は、少くともあの場合、黒いトランクを平気でその持主でもない岸田氏に持たせて歩かす事の出来る人間だよ。つまり、極めて常識的に考えて見て、そんな事の出来る人間は岸田氏の親しい同輩か、或は広い意味で先輩か、それとも、そうだ。婦人位いのものじゃあないか——。次にもうひとつ、証言に依ると犯人は岸田氏より小柄で細っそりしていたとあるが、病上りとは言え相当体格のある岸田氏に組付いて、格闘の揚句あつさり、岸田氏を崖の下へ突墜して了つたと言うからには、子供の喧嘩じゃあないんだから、何か其処に特種な技でもない限り、犯人は柄の割に腕の立つ、少なくとも被害者と対等以上の実力家である事だけは認めなけりやならないね」

と、黙つて歩いていた証人が口を入れた。

「いや、全くその通りで御座居ます。あの方が崖から突墜される瞬間だけは、手前もよく覚えておりますが、それは全く簡単な位に、……こう、……ああ、これだ。これがその喧嘩の足跡で御座居ます」

そう言いながら証人は、急に五六步前迄馳け出して立止り、地面の上を指差ながら二人の方へ振り返った。

成程彼の言う通り、殆ど崖の縁近く凡そ六坪位の地面が、其処許りは芝草に覆われなくて、潮風に湿気を帯んだ黒っぽい砂地を現わしていた。砂地の隅の方には、格闘したらしい劇しい靴跡が、入乱れながら崖の縁迄続いている。よく見ると、所々に普通に歩いたらしい靴跡も見える。そしてそれ等の靴跡を踏まない様に取りまいて、警官達なのであろう大きな靴跡が幾つも幾つも判で捺した様についている。

大月は争いの跡へ寄添つて見た。

大きな靴跡は直介のもので、薄く小さいのが犯人の靴跡だ。二種の靴跡は、或は強く、或は弱く、曲つたり踏込んだり、爪先を曳摺る様につけられたかと思うところ、ジ曲げた様になつたりしなから、激しく入り乱れて崖の縁迄続いている。そうして、崖の縁で直介の靴跡は消えて了い、その代りに角の砂地がその上を重い固体の墜ちて行つた様に強く傷付けられている。下は、眼の眩む様な絶壁だ。

大月はホツとして振り返ると、今度は逆にもう一度靴跡を辿り始めた。が、二種の靴跡が普通に歩いている処迄来ると、小首を傾げながら屈み込んで、其処に比較的ハッキリと残されている犯人の靴跡へ、注意深い視線を投げ掛けていた。が、聴て顔を上げると、

「ふむ。こりや面白くなつて来た」と、それから証人に向つて、不意に、「貴方は確かに犯人は男だ、と言いましたね。——ところが、犯人は女なんですよ。——」

秋田も証人も、大月の意外な言葉に吃驚して了つた。二人は言い合つた様に眼を睜りながら、靴跡を覗き込んだ。が、勿論二人の眼には、どう見てもそれは踵の小さいハイ・ヒールの女靴の跡ではなく、全態の形こそ小さいが、明かに男の靴跡としか見られない。秋田は、大月の言葉を求める様にして顔を上げた。すると大月は、静かに微笑みながら、

「判らないかね。——じゃあ言つて上げよう。ひとつ、よくこの靴跡を観察して御覧。すると先ず第一に、誰れにでも判る通りこの靴跡は非常に小さいだろう。第二に、靴の小さい割に爪頭と踵との間隔——つまり土つかずが大きいだろう。そして第三に、これが一番大切な事なんだが、ほら、踵の処をよく御覧。底ゴムを打つた鋏穴の窪みの跡が、こちらの岸田氏の靴跡にはこんなに良く見えるが、この靴の踵の跡には少しも見えないじゃあないか。ね。いいかい、君。靴に対する衛生思想が、一般に発達して来た今日では、オーヴァー・シューや、特殊な運動靴などを除く限り、殆んどどの男靴にも踵へ鋏穴のあるゴムが打つてあるんだよ。ところが、この靴にはその底ゴムを打つてない。而らばオーヴァー・シューか、と言うに、オーヴァー・シューにしては、子供のものでない限りこんな小さな奴はないし、又、運動靴など

にしては、こんな大きな割合の土つかずを持つた奴はない。そして又オーヴァー・シューや運動靴の様な特種なものには、それぞれ特有なゴム底の凹凸なり、又は金属的な装置がある筈だ。そこで、僕は、この犯人の靴跡の個有の型状——例えば、全体に小さい事や、外郭の幅が普通の靴底のそれよりも遙かに平坦で細長い事や、土つかずの割合が大きくそして特異である事や、そして又、人間の足首で言うところと恰度蹠骨尖端の下部に当る処なんだが、あの少女の履くポツクリの前底部を一寸思い出させる様なこの靴跡の前の部の局部的な強い窪み方——。等々の総合的な推理からして、僕はこの靴を、一種の木靴——あの真夏の海水浴場で、熱い砂の上を婦人達^{サンダル}が履いて歩く可愛い海水靴であると推定したんだ。そして、少なくともその海水靴の側面は、美しい臙脂色に違いない——。何故って、ほら、これを御覧」

そう言つて大月は、靴跡の土つかずの処から、その海水靴が心持強く土の中へ喰入つた時に剥げ落ちたであろう極めて小さな臙脂色の漆の小片を拾い上げて、二人の眼の前へ差出した。そして、

「勿論、こんなにお詛え向きに漆が剥げ落ちて呉れる様では、その海水靴ももう相当に履き古されたものに違いないが、ここで僕は、去年の夏辺りどこかの海水浴場で、その海水靴と当然同時に同じ女に依つて用いられたであろうビーチ・パンツとビーチ・コートを思い出すんだ。そして而もそれらの衣服の色彩は、派手な水色で

あつた、とね。だが茲で、或は君は、若しも男が、犯人は女であると見せかける為に、そんな婦人用の海水靴を履いたのだとしたらどうだ、と言う疑いを持つかも知れない。が、而し、それは明かに間違っている。何故ならば、若しも犯人が男で、そしてそんな野心を持つていたのだつたならば、その男は、一見男に見えるビーチ・パンツやビーチ・コートを着るよりも、当然、逆に、一見して婦人と思われるワンピースか何かの婦人服を着なければならぬ筈だからね。……いや、全く僕は、最初夫人の証言を聞いた時から、ひよつと、こんな事じゃないかと思つた位いだ。遠方から見てそれが男装であつたと言うだけで、犯人を男であると断定するなど危険な話だよ。なんしろ海のおちらじや女の子の男装が流行つてゐる時代なんだし、岸田氏を取巻く女達などは、ま、言つて見れば日本の「デイトリツヒ」や「ガルボ」なんだからね。——兎に角、若しも犯人が、夫人やこの証人の方の遠目を「くま」ます為にそんな奇矯な真似をしたのだとしても、今更そんな事を名乗つて出る犯人などないんだから、まあ、直接の証拠をもつと探し出す事だよ」

大月は再び熱心に靴跡を辿り始めた。

臆て暫くして、靴跡が交錯しながら砂地から芝草の中へ消えているあたり迄来ると、再び二人の立会人を招いて、地上を指差しながら言つた。

「林檎の皮が落ちてゐるね。見給え」それから証人に向つて、「警察の連中はこれを見

落したりなどして行つたんですか？」

「さあ、——この付近に林檎の皮など落ちて位いは珍しい事じゃないですから、旦那方は知らずに見落したんじゃないやなかうかと思えますが。何でも旦那方はそこから中細こまかに調べられて、あの雑木林の入口に散っていた沢山の紙切れなんども丁寧に拾つて行かれた位いで御座居ます」

「紙切れを——？」

「へえ。何か書いた物をビリビリ引裂いたらしく、一寸見付からない様な雑木林の根っこへ一面に踏ん付ける様にして捨ててあつたものです。手前が拾いました奴は、恰度その書物の書始めらしく、何でも——花束の虫……確かにそんな字がポツリと並んでおりました」

「ほほう。……ふうむ……」

大月は暫くジツと考えを追う様にして眼をつむっていたが、聽て、

「ま、それはそれとして、兎に角この林檎の皮だ。勿論これは、警察で見捨てみすて行つたものだけに月並で易っぽいかも知れない。が而し決して偶然ここに落ちていたのではなくて、この犯罪と密接な関係を持っている。——つまり兇行が犯された当時に剥き捨てられたものなんだ。よく見て御覧。そら。この皮は、岸田氏の靴跡の上に乗っているだろう。そして一層注視すると、その又皮の上を半分程、それこそ偶

然にも犯人の靴が踏み付けてるじゃないか。だからこの皮は、兇行当時前に捨てられたものでもなければ、兇行当時に捨てられたものでもない。正に加害者と被害者の二人がこの丘の上で会合した時に剥き捨てられたものなんだ。そして、尚一層注意して見ると」大月は林檎の皮を拾い上げて、「ほら。剥き方は左巻きだろう。なんの事はない。よくある探偵小説のトリックに依って推理すると、この場合犯人は女だったのだから、林檎の皮を剥いたのは極めて自然に犯人であると見る。従って犯人は左利、と言う事になるわけさ。……だが、それにしても黒いトランクは何だろう？　そして、岸田氏に組付いて、そんなにあつさり、と断崖から突墜す事の出来る程の体力を具えた女は、一体誰れだろう？　そして又、『花束の虫』とは一体何を意味する言葉だろう？……」

それなり大月は思索に這入って了った。そして腕組をしたまま再び靴跡の上を、アテもなく歩き始めた。秘書の秋田は大月の思索を邪魔しないつもりか、それとももうそんな仕種しくさに飽きて了ったのか、証人の男を捕えて丘の周囲の景色を見ながら、その素晴らしい見晴に就いて何か盛んに説明を聞き始めた。

一方大月は、考え込みながらぶらぶらと歩き続けていたが、ふと立止ると、屈み込んで、何か小さなものを芝草の間の土の中から拾い上げた。それは黒く薄い板つぺらの様な小片で、暫くそれを見詰めていた大月は、聽てその品をコツソリとポケット

トの中へ入れて、深く考える様に首を傾げながら立上った。

そして間もなく大月は、秋田と証人を誘つて、丘を降りて行つた。

夕方近くの事で、流石さすがに寒い風がドス黒い海面を渡つて吹き寄せて来た。もう時間も遅いし、それに直介の死亡に依る大月の当面の仕事は、まだ全然手が付けてないので、東京へは明朝夫人と一緒に引挙げる事にして、二人とも別荘の客室へ一泊する事になった。

梟山の検証で、推理がハタと行詰つたかの様にあれなりずつと思索的になつて了つた大月は、それでも夕食時が来てホールで三人が食卓に向うと、早速夫人へ向けて切り出した。

「少し変な事をお訊ねする様ですけど、花束の虫——と言う言葉に就いて何かお心当はないでしょうか？」

「まあ——」夫人は明かに驚きの色を表わしながら、「どうして又、そんな事をお訊ねになりますの。『花束の虫』と言うのは、何でも上杉逸二さんの書かれた二幕物の脚本だそうですけれど……」

「ははあ。成程。なるほど——して、内容は？」

「さあ。それは、一向に存じないんですけど……何でもそれが、今度瑪瑙座の創立記念公演に於ける上演脚本のひとつであると言う事だけは、昨晚主人から聞かさ

れておりました。昨日上杉さんが別荘をお訪ね下さった時に、主人にその脚本をお渡しになったので、そんな事だけは知っているので御座居ます」

「ああ左様ですか。すると御主人は、まだ今日迄その脚本をお読みになつてはいなかつたんですね？」

「さあ。それは——」

「いや、よく判りました。御主人が今朝の散歩にそれを持って梟山へお出掛けになつている以上、まだお読みになつてはいなかつたんでしよう……」

大月はそう言つて、再び考え込みながら、アントレーの鳥肉を牛の様に噛み続けた。

聽て食事が終ると、夫人がむいて呉れる豊艶な満紅林檎を食べながら、遺産の問題やその他差当つての事務に関して大月は夫人と相談し始めた。

秋田は、ふと、先程丘の上で大月の下した犯人は左利きであると言う断案を思い出した。そして何か英雄的なものを心に感じながら、コツソリと夫人の手許を盗み見た。が、勿論夫人は左利きではなかつた。

翌朝——。

それでも昨晩に較べると大分元氣づいたらしい大月は、朝食を済ますとこの土地を引き上げる迄にもう一度単身で昨日の丘へ出掛けて行つた。そして崖の頂へ着く

と再び昨日よりも嚴重な現場の調査をしたり、靴跡の複写コピーを取ったりした。が、それ等の仕事は済むと、氣に掛つていた仕事を済した人の様に、ホツとして別荘へ戻つて来た。

そして間もなく、大月、秋田、比露子夫人の三人は、銚子駅から東京行の列車に乗り込んだ。

車中大月はこの犯罪は、大變微妙なものであるが、もう大体の見透はついたから、茲一兩日の内には大丈夫犯人を告発して見せると言う様な事を、自信ありげな口調で二人に語り聞かせた。が、何故どうしてそうなるのか、詳しい話を聞かせて呉れないので、秋田は内心軽い不満と不審に堪えられなかった――。

三

屏風浦を引上げて、大月と秘書の秋田まろが丸うちの内の事務所オフィスへ歸つたのは、その日の午後二時過ぎであつた。

事務所には、二人が一日留守をした間に、もう新しい依頼事務が二つも三つも舞い込んで、彼等を待つていた。昨日の屏風浦訪問以来、大月の言う事なす事にそろそろ不審を抱かせられてうんざりしていた秘書の秋田は、それでも極めて従順に、

どの仕事から調べかかるか、と言う様な事を大月に訊ねて見た。が、それにも不拘かかわらず大月は、もう一度秋田を吃驚びつくりさせる様な不審な態度に出た。全く、それは奇妙な事だった。

——銚子から帰って二時間もしない内に、新しい書類の整理をすっかり秋田に任せた大月は、築地つきじの瑠瑠座の事務所を呼び出して、暫く受話器を握っていたが、聽て通話が終ると、何思ったのかついぞ着た事もないタキシードなどを着込んで、胸のポケットへ純白なハンカチを一寸折り込むと、オツにすましてその儘夕方の街へ飛び出してしまったのだ。

歳柄もなく口笛などを吹きながらさっさとアスファルトの上を歩き続けて行つた大月は、銀座裏ざんざのレストランでウイスキーを一杯ひっかけると、それからタクシーを拾つてユニオン・ダンス・ホールへやって来た。そして其処で、昔習い覚えた危い足取で古臭いワルツを踊り始めた。——が、それも二十分としない内に其処を飛び出すと、再びタクシーに乗り込んで、意勢いせいよくこう命じた。

「日米・ホールへ！」

それから、次に、

「国華・ホール！」

——そんな風にして、ざっと数え上げると、ユニオン、日米、国華、銀座、フロ

リダと、都合五つの舞踏場ホールドを踊り回った大月は、最後のフロリダで若い美しい一人のダンサーを連れ出すと、その儘自動車を飛ばして丸の内の事務所へ帰って来た。

いつもならばもう仕事を終って帰っている秋田も、流石に今日は居残っていた。そして、不意に若い女などを連れて帰って来た大月を見ると、もう口も利けない位おどろに驚いて了った。

が、そんな事には一向に無頓着むとんちやくらしく、帰って来た大月は、秋田に一寸微笑して見ただけで、直ぐ隣室へその女を連れ込むと、間の扉をピツタリ閉めて了った……。そして、おお、呆然ぼうぜんとして了った秋田の耳へ、聴て、狂躁なジャズの音が、軽いステップの音と一緒に、隣室から聞え始めて来た。

全く、「先生」のこんな態度に出会ったのは、今日が初めてであつた。秋田はもう書類の整理どころではなくなつた。ともすると、鼻の先がびツしより汗ばんで、眩暈めまいがしそうになるのを、ジツと耐えて、事務卓デスクに獅噛しがみついていた。が、それでも段々落着くに從つて、彼の脳裡に或るひとつの考えが、水のように流れ始めた……

——ひよつとすると、この女が、あの梟山の海水靴の女ではないだろうか？　そして、先生が……だが、そうすると、一体この騒さわぎは何になる……いや、これには、何か深い先生のたくらみがあるに違いない。そうだ。兎に角この女を逃してはならない。犯人を茲迄引き寄せて、この儘逃したとあつては面目ない。先生の先刻の、

あの意味ありげな微笑は、確に自分の援助を求めた無言の肢体信号なのだ——。

やっと茲迄考えついた秋田は、ふと気付くと、もうどうやら隣室の騒ぎも済んだらしく、いつの間にかジャズの音は止んで、只、低い囁く様な話声が聞えていた。が、聴てそれも終ると、どうやら人の立上ったらしい気配がして衣摺きぬずれの音がする。で、急にキツとなった彼は、椅子から飛上ると、扉の前へ野獸の様に立開たちひだかつた。と、不意に扉が開いて、大月の背中が現れた。そして、そのタキシードの背中越しに、若い女の艶しい声で、

「まあ、いけませんわ。こんなに載いては……」

すると大月は、それを両手で押えつける様にして、それから秋田の方を振向きながら、

「君。——何と言う恰好をしているんだ。さあ、お客様のお帰りだ。其処をお通し給え」

そこで秋田は、眼を白黒させながら、思わず一步身を引いた。

「ほんとに済みませんわ。——じゃあ、又どうぞ、お遊びにいらして下さいな」

そう言つて若い女は、媚こびを含んだ視線をチラツと大月へ投げると、秋田には見向きもしないで、到頭その儘出て行つて了つた。

大月は自分の椅子へ腰を下ろすと、さも満足そうにウエストミンスターに火を点

けた。

秋田はどうにも堪らなくなつて、到頭大月の側へ腰掛けた。そして、

「一体、どうしたと言うんですか？」

「別に、どうもしやしないさ。が、まあ、兎に角、これからひとつ説明しよう」

そう言つて大月は、内ポケットへ手を突込むと、昨日屏風浦の断崖の上で拾つた、例の黒く薄い板つぺらの様な小片を取出した。

「これ何んだか、勿論判るだろう？ よく見て呉れ給え」

「……何んですか。——ああ。レコードの欠片かけらじやありませんか。これが、一体どうしたと言うんですか？」

「まあ待ち給え。その隅の方に、金文字で、少しばかり字が見えるね」

「ええ。判ります。……アルセロナarcelona——としつ、Victor・20113——とあります。それから、……チ・フォックスストロット——」

「そうだ。その字の抜けているのは、勿論、あの、踊りのバルセロナの事だ。そして、もうひとつの方は、マーチ・フォックスストロットだ——ところで、君は、時々ダンスを嗜たしなまれる様だが、その踊り方を知つてゐるかね？ その、マーチ・フォックスストロットと言奴いふやつをだね」

秋田は、凶星を指されて急に顔を赤らめた。が、聽て仕方なさそうに、

「二三度名前だけは聞いた事がありますが、僕はまだ習い始めですから、全然踊り方は知らないです」

「ふむ、そうだろう。——実は、僕も知らなかった。が、いま帰って行かれたあの若いお客さんから得た知識に依ると、何でもこのダンスは、四五年前に日本へ伝ったもので、普通に、シックス・エイトって言われているそう。欧州では、スパニッシュ・ワンステップと呼ばれているものだ。そしてその名称の示す様に、このダンスのフィギュアと言うか、つまりステップの型だね。それは非常に強調な、人を激励する様な、ワンステップ風のものなんだ。——ところで、これを君は、何だと思う」

大月はそう言って、一枚の紙片を秋田の前に拵げて見せた。秋田は、それを一寸見ていたが、直ぐに、幾分得意然として、

「——判ります、つまりこれが、そのマーチ・フォックスロットのステップの跡、と言うか、足取りの跡を、先生が図にしたものなんでしょう」

すると大月は笑いながら、

「——ウツフツフツフツフツ……まあ、そうも言える。が、そうも言えない」
「と言うと——」

秋田は思わず急ぎ込んで訊ねた。

「つまり、スパニッシュ・ワンスステップの足取りであると同時にだね。いいかい。もうひとつ別の……何かなんだよ」

「別の——!？」

「他でもない。屏風浦の断崖の上の、あの素晴らしい格闘の足跡なんだ！」

——秋田は、蒼くなつて了つた。

四

自分の鋭い不意打の決断に、すっかり魂消て了つた秋田の顔を見ながら、ニコニコ微笑していた大月は、聽て、煙草の煙を環に吹きながらポツリポツリと言葉を続けた。

「——勿論、最初、あの取り乱れた足跡を見た時には、僕も、異議なくあれが争いの跡であると信じ切っていたよ。だが、僕は、君がああ証人と何か話合っている間に、あの芝草の中から、こ奴を、このレコードの欠片を、拾い上げたんさ。それから急に、僕が鬱ぎ込んで了つたのを、君は大分不審に思っていた様だったね。だが、実を言うと、あんな田舎の丘の上で、而も殺人の現場で、オヨソその場面と飛び離れた蓄音器のレコードの欠片などを拾い込んだ僕の方が、君よりも、どれだけ不審

な思いをしたか判らないよ。而もこの小片は、よく見ると、あの喧嘩の靴跡の内の、芝草の生際はえざわに一番近い女の靴跡の下敷になつていたんだよ。つまり海水靴の踵に踏み付けられた様になつて、割れてからまだ間もない様な綺麗な顔を、砂の中から半分覗かせていたんだよ。——僕は、考えた。晩迄考えた。そして到頭、その謎を解いて了つたんだ。——新時代の生活者である岸田夫妻の別荘の近くに、こ奴が転つていたのに不思議はないとね。つまり、あの丘の見晴しのいい頂の上で、よしんばそれが直介氏であろうと、比露子夫人であろうと、或は又、その他の誰れであろうと、兎も角岸田家に関係のある誰れかが、手提蓄音器ポータブルを奏たでて娛たのんだとしても、何の不思議があらうとね。そして、そしてだ。このレコードの欠片や、それから又こ奴の落ちていた時の様子からして、僕は、誰れか彼処あそこで、ダンスを踊つていたんじやあないかと言う、極めて漠然とした、だが非常に有力な暗示にぶつかつたんだ。そこで翌朝、つまり今朝だね。僕はもう一度あの丘を調べに出掛けたんだ。そして其処で僕は、はからずも、あの素晴らしい足跡の中に、昨日それを見た時には全く単に荒々しい争いの跡でしかなかつたその足跡の、いや靴跡の中に、どうだい、よく見ると、なにかしら或るひとつの、旋律リズム——と言つた様なものがあるじやないか。僕は思はず声を上げた。そして、そう思つて見れば見る程、その事實は、益々ハッキリして来る。勿論もちろん、そんな六ヶ敷むっかしい、激しいステップのフィギュアフイギュアを持ったダンス

を僕は知らなかった。だが、その時の僕に、それがダンスのステップの跡でない、と、どうして断言出来よう。そしてそれと同時に、実に恐しい考えが、僕の頭の中でムクムクと湧上り始めたのだ。と、言うのは、その時に僕は、昨日別荘で、夫人の陳述した証言を思い出したんだ、——突然、二人は格闘を始めました。そして、日々——と言った奴をね。ここんとこだよ。いいかい君。夫人は、同じその証言の中に於て、兇行当時あの断崖の上の人物を、一人は夫の直介である、又も一人は水色の服を着た小柄な男と言明している通りに、近視眼じゃあないんだよ。そして而も、思い出し給え。夫人は、岸田直介との結婚前に、飯田橋舞踏場のダンサーをしてい、ただぜ。その比露子夫人が、仮令多少の距離があつたにしろ、そして又、仮令も、う一人の百姓の証人——彼はダンスのイロハも知らない素朴な農夫だ——が、そう言っているにしろ、ダンスをし始めるのと、喧嘩をし始めるのを、見間違えるなんて事は、そのかみダンスでオマンマを食べていた彼女の申立として、断然信じられない話だ。そこで、僕は、夫人が虚偽の申立をしたのではないか、と言う、殆ど不可避的な疑惑にぶつかつたものだ。同時にだ。逆に、この調子の強烈な、六ヶ敷のような直介氏のダンスの相手として、曾て職業的なダンサーであつたところの比露子夫人を想像するのは、これこそ、最も尋常で、簡単な、だが非常にハッキリした強い魅力のある推理ではないか。——ところが、茲に、僕の推理線の合理性を裏書して

呉れる適確な証拠があるんだ。君は、昨晚あの別荘の食堂で、夕食後比露子夫人が何気なく満紅林檎の皮を剥いて僕達に出して呉れたのを見ていたろう。そして勿論君は、その時、あの兇行の現場で僕が下した『犯人は左利である』と言う推定を思い出しながら、熱心に夫人の手元を盗み視たに違いない。ところが、夫人は左利ではなかった。そこで君は恰も自分の過敏な注意力を寧ろ嫌悪する様ないやな顔をして鬱ぎ込んで了った。——だが、決して君の注意力は過敏ではなかったのだ。それどころか、まだまだ観察が不足だと僕は言いたい。若しもあの時、君がもう少し精密な洞察をしていたならば、屹度君は、驚くべき事実を発見したに違いないんだ。何故って、夫人は明かに右利で、何等の技巧的なわざとらしさもなく極めて自然に右手でナイフを使っていた。が、それにも不拘、夫人の指間に盛上つて来るあの乳白色の果肉の上には、現場で発見したものと全く同じ様な左巻の皮が嘲ける様にとぐろを巻いているじゃないか。僕は内心ギクリとした。で、落着いてよく見る、……と。なんの事だ。実に下らん謎じゃあないか。問題は、ナイフの最初の切り込み方にあるんだ。つまり、普通果物を眼前に置いた場合、蒂の手前から剥き始めるのを、夫人の場合は、蒂の向う側から剥き始めるのだ。——勿論こんな癖は一寸珍らしい。が、吾々は現に昨晚別荘の食堂で、その癖が三つの林檎に及ぼされたのを見て来ている。ありふれた探偵小説のトリックを、その儘単純に実地に応用しようとした僕

は、全く恐ろしい危険を犯す処だったね。……ところで、この林檎の皮なんだが」大月はそう言つて、いつの間にも何処からか取り出した小さなボール箱の中から、大切にそうに二筋すじの林檎の皮を取出しながら「この古い方は断崖の上の現場で、こちらは今朝別荘のゴミ箱から、それぞれ手に入れた代物だ。もう気付いたろうが、僕はこの艶のいい皮の表面から、同一人の左手の拇指紋を既に検出したんだ。——君。岸田直介の殺害犯人は比露子夫人だよ。さあ。これを御覧——」

その結果は、ここに記す迄までもなからう。聽て大月は、ニタニタ笑いながら立上ると、大膽に隣室へ這入つて行つた。そして、再び彼が出て来た時に、その右手に提げた品を一眼見た秋田は、思わずあつと叫んで立上つて了つた。

秋田が声を挙げたも道理、その品と言うのは、今朝三人が屏風浦の別荘を引挙げた時に、比露子夫人の唯一の手荷物であり、秋田自身で銚子駅迄携えてやつた、あの派手な市松模様のスーツ・ケースではないか!!

「別になにも驚くことはないさ。僕は只、夫人の帰京の手荷物がこのスーツ・ケースひとつであると知つた時に、屹度この中に大切な犯人の正体が隠されているに違いないと睨んだ迄の事さ。だから僕は、銚子駅で、親切ごかしに僕自身の手でこ奴をチツキにつけたんだよ。夫人の本邸へではなく、内密で僕のこの事務所オフィスを宛名アドにしてね。——今頃は屹度岸田の奥さん、大騒ぎで両国駅へ、チツキならぬワタリを

つけているだろうよ。只、君は、いつの間にこれが持ち込まれて、隣室の戸棚へ仕舞われたかを知らなかっただけさ」

そして笑いながら大月は、ポケットから鍵束を出して合鍵を求めると、素早くスーツ・ケースの蓋を開けた。

見ると、中には、目の醒める様な水色のビーチ・コートにパンツと、臙脂色の可愛い海水靴と、それから、コロムビアの手提蓄音器とが、窮屈そうに押込まれてあった。

「じゃあ一体、『花束の虫』と言うのはどうなつたんですか？」

秋田が訊ねた。大月は煙草に火を点けて、

「さあそれなんだがね、僕は最初その言葉を暗号じゃあないかと考えた。が、それは間違いで、『花束の虫』と言うのは、只単に、上杉の書いた二幕物の命題に過ぎないのだが、僕は、その脚本がああの上でジリジリに引裂かれていたと言う点から見て、岸田直介の死となにか本源的な関係——言い換えればこの殺人事件の動機を指示していると睨んだ。で、先程一寸電話で、瑪瑙座の事務所へ脚本の内容に就いて問い合わせて見た。するとそれは、一人の女の姦通を取扱った一寸暴露的な作品である事が判明した。ところが、事件に於て犯人である夫人は、明かに『花束の虫』を恐れていた。で、僕の疑念は当然夫人の前身へ注がれた訳だ。その目的と、も

うひとつスパニッシュ・ワンステップの知識に対する目的とで、僕はあんな馬鹿げたホール回りをしたわけさ。——が、幸いにも、飯田橋華かなりし頃の比露子夫人の朋輩であつたと言う、先程のあのモダンガールを探し出す事の出来た僕は、計らずも彼女の口から、上杉逸二と比露子夫人とがそのかみのバッテリーであつた事、そして又、夫人は案外にもあれでなかなかの好色家である事等を知る事が出来た。——で以上の材料と、僕の貧弱な想像力とに依つて、最後に、犯罪の全面的な構図を描いて見るとしよう。……先ず比露子夫人は、岸田直介との結婚後、以前の情夫である上杉に依つて何物かを——それは、例えば、恋愛の復活でもいいし、又何か他の物質的なものでもいい——兎に角強要されていた、と僕は考えたい。そして上杉は、その脅喝の最後の手段として、好色な夫人の現在の非行を暴露した『花束の虫』を、瑪瑙座に於ける新しい自分の地位を利用して、直介の処へ持つて来たのだ。勿論、夫人は凡てを知っていた。そして、いま、裕福な自分の物質的な地位の上に刻々に迫ってくる黒い影を感じながら、この一兩日の間と言うものは、どんなにか恐ろしい苦悩の渦に巻き込まれていた事だろう。其処では、恰度イブセンのノラが、クログスタットの手紙を夫のヘルメルに見せまいとする必死の努力と同じ様な努力が、繰返されたに違いない。——だが、結果に於て夫人はノラよりも無智で、ヒステリカルであつた。昨日の朝になって、多分夫人は、これ等の奇抜な季節違いの装

束を身に着けると、『花束の虫』を読みたがる直介を無理に誘い出し、あの証人が黒いトランクと間違えたこの手提蓄音器ポータブルを携えて梟山へピクニックに出掛けたのだ。この場合僕は、あの兇行きようこうをハッキリと意識して夫人はあんな奇矯な男装をしたのだと考えたくない。それは、犯罪前のあの微妙な変則的な心理の働き——謂いわば怯懦きようだに近い、本能的な用意、がそうさせたのだ。そして夫人は、絶えず『花束の虫』から直介の関心を外らす為に、努力しなければならなかった。——聽やぶて、見晴のいいあの崖の上で、二人はダンスを踊り始めたのだ。あのうわずった調子の、情熱的なスパニッシュ・ワンステップをね。そして、その踊の、情熱の、最高潮に達した時に、今迄夫人の心の底でのたうち回っていた悪魔が、突然首を上げたのだ。——茲こゝで君は、あの証人が、馬鹿にあっさり墜おちされたと言つて不思議がつていた言葉を思い出せばいい。——それからの夫人は、完全に悪魔になり切つて、もう恐れる必要もなくなつた『花束の虫』を破り捨てると、手提蓄音器ポータブルを携たずえて直ぐに別荘へ引返したのだ。そして、最も平凡な犯罪者の心理で、あんな風に証人の一役を買つて出た——と言いうわけさ。……兎に角この手提蓄音器ポータブルを開ひらけて見給みたまえ。夢中になつて踊つていた時に、誤つて踏割つたらしいレコードの大きな欠片と、それから、先程一寸僕

が拝借した、いずれも同じスパニッシュ・ワンステップのレコードが四五枚這入っているから——」

大月はそう語り終つて、煙草の吸殻を灰皿へ投げ込むと、椅子に深く身を埋めながら、さて、夫人の犯罪に対する検事の峻烈な求刑や、そしてそれに対する困難な弁護の論法などをポツリポツリと考え始めた。

幽靈妻

——じゃアひとつ、すっかり初めつから申し上げましょう……いや全く、私もこの歳になるまで、ずいぶん変わった世間も見てきましたが、こんな恐ろしい目に出会ったのは天にも地にも、これが生まれて初めてなんでして……

——ところで、むごい目にお会いになった旦那様のお名前は、御存知でしたね……
そうそう新聞に書いてありましたな。平田章次郎様とおっしゃって、当年とつて四十六歳。いや新聞も、話の内容はまるで間違つたことを書いてても、あれだけは確かでしたよ。N専門学校の校長様で、真面目すぎるのが、かえつてたつた一つの欠点に見えるくらいなの、立派な厳格な先生様でございました。……ところで、今度のこと起きあがるしばらく前に、御離縁になつて、お気の毒な最期をおとげになつた、問題の、夏枝様とおっしゃる奥様は、旦那様とは十二違いの三十四におなりでございましたから、この方がまた、全く新聞に書いてあつた通りの御器量よしで、そのうえお氣立てのやさしい、よくできたお方でした……こう申しては、なんです、二年前にこの老耄が、学校の方の小使を鹹になりました時に、お邸の方の下男にお引き立てくださったのも、後で女中から聞いたことですが、みんな奥様のお口添えがあつたからでして、なんでも、旦那様はどちらかというと、口喧しいお方でした、奥様は、いかにも大家の娘らしく、寛大で、淑やかで、そのために御夫婦の間で口争いなぞこれっぽちも、なされたことがございませんでした。

……申し忘れましたが、奥様は、旦那様と違って生粋きんすいの江戸ツ子で、御実家は人形町の呉服屋さんで、かなり盛んにお店を張っていらっしやいます……で、まあ、そんなわけで、御夫婦の間にお子様こそございませんでしたが御家庭は、まずまず穏やかに参っていたわけでございますが、ところが、それがこの頃になって、どうしたことか急に悪いことになり、とうとう奥様は御離縁という、まことに不味まずいお話になってしまったんでございます。

——いや全く、なんだって今更御離縁なぞというところでもないお話になったのか、私共にはトンと知る由もございませんが、御実家のお父様も、一、二度おいでになって、いろいろとお話をなさったようでもございましたが、なにぶん頑かたくな旦那様のことでお話はず、親元へお引き取りということになったんでございます。

——いや、どうも、これがそもそも悪いことの始まりでした。奥様は大変お嘆きになって、お眼を真つ赤に泣きはらしながら、お父様と御一緒にお帰りになるし、旦那様は、なにか大変不機嫌で、ろくに口をお利きにならないという始末。私共もずいぶん気を揉もんだんですが、何を申してもこちらはただの傭人やといにん、それ、第一なものための御離縁か、肝心要のところはトンとわかっていないのですから、お話にもなりません。なんでも、女中の澄すみさんのいうところでは、なにか奥様に不行跡があつての御離縁ではあるまいかなぞと申しますが、しかし私は、初めっから、奥様

がそんな方でないことは、チャーンと存じ上げておりました。成程なるほど奥様は御器量よ
しで、さすが下町育ちだけあって万事に日本趣味で、髪なぞもしよつちゆう日本髪
でお過しになりましたが、それがまたなんともいえない粋な中に気品があつて、失
礼ながら校長様の奥様としても、申し分ないほど美しい方でしたし、それに第一
また、お子様もないことですので、お一人で気軽に外出なさることもよくございま
したけれども、一旦お天道様が沈んでからというものは、一人でお出掛けになつた
ことなど、決してございませんでした……いや全く、私もこの歳になるまでには、
ずいぶんいろいろな女も見て参りましたが、奥様のように、大事なところをキチン
と弁わきまえていられる方は、そうザラにはござんせんですよ……

——いやどうも、とんだ横道にそれてしまいました。さて、それから大変なこ
とが、続いて持ち上がったのでございます。……あれは、御離縁になつてから確か
四日目のことでした。まだお荷物も片付いていないというのに、御離縁
を苦になさつた奥様は、とうとう御実家で、毒を呑のんでお亡くなりになつたんでご
ざいます。どうも、何となくお気の毒な次第で……なんでも、あとから伺うかがつたこと
でございりますが、奥様は簡単な書置きをお残しになつて、自分はどこまでも潔白で
あるが、お疑いの晴れないのが恨めしい、というようなことを、旦那様あてにお残
しになつたということですが、そのお手紙を持って、人形町からの使いが、奥様の

急死を旦那様へお知らせに来ました時にはさすがの旦那様も、急にお顔の色がサツとお変わりになりました。

——いや皆さん。ところが学者というものの偏屈さを私はその時しみじみ感じましたよ。……とにかく、命を投げだしてまで身の潔白を立てようとなさった奥様ではございませんか、よしんばどのような罪がおりなされたとしても、仏様になつてからまで、そんなにつらくお当たりになることもないんですのに、ところが旦那様は、一旦離縁したものは妻でも親族でもないとおっしゃつて、青い顔をなさりながら、名譽心が高いと申しますか、意地が悪いと申しますか、お葬式にさえ、お顔をお出しになろうとなさらなかったのをごさいます。そうして、私共の気を揉むうちに、どうやら御実家のほうだけで御葬儀もすんでしまい、あの取り込みのあの言いようのない淋しさが、やつて来たのをごさいます。……

——さて、これで、このまま過ぎてしまえば、なんでもなかったのをごさいます。が、実を申しますと、いままでのお話は、ほんの前置きでございまして、話はこれから、いよいよ本筋に入り、とうとう皆様も御存知のような、恐ろしい出来事が持ち上がってしまったのをごさいます。

——ところで、いちばん初め、旦那様の素振りそぶりに変なところの見えだしましたのは奥様の御葬儀がおすみになりましたから、三日目のことごさいました。いまも

申し上げましたように、旦那様は偏屈をおっしゃって、御葬儀にも御出席になりませんでした。旦那様はそれでいいとしましてもお世話になりました私共がそれではすみません。それで、なんとかして、せめてお墓参りなどさしていただきたいものと存じまして、それとなく旦那様をお願いいたしましたところ、それまで表面はかなり頑固にしてみえた旦那様も、さすがに内心お咎めになるところがあると思えます、まして、

「では、わしも、陰ながら一度詣でてやろう」

とおっしゃいます。早速お供を申し上げることになったのでございます。

申し忘れましたが、奥様の御墓所は谷中墓地でございまして、田端のお邸からはさして遠くもございせんので、私共は歩いて参りましたのでございますが、なにごん旦那様の学校がお退けになりましたから、お供したのでございますので、道灌山を越して、谷中の墓地に着きました時には、もうそろそろ日も暮れ落ちようという、淋しい時でございました。

奥様の御実家の、御墓所の位置は、以前にもおいでになったことがございまして、旦那様はよく御存知でございまして、早速お花を持ってそちらへお出掛けになりますし、私は、井戸へお水を汲みに参ったのでございます。ところがお水を汲みまして、私が、一足遅れて御墓所のほうへ参ろうといたしますと、たったいまそちらへお出

掛けになったばかりの旦那様が、こう、青いお顔をして、あたふたと逃げるように引き返しておいでになり、

「急に気持が悪くなったから、これで帰ろう。自動車を呼んでくれ」

とおっしゃるのでございます……いやどうも、全くびっくりいたしました。私としましては、折角せつかくそこまで参ったのでございますから、とてもそのまま引き返したりなぞしたくなかったのでございますが、さりとて、お加減の悪い旦那様を捨てても置かれず、残念ではございましたが、そのまま一旦桜木町の広い通りへ出まして、遠廻りながらそこから自動車を拾って、お宅まで引き返してしまつたのでございました。……

あとで考えてみれば、少し無理と思ひましても、あの時旦那様だけお返しして、私だけ、直ぐに引返してお墓参りをしましたなら、あるいはあの時、人気がない墓地の中で旦那様をご覧になつたものを、私も見る事ができたかも知れないと、おっかなびっくり考えたものでございますが何分その時は、変だとは思ひながらも、旦那様の御容態の方が心配でしたので、そんな分別ぶんべつも出なかつたわけでございます。

——さて、御帰宅なさいましてから、旦那様の御加減は間もなくお直りになりましたが、その日から、旦那様の御容子が、少しずつ変わつて参つたのでございます。……いつになつてもお顔の色は妙に優すぐれず、お眼が血走つて、いつもイライラ

なさつていられるのを見ますと、私共は、まだ本当にお加減はよくなつていられないのだなと、思われたほどでございます。

——そうそう、こんなこともございました。なんでも、いままでは夜分なんぞ、いつもかなり遅くまで御書見なさつたり、お書き物をなさつたりなされました御習慣が、ふつりお止まりになりまして、かなり早くから女中にお床をお取らせになつて、お睡眠やすみになるのでございます。そして戸締りなぞにつきましても、いままでより一層神経質になり、厳しくおっしゃるのでございます。——気のせいか、そうして日毎に御容子のお変わりになつて行く旦那様のお側におりながら、私共は、ただわけもわからず、オドオドいたすばかりでございました。……

——いや、ところが、こうしたまるで『牡丹燈籠』の新三郎のような不吉な御容子は、そのまま四日ほど段々高まり続いて、とうとう恐ろしい最期の夜が参つたのでございます。

——いや全く、²⁰今思い出してもゾツとするような恐ろしい出来事でございます。た。……なんでも、あの日女中の澄さんは、千葉の里から兄さんが訪ねて来まして、一晩お暇をいただいで遊びに出掛け、旦那様のお世話は、この老耄おいぼれが一人でお引き

受けたいしたのでございますが、六時頃に夕飯をおすましになりますと、旦那様は、御書齋から何か書類の束をお持ち出しになって、

「明日から二、三日、学校の方を休みたいと思うから、これを早稲田の上田さんうえだへお届けして、お願いして来てくれ」

とおっしゃるのでございます。上田様とおっしゃるのは、学校で旦那様の代理をなさる先生でございます。まだその時は時間も早うございましたし、二時間もすれば充分帰って来られると思われましたので、早速お引き受けいたしましたして、田端駅から早稲田まで出掛けたのでございます。むろん私は平素のお指図通り、戸締りはきちんとし、表門なぞも固く閉して勝手口からこっそりと出掛けたのでございますが、なんと申ししても、旦那様をお一人で残して置くなぞというのは、そもそも見違いだつたのでございます。

——御用をすまして帰って参りましたのが、意外に遅くなって八時半。てつきり旦那様にお小言を受けるに違いないと、舌打ちしながら、急いで廊下を御書齋の前まで参りまして、扉の外から、

「行つて参りました」

恐る恐るお声を掛けたのでございます。ところが御返事がございません。もう一度声を掛けながら、扉をあけてお部屋の中へ一歩踏み込んだ私は、その時思わずハッ

となつて立ち竦すくんだのでございます。——どこへお出掛けになつたのか、旦那様のお姿が見えませぬ。いやそれどころか、お庭に面した窓のガラス扉が一方へ押し開けられて、その外側の窓枠にはめてあるはずの頑丈な鉄棒が、見ればなんと数本抜きとられて外の闇がそこだけ派手な縞しまとなつて嘘うそのように浮き上がっているではございませんか。私は思わずドキンとなつてその方へ進みかけたのでございますが、進みかけて、ふとかたわらの開放された襖ふすま越しに、畳敷たたみきのお居間の中へ目をやつた私は、今度はへなへなとそのままその場へ崩れるように屈かぶんでしまいました。お居間の床柱の前に仰向あおむきに倒れたままこと切れていられる旦那様をみつけたからでございます。——お姿はふためと見られないむごたらしきで、両のお眼を、なにかまるで、ひどく凄しみいものでもご覧になつたらしくカツとお開きになつたまま、お眼玉が半分ほども飛び出して、お顔の色が土色に変わっているではございませぬか。見渡せば、お部屋の中は大変な有様で、旦那様もかなり抵抗なさつたと見え、枕や座布団や火箸などがところかまわず投げ出されているのでございます。……

——さアそれからというものは、いったい私は何をどうしたのか、いまから考えても、サツパリその時の自分のとつた処置が、思ひ出せないのでございますが……なんでも私の気持が少しずつ落ち着いて参りました頃には、もう大勢の警官達が駆

けつけて、調査がどしどし進められ、世にも奇怪な事実が、みつけられていたので、²¹ ざいます。

——なんでも、警察の方のお調べによると、旦那様のところへやって来た恐ろしいものは、明らかに、一人で、庭下駄を履いて来たというのでございます。それは表門の近くの生垣を通り越して、玄関、勝手口を廻って庭に面した書斎の窓に到るまでの所々の湿った地面の上に、同じ一つの庭下駄の跡が残っていたからで、しかもその庭下駄の跡は齒と齒の間に鼻緒の結びの跡がいずれも内側に残っていて、ひどく内側の擦り減った下駄であることが直ぐにわかったというのでございます。

私は、警察同士で語り合っているこの説明を聞いた時には思わずギクンとなりました。それは——前にも申し上げましたように、お亡くなりになりました奥様は、日本趣味で、髪もしよちゆう日本髪に結ゆっておいでになったような方で歩き方も、いま時の御婦人には珍しい純粹な内股で、いつもお履物が、すぐに内側が擦り減ってかなわない、とおっしゃっておいでになったのを、思い出したからでございます。私は思わずゾツとなって、このことは口に出すまいと決心いたしました。

——さて、庭に面した書斎の窓の、親指ほどの太さの鉄棒は、皆で三本抜かれて

21 「いたので」は底本では「いたの」

おりましたが、それは三本ともほとんど人間ばなれした激しい力で押し曲げられて、窓枠の柄ほぞから外された見え、それぞれ少しずつ中ほどから曲がったまま軒下に捨ててあるのを見ました時に、私は思わずふるえあがつてしまいました。

——ところで、今度は旦那様の御遺骸いがいでございませうが、これはまことにむごたらしいお姿で、なんでも頭の骨が砕かれたため、脳震盪のうしんどうとかを起こされたのが御死因で、もうひとつひどいことには、お頸くびの骨がヘシ折られていたのでございませう。この他には別にお傷はございませうでしたが、けれどもその固く握りしめられた右掌の中から、ナンとも奇妙な恐ろしいものがみつげ出されたのでございませう。お側にソツかと屈かんで見ますと、なんとそれは、右掌の指にからみつくようにして握りしめられた数本の、長い女の髪の毛ではございませうか。そして、おまけにその髪の毛からは、ほのかに、あの懐かしい、日本髪に使う香油の匂いがしているではございませうか……。私はふと無意識で頭をあげました。このお部屋は十畳敷きで、床の間の真向かいの壁よりの所には、なにか取り込み中で、まだ御整理のできていない奥様のお筆筒や鏡台が、遠慮深げに油単ゆたんをかけて置かれてあつたのでございませうが、香油の匂いを嗅いでふと思わず頭をあげた私は、何気なしにその鏡台のほうへ眼をやったのですが、その途端にまたしてもドキンとしたのでございませう。——見れば、いままで気づかなかつたその鏡台の、燃えるような派手な友禅の鏡台掛けが、艶つやめ

かしくパツと捲たまくりあげられたままであり、下の抽斗ひきだしが半ば引き出されて、その前に黄楊櫛つげくしが一本投げ出されているではございませんか。思わず立ち上がった私は、鏡台の前へかけよると、屈むようにして、改めてあたりの様子を見廻わしたのでございませぬが、抽斗の前の畳の上に投げ出された黄楊櫛には、なんと旦那様のお手に握られていたのと全く同じ髪の毛が三、四本、不吉な輪を作つて梳すき残されておりました……。

——いや全く、その時私は、たつた今しがた、その鏡台の前に坐つて、澄み切つた鏡の中へ姿を写しながら乱れた髪をときつけて消え去つて行つた恐ろしいものの姿が、アリアリと眼に見えるような気がして、思わず身震いをくりかえしたのでございませぬ。

——ところで、この時私は、またしても忌いまわしいものをみつけたのでございませぬ。それは、この鏡台の前に来て初めてみつけることができるような、部屋の隅の畳の上に、落として踏みつぶされたらしい真新しい線香、それも見覚えもない墓前用の線香が、半分バラバラになつて散らばつていたのでございませぬ。なんとこの忌まわしい品物でございませぬ。私は思わず目をつむつて、誰へともなく、心の中で掌を合わせたものでございませぬ。そして私は、もうこれ以上これらの忌まわしい思いを、自分一人の中に包み切れなくなりまして、おりから、私へのお調べの始まつ

たのを幸いに、奥様の御離縁からお亡くなりになった御模様。続いてあの谷中の墓地での旦那様のおかしな御容子から、今日いまここに到るまでの気味の悪い数々の出来事を、逐一申し上げたのでございます。

——すると、それまで私の話を黙って聞いていた、金筋入りの肩章をつけた警官は、かたわらの同僚のほうへ向き直りながら、

「どうもこのお爺さんは、亡くなられた奥さんが、幽霊になって出て来られた、と思ってるらしいんだね」

そういつてニタリと笑いながら、再び私のほうへ向き直っていわれるのです。

「成程、お爺さん。これだけむごたらしい殺し場は、生きている人間の業とは、ちよつ

と思われなくても知れないね。しかし、これも考えようによつては、ただの女一人に

だつてできる仕事なんだよ。たとえばね。あの窓の鉄棒を抜きとるにしたつて、な

にもそんなお化けじみた力がなくなつて、よくある手だが、まず二本の鉄棒に手拭か

なんかを、輪のように廻してしっかりと縛るんだ。そしてこの手拭の輪の中になにか

木片でも挿し込んで、ギリギリ廻しながら手拭の輪を締めあげるんだ。すると二本

の鉄棒は、すぐに曲がつて窓枠の柄から外れてしまう。……なんでもないよ。……

それから、この死人の傷にしたつて、何か重味のある兇器で使いようによつては充分こうなる。……それからまた、内側の減つた下駄にしても、なにも内股に歩くの

は、こちらの奥さん一人きりというわけでもないだろう……わかったね。じゃアひとつ、これから、その亡くなった奥さんの、人形町の実家というのへ案内してくれ。そこにいる女を、片っ端から叩きあげるんだ」

警官は、そういつて、ガツチリした体をゆすりあげたものでございます。ところが、この時、いままで旦那様の御遺骸を調べられていた、わりに若い、お医者様らしいお方がやって来られまして、不意に、

「警部さん、あなたは、なにか勘違いをされていますよ」

とテキパキした調子で、始められたんでございます。

「たとえば、あなたの鉄棒を曲げるお説ですね。聞いてみれば、成程ごもつともです。その手でやれば、二本の鉄棒は、人間の力で充分曲がりましょう。しかし、いまあの窓で曲げられているのは、三本ですよ。三本曲げるにはどうするんです。え？　いまのあなたのお説では、二本しか同時に曲げることはできないのですから、二本とか四本とか六本とか、つまり偶数なら曲げられるが、一本とか三本とか五本とか、奇数ではどうしても一本きり余りができて、手拭の輪をかけることもできないではありませんか。……だからあれはそんな泥棒じみたからくりで抜いたんではありませんよ。本当に魔物のような力でやったんです。

……それから、例の下駄の件ですがね、あなたは、あの下駄を履いた内股歩きの女

が、人形町あたりにいるようなお見込みですが、しかし、こういうことを一応考えてください。つまり、下駄の裏の鼻緒の結び跡が残るほど内側が減るには、一度や二度履いただけではなく、いつも履いていなくちやアならぬわけでしょう。そうすると、鏡台に向かつて、乱れた髪をときつけて帰って行くような、たしなみを知っている普通の女がいつでも庭下駄なんぞを履いて、しかも人形町あたりでゾロゾロしているというのはちよつとおかしかないですか……」

そう言ってお医者さんは、急に部屋の間へ行かれて、畳の上から例の忌まわしい線香の束を拾いあげると、今度はそいつを持ってツカツカと私の前へやって来られていきなり、

「あなたは谷中の墓地にある、亡くなられた奥さんのお墓の位置を知っていますか？」
と訊かれたんでございます。抜き打ちの御質問でびっくりした私が、声も出せずに黙つてうなずきますと、その若い利巧そうなお医者様は、

「では、これから、そのお墓まで連れて行つてくれませんか？」
と今度は警官のほうへ向き直つて、

「ねえ警部さん。この線香の束は、まだこれから使うつもりの新しいものですよ。ひとつこれから、谷中の墓地へ出掛けて、こいつをここへ忘れて行つた、その恐ろしいものにぶつかつて見ませんか？」

とまあそんなわけで、それから十分ほど後には、もう私共は警察の自動車に乗って、深夜の谷中墓地へやって来たのでございます。

墓地の入口のずっと手前で自動車を乗り捨てた私共は、お医者様の御注意で、お互いに話をしないように静かに足音を忍んで、墓地の中へはいったのでございますが、ちようどそのとき雲の切れめを洩れた満月の光が、見渡す限りの墓標を白々と照らし出して、墓地の周囲の深い木立が、おりからの夜風にサワサワと揺れるのさえ、ハッキリと手にとるように見えはじめたのでございます。——いや全くこの時のものすごい景色は、案内人で先へ立たされていた私の頭の中へ、一生忘れることのできないような、なんて申しますか、印象？ とかいうものを、焼きつけられたんでございます。

——ところが、それから間もなく、奥様のお墓の近くまでやって参りました私は、不意にギョツとなつて立ち止まったのでございます。——見れば、まだ石塔の立っていないために、心持ち窪んで見える奥様のお墓のところから、夜目にもホノボノと、青白い線香の煙が立っているではありませんか。

「ああ、確かあの、煙の立っているところでございます」

もう私は、案内役ができなくなりましたので、そう言つてふるえる手で向こうを指差しながら、皆様先に立っていただきました。するとお医者様が真つ先になつ

て、ドシドシお墓のところまでお行きになりましたが、立ち止まって覗き込むようにしながら、

「こんなことだろうと思った」

そういつて、私達へ早く来い——と顎をしゃくつてお見せになりました。続いてかけつけた私達は、ひとめお墓の前を覗き込むと、その場の異様な有様に打たれて、思わず呆然と立ち竦んだのでございます。

——黒々と湿った土の上に、斜めに突きさされた真新しい奥様の卒塔婆の前には、この寒空に派手な浴衣地の寝衣を着て、長い髪の毛を頭の上でチヨコンと結んだ、一人の異様な角力取りが、我れと己れの舌を噛み切つて、仰向きざまにぶつ倒れていたのでございます。

「手遅れでしたよ」

お医者様はそういいながら、無造作な手つきで死人の体をまさぐつていられたましたが、やがてふと、卒塔婆の前のもう既に燃えつきようとする線香の束の横から、白い手紙のようなものを取りあげると、そいつをひろげて、黙つて警部さんのほうへ差し出されました。むろんその手紙は、私もあとから見せていただきましたが……なんでも、余り達筆ではございませんでしたが、それでも一生懸命な筆跡で……

御鼻肩ひいきの奥様。

いきさつは御実家の旦那様からお伺いいたしました。私めのためにとんでもない濡ぬれ衣ぎぬをお着になったお恨みは、必ずお晴らし申します。特別御鼻肩ひいきにして頂きました私めの、これがせめてもの御恩返しでございます。

——大体、そんなことがその手紙には書いてあったのでございます。

——いや全く、相手がお角力取りと知ってからは、大きな下駄の跡を、庭下駄だなんて騒いでいた連中がおかしいみたいで……それに、これはあとから奥様の御実家の旦那様から伺ったんでございますが、なんでも下駄の内側を擦り減らすのは角力取りに多いので、それは角力取りの一番力のはいるところが、両足の拇指おむゆびのつけ根だからだそうでございます。それから、奥様の御実家は、皆様揃って角力好きで、舌を噛み切って死んだその角力取りは、御実家で特に鼻肩ひいきにしていらっしやる、茨木部屋の二枚目で、小松山こまつやまという将来のある力士だったそうでございます。

——いや、どうも、奥様の幽霊の正体が、お角力取りとは思いませんでしたが、それでも私は、奥様が不行跡をなさるようなお方でないことは、初め頃から固く信じておりましたようなわけで、こうしてことの起こりが鼻肩角力とわかってみれば、やっぱり私の考えが正しかったのでございます。学者気質で、少し頑かたくな

旦那様には、お可哀そうに、どうしても、鼻肩角力の純な気持というものが、おわかりになれなかつたのでございましょう……。

——やれやれ、とんだ長話をいたしましたな。では、ここらで御無礼ささせていただきます……。

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。